
紅眼の守護者(ガーディアン)

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーディアン
紅眼の守護者

【Nコード】

N3366F

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

西暦2929年10月24日。世界恐慌からちやうど千年が経ったその日、日本が消えた。原因はわからない。そもそも何があったのかすらわかっていない。人々は故事になぞらえ、その日を『暗黒の水曜日』と呼ぶようになった。そしてそれから十二年。物語が幕を開ける――1／30『Prelude』編開始予定！

第一部 崩壊の鍵 序章



それはスラムでは決して珍しいことではなかった。

よそ者ははけ口になる——そんなことはわかっていた。自分だつてそうなのだから。ただ違うのは、花雪は女だったということだ。その些細な違いが運命を変えた。

花雪は死んでいた。体中を白濁で汚し、しなやかな白い足を血染めにした状態で。何が起こったのかは考えなくてもわかった。

抵抗できなかったのか。——できるはずがない、彼女は無力だ。

『失われた国』ロスト・カントリーの生き残りの証である花雪の愛刀・墨染桜は闘いのためにあるのではなかった。墨染桜は宝だ。それは同時に、愛刀以外に武器を持たない花雪の無力をも示していた。

「だから拳銃くらい持てと言ったんだ……」

朔は花雪の屍を清めながら、真紅の双眸から涙を零した。このスラムでは忌避の対象だった紅の瞳を、

「紅玉ルビーのように綺麗」と言ってくれた花雪が死んだ——つまり、朔は一人になったのだ。彼女と出会う前と同じように。

朔にとって、花雪は母であり、唯一の居場所だった。心に穴が空き、喉元を嗚咽が通り過ぎる。

「っ……嘘つきっ……!!」

一人にしないと云ったくせに。

味方でいてあげると云ったくせに。

「俺は……どうすればいいんだよ……!!」

朔は冷たい花雪の身体に縋り付いて涙を流した。唯一を失った朔にはそれしかできそうになかった。

不意に朔の視界に、床に無造作に置かれていた墨染桜が映った。虚ろな眼をしたまま、それを抜刀する。紫電が朔の眼を灼いた。そ

れをゆっくりと腹部に突きつける。

しかし朔がそれを腹に差し込むことはなかった。小屋の外で物音が聞こえたからだ。朔は覚束ない足取りで、音の正体を掴もうと歩く。その瞬間、彼を阻むように炎が上がった。

粗末な小屋はすぐに燃え上がる。犯人は誰なのか——そんなことはわかりきっている。朔は花雪の亡骸を抱えて外に出た。

その焰にも似た瞳は、憎しみと悲しみに——燃えていた。

花雪を返せ。

居場所を返せ。

俺の半身を返せ。

朔は悲痛な絶叫をあげながら、墨染桜を血で染めていた。視界に入った人間は斬る。女だろうが子供だろうが関係はなかった。

そんなことをしても花雪は戻れない。それは痛いほどわかった。だが、壊れた心もまた——戻らなかった。ただ人を殺しながら、スラムのボス——ゼラスの罅を目指した。

「殺してやる……！」

あんなことをするのは、指示するのはゼラス以外にいない。他の人間は罵ったり、唾を吐くくらいが精一杯だ。

墨染桜は花雪の手入れの賜物なのか、非常に切れ味がよかった。

朔は自分と白刃を、その双眸と同じ真紅に染め上げ、ゼラスの罅の目の前に立った。二人の護衛が立っている。

「退け！」

朔は素早く一人を斬り捨てた。しかしもう一人に肩を撃たれる。

痛みはない——麻痺してしまっているのだろう。刃を閃かせ、袈裟掛けに斬りつけた。

罅に入るとゼラスは冷たく澱んだ緑の瞳を朔に向けた。その右手には派手な装飾銃がある。だが朔には見えていなかった。

「死ね！」

絶叫しながら間合いを詰めていく。ゼラスは無表情で銃の引き金

を引いた。朔は咄嗟に避けたが、右腹に着弾してしまい身体を折る。血が溢れた。その熱に朔は花雪の亡骸の冷たさを思い出す。

「何故だ！ 何故花雪を殺した！？」

「あの女はスラムの秩序を乱す存在だ。お前と同じように」

「花雪一人で乱される秩序なら、混沌と同じだ！」

朔は赤眼でゼラスを睨みつけながら墨染桜を握り、再びゼラスに向かっていた。

ゼラスは退屈そうに溜息をつき、引き金を引く。朔は避けきれずに石の床に倒れ込んだ。荒い呼吸を繰り返し、血を吐く朔にゼラスはゆっくりと近付く。

「魔女の死体はどうした？」

「……ここに、来る前に……埋めて来た……っ」

「そうか。折角『失われた国』ロスト・カントリー 風に火葬にしてやろうと思ったんだけどな」

「貴様……っ！」

朔の瞳が燃えた。同時にその喉から絶叫が迸る。

「【死ね！】」

その瞬間、ゼラスの身体が紅蓮の業火に包まれる。朔は真紅の眼を見開いてそれを見た。

「うわああああっ！」

何が起こったかわからなかった。朔が茫然としている間に、焰はゼラスを喰らい尽くしてしまう。灰一つ残さず、まるで朔の感情そのものののように。

「……俺は、何を……」

朔はその手を見つめた。薄汚れた手は血に染まっている。騒ぎを聞きつけやってきたらしいゼラスの子分が朔を見て叫びをあげる。

「ば、ば……化け物……っ！」

そうかもしれない。朔はぼんやりと思った。仇を取ったはずなのに、朔の心は暗く閉じていくばかりだった。

◇＋◇

花雪の死から八年。

朔は武器商人・メイプルウッドの屋敷の庭で墨染桜を振るっていた。深夜なのに空はうつすらと明るい。街が明るいからだろうか。

不意に芝生を踏む音がして、朔は反射的に墨染桜を人影に突き付けた。苦笑の気配。

「私ですよ、月峰君」

「ジェイドか。何か用か？」

ジェイドは翡翠のような緑の瞳を優しく朔に向けた。朔と対極の、柔らかな雰囲気を感じている。

「眠れないのかな、と思ひまして」

「ジェイドこそ」

「私は今まで仕事だったんですよ」

ジェイドは庭のベンチに越しかけた。彼はメイプルウッドの当主であるフリードリヒの秘書である。眼の下隈からして、それが激務だということがよくわかる。

「大変だよな……ガーディアン守護者は交代制なのに。夜は夜がいるからな」

「守護者は武器のようなものですからそれでいいですよ。秘書はブレンですから、たくさんいたら逆に困ります」

朔はフリードリヒの一人娘・テレゼの守護者を務めている。昼間だけだが。しかし、朔は家がないので住み込みの使用人という扱いをされている。

「……人を殺したことがあるか？」

口をついて出た質問に、驚いたのは朔の方だった。ジェイドはというと、その質問の異質さを気に留めた様子もなく微笑する。

「肉体的に殺したことはありませんが、精神的または社会的に殺したことはありませんよ」

「え……」

「私は旦那様の仕事をサポートするための人間です。邪魔な者を旦那様

那様に代わって排除する……それも私の仕事に含まれているのですよ」

あまりに柔らかな微笑みを浮かべながら言われ、朔は思わず息を呑む。ジェイドの瞳がゆらりと燃え上がったように見えた。

「……俺は、沢山人を殺した。十歳で初めて人を殺して……それからテレーゼ様の守護者になるまでの六年間は殺し屋として人を殺し続けた」

朔は自分の白い手を見つめながら続ける。

「俺は……化け物だ」

「月峰君が化け物なら私は怪物です。実際、そういうあだ名もありますし」

朔は眼を伏せた。ジェイドは殺し屋としての自分は知っていても、ゼラスを燃やした自分は知らないのだ。あれを化け物と呼ばないなら、何と呼ぶのだろう。

「月峰君は化け物なんかじゃありませんよ。君は誰よりも真っ直ぐで、優しい人です」

「ジェイド……」

「そろそろ寝ないと、明日の仕事に障りますよ」

「……そうだな。ありがとう」

朔はぎこちなく言って、屋敷の中に戻っていった。ジェイドはその華奢な後ろ姿に向かって呟く。

「君は化け物なんかじゃありませんよ、朔……君は生まれながらに気高く清らかな、至高の存在なんです」

ジェイドは空を見上げる。月は朔の瞳と同じ——真紅に染まっていた。



テレーゼの夜の守護者であるアレンと交代した朔は、本を読んでいるテレーゼを退屈そうに見た。

テレーゼはまるでビスクドールのようだ。

陶器のように白くきめ細やかな肌、小さな顔を縁取る後光のような金髪。癖毛らしく外側に跳ねているのが彼女の活発さを示している。厚い本に向けられている瞳は、海より深いキアノスブルーだ。彼女は自分のように、容姿が原因で迫害されたりはしないのだろう。朔はテレーゼに聞かれないように溜息をついた。

「……朔」

「何ですか、テレーゼ様？」

「朔には七歳までの記憶がないのよね？」

「はい。でもそれが何か？」

テレーゼが朔の記憶の欠如に触れるのは二年間彼女に仕えていたが、これが初めてだった。興味がないのだろうと思っていたのだが、朔は怪訝そうな眼をテレーゼに向けた。

「これ、世界中の都市伝説をまとめた本なんだけど……読んでみて」朔は言われた通りに、テレーゼが示したページに眼を通す。そして馬鹿にしたようにテレーゼを見た。

「都市伝説はあくまでも都市伝説ですよ、テレーゼ様。有り得ませんよ。『暗黒の水曜日』^{ブラック・ウェンズデー}以前の日本で魔術が研究されてたなんて……」

「ニュートンだって錬金術の研究してたのよ？ 科学的に検証するなら魔術研究だって立派な科学よ」

テレーゼは博識だ。そしてませている、というか口だけは達者だ。朔は溜息をついてテレーゼの額を指弾した。

「どっかの秘密結社が魔術の研究してたって話よりは、この科学的な研究の方が信憑性ありますけどね。でも、だったらどうして他の国で研究してないんですか？」

「な、内緒にしたかったのよ、多分！」

子供じゃないんだから。朔は苦笑した。だが、と同時に考える。ゼラスを殺したときのあれが、魔術の類だしたら——あの現象を説明出来なくはない。何せ、魔術などというオカルトなものは、

正しいかどうかは別として、全てを説明出来るのだから。

「朔に記憶があったら真偽を確かめられたのに……」

「六歳児が世の中のことをそこまで知っているとは思えませんが」

「自慢じゃないけど、私は六歳の時に既にどこがどこ戦争してるかを完璧に把握してたわよ」

思いつきり自慢だ。しかもそれは武器商人の娘だから知りえたことだろう。何とも血生臭い子供だ。

テレーゼの母親は三年前に亡くなっている。父親であるフリードリヒが再婚して子供を作らない限り、メイプルウッドの次の当主はテレーゼだ。そして彼女は、女でありながら武器商人としての才能を持ち合わせているのだった。

だが彼女は武器商人として生きるには、あまりに純粹だ。間接的に人を殺す仕事に堪えられるとは思えない。

朔はまるで捨てられた猫を見るような目で、テレーゼを見つめた。

□十□

西暦二九四一年。

ブラック・ウェンズデイ

『暗黒の水曜日』——つまり原因不明の日本崩壊から十二年。

ロスト・カントリー

『失われた国』——日本の唯一残された土地に仮面を被った人達が集結していた。彼らはかつての日本で科学者と呼ばれていた。もちろん、その時は仮面など着けていなかったが。

仮面の男が一人、コンクリートの残骸の上——つまり天然の壇上に上がった。そして手を叩き、その場を静める。

「時は満ちた。我らの国を取り戻すときが来たのだ」

観衆の中から歓声が上がる。仮面の男はそちらを眺めて、満足そうに眼を細めた。

「我らはこれから計画に従い、国を滅ぼした悪魔を討つ。そして日本を取り戻すのだ！」

観衆は怒号にも似た声を上げる。男は尚も続けた。

「悪魔の名はフリードリヒメイプルウッド、そしてその娘である
テレーゼメイプルウッドだ。この名を脳に刻め！ そして憎むの
だ！ それが我ら『青血隊』の力となる！」

第一話『毒殺魔女』（前書き）

テレーゼ十二歳の誕生パーティーのこと。

第一話『毒殺魔女』



五月三十日はテレゼ・メイプルウツドの誕生日だ。勿論、豪華なパーティーが開かれる。しかしその主役であるはずのテレゼは不機嫌そうに革張りのソファに座っていた。

「テレゼ様、少しは食べたらどうですか？　一応主役なんですし」

「私を主役と判断した理由は何？」

「ケーキの上に乗っているチョコプレートに書いている名前です」

真実、テレゼのためのパーティーではなかった。様々な国の人間が入り乱れるパーティーの実際の主役はフリードリヒ・メイプルウツド――テレゼの父親である。

「お父様は武器商人だから仕方ないのかもしれないけど、こんな偉い人ばかりじゃなくて綺麗なお姉さんとか招待してほしいわよね。私の誕生日なんだから」

「綺麗なお兄さんじゃなくていいんですか？」

「男は見飽きたの。特に筋肉質な奴は」

朔は苦笑した。表現がストレート過ぎる。確かに、メイプルウツド家の使用人はほとんどが男だ。しかもわりとがっしりした体つきをしている。朔のように華奢なのは珍しいのだ。

「……ね、朔。いつそ明日から女装してみない？」

「お断りします。何で俺が……華奢だって理由で選んだんならジェイドでもいいでしょう？」

「そんなことを頼んだあかつきには、笑顔で『お嬢様の飲む紅茶に毒を入れていいのなら』とか言われるのがオチね」

確かに言いそうだ。だからと言って女装してやるつもりはない。

朔は溜息をついて、テレゼの後光のような金髪を梳いた。

「だいたい華奢とはいっても、体つきはやはり男ですよ」

「――和服ならごまかせるんじゃない？」

不意に背後から聞こえた女の声に、朔は思わず体を強張らせた。しかしすぐに気を取り直し、低い声でその女に応える。

「――何でお前がここにいるんだ？」

「別にテレーゼお嬢様の誕生日を祝いに来たわけじゃないわよ。まして貴方に会いに来たわけでもない。ちょっとしたビジネスよ」

「ここで殺るつもりか、毒殺魔女」

朔は女の顔を見ることなく話したが、テレーゼは女――『毒殺魔女』の顔をしっかりと見た。

「眼の保養になるわね……」

女は露出度の高い真紅のドレスに身を包み、白く長い足や艶めいた鎖骨を惜し気もなく曝していた。好色な男ならばくつきりと見えるその胸の谷間に眼が釘付けになるだろう。

「テレーゼ様……男ばかり見ていたせいで、女を見る眼がなくなつたようですね。言っておきますが、その女は殺し屋です。見とれている間に殺されてしまいますよ」

「あら、私は女の子は殺さない主義よ」

「そうですか、安心しました」

朔はそう言って、振り向きざまに女の首筋に墨染桜の刃先を突き付ける。女はしかし、血のような唇に浮かべた笑みを崩さなかった。「へえ、本当にテレーゼお嬢様の守護者ガーディアンなのね。でも心配しないで。今日はあそこのメタボ政治家先生を始末しに来ただけだから」

「よそでやってくれ。今日はテレーゼ様の誕生日なんだ」

「テレーゼお嬢様には汚いものを見せたくないってわけ？ 貴方、昔からそういうところだけは変わらないわね」

朔は墨染桜を握る手に力を込めた。赤い血が、女の真珠のように白い首を伝っていく。

「貴方の心は人殺しにしては綺麗よ。だけど、テレーゼお嬢様は貴方が思っているほど綺麗な女の子じゃないわ」

「お前よりは余程綺麗だ。まだ誰も殺していないからな」

「いずれは私たちより多くの人を間接的に殺すことになる人間よ。今のうちに慣れさせてあげるのが優しさじゃないかしら？」

朔は真紅の眼で女を睨みつけた。まるで鬼のようなその表情にも、女はまるで顔色を変えない。しかしテレーゼは、彼女の眼の色のようにどんどん青ざめていく。そして耐え兼ねたのか、朔のスーツの裾を引っ張った。

「……やめなさい、朔」

「何故ですか？」

「朔の仕事は私を護ることだけよ。他の人間なんて放っておきなさい」

女は二人のやり取りを聞いて、甲高い笑い声を上げた。朔は眉をひそめる。

「十二歳の子供の方がよっぽどしっかりしているんじゃない？」

「――黙れ」

「貴方は何故頑なに私のビジネスを邪魔しようとするの？ 今日がお嬢様の誕生日だから？」

「今すぐその口を閉じろ！ さもないとこの場で首を斬り落とすぞ！」

女は真紅の唇で残酷に冷笑する。テレーゼはそれを見て僅かに肩を震わせた。

「今夜だけは出来ないでしょう？」

女の言葉が当たっているのは、朔の燃える瞳を見れば一目瞭然である。テレーゼは朔の腕を掴み、静かに言った。

「もういいわ、朔」

「テレーゼ様のためにやってるんじゃないありません。ただ……死の世界に生きる者にも、一日くらい死を見ない日があってもいいんじゃないかと思っただけです」

「朔……」

「ですが、やはり死の世界に生きる者は死に生きるしかないようです。だから……俺がいいと言うまで目を閉じて、耳を塞いでいてく

ださい」

朔はテレゼが眼を閉じたのと同時に、女の首を斬りつける。女はけたたましい笑い声を上げながら床に倒れた。

「貴方がいくら努力したって、その子の血は死を引き寄せるわ……私達がそうであるようにね……」

「今の俺は守護者だ。殺し屋じゃない」

「そう……ならばせいぜい頑張るといいわ——『死人花』」

朔はとどめとばかりに、女の左胸に刀を突き刺した。血の匂いが濃くなる。

「——これは私が責任を持って処理します」

ジェイドが静かに、血を流す女を抱きかかえた。ブランド物のスーツが紅く汚れていく。

「後で絨毯を掃除しなければなりませんね。これからは絨毯のある部屋ではなるべく血の出ない殺し方をしてください」

「ジェイド……」

「では、私はこれで」

ジェイドそう言うなり、死体を抱えたまま部屋を出て行った。朔はジェイドが去った方と、血染めの絨毯を交互に見るしかなかった。



「……もういいですよ、テレゼ様」

テレゼはゆっくりと眼を開け、耳に当てていた手を外した。眩しそうに眼を細める彼女に、朔は柔らかく笑いかける。

「朔、大丈夫？」

「俺は元殺し屋ですよ。毒殺魔女は戦闘が苦手ですし」

「そうじゃなくて……。何か、悲しそうな顔してる」

朔は苦笑して、右手をテレゼの髪の中にうずめた。

「貴女はいずれメイプルウッドの当主となられるお方です。しかし

今のテレーゼ様はまだ、ただの女の子だから……それにそぐわないものは見せたくなかったし、聞かせたくなかった」

テレーゼはキアノスブルーの瞳で朔を見る。それは少女の眼ではなく——強い決意を秘めた、闇を負う女のそれだった。

「私はテレーゼⅡメイプルウッド。死臭の中で生きる女——生まれ堕ちたその瞬間から、私はそういう存在よ。貴方の思っているような、普通の女の子じゃないわ」

「テレーゼ様……」

「情けない顔するんじゃないの！ 私まで情けないと思われるじゃない」

テレーゼは立ち上がって、朔に白い絹の手袋をした手を差し出した。

「主役の座を取り戻しに行くわよ。ついてきなさい、朔」

朔は諦めたように微笑して、その手を取る。

「Yes, my Lord」



テレーゼと朔はパーティーの中心にいた。大物政治家を救った英雄とその主人ということで注目を浴びていただけなのだが。

「あのメタボ議員に気に入られたみたいですよ、月峰君」

「ジェイド……死体はどうしたんだ？」

ジェイドはワインを飲みながら、気高く柔らかな微笑を浮かべた。「納棺師と葬儀屋を呼んで処理して貰いました。近くの墓地にでも埋めておいてくれるでしょう」

「……そうか」

「旦那様もお喜びになっていましたよ。大物政治家が味方してくれるほど心強いことはありませんから。もしかしたら報酬を貰えるかもしれないですよ」

朔は力なく首を振った。もとより金に興味はないし、報酬を貰う

気分でもない。しかしテレーゼは朔の肩を叩いて笑みを浮かべた。
「よかったじゃない。お菓子いっぱい食べられるわよ」

ジェイドは口許に手を置いて苦笑し、朔もぎこちなく微笑んだ。

「ところで、朔」

「何でしょう？」

「今夜の主役とワルツなんてどうかしら？」

「残念ですが……踊りと名が付くものは、盆踊りしか知りません」

テレーゼは頬を膨らませる。ジェイドは笑い声を上げ、自分の来ていた上着を朔の肩にかけた。

「見よう見真似でいいですよ、そんなもの」

「だけど……」

「今日くらい踊ってあげたらどうです？ 誕生日なんだから」

「それも……そうだな」

朔はテレーゼの手を取り、真紅の瞳でテレーゼを見つめた。

「踊っていただけますか、お嬢様？」

「勿論よ」



「やっぱり運動神経いいんですね、月峰君は」

護衛をアレンと交代し、リビングで休んでいた朔にジェイドは言った。
「そうか？」

「最初は全然ダメだったけれど、最後は結構踊れてたじゃないですか」

ジェイドは朔の隣に座り、ミネラルウォーターを飲む。その顔はいつもより少し赤かった。

「今日は飲み過ぎました」

「そんなに飲んだか……？」

「弱いですよ、お酒」

ジェイドは苦笑混じりに栗色の髪を掻き上げる。朔には翡翠色の瞳が、少し緩んでいるように見えた。

「明日から米国に行くので、酔っている時間はないんですけどね……」

「随分きついスケジュールだな。大丈夫なのか？」

「お嬢様の誕生日には英国にいられるように無理なスケジュールを組んでしまったので、少し辛いですね。でも、今回は難しい仕事ではないので」

ジェイドは疲れた笑顔で微笑んだ。朔は心配そうにジェイドの顔を覗き込む。

「秘書も大変だな」

「慣れますよ。分刻みのスケジュールにも、人の死にも」

「俺は慣れないな。まさか殺し屋を辞めてからも沢山の人の死を見るなんて思ってた」

呪われている、と思う。朔は呻くように呟いた。

「……これで俺が殺した人間は五十八人になった」

「月峰君……」

「俺はこの道を、テレーゼ様に歩んでほしくない。でもそれは……叶わない願いだろうな。男が生まれない限り」

テレーゼの母親は三年前に死んでいる。一人娘のテレーゼが家を継ぐことは自明のことだった。

ジェイドは俯く朔に微笑みかけ、ゆっくりと立ち上がる。

「明日は早いので、私はもう寝ます。月峰君も早く寝て、心も体も休めたほうがいいですよ。今日は随分とお疲れのようですから」

「そう、だな……」

ぼんやりと朔は呟く。ジェイドは

「失礼します」と言ってリビングのドアを開けた。

「心配しなくても大丈夫ですよ、朔……」

冴えた月の光が、
眩くジェイドを照らしていた。

第二話『殉教の吸血鬼（ヴァンパイア）』（前書き）

テレーゼと朔との出会い。二年前の話です。

第二話『殉教の吸血鬼（ヴァンパイア）』

◇＋◇

午前七時。

アレンと朔が交代する時間である。朔は眼を擦っているアレンに呼び掛けた。

「眠そうだな、アレン」

「夜通し起きてるのって大変なんだぜ？ オレの体はどうも昼型らしくてな」

「その分給料も高いんだからいいだろ。昼はかなり安いんだぜ？」
昼の守護者の給料は夜の七割分しかない。朔は食事分も引かれて
いるからさらに安い。別に困りはしないが。

「確かに朔の給料安いもんなあ。……あ、そういえばさ——」

「何だ？」

「テレーゼ様、今日めっちゃ機嫌悪いから気をつけろよ」

「わかった」

朔はアレンに手を振って、テレーゼの部屋の扉をノックした。少し間を置いて、負のオーラを漂わせたテレーゼがドアを開ける。

「おはようございます、テレーゼ様」

「おはよう」

さっきまで見ていたのだろう、携帯用のテレビがベッドに転がっている。テレーゼは無言でノートパソコンの電源を入れ、朔を見た。

「——朔」

「何ですか？」

「サリュー＝アンダーソンのことは覚えてる？」

忘れるわけではない。朔はベッドにダイブしながら答える。

「忘れるわけではないでしょう。俺が唯一殺しそこねた人です」

「そのサリューが脱獄したらしいわ」

朔はがばりと体を起こした。サリユーは一番脱獄が難しい監獄に容れられたはずだ。なのに――

「アイツは私のことなんか忘れてるだろうけど……一応気は張って
いてね」

「勿論ですよ」

殺しておけばよかった。朔はそう思いながら墨染桜を抜刀する。
紫の光が刃の上で躍った。

「――テレーゼ様」

「何？」

「いえ、なんでもありません」

怖いのか、なんて聞いたら怒られるに違いない。朔は墨染桜を鞘
に納めた。

怖いに決まっている。現にテレーゼの肩は震えているのだから。

朔はゆっくりとテレーゼに近づき、柔らかな髪に手をうずめた。

「今の俺はテレーゼ様の守護者です。何も心配はいりません」

「朔……」

そういえば、と朔は思う。あの時もテレーゼは震えていた。

まだたった二年前。

朔とテレーゼが初めて会ったときのこと――



「お願いします！ 『吸血鬼』を殺してください！」

髪を振り乱し、女は朔に縋り付いた。朔は女を宥めるように、低
い声で言う。

「……努力してみよう」

「本当ですか!？」

何人もの殺し屋に断られて来た。そう言って女は泣く。断るのは
当然のことだろう。女は誰かもわからない人間を殺せと言っている

のだから。

「ただ、『吸血鬼』のことは警察も追っているから、もしかしたら彼らの方が早く捕まえてしまうかもしれない。流石に牢獄破りはリスクが高いから、その場合は失敗となる。もちろんその時は、依頼料はとらないが……それでいいなら引き受けよう」

「いいです、それで……貴方が金も取らずに話を聞いてくれただけで、少し楽になりました」

女は悲壮な表情を無理に笑顔に変える。朔は真紅の眼を僅かに細めた。真実、誰も女の話など聞きはしなかっただろう。殺し屋達はこんなリスクな依頼はゴメンだろうし、警察は彼女を落ち着かせようとして火に油を注いだに違いない。朔は自分に縋り付く女を無表情に見つめた。

「今日はもう遅いから帰った方がいい。俺も早速調査に入りたいし……」

「わかりました。本当にありがとうございます……」

女は呟くように言い、バーを出て行った。本来彼女はこんな場末のバーに来るような身分の人間ではない。それだけ切羽詰まっていたのだろう。朔は溜息をついて、水を飲み干した。

「朔は本当にリスクな依頼が好きやなあ」

「好きなわけじゃない。他の奴らが断るから俺に来るだけだろ」

バーのマスターであり情報屋の『根』^{ルート}は、苦笑しながら朔に数枚の紙を渡した。朔は怪訝な表情を『根』に向ける。

「新聞報道レベルやけどな、『吸血鬼』の情報や」

『根』はチヨコレート色の瞳を朔に向けた。朔は直ぐさまそれを目を通す。

「被害者の年齢は六歳から十四歳で、全員女。死因は全てのケースで出血多量によるショック死。その血は首筋に開けられた二つの穴から吸い出されたものと考えられる……か」

「ゆえに『吸血鬼』って呼ばれとるワケやな」

「人間に吸血能力などない。何か、そういうことの出来る器具かな

んか……知らないか？」

「知らんなあ……まあ調べてみるさかい」

何故血を抜くのか。朔は首を捻りながら被害者のデータを見つめた。

「被害者のデータ、もっと詳しいのいないのか？」

「明日まで待ってくれたら、全員分出したるで」

「期待してる」



次の日。

眼の下に隈を作った『根』が、分厚い紙束を朔の眼の前に置いた。

「お疲れ様、『根』」

「被害者の共通点がわかったで。血液型や。全員B型のRHマイナスなんや。でもって処女」

「つまり犯人はそれを知ることが出来る人間……病院関係か？」

「俺もそう思ってな、色々調べてみたんや。被害者の他の共通点も探る意味でな。それで容疑者を三人に絞った」

推理や調査はやはり『根』の天下だ。警察と違うのは何よりもその速さである。

「一人はトム・ライズ。コイツは医者やったんだが、ワイフが死んでからイカレちまってヤク中になっちまったらしい。二人目は殺し屋のクラッド。コイツはお前も知ってのとおり、元看護師のイカレ野郎や」

「クラッドはないな。アイツは年増好みだ」

「餅は餅屋やな。それは知らなかった。最後はサリユー・アンダーソン。現職のナースや。産婦人科におったんだけど、自分が不妊症やってわかったら他の科に移ってもうたらしい。で、彼女もB型のRHマイナスや」

ここからは朔の仕事である。つまりは家宅搜索だ。もはや推理も

何も関係ない。

「しかし、ヤク中と殺し屋はいいとして……何で普通のナースが容疑者なんだ？ 怪しい人間なら他にもいるはずだ」

「サリユー＝アンダーソンはこのバーに来たことがあってな。その時に言ってたんや。『神様が私を導いてくれた』ってな」

「つまりお前はサリユーが犯人だと思ってるわけだな？ 神に導かれ人を殺す哀れな女だと」

『根』は頷いた。所詮は勘だが、裏の世界の人間は裏の世界の人間を見抜くことが出来る。経験豊富な刑事も裏の人間を見抜く力はあるが、いかんせんこの地区の警官は皆経験不足だ。サリユーが犯人ならばらく捕まりはしないだろう。

「可哀相な女なんや。サリユー自体の身分は低いが、幼なじみやった子爵と結婚してな……幸せに暮らしとったんや。でも不妊症やってわかって、子爵から別れを告げられたらしい」

「『根』……まさかとは思うが、お前……サリユーに惚れてるんじゃない……」

『根』は顔を赤らめた。凶星らしい。朔は溜息をつく。

「なら何故わざわざ容疑者に挙げた？」

「……殺すことでしか止められないんちゃうかな、と思ってな。人ってのは実は簡単には変われもんやからな」

『根』は呻くように言って、水割りをあおった。朔は愛刀を握り締めて立ち上がる。

「……ごめん、『根』」

「謝るなよ。仕事なんだから仕方ない」

「だけど……」

わかっている。裏に生きる人間は「仕事だ」と諦めなければならぬことが山ほどあると。朔も『根』も、明日誰かに殺されるかもしれない。朔自身はそれを肝に命じて人との関わりを断ってきた。だが他人となると話は別だ。

「お人よしやなあ、朔は」

「別に……お前に殺し屋を差し向けられたくないからだ」

朔はそう言って、バーの扉に手をかけた。『根』はその後ろ姿に向かって問う。

「行くのか？」

「……ああ、『仕事』だからな」

「そうか。じゃあいいことを教えておいてやる」

『根』はそう言って、一枚の写真を朔に投げた。そこに写っていたのは金髪碧眼の少女。『根』は悲しげな微笑を浮かべながら言う。「その嬢ちゃんは三日前から失踪しているんや。おそらく『吸血鬼』に捕まっとるんだろな」

「……うん、わかった」



暴れたせいで体力を奪われた。手錠をつけられ、頭上に固定されている手首からは血が流れている。生温い感触が腕を伝う。

どうして自分はここにいるのだろうか。今日は何月何日なんだろう。石の冷たい壁は何も教えてくれない。怖い。

「帰りたい……」

探してくれているだろうか。見つけた人間には報酬をやるというポスターを貼ってくれているだろうか。不安は募る。

早く見つけて。血を吸われる前に。テレーゼは祈った。助けてくれるなら、キリストでもアッラーでもルシファーでもいい。

足音が地下牢に響く。食事の時間なのだろう。ここに来てから七回目の食事だ。ということはもう三日が経ったらしい。

「また暴れたの？ 血が出ているわよ？」

牢に入って来た女——サリューは、腕を伝う真紅を舌で掬いとった。テレーゼは体を震わせる。

「いや……離して……」

痺れにも似た何かが体に広がっていく。それに侵食されそうな気

がして、テレーゼは体を強張らせた。

「怖がらなくていいのよ。貴女は私に力を貸すことで、天国に行けるのだから」

「天国になんか行きたくない！」

離れたくない人がいる。テレーゼは涙で潤んだ瞳で、サリユーを睨みつけた。

「天国には貴女のお母さんもいるのよ？」

「……ッ」

何でそれを知っているのだ。テレーゼは目を見開いた。父親の死なら大事件だが、母の死は世間的には瑣末事項なのに。

「神様が教えてくれたのよ。だから貴女が現世うつしよにいる間は、私が貴女の母親になってあげる……」

「母様は私にこんなことなんてしなかった！」

「そうね。じゃあ枷は外してあげるわ。それから食事にしましょう？」

サリユーは微笑しながら手錠を外した。力が抜けた腕が、テレーゼの黒のワンピースの上に落ちる。サリユーはテレーゼの顎を持ち上げ、水が入ったグラスを桃色の唇に押し当てた。喉が渴いていたテレーゼは、手を解かれた安心感からそれを飲み干す。

「ねえ、テレーゼ……貴女のお母さんは優しかった？」

「優しかったわ。貴女と違って」

「とても強くて、いつも貴女を護ってくれたんでしょ？ でももう——いないわ」

テレーゼの瞳に黒が混ざる。絶望の色——サリユーは歪んだ笑みを浮かべた。

「今の貴女はたった一人。誰も守ってくれはしないわ。——私以外は」

「貴女が私を傷つけているんじゃない……っ……っ……！」

テレーゼは左胸を押さえ、喘ぎ始めた。呼吸と脈が異常なまでに速くなる。テレーゼのマシユマロのような頬に赤みが差した。

「……何、飲ませたの……っ！」

「私が作った薬よ。貴女がいい子になる薬——興奮剤が入っているから最初は辛いだろうけど、すぐに楽になるわ」

「……わ、私を……殺すの……？」

「殺すなんて……人間きが悪いわね」

サリユーは残忍な笑みを浮かべ、テレーゼの首筋にコンセントのプラグのような物を向けた。テレーゼの目が見開かれる。

「神様が血を要求しているの。七人の処女^{おとめ}の血を。貴女でちょうど七人目——大丈夫、痛くなんてないわ」

「……や、やめて……いや……」

テレーゼは後ずさるが、すぐに石の壁が退路を絶つ。そのキアノスブルーの瞳は恐怖の色に染まった。



（偵察だけのつもりだったが……）

朔は排気口から様子を伺っていた。予定が狂ってしまった。『根に「今から突入する」とメールを送り、再び下の様子を見る。

依頼を優先させるなら、今日は引き上げるべきだった。しかしそうしなかったのは殺し屋らしくない、情というものが朔の中に在るという証である。

——母を喪^{ウシナ}う悲しみなら、覚えがある。

少女——テレーゼの瞳に自分と同じ色の悲しみを見た。だから、失いたくないと思ったのだ。

（とりあえずはあの子の保護を優先するしかないな……）

朔は懷から拳銃を取り出し、サリユーの右手に向かって引き金を引いた。サリユーがコンセントのプラグのような器具から手を離す。

「誰!？」

「『死人花』——まあ、知らないだろうけど」

朔は言いながら、牢の中に降り立った。サリユーはプラグを握り

なおし、朔と対峙する。

「邪魔しないで！」

「……お前を邪魔するのが仕事なんだよ。といっても警察じゃないが」

朔はさりげなくテレゼに目をやった。テレゼはよほど怖かったのか、それとも薬の作用なのか——気を失っている。朔は墨染桜を抜くと同時に、サリューの体を横一文字に斬った。

「今まで六人の少女を殺したのはお前か？」

「殺してなんかないわ。新たな生を与えてあげただけよ。そして私は七人の処女おとめの血を捧げることで、神様の御子を宿することが出来るの」

完全にイカレている。斬られて叫びもしないのは、神経が麻痺しているからだろう。

「——神なんかいない」

朔は呟いて、拳銃に弾を詰める。サリューは壊れたからくり人形オートマタのように笑いながら、朔にプラグを投げた。

「神様はいるのよ」

プラグは意志を持っているかのように、朔の首筋に噛み付いた。微かにモーター音がする。

「……ッ！」

血が吸われていく。朔はプラグを抜こうとするが、何故か抜けない。

（AIを搭載してるのか……）

「神様を冒涇した貴方には、罰を下さなきゃね……」

「神なんていない！」

朔は叫び、引き金を引いた。それと同時に吸血のスピードが上がる。

「くっ……」

朔はプラグから伸びる管を墨染桜で叩き切った。サリューは石の床に倒れ伏している。死んではいないだろう。先程撃ち込んだのは

強力な麻酔だ。

「……ッ、油断しちゃったな……」

朔は気を失っているテレーゼに歩み寄った。プラグの吸血能力はまだ失われておらず、管の先からは血が絶えず流れている。

「大丈夫か？」

「……ん……貴方は……？」

「『死人花』——知らないだろうが……ッ……！」

視界が歪む。どうやら貧血らしい。テレーゼは血の気を失った朔の顔を見て目を見張った。

「……心配するな。ちよつと、油断……しただけだ。立てるか？」

テレーゼは壁に手をつきながら、何とか立ち上がる。朔はそれを見て、苦しそうに微笑を浮かべた。

「外に出ろ。この家を出たら、すぐ目の前に藤通りがある。そこから二ブロック行つて左折すれば交番があるから……そこに行け」

「でも、貴方は……」

「殺し屋が交番なんか行けるか。早く行け」

テレーゼは朔の言葉に頷くと、ゆっくりと、しかし確実な足取りで歩き始めた。

「ねえ、殺し屋さん」

「何だ？」

「貴方は何故、神を頑なに否定するの？」

朔は苦笑した。気を失っていると思つたが、耳はしっかり起きていたらしい。それが薬のせいかはわからないが。

「神なんていない。神がいるなら……俺はとっくの昔に雷を落とされてるさ。俺はこの女の六倍くらい人を殺してる」

「……そう、わかつたわ。それと……助けてくれて、ありがとう」



あれから二年が経った。

サリユーを殺さなかったのは、血を流してしまったからだ。勿論、『根』が気になったということもあるが。でも本当はテレーゼを逃がしてからとどめを刺すつもりだった。だがあそこで彼女を殺してしまえば、警察に追われることは自明のことだった。逆に言えば壊れかけたこの国では、未遂は事件にすらならないということである。不意にポケットに入っていた携帯が鳴った。朔はテレーゼに断つてから通話ボタンを押す。

「どうした、『根』？」

《お前が殺し損ねた女の始末は任せとき。あの時みたいに厄介な武器は持つとらへんみたいやしな》

「殺しはしないんじゃないのか？」

《それはそれ、これはこれや。だからお前はぜーんぜん心配することあらへん。そうあの嬢ちゃんにも言っちゃれ。おるんやろ、そこに？》

朔は唇を噛んだ。『根』に人殺しの咎を背負わせたくはない。だが、彼は一度決めたら決して曲げることがないのだ。

「『根』……何でそんなにこだわる？」

《おふくろに似てるんや。だから……早う楽にしてやりたいんや》
「耐えられるのか？ その罪の重さに……」

《信用あらへんなあ、俺……。大丈夫やって。ほな、またな》

『根』はやると言ったらやってしまう人間だ。朔は虚しい電子音を鳴らす携帯を握り締めた。

「どうかしたの、朔……？」

「何でもありません」

テレーゼは朔にゆっくりと近づき、朔の白い首筋に残る醜い牙痕に指を這わせた。朔は怪訝そうにテレーゼを見る。

「貴方は私だけを見ていればいいの。他の誰の運命も背負ってはいけないわ」

「テレーゼ様……」

「全てを護ろうとするから、貴方は結局傷ついてしまうのよ。私以外の何も護る必要はないわ。『根』が大丈夫だと言ったんだから、放っておきなさい」

聞こえていたのか。朔は静かに携帯電話から手を離す。

「あのね、朔……私はあの時、貴方が神様に見えたのよ？」

「神なんか、いませんよ……」

いるなら何故、自分は生きているのか。

何故花雪が死んだあの時に一緒に殺してくれなかったのか。

生きれば生きるほど、罪を負う——

「私の神様の名前はね、イエスⅡキリストでもなくアツラーでもない……『希望』というのよ」

テレーゼはゆっくりと朔の頬を包み込む。いつもは振り払うその手を、今日は何故か振り払えなかった。

「朔は私の『希望』なの。あの日からずっと……」

テレーゼが飲み込んだ言葉を、朔は知らない。ただ潤んだキアノスブルーをじっと、眺めていた。

第三話『魔術の研究』（前書き）

ジェイドの過去と謎の研究。

第三話『魔術の研究』

□＋□

『失われた国』^{ロスト・カントリー}の、かつて北海道と呼ばれていた場所——そこに『青血隊』の指導者である小面は立っていた。

破壊された街を見回した小面の表情は、面に隠されていてわからない。だがその華奢な体には悲壮感を纏っていた。

ふと、小面の視界に小さな花が映った。枯れかけた鈴蘭——小面はそれにそっと手を伸ばした。

「【咲き誇れ、永久に^{とこしえ}】」

小さく唱えた瞬間に鈴蘭は生氣を取り戻し、凜と立ち上がる。瓦礫の街に鮮やかな白。小面は微笑した。

「美しい……まるで我が至宝のようだ。死と再生を繰り返し輝き続ける——これが私達の研究だったんだ……」

破壊された美。欧米とは一線を画する、全てを内包する美しさ。

それを愛しているからこそ、小面のメイプルウッドへの憎しみは底がない。彼らはこの美を奪い、揚句の果てには家族さえ奪ったのだから。

「仇は必ず討つ——この、寒緋桜^{カンヒザクラ}で」

小面は腰に差した寒緋桜を抜き、その刃を陽の下に晒した。

「——小面様^{オカメ}！」

不意に顔を阿亀^{オカメ}の面で覆った少年が駆けて来る。小面は刀を納め、阿亀に怪訝そうな目を向けた。

「どうした？」

「英国で青血石の取引が行われるようです！ しかも大量に」

「英国で？ 誰が……」

小面は黒いコートを羽織って阿亀の後ろを追う。阿亀が目指す先には般若の面をつけた女がノートパソコンを操作していた。

「――般若。青血石の取引の話は本当か？」

「ああ、しかも錬成後の最高級品だよ。シュドゥケイトの青血石を十二カラット、受取人はウェアリーメイプルウッド」

「ウェアリーメイプルウッドだと!？」

小面は叫ぶ。ウェアリーメイプルウッド――仇であるフリードリヒの兄だ。

「あの一族は……どこまで穢れているんだ！」

「小面様……」

「英国に行く。準備をしろ! あの一族に青血石を渡してはならない!」

「はい!」

般若は小面の前にひざまずき、その面をそっと外した。紅の瞳が炯々（ケイケイ）と輝き、鈍色の空を射る。

「【我らを英国へ導け】!」

般若が叫んだ瞬間、辺りはまばゆい光に包まれる。その光が消えた時には、小面達の姿も同じように消えていた。



朔はゴーグルをつけたまま、空中を斬り裂いた。このゴーグルは射撃や剣術などの練習に使う、メイプルウッド社が開発したものである。朔は自分にしか見えない、敵の映像を斬り続けた。

乱れている。当たり前だ。集中などしていない。ただ苛々と空を斬る。愛刀は素人が得意げに振り回す棒きれのようになっていた。

「……っ……はっ……」

膝をつく。ただ疲労だけを積み重ねる意味のない運動。汗が吹き出し、朔のシャツを濡らしていた。

「――荒れてますね、月峰君」

朔の熱を冷ますような声が響いた。冷静でない朔にもすぐにわか

る。自分を「月峰君」と呼ぶのはジェイドだけだ。朔は息を整えてから、ゴーグルを外してその翡翠の瞳を見た。

はっとする。その眼には、いつもの穏やかな彼からは想像も出来ない、暗く冷たい焰が燃えていた。

「月峰君が荒れているのは、あの情報屋が原因ですか？」

「……ああ」

「でも彼がサリューIIアンダーソンを殺したおかげで、お嬢様の憂いも消えたんですよ。もちろん傷が癒えたとは言い難いですが……少なくとも、彼女に再び狙われる心配はなくなった」

「そうだけど……何だかすっきりしなくて。ジェイドも、何かあったんじゃないのか？」

ジェイドは微笑して、懷から武骨なナイフを取り出した。朔は思わず息を呑む。何をするつもりなのだろうか。

「私も少々暴れたと思いますしてね。ですが月峰君と違い、体力がないのでやめておきます」

ジェイドは軽くナイフを投げた。それは地面に刺さり、月の光を冷たく反射する。

「ウエアリーさんが会社の金を着服していたんです」

「ウエアリーって……旦那様の実の兄、だろ？」

「ええ。ですから出納管理をしていた人も逆らえず帳簿を書き換えていたようです。彼に関しては解雇すれば問題はないですが……ウエアリーさんを解雇するとなると大変なんですよ。まあ、でもあの人はろくに仕事もしてなかったんで解雇しましたが」

朔は目を見開いた。フリードリヒの秘書として絶対的な権力を持つジェイドだが、まさかウエアリーを解雇するタブーを犯してしまふとは。出来ないことはない。だがその後に怒る嵐は想像を絶するものになるだろう。それはジェイドも痛いほどわかっていたはずなのに。

「あの、さ……大丈夫なのか？」

「面倒なので一対一で勝負をつけることにしました。文字通り命懸

けです」

「そんなリスクを何故背負うんだ？」

「野心ですよ。私は早く旦那様に認められて、研究職に戻りたいんです」

ジェイドはナイフを拾って、それを再び懐にしまった。厳しく凜とした表情のまま、ジェイドは続ける。

「私はかつてメイプルウッドのライバルであるクール社の研究員だったんですよ。しかし上と揉めて解雇されたところを旦那様に拾われました。それが三年前のことです」

初耳だった。クール社のことはメイプルウッドではタブーとなっているから当然かもしれないが。ジェイドは翡翠の瞳を空に向ける。その姿には僅かな悲哀が見えた気がした。

「ですが、旦那様はまだ私を信用していない……だから、研究をさせてくれないんです」

「敵になりそうな奴ほど近くに置いておけということか？　旦那様の考えてることがよくわからないな……」

「私ものです。でもそれを考えるよりは、早く信用されたほうがいいでしょう？　だから命懸けで挑んでるんです」

朔は静かにジェイドを見た。研究者に似つかわしい怜悯な顔立ちには決意の色が浮かんている。こんな顔をした人間は何を言ったって止められはしない。サリユーを殺すと言った『根』のように。

「――ジェイドっ！」

不意に闇を裂くような声が響く。眼を向けると、そこにはアレンを引き連れてテレーゼが走ってくるのが見えた。

「お嬢様、どうかしたんですか？」

「伯父様が明日家に来るって……。どうしよう、明日お父様はいないのに」

テレーゼは不安そうに爪を噛んだ。彼女は伯父であるウェアリーを苦手とし、避けている。フリードリヒもそれを理解しているのか、彼女とウェアリーが会わないようにしていたのだ。

「心配はいりません。明日は旦那様の代わりに私がウェアリー様の相手をいたしましょう。ウェアリー様がいらっしゃるのは何時ですか？」

「昼の一時だと言っていたわ」

「ではアレンさん、その時間は特別に月峰君と二人でお嬢様の守護をお願いします。もちろん時間外労働の手当は出しますから」

ジェイドはアレンの扱いを心得ている。アレンは金が絡めば、倍以上の力を発揮できるのだ。朔はだれにもわからないように、小さく溜息をついた。

「でも……ジェイドは大丈夫なの？」

「心配いりませんよ。お嬢様は自分の心配だけしていればいいんです」

テレーゼは眼を伏せた。彼女がこういう態度をとるときは、何か言いたいことを隠しているときだ。テレーゼはしばらく口を開けたり閉めたりしていたが、やがてゆっくりとジェイドに聞いた。

「……伯父様を解雇したって、本当？」

「誰から聞いたんですか？」

「伯父様が言ってたわ。でも私は……ちゃんと理由があったんだって、思っているわ。だからその……頑張って」

ジェイドは柔らかくテレーゼに微笑みかけた。テレーゼはそれを見ると、安心したようにアレンと屋敷に戻っていく。朔はその後ろ姿を見ながらジェイドに言った。

「あのさ……ジェイド」

「何ですか？」

「テレーゼ様より、お前が心配だ」

「月峰君は誰の守護者ですか？ 君は私ではなくテレーゼ様を守るべきなんです。何、心配はいりませんよ。私は『怪物』と呼ばれた男です」

でも、と食い下がる朔の唇にジェイドは人差し指を置いた。

「ウェアリーは昔酔った勢いでテレーゼ様に迫ろうとした強欲で変

態な人です。お嬢様をそんな男から護ることに、君は命を懸けてください」

朔は諦めたように笑った。ジェイドはもう曲げられない。出来ることはもう、何もないのだ。

□＋□

「通信を傍受した結果、明日ウェアリーはメイプルウッド本家を訪問するようです。時刻は現地時間午後一時。どうしますか、小面様」
般若の言葉に、小面は腕組みをしたまま答える。

「阿亀はその時を見計らって、ウェアリーの屋敷にある青血石を探せ。般若は契約に違反したシュドの始末だ。いいな？」

「わかりました！」

般若と阿亀は同時に言い、仮面を外した。その眼は青血石を嵌め込んだように、真紅に輝いていた――

◇＋◇

テレーゼは自室の中をせわしく歩き回っていた。朔とアレンはしばらくそれを見ていたが、やがてアレンがしびれを切らしたかのようにテレーゼに言う。

「ジェイドが心配か？」

テレーゼは「そんなわけない」と言いながらも、本を逆さまの状態で読んでいたりと落ち着かない。ウェアリーが来てからずっとこのなのだから、ジェイドが心配なのは誰が見たって明らかだ。しかし認めないのは、照れているからだろうか。

「テレーゼ様……」

呆れたように朔が言うと、テレーゼは、

「わ、私は伯父様が前に酔っ払って私にセクハラしてきたから……」

またそうになったら嫌だと思ってるだけで、別にジェイドが心配なわけじゃないから！」

と叫んだ。まだ何も言っていないのに。朔は苦笑を禁じ得なかった。「そんなに心配なら、少し覗いてみるか？」

「な、何言ってるのよアレン！ 覗きなんて破廉恥な……！ もういい、伯父様帰るまで本読んでるから！」

読んでいないのは明らかだ。しかしこれ以上口出しをすれば怒られるだけなのはわかっている。朔とアレンはお互いの得物を握り締めながら、視線をさ迷わせていた。実際、テレーゼ以上にジェイドの心配をしているのだ。

「まだ終わらないのかな……」

テレーゼの独り言に、言葉を返す者は一人もいなかった。同じことを考えているのだ。強欲で、目的のためなら手段を選ばないと言われるウェアリーである。殺し屋の一人や二人、呼んでいてもおかしくない。

「……ねえ」

テレーゼがぎこちなく朔達の前に立った。

「その……なんて言うか、レモンティーが飲みたいから……台所までついて来てほしいなあ、なんて……」

台所までの道のりには、ジェイドとウェアリーがいる応接室がある。アレンは意地悪のつもりなのか、真面目に仕事をする守護者のように言う。

「内線電話をかけて、持ってきてもらえ。部屋から出ちゃダメだ」
テレーゼはしかし、しどろもどろになりながらも食い下がる。

「その……えっと……紅茶を自分で入れてみたいなあ、なんて……」
「仕方ないな。朔、行くぞ」

アレンも気になっているのだ。主人も素直でなければ守護者も素直でない。朔はそう思って苦笑を浮かべた。

朔達三人はまるで泥棒のように忍び足で廊下を歩いていた。そして応接室が近づくと、足を止める。

「ちょっと覗くだけだからね！ 別にその……」

「テレーゼ様、あまり大きい声を出すと聞こえますよ」

テレーゼは朔の言葉を無視して、細く扉を開けた。途端にジェイドの怒声が響き渡る。

「会社の金は貴方の私物ではない！」

「ジェイド！ オークス……お前のような余所者に口を出される筋合いはない。メイプルウッドの命令は絶対なのだよ。やろうと思えばテレーゼも会社を動かすことが出来る」

「舵取は一人で十分です！ 貴方のやったことはメイプルウッドを内側から崩壊させることと同じです！」

ジェイドの剣幕にテレーゼは身を縮こまらせた。このままここで聞き続けると駄目かもしれない。朔はアレンとテレーゼに外に出るように促したが、二人は野次馬精神を発揮して、てこでも動かないようだった。朔は仕方なく室内に視線を戻す。

「――私は社を崩壊させるつもりなどない。社のためになることをしたんだ」

ウェアリーはそう言って、鞆から紅く輝く石を出してジェイドに見せた。ジェイドの眼が見開かれる。

「それは……！」

「お前もクール社の研究員なら知っているだろう？ 錬成された青血石がどれだけの威力を持つか……」

ウェアリーが笑んだ瞬間、石が強く発光した。眼を灼かれる。朔はテレーゼの眼を腕で塞ぎ、自分の眼も覆った。

光が消えた時、朔の眼に飛び込んで来たのは床に膝をついたジェイドだった。体が沈みそうなくらいに深い絨毯を掴み、喘いでいる。「――ジェイド！」

テレーゼはジェイドに向かって飛び出した。アレンは慌ててテレーゼを止める。朔はウェアリーに墨染桜の切っ先を突き付けながら叫んだ。

「貴様……ジェイドに何をした！？」

「それはジェイド自身が一番よくわかっているはずだよ。彼がクル社でやっていた研究はこういう恐ろしいものなんだ」

「私はそんな研究をしたつもりはない……ッ、くう……！」

アレンは床に倒れ伏したジェイドを抱き上げた。ジェイドの呼吸は異常に速い。アレンはテレーゼの手を引き応接室を出て行った。後は任せるということだろう。

「俺はジェイドが何の研究をしていたかなどわからない。無学だから……多分聞いても理解など出来ない。だが、貴方のしたことは間違っている」

「それはお前が表明しか見ていないからだ。私はメイプルウッドのためになることをした！ ああ男はいずれメイプルウッドに厄災をもたらす！」

朔が反駁しようと口を開いた瞬間、防弾ガラスが割れた。

「誰だ！」

「私は青血隊の般若、と申します。本日はウェアリーメイプルウッド様に用事があって参りました」

般若の面をつけた女——朔は墨染桜を般若に突き付けた。

「今、俺が話しているんだが」

「私は同じ日本人である貴方と剣を交えるつもりはありません。ほんの少しでいいのです。私の目的はこの男から青血石を回収することのみです」

般若はそう言うと、顔を覆う面をすつと外す。零れる長い黒髪の真紅の瞳——朔は思わず目を見開いた。

「【風よ】」

般若が呟く。一瞬遅れて突風が朔達を襲った。壁に叩きつけられた朔は、頭を押さえながら様子を伺う。しかし巻き上げられた塵が目を塞いでいた。

突然、何事もなかったかのように風が止む。朔は物が散乱した部屋を見回す。そこにはウェアリーも般若もいなかった。床に落ちた墨染桜を握り、気配を探るが何も感じられない。

朔がしばらくそうしていると、ひらひらと花のように紙が落ちて来た。朔はそれを右手で掴む。

「『ウェアリー・メイプルウッドは家に送り届けました。ご安心ください』……って安心できるかよ……」

まあいい。朔はその紙を適当に丸めて部屋を出た。今はそれよりも、ジェイドだ。

しかし朔の脳裏から、般若の紅の瞳が消えることはなかった――



ジェイドの自室に入ると、先程よりは落ち着いたものの、まだ荒い息をしたジェイドが天蓋付きのベッドに横たわっていた。朔はゆっくりジェイドに近付き、その汗ばんだ額に手を置く。

「熱いな……」

「……月峰、君……ウェアリーさんは……？」

「それについては後で話す。今は休め」

ジェイドは胸に手を当て、小さく呻く。こめかみのあたりを汗が伝った。

「……アレンさん。テレーゼ様と台所に行って……水を持って来てくれますか？」

「あ、ああ……わかった」

アレンは頷き、テレーゼの手を引いて部屋を出て行った。朔はジェイドの潤んだ翡翠の目を見る。

「……青血隊の般若とかいう日本人が入ってきて、ウェアリーを連れ去った。お前が聞きたいのはこれだろう？」

「青血隊ですか……成程。ではウェアリーさんは無事でしょうね……」

「何か知ってるのか？」

「知っていますよ。私が研究員だったころはお世話になりましたから。彼らはむやみに人を殺したりはしません」

ジェイドは朔の右手を強く握った。熱が伝わってくる。

「……月峰君にお願いがあります」

「何だ？」

「私を……スピネル・クールのもとへ運んでください」

朔は目を見開いた。スピネル・クール——クール家の若き当主である。

「でも……」

「彼なら治療するための道具を全て持っています。早く……もうもちそうにありません……う、あッ……！」

血が止まるのでは、と思うくらいにジェイドは朔の手を強く握った。熱い。しかし朔は逡巡していた。スピネル・クールのところへジェイドを連れていくのは、裏切り行為になるかもしれない。だが苦しむジェイドを目の前に、朔は小さく首を振った。

「——わかったよ」

ジェイドを抱きかかえたまま、窓を開ける。

「そこから……降りる、つもりですか……？」

「ああ」

窓枠を蹴り、空中に飛び出す。ジェイドに振動が伝わらないように、庭の上に着地した。離れに『転送』装置がある。朔は急いで離れの扉を開けた。ジェイドの呼吸は段々と浅くなっている。脈も異常に速かった。

朔は『転送』の中にジェイドを寝かせ、パネルを操作する。エンターキーを押すと機械が唸りを上げた。



クール家の屋敷はメイプルウッドのその二倍くらいはあった。庭には噴水までもがある。メイプルウッドと違い、クールは元々伯爵家だ。だからこの違いも当たり前のことなのだろうが、朔は呆然とするしかなかった。

心持ち緊張しながらもインターホンを押す。するとすぐに透明な声が応えた。

《テレーゼの従者が何の用だい？》

「ジェイドを助けて欲しいんです！」

《ジェイドをね……そういうことなら、入りなよ》

軋む音をさせて、重厚な扉が開いた。朔はジェイドを抱えたまま、屋敷に向かう。

「大丈夫か、ジェイド？」

「なん……とか。ありがとうございます……」

屋敷の目の前に立つと、自動で扉が開く。中から目の回りに鮮やかな青の布を巻いた少年が出てきた。気品を纏ってはいるが、まだ幼い。確かスピネルはテレーゼと同じ歳だったはずだ。

「直接会うのは初めてだな、月峰朔。ジェイドのその様子を見れば用事は一目瞭然だ。とりあえず中に入りなよ」

「ああ」

朔はスピネルの後ろをついて歩いた。屋敷内は青で統一されている。まるで海の中にいるようだ。スピネルは目隠しをしているとは思えない、確かな足取りで歩を進めている。自分の家だからだろうか。しかし、スピネルとクールが盲目という話は聞いたことがない。朔のその疑問を悟ったのか、スピネルは苦笑する。

「僕は盲目ではないよ。これは見たくないものを見ないためになっているんだ。どうせつけていたって普通に見えるしね。僕は千里眼なんだ」

「せんり……がん？」

「信じていないようだね。でも、嫌でも信じざるを得ない状況になると思うよ」

スピネルは口許だけで涼やかに微笑した。人の表情が一番見える眼が見えないのは、意外に不安を掻き立てる。しかしそんな朔をよそに、スピネルは一つのドアを開けた。礼拝堂のようだ。

「祭壇にジェイドを寝かせてくれ」

「ああ」

朔は言われるがままにジェイドを祭壇に横たわらせた。スピネルはゆっくりと目隠しを外す。その目は海の底のように蒼いが、テレーゼのような澄んだ色ではなかった。

「ジェイド、彼には見られていいのかい？」

「……問題はありません。それより、早く……」

スピネルは頷いて、眼を閉じる。しばらくして再び開いたとき、その目はまるで血のような紅に染まっていた。朔は驚き、その眼を凝視する。

「自分以外に赤眼を見たことはないのかい？」

「いや、さっき……だが、変わるのは初めてだ」

「僕は人為的に力を付与された存在だからな。まあ、詳しい話は後にしよう」

スピネルはジェイドの着ていたワイシャツの前を開け、白い体を間接照明の柔らかい光の下に晒した。ジェイドの腹部で何かが蠢いている。ジェイドは華奢だからだろう、それははっきりとわかった。

「『蟲』か……。誰にこんな術を使われたんだい？」

「ウェアリーが……鍊成された青血石を手に入れていて……う、ああ……！」

ジェイドの腹部のそれが、急に激しく動き始めた。ジェイドは祭壇の上で転げ回る。

「灼けるッ……く、あ……ッ！ うああああっ！」

ジェイドの喉から絶叫が上がる。翡翠の瞳は虚空を見つめ、細い体が弓のように反った。

「ジェイドの体を押さえていてくれないか？」

「ああ」

朔は暴れるジェイドを渾身の力を込めて祭壇に縫い留めた。スピネルはまだ幼い手を、ジェイドの腹部に置く。それは徐々にジェイドの中に侵入していくように見えた。

「ぐっ……あ、いつッ……！」

「我慢してくれ、ジェイド。相当喰い荒らされているから……かなり痛いと思う」

スピネルは手首までをジェイドにうずめて、何かを捜すように手を動かした。おそらく腹部で蠢くものを掴もうとしているのだろう。

「今から『蟲』を抜く。かなり痛い……耐えてくれ」

スピネルがジェイドに優しく言ってから、沈めていた右手持ち上げた。ジェイドは濁った母音を繰り返す。激痛に、叫ぶことも出来ないのだろう。スピネルが右手を完全に抜き取る。その手には百足を大きくしたようなものが握られていた。

「かなり強いな……。月峰、これを斬れるかい？」

朔は返事のかわりに、素早く墨染桜を抜いてそれを斬り捨てた。

スピネルが感嘆の声を上げる。

「日本刀には魔を斬り裂く力があるというのは嘘ではなかったようだな。——よし、あとは毒を抜くだけだ」

スピネルは、今度は肺の辺りに右手をうめた。血が出ている様子はない。信じられない光景が繰り返されていたが、朔はとりあえずは邪魔をしないように口をつぐんでいた。

「う……あ、あ……！」

ジェイドの喘ぎと重なるように、濡れた音がし始めた。似た音を聞いたことがある。血の匂いを纏った、臓物が立てる音にそれは似ていた。

スピネルが手を抜く。その瞬間、礼拝堂を血の匂いが包んだ。スピネルの血染めの手には何か黒いものが握られている。それはまるで心臓のように胎動していた。肉塊のようにも見える。

「【悪を滅せよ】」

スピネルが言うと、その黒いものは霧のように消える。朔は驚き

を隠せなかった。

「あとは一日くらい安静にしていれば自然と消えるよ」

「……ありがとうございます、スピネル」

ジェイドの表情がいつものように和らいだのを確認すると、朔はそつと手を離す。同時にスピネルも瞳の色を蒼に戻した。

「――月峰君。今のが、私がクール社で研究していた『魔術』ですよ。ウェアリーさんが私に使った『蟲』もその一種です」

「魔術？」

「聞いたことはありませんか？ 『暗黒の水曜日』以前の日本で魔術が研究されていたという話を――」

「テレーゼ様がそんなことを言っていたような……」

朔は腕組みをして記憶を探る。そうだ、確か都市伝説の本だ。朔は手を打った。

「あれは真実でした。ただ、あまりに突拍子もない研究であったのと、成果をあげられなかったこともあり、日本の一部の人にしか知られていない研究でした」

スピネルがジェイドの言葉を受けて続ける。

「そこに眼をつけたのが死んだ僕の父親なんだ。昔から、一番新しい技術は兵器開発から生まれると言うだろう？ それは突拍子もないものでも、破壊力があれば採用してしまうからなんだ。原爆だって、あれほどの被害が出るとはわからないうちに落とされてしまった」

ジェイドは服を整えながら話を続ける。朔も、とりあえず口を挟むことはせずに耳を傾けていた。

「クール社の魔術研究は、十二年前までは日本で行われていました。しかし日本がなくなったことにより、生き残った研究者は英国に渡りました。しばらくそこで研究を続けていたのですが……彼らは兵器開発より自分達の国の再建を望むようになりました。それが青血隊です」

般若という女を思い出す。あの女が起こした風が、研究の成果で

ある魔術だったというなら確かに筋は通る。初めて見る技術はたい
てい魔法のように見えてしまうものであるし。

「魔術研究は技術だけが先行してしまっているのですが、鍵を握る
鉱物はすでに発見されています。それが青血石です。もちろん宝石
として出回っているものとは違い、ある特殊な状況に置くことによ
って錬成されたもの——私達はルベドと呼んでいますが一それが
魔術を発動させる鍵になるんです。ウェアリーさんがルベドを出し
たところを見たでしょう？」

だからジェイドはあの時、あんなに驚いていたのか。朔は納得し
たように頷いた。スピネルが再びジェイドの言葉を受けて口を開く。
「全てを話したって頭がパンクするだけだから、理論の話は置いて
おこう。だがお前は知らなくてはいけない。お前も僕のように、青
血石の力を借りなくても魔術を使える種類の人間だ」

「俺が……？」

「僕は人為的に力を付与されたけど、お前は生まれながらに魔術を
使えるんだ。瞳の色を見れば一目瞭然だ」

スピネルは朔の真紅の瞳を指差した。礼拝堂に沈黙が流れる。ス
テンドグラスの雪の結晶が冷たく朔を見下ろしていた。

「——つまり俺は、やっぱり人とは違うということか」
全てが繋がる。

ゼラスを燃やした炎は、自分が発生させたものだ。般若と名乗っ
た女に風が起こせたのだから、多分可能だろう。天然である自分
は。

納得と同時に、スラムの人間の声が蘇る。

『あの紅眼は化け物の証』

『あいつが殺したんだ』

『悪魔の子だ』

『殺される前に殺してしまえ』

疫病が流行れば自分のせいになれ、盗難が起これば犯人として吊
し上げられた。蘇る。罵る女の声。男の声。子供の声。——花雪の

死体。血の匂いがまだ微かに残る礼拝堂は、朔を闇に引き込んでいく。

化け物は、悪は、狩られる——

「僕はそういうつもりで言ったんじゃない……」

「俺は特殊な人間だということは合っているだろ。俺は——『特別』なんて嫌だ！ 今すぐ俺を普通の人間にしてくれ！ お前らなら出来るんだろ！？」

特別であることで一人になるなら、ただの人間でいい——

賛美歌を美しく響かせるであろう石の壁に、朔の声が虚しく反響した。

○十○

「主人に行き先も告げずにどこに行ってるのよ！」

テレーゼの怒号が屋敷に響いた。アレンは耳を押さえながら彼女を宥める。

「きつと医者のとこだと思うよ。朔は元殺し屋なんだから、腕のいい闇医者くらい知ってるだろうし……」

「アレンだって見てたでしょ！ あれが医者に治せると思う？ 毒の類ではないはずよ。ジェイドは気をつけていたはずだし……呪術、としか考えられないけど」

「闇稼業ってのは人脈が命だからな、もしかしたら何とかできる人間を知ってるのかもしれないし。気長に待つしかない」

テレーゼは不満そうな声を上げる。なおも反駁しようとしたテレーゼはしかし、電話のベルによってそれを阻害された。テレーゼはスピーカーホンのスイッチを押す。

「はい」

《久しぶりだな、テレーゼ》

「スピネル……用がないなら切るわよ」

家同士の仲が悪いのだ、仲がいいはずがない。テレーゼは嫌そうな態度を隠さずに、揚句の果てには舌打ちをした。

《レディが舌打ちなんかするもんじゃないよ。だから成金は嫌いなんだ、下品で》

「で？ 上品な伯爵様が下層の私に何の用かしら？」

嫌味たっぷりテレーゼは言う。アレンは「だから下品って言われるんだ」と呟いたが、テレーゼのキアノスブルーの瞳に気圧されて口をつぐんだ。

《優秀な秘書様と、君の従者が僕の屋敷にいるから迎えに来てくれないかな？ ジェイドは落ち着いたけど、君の従者の方がね……》

「朔がどうかしたのッ!？」

《来ればわかるよ。じゃあね》

一方的に電話は切れた。テレーゼは椅子にかけていたカーディガンを羽織り、アレンを一瞥する。

「行くわよ。さっさと連れ戻して、何でアイツのところに行ったのか朔を問い詰めてやらなくちゃ!」

「でもジェイドの具合は良くなったということは……ジェイドが指示した可能性がありま——」

「ジェイドを問い詰めたら、紅茶を熱湯にされそうじゃない。それよりも、朔が心配だわ」

アレンはテレーゼの手を引いて早歩きをしながらも、冷静に返す。

「スピネルのはったりの可能性は？」

「スピネルは、そういうのは苦手よ。アイツは隠すことはあっても嘘はつかないわ」

待っていて。

今すぐに、行くから。

テレーゼは右手を握りしめて、朔の眼の色に染まり始めた空を見上げた。

第四話『紅』（前書き）

第三話の続きです。

第四話『紅』



紅い眼は悪魔の証。

それがスラムの秩序のためにゼラスが流した噂だということを、花雪はすでに理解していたのかもしれない。花雪はいつも朔を守っていた。目を塞ぎ、耳を塞ぎ——しかしその指の隙間から、いつも絶望は侵入してきた。

誰も信用できない。

花雪だって、いつか自分を斬ってしまうのかもしれない。

憎んだ。真紅に染まる瞳を。他者と違う、そのことを。自分の眼が、例えば青なら——愛されただろうに。

盗みは得意だった。花雪には怒られたが、生きるためには汚れるしかない。朔はいつも二つのパンを盗んだ。

その日も同じようにパンを盗み、店主から逃げていた朔の眼の前に子供達が立ち塞がった。スラムの子供を束ねる、所謂ガキ大将とその腰ぎんちゃくだ。朔はガキ大将を睨みつける。

「何か用か？」

腰ぎんちゃく達が朔を押さえ付けた。朔は逃れようと暴れるが、流石に年上には勝てない。ガキ大将が太い指を朔の右眼に突き立てた。

血の匂いがした。神経を切られ、眼球がえぐり出される。ガキ大将は叫びを上げた朔の口に入れて入れた。吐き出そうとするが、口を塞がれる。残された左眼から涙が流れた。

鉄の味。

変に柔らかく、弾力のある感触。

息苦しくなった朔の喉を、悪魔の眼が通過していく。朔は絶叫し

た。

「うわ、コイツマジで食ったよ」

子供達はまるで化け物でも見るような眼で朔を見てから、一目散に逃げ帰った。朔は虚ろな表情のまま、左眼に細い指を食い込ませる。神経を引きちぎる音と共に世界が色を失った。

左手に血と、不気味に柔らかい感触。朔はそれをそのまま握り潰した――

これでいい。

これで皆、自分に笑いかけてくれる。

人として見てくれる。

人に、なれるんだ……！

朔は高い笑い声を上げた。その声は虚ろに響いて消えていく――



――血の匂い。

今も消えない、喉を通るおぞましい感触。

朔は頭を抱えて叫んだ。

「俺は――『特別』なんて嫌だ！ 今すぐ俺を普通の人間にしてくれ！ お前らなら出来るんだろ！？」

普通の人間になりたいと潰した眼。しかし次の日には完全に元に戻っていた。それも魔術によるものなら、自分は完全に人間の範疇を越えている。

普通は、潰した眼が再生したりはしない――

「残念だけど……それは出来ないんだ」

スピネルの眼が紅に変化する。忌まわしい、呪われた血の色だ。少し伸ばした黒い髪に、真紅の瞳――まるで幼い頃の自分を見て

いるようだった。朔の口許に、歪んだ笑顔が浮かぶ。

忌マワシイ、忌マワシイ。

災イダ。悪魔ダ。化け物ダ。

自分ノ眼ヲ食ベタ！

人喰イニ違イナイ！

殺シテシマエ！

朔は脳内で反響する声に導かれるように、スピネルの右眼をゆつくりとえぐり出した。

「――月峰君！」

ジェイドが叫んで、朔を押さえ付けた。しかし身体能力が違いすぎる。すぐに自由を取り戻した朔は、スピネルの小さな薄紅色の唇をこじ開けて眼球を入れた。

「懐かしい味がするだろう……？」

口を塞がれたスピネルは、飲み込まないように必死で首を振った。朔はそれを見て、さらにいびつな笑い方をする。その眼は全く笑っていないかった。

「お前は人間になどなれない……」

まるで自分に言い聞かせるように言う。いや、真実自分に言っているのだ。

ジェイドは思わず息を呑んだ。しかしすぐに冷静に戻り、麻醉銃を撃ち込む。朔の体から力が抜けた。スピネルはすぐに口の中のものをつき出す。

「……大丈夫ですか、スピネル？」

「一応な。このくらいならすぐに再生出来るし……だけど、気持ち悪い」

「スピネルがルベド状態に入ると、月峰君にそっくりになりますから……そのせいで記憶を呼び覚ましてしまったんでしょう」

スピネルは眼を眼窩に嵌めて、そっと手を当てた。完全に元通り

とはいかないが、とりあえず神経だけは繋げたようだ。

「本当は魔術を使えるようにして、テレーゼの守護を完璧にしてやりたかったが……この分じゃ無理そうだな……」

「そうですね……月峰君は魔術がなくても十分強いですから、諦めましょう」

「――そう、だな」

○＋○

スピネルの電話を受けたテレーゼは、『転送』を使ってクール家の目の前に降り立った。インターホンを押そうとして、門が開いているのに気がつく。

「開けてくれたようね。スピネルにしては気が利くじゃない」

テレーゼはアレンを引き連れて、邸内に入った。すぐにスピネルが出て来る。

「朔は!？」

「やれやれ、君はロクに挨拶も出来ないのかい？」

「アンタにする挨拶の文句なんて持ち合わせてないの。それより朔はどうしたの!？」

テレーゼはスピネルの胸倉を掴んで揺り動かした。スピネルは苦笑しながら、寝室の方を指差す。

「今は寝てるよ。心配しなくても、怪我をしたとかそういうんじゃない。ただちよっと……混乱してしまったみたいで」

「そう」

テレーゼはすぐに寝室に向かおうとする。スピネルは腕組みをしながらその後ろ姿に問い掛けた。

「テレーゼは月峰の過去をどこまで把握しているんだ？」

「七歳までは記憶がなくて、殺し屋を始めたのは十歳の時。殺し屋を始める前はスラム街に住んでいた。……それくらいね。朔はあま

り過去の話をしてくれないから。でもどうしてそんなことを聞くの？」

「世の中の人間は未来や現在ばかりに眼を向けるが、過去は今を形成する重大な要素だ。主人として、従者の過去を受け止めてやらなきゃならないときもある。このことをちゃんと覚えておいたほうがいい」

テレーゼは微笑を浮かべた。その瞬間に、柔らかな太陽の香りがある。スピネルは僅かに眼隠しの下の目を細めた。

「スピネルにしてはいいこと言うわね。だけど私には朔の過去なんか受け止めきれない。それだけ重い過去だということは、今の朔を見ればすぐにわかるわ」

「僕は、テレーゼなら大丈夫だと思うけど。君は雑草みたいに強そうだし。品はないけど」

「私が雑草なら、上品なクール伯爵様は儂く散りゆくアネモネといったところかしら」

テレーゼはスピネルに毒を吐いてから、寝室に向かった。仲は悪いが、幼馴染であったために屋敷の間取りは完全に記憶している。

テレーゼは青いドアをノックして部屋に入った。

まるで海の底にいるような気持ちになる。青で統一された部屋の、これまた青い天蓋付きのベッドに朔が横たわっていた。紅い瞳は瞼の下に隠れ、いつもは隠れている額があらわになっている。

「朔……」

寝顔は安らかとは言い難い。何かを堪えるような悲しい顔だ。テレーゼはその滑らかな額に唇を落とす。

「貴方はいつもそうやって、一人で抱え込んでしまうのね……」

そんな細い肩に背負えるものなどたかが知れているのに。いつかその荷物に押し潰される日まで、朔は一人で抱え続けるだろう。投げ出してもいいんだと誰かが言っても変わりはない。朔は優し過ぎるくらい優しく、耐え忍ぶことが強さだと信じているのだから。だからせめて、後ろからそっと支えるくらいは。テレーゼは朔の

瞼に指を置いた。いつもは振り払われるが、余程深い眠りなのか起きる気配はない。

テレーゼはそのまま顔の曲線をなぞり、首筋に指を伸ばした。二年前につけられた醜い傷痕が残っている。

「この傷、消えないのね……」

「消えないんじゃない」

青を思わせる声がする。テレーゼはゆっくりと振り向いた。

「スピネル……」

「気付いているだろ、お前だって」

「……うん」

朔からはいつも微かに血の匂いがした。どこかが傷ついている証だが、誰もその傷を探せはしなかっただろう。首筋の牙痕は治らない傷ではなかった。しかし何度も治りかけるたびに傷つけられ、ついには絶えず血を滲ませる傷になったのだ。

「私は主人失格ね……。知っていながら止めることが出来ない」

テレーゼは朔の傷をなぞりながら続ける。

「朔は……母様に似ているわ。だから初めて会ったときに、守りたいと思ったの。だけど、出来そうにない……自信がないの」

スピネルはテレーゼを鼻で笑う。

「お前は本当に馬鹿だな」

「馬鹿って何よ！」

「馬鹿は馬鹿だ。自分の身も守れない奴が人を守るかよ。お前は自信がないとか言う前に守護者が必要ないくらいに強くなれ」

スピネルは目隠しを外し、テレーゼを見た。深く底の見えない青い瞳にテレーゼは思わず息を止める。

「——強さは暴力だけじゃない。お前がいくら馬鹿でも、そのくらいはわかるだろ？」

「アンタっていちいち失礼よね。貴族のくせに礼儀も知らないわけ？」

テレーゼが切り返すと、スピネルは微笑を浮かべた。いつものよ

うに言い返してこないことに違和感を覚える。

「スピネル……？」

「お前はそれでいいんだ。成金のくせに高飛車で、下品で、自信に満ち溢れているのがいい。さっきみたいなのは、調子が狂うからやめてくれ」

元気づけようとしていたのだ。ようやく気付いて、テレーゼは笑った。本当にスピネルらしくない。

「スピネルの調子が狂うなら、ずっと落ち込んでいようかしら？」

「無理だろ」

薔薇色に色づいた唇から心底馬鹿にしたような言葉が返ってくる。テレーゼは頬を膨らませた。



誰かが自分を呼んでいる。そんな気がして、朔はゆっくり目を開けた。

「テレーゼ様……？」

「あら、ようやく起きたのね」

部屋は青い。まるで海に抱かれているようだ。朔は何が起きたのかを思い出そうと部屋を見回す。すると、壁に寄り掛かっていた部屋の主——スピネルと眼が合う。

その瞬間に思い出す。自分のしたことを。喉から掠れた音が漏れた。

「……俺は……」

混乱する。

何故そんなことをした？

——わからない。

ただ、言葉だけが頭を回る。

「朔……？」

自分を見るテレーゼのキアノスブルーの眼が責めているように見える。朔は伸ばされた手を振り払い、頭を抱えた。

「見るな……ッ！」

そんな綺麗な瞳を向けなくてくれ。朔は頭を振って叫びを上げた。テレーゼはもう一度ゆっくりと手を伸ばす。

「――落ち着きなさい、朔」

耳元で響く声は蒼い。熱を冷ましていく清浄な風のような。しかし耳を塞いでいる朔には届かない。

紅い瞳は虚ろに涙を流す。テレーゼはそれを拭おうと再び手を伸ばした。

「来るな……触るな……！」

「朔……」

テレーゼは朔を抱きしめ、子供をあやすようにその背中を優しく叩いた。

「大丈夫……貴方を傷つけるつもりはないわ。私は貴方の味方よ」
朔はテレーゼの腕の中で暴れた。しかし起きたばかりだからなのか、逃れることはできない。

「怖いことは何もないわ……」

テレーゼの手がゆっくりとしたテンポを刻む。それに倣うように朔の呼吸が深くゆっくりになっていった。スピネルは感嘆したように鼻を鳴らす。

「テレーゼ様……？」

「何かしら？」

テレーゼは朔をさらにきつく抱きしめた。そしてまるで刻み込むように言う。

「私は朔が好きよ……誰よりも、何よりも……」

「テレーゼ様……」

スピネルは一瞬、悲しげにテレーゼを見てからそっと部屋を出て行った。朔はそれに気付かずに、テレーゼに体を預ける。

「花雪……」

小さく呟いた声はテレーゼを強張らせる。しかしテレーゼはすぐに気を取り直して、朔の黒い髪を優しく梳いた。

□＋□

ジェイドは礼拝堂に佇むスピネルに声をかけた。

「……体はもういいのか？」

「おかげさまですっかり良くなりましたよ。お嬢様には私の体調のことなど忘れられている気がします」

苦笑気味にジェイドは言い、スピネルの隣に立った。翡翠の瞳でステンドグラスを見上げる。

「なあ、ジェイド。僕と月峰は何が違うんだと思う？」

「あの二人は鍵と鍵穴なんです。どちらかを失えば成立しないんです。でも、だからと言って、一生そのままというわけではありません。人は形を変えることもあります」

「慰めてくれてるのか？」

「いいえ。真実を言ったまでです」

スピネルは嘲るように笑い、ジェイドを見る。

「真実、か……それを壊そうとしている奴が何を言う」

スピネルの吐き捨てるような言葉に、ジェイドは歪んだ微笑を浮かべた。ステンドグラスを通り抜けた色とりどりの光がその上で踊る。

「心配しなくても、今すぐ壊したりはしない。我らの至宝が壊れてしまうことは避けなければならないからな」

スピネルは悔しそうに唇を噛んだ。対するジェイドは悠々と構えている。

「お前たちの思い通りにはさせない……！」

「朔一人さえ仲間に入れられなかった君に何が出来る？」

「……ッ！」

「今のところ、君が駒として使える人間で、我々に対抗出来るのは一人もない。君はしばらく見ない間に随分力をつけたようだけど……それでも足りはしない」

スピネルはさっと目を閉じて、瞳の色を変化させた。爛々と輝く紅の瞳でジェイドを睨みつけ、小さく言葉を呟く。刹那、突風が礼拝堂に吹いた。

「ここまで出来るようになったか……でも、至宝には遠く及ばない」「もっと強くなって、至宝など越えてみせる！」

スピネルが叫んだ瞬間、部屋の温度が一気に下がった。ジェイドは舌打ちをして目を閉じる。

「そっちがそれなら……」

ジェイドは目を開くと同時にスピネルの腕を掴んだ。

「うあっ……！」

「苦手だった大掛かりの術が使えるようになったと主張したいようだが、私には遠く及ばない。これからも及ぶことはない……力を与えたものを越えることなど出来ない」

スピネルの集中力が途切れたのか、風はやみ、室温も元に戻る。

静寂が訪れた礼拝堂には、地面に膝をつくスピネルがいた。

「……畜生ッ……！」

「君は仮にも伯爵なんですから、そんな下品な言葉はやめなさい」

スピネルはジェイドを睨みながら、自分の左腕に右手を埋めた。

しばらくして右手が抜かれる。その手には氷の塊のようなものが握られていた。

「……いい目をするようになったね、スピネル。でも君にはまだ憎しみも愛情も足りない。勝負にならないよ」

「まだ時間はある！ そのときまでに僕はお前に対抗しうる力を手に入れる……！」

「期待しないで待っているよ」

ジェイドは微笑んで、礼拝堂を出て行った。一人残されたスピネルは、祭壇の向こう——磔けられた救世主に向かって叫ぶ。

「テレーゼは僕が守る……！ 青血隊の思い通りにはさせない！」
石の壁は決意を増幅させる。スピネルは深紅の瞳で、神を睨みつけた。

第五話『捧ぐ詩』（前書き）

朔とその友人・フェイノールトの話。

第五話『捧ぐ詩』



テレーゼが本に葉を挟んで、朔をじっと見つめた。

「……どうしましたか？」

「朔ってこの本の登場人物に似てるなあ、と思って」

テレーゼはそう言いながら読んでいた本のカバーを外した。題名は『That's all there is.』、作者はフェイ
||ノールト―フェイ||ノールト？ 朔は思わずテレーゼから本を奪い取り、目を皿のようにしてその名前を見た。

「アイツめ……」

「どうかしたの？」

「知り合いなんですよ、そいつ。でもフェイはジャーナリストだったような……」

「ジャーナリストだけど、小説も書くのよ」

そうなんだ。とは返せない。朔は恐る恐るページをめくった。

三ページほど読んで、すぐに閉じる。確かに文章は上手い。そしてとても読みやすいが陳腐な感じはしない。問題は――――

「……ってことは、朔って左胸にホクロが――」

「そこまで書きやがったのか、アイツ！」

「でも、かっこよく書かれているわよ。作中では銃使い（ガンマン）だけ」

そういえば、いつか自分をモデルにした作品を書くと言っていた気がする。もちろん断ったはずだが――――

「――で、フェイ||ノールトとはどういう関係？」

「殺し屋時代に取材されたんです。裏の仕事に関する記事を書きたかったらしいです。まあ、脅されておじちゃんになってしまいました。それ以来連絡はとっていません」

「ふうん……にしては口調とか性格とか容姿とか、かなり精緻に書かれているけど。ホクロの位置もね」

テレーゼは何を疑っているのだろうか。朔は溜息をつきながら言う。

「言っておきますが、俺は異性愛者です。だからフェイノールトと恋人だったとかいきずりの関係だったとか、そんなことは断じてありません」

「じゃあホクロは……」

「テレーゼ様は知らなくていいです！」
脱がされたなんて言えるか！

朔は心の中で叫んだ。フェイノールトの問題点は男色で、しかも変態だということのみである。男色はいいとして、変態は大きな問題だ。被害者である朔なら尚更である。

「気になるけど……まあいいや。それより朔……サイン貰ってきてくれない？」

「まさか、フェイノールトのファンだったり……しませんよね？」
「ファンだけど？ 悪い？」

朔は溜息をついた。『根』に頼めば連絡先などすぐにわかるし、フェイならばサインくらいすぐに書いてくれるだろう。問題はあの変態に襲われないか——ただそれだけだ。

「仕方ありませんね。サイン貰うだけならいいですよ」
テレーゼに罪はないんだし。朔はテレーゼに本を返した。



『根』から教えられた電話番号にかけると、すぐにフェイの情けない声が聞こえてきた。

《ふあい……》

「寝てたな、お前……」
沈黙。

しかしすぐに歓喜の色に染まった声が響く。

《朔！ 久しぶり！ なになに、とうとうオレの恋人になってくれるの？》

「誰になるか！ だいたい俺に断りもなしに小説のキャラのモデルにしゃがって！」

《朔が主役の小説は駄目って言われたから、脇役にしたんだけど…
…》

そういう問題ではない。朔は深い溜息をついた。

「今日電話したのはな…俺の雇い主がお前のサインを欲しがってたからんだけど…」

《雇い主って…メイプルウッドの一人娘か？》

「ああ。でも何で知ってるんだ？」

《日本刀を使う元殺し屋なんて英国には朔しかいないだろ。噂で聞いたんだよ》

相変わらず裏の世界には関わっているらしい。確かに裏の世界はネタと噂の宝庫だが、フェイのような戦闘能力が低い人間には危険な場所だ。

《ま、サインくらいなら何枚でも送ってやるよ。だけど、今夜うちでパーティーやるんだよな。よかったら来ないか？》

「パーティー？」

《映画を作ったんだよ。その公開記念パーティーさ。ま、ただ食ってるだけだけど。物書きとして未来の武器商人に会ってみたいし、朔にも会いたいし……どうかな？》

「聞いてみるよ」

朔は保留ボタンを押して、テレーゼに今夜の予定を聞いた。テレーゼは本を読みながら「大丈夫」と応える。

「いいってさ」

《そうかそうか！ じゃあオレは朔に飲ませる媚薬でも用意して…
…》

「今日は護衛だ。お前と遊んでいる暇はない」

残念そうな声が聞こえた。どうやらフェイの変態ぶりは相変わらずらしい。それさえなければ作家としても、友人としても最高ののだが。

◇＋◇

「俺も行きたい」

朔がテレーゼを連れて家を出ようとする、アレンが言った。既に燕尾服を着ている。行く気満々のようだ。

「お前もフェイのファンとか言わないよな……？」

「ファンだ。ていうかテレーゼ様にフェイⅡノールトの本を読ませたのは俺だ」

変態だが、作家としてはすごいのだろう。朔はテレーゼを見た。

「いいわよ。アレンが来てくれたら、朔もフェイⅡノールトと仲良く出来るでしょ？」

真紅のイブニングドレスを着たテレーゼは悪魔のような笑みを浮かべた。トゲがある。まだ誤解しているのだろう。

「だから俺とフェイはただの友達……」

でも確かにアレンがいれば楽だ。ここはテレーゼの誤解に基づいた心遣いに甘えよう。朔は燕尾服の襟を整えた。

「前から思ってたんだけど、燕尾服に刀って合わないわよね……」

「自分もそう思います。でも墨染桜は武器というよりお守りみたいなものだから」

「そう。じゃあ行くわよ」

テレーゼは黒いストールをさっと巻いて朔に右手を差し出した。朔は恭しくその手を取る。

フェイの家には既に沢山の人がいた。朔は招待状を持っていなかったが、事前にフェイが話を通していたのだろう、すんなり入ることが出来た。

「朔うゝ久しぶり！ 会いたかったよ！」

他人のふりをしたい。というか帰りたい。フェイは一目散に朔目掛けて走ってきた。

「騒がしいな、相変わらず」

「朔も相変わらず華奢で綺麗だよ！」

「腰に手を回すな、変態！」

フェイと朔がじゃれあっていると、テレーゼが二人の間に黒い絹の手袋をした手を差し出した。

「初めまして。私はテレーゼⅡメイプルウッドよ」

「君が今の朔の主人か……似合ってるよ、そのドレス。派手だが、着られているといった感じがしない」

「あ、ありがとう……」

テレーゼは顔を赤く染めた。確かに似合っている。元々金髪碧眼の華やかな容姿だ。今日は薔薇のようなドレスがそれを更に引き立てている。しかし残念なことに、フェイはドレスを着た女には興味がないのだ。

「朔は着られているな。馴れていないんだろう？」

「執事じゃないから正装している必要はないんだよ。家にいるときはTシャツにジーパンとかだし。あ、そういやサインは？」

「今から書くよ。何枚欲しい？」

「俺はいいから、二枚だな」

フェイは懷からサイン帳を出して、さらさらと自分の名前を書いた。そして一枚をテレーゼに、もう一枚をアレンに渡す。アレンは顔を輝かせた。

「映画、絶対見ます！ あ、俺は朔と同じくテレーゼ様の守護者のアレンⅡクレイアです」

「映画は初めてだから至らないところも多いだろうけど、楽しんで欲しいな。今回は学校教育がテーマなんだ。ネットで授業を受けているテレーゼお嬢様には関係のない話かもしれないけどさ」

確かに今の英国の学校教育は劣悪だ。特にスラムの子供が通うよ

うな公立の学校は。だからこそテレゼは学校には通わずにインターネットで授業を受けている。

「インターネットによる通信制を導入したから劣悪になったのか、それとも劣悪になったから通信制を導入したのかはわからないけど、今の学校は酷いからね。この映画で何かが変わえられればいいんだけど」

フェイは決意を込めた目で微笑した。やはり彼はジャーナリストや作家としては素晴らしい人間らしい。真面目な話をしながら人の肩を抱き寄せたりしなければ完璧なのだが。朔は残念に思った。

「あ、でも朔はあの映画見ないほうがいいかもな。君は多分被害者側の人間だし」

「フェイ……」

学校にはいい思い出がない。そう言ったことを今でも覚えているようだ。朔は微笑した。

「大丈夫だよ、必ず見る。本は……苦手だから約束出来ないけど」



まだ誤解したままのテレゼが気を利かせて離れていったのを見て、フェイはにやにやと笑った。

「気配りの出来る、いい主人じゃないか」

「腰に手を回すな」

物書きとしてのフェイと普段のフェイは落差が激し過ぎる。フェイは満面の笑みを顔に湛えながら、朔の手を引いた。

「きっちり燕尾服なんて着られると、脱がせたくないんだよね」

「着崩したって脱がせたくないくせに……ってフェイ！ お前どこに連れて行く気だ！」

「ちよっとバルコニーにね」

「待て、この変態！」

朔はしかなす術もなく、バルコニーに連れていかれてしまった。流石にこんなところで脱がしはしないだろうが……朔は溜息をついた。

「……ねえ、朔」

フェイは不意に、朔の蝶ネクタイを筆取り取った。そしてボタンを二つだけ開ける。あまりの速さに、朔は咄嗟に対応出来なかった。

「何すんだよ、変態！」

「サリユー||アンダーソンにつけられた傷はこれかい？」

フェイはあらわになった朔の首に触れた。未だ微かに血が滲む傷に、フェイは爪を立てる。

「……っ！」

「自傷も相変わらずか。オレの鼻はごまかしきれないぜ？ 血の匂いがしてた」

フェイは自分の指についた朔の血を嘗めた。朔は肩を震わせる。

「止めたってお前はやるんだから、やめろとは言わない。けどな……お前が変わっていることを期待していたオレの落胆だけはわかってくれ」

落胆？ 違う、フェイは怒っているのだ。彼の灰色の瞳の中に炎が見える。朔は目を逸らした。

「俺だって……もうこんなことしたくない……！」

「朔……」

「だけど、止められないんだ……」

フェイは朔を優しく抱きしめた。

「お前、少しだけ変わったな。正直になった」

「え……」

「いい兆候だ。テレーゼ様のおかげかな。昔は自分の心を決して人に見せなかったからな」

フェイは鳶色の髪を結んでいたリボンを朔の首に巻き付けた。包帯の代わり、なのだろうか。フェイは笑いながら、再び朔を腕の中に納めた。朔は安心したように目を閉じる。

しかし、すぐに体を強張らせた。守護者として過ごした二年間で鍛えられた勘が警鐘を鳴らす。殺気を感じるのだ。

「朔……？」

「……誰か、いる」

朔はフェイに言い、拳銃の安全を見えないように外した。それを合図にしたように刃物が飛んで来る。朔は素早くフェイを広間の方に突き飛ばし、その刃物を撃ち落とした。

「逃げろ、フェイ！　ここは俺がやる！」

叫ぶと同時に第二波が襲ってくる。朔はそれを撃ち落とすと同時に、手元の無線に向かって叫んだ。

「アレン、テレーゼ様を安全なところに！　外に殺し屋がいる」

《テレーゼ様を狙ってるのか？》

「その可能性は低い」

話している間にもナイフは飛んでくる。埒があかない。朔はそう思い、敵がいるだろう茂みに足を踏み入れた。その瞬間、首筋のりボンが切られる。朔は反射的に引き金を引いた。

「ぐっ……！」

「標的はフェイか？」

「ああ……しかし『死人花』様がフェイノールトの恋人とは知らなかったな」

「恋人じゃなくて友人だ。誰の依頼だ？」

朔はその殺し屋に銃を突き付けた。

「『死人花』様に嘘ついたら殺されそうだな。正直に言うよ。教育委員会のお偉方だ」

「あの映画か……わかった。ありがとう」

「殺さないのか？」

朔は殺し屋を無視して広間に戻る。殺し屋は苛々したように、その背に声をかけた。

「おい」

「……今は殺し屋じゃなくて守護者だからな」

落ちたりボンを拾ってから広間に戻ると、心配そうに眉をひそめたフェイが朔に抱きついてきた。

「大丈夫か……？」

「当たり前だ。ていうか抱きつくな」

フェイはそのまま朔の頭を撫でる。

「……今日は切り抜かれたが、明日からは気をつけろ。臨時の守護者か便利屋を雇え」

「大丈夫だって。オレ、そこそこ強いし」

「そこそこ強い程度で命が守れるか！ 相手は教育委員会のお偉方なんだ」

「だったらなおさら、自分で闘いたい」

灰色の瞳には決意が見えた。ああ駄目だ。もう止められはしない。

「――何故そんなにこだわる？」

「オレにもプライドがあるんだよ……ッ！」

「フェイ!？」

フェイは突然胸元を押さえて、床に膝をついた。朔は慌ててしゃがみ込む。

「……う、あ……朔……っ」

雇われたのは一人だけではなかったらしい。目の前が真っ白になった。

結果はすでにわかっているのだ。何も出来ない。

「……朔」

「何だ？」

「――オレを、殺してくれ……」

朔は目を見開いた。フェイは苦しそうに微笑しながら続ける。

「誰だかわかんない奴になんか殺されたくないんだ。お前だったら、安心して任せられる……」

「馬鹿なことを言うな！ とりあえず医者……」

朔はフェイを抱えたまま広間を出る。しかしフェイは首を振った。

「間に合わないさ……。だから、頼む……。もうオレがやるべきことはやり遂げたから……」

「フェイ……」

朔は玄関に向かうのをやめ、フェイの自室に向かった。間に合いはしない。裏の世界に生きたからこそ、それがわかるのだ。

朔はゆっくりとフェイをベッドの上におろした。

「朔……」

朔は静かに、墨染桜を抜いた。月の光に白刃が煌めく。

「俺はもつと……。お前といたかったよ、フェイ……」

「嘘でも嬉しいよ、朔……」

朔はフェイの目を見ながら、墨染桜を左胸に突き立てた。肉を断つ感触。そしてベッドにまで到達したのか、穴が開く音がした。

「フェイ……」

フェイの顔はあまりに安らかで、きつと満たされていたのだろうと朔はと思った。やるべきことをやり遂げたから、そう言ったフェイの声が蘇る。

頬を暖かいものが伝う。泣き方など忘れたと思っていたのに、次から次へと溢れてくる。朔はまだ暖かい、フェイの胸に触れた。

「仇は、討つから——」

墨染桜を抜き、フェイの体を清めた。左胸の黒子——お揃いだ、と言った笑顔が去来する。

「——深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」

ゆっくりと和歌をそらんじる。花雪から繰り返し聞かされた、愛刀の銘の由来だ。

「この刀はある高貴な人の死を悼んで造られた。お前を送る物で、これ以上に相応しいものはないだろう……。？」

朔は墨染桜を鞘に納め、フェイの手を胸の上で組ませた。涙が一粒、その手の上に落ちる。

「さよなら、フェイ——」

◇＋◇

フェイが死んでから一週間――

朔はアレンと交代するとすぐに屋敷を抜け出した。手には小さな紙を握っている。『根』に調べさせた、フェイの暗殺を行った殺し屋の所在地だ。

朔はポケットに入れたりボンをきつく握りしめた。そのまま紙に書かれた住所に向かう。

昔住んでいたスラムを彷彿とさせるような裏路地。その角に目的の人物――殺し屋『毒蜘蛛』がいる。朔は懐からクナイを出し、その刃に薄紅色の軟膏のようなものを塗った。

「殺し屋は辞めたんじゃないのか、『死人花』？」

『毒蜘蛛』の部屋に入るなり、そう言われた。朔は無表情のまま答える。

「殺し屋として来たわけじゃない。個人的な……仇討ちだ」

朔は言うなり、『毒蜘蛛』の肩目掛けてクナイを投げる。『毒蜘蛛』は微笑を浮かべた。

「仇討ち……フェイノールトのことかい？」

「わかっていいるなら話は早いな。単刀直入に聞く。依頼人は誰だ？」
「言うわけじゃないか……え……？」

朔は自らの体を抱きしめた『毒蜘蛛』を冷たく見た。表情は面のように固定されている。

「貴様、何を……！」

「自白剤兼毒薬、名前は『紅時雨』――あと三分でお前は死ぬ。だからさっさと尋問を終わらせようか」

『毒蜘蛛』の体が震え始めた。もちろん、『紅時雨』の効果だ。朔はもう一度、低い声で『毒蜘蛛』に問う。

「答えろ。依頼人は誰だ？」

「……教育審議会の、アーサー・ウィノナ……」

「素直に答えてくれてうれしいよ。お礼に今すぐ逝かせてやる」

朔は拳銃で『毒蜘蛛』の心臓を撃ち抜いた。銃声が耳を裂く。

「……アーサー・ウィノナ、ね。アイツも随分大物に睨まれたものだ」

名前を知らない人間は、よっぽど世の中に疎いのだろう。アーサー・ウィノナとはそういう人だった。表向きは教育改革を推し進める善人だが――

「殺し屋に関わった時点で善人なわけないよな……」

朔はクナイを回収して、再び夜の街に足を踏み出した。



アーサーはリモコンを操作し、ある場面で映像を止めた。そしてくつくつと笑みを漏らす。

「私に逆らうとうなるんだ……」

朔はアーサーの下品な笑い声に思わず舌打ちをした。

「誰だ!？」

「名乗っても意味などない。お前はここで死ぬんだから」

朔は墨染桜をアーサーに突き付けた。顎と首の区別がつかない醜い体に傷がつく。

「殺す前に聞いておこう。何故フェイを消した？」

「フェイ? ああ、あの小僧か……あいつは私の政策を映画で暴露したんだよ!」

アーサーは止めたままの画面を指差す。朔はそれを素早く読んだ。
「『分離政策』……!？」

それは単純な話だった。アングロサクソン系とそれ以外の人間のクラスを分けるというものだ。その主な標的は――難民となった、日本人。

そうか。朔は息をついた。フェイは姪のためなんかじゃなく、自

分のために――朔はポケットのリボンをもう一度握った。

「お前は日本人か？」

「ああ」

「成程。奴はお前のためにこの駄作を作ったのだな。実に愚かだ！
全てを失った民を庇って死ぬなんてな！」

「黙れ！」

朔は叫ぶと、アーサーに向かってクナイを投げた。

「お前にフェイを罵る権利などない！」

頬を伝う生暖かいものが邪魔だと思った。沢山の言葉が生まれて、
どれも形にならず消えていく。

「許さない……！」

朔は墨染桜でアーサーの首を刎ねた。血が桜吹雪のように舞い散る。

「ふふ……はははっ……！」

朔は高い声で笑いながら、床に膝をついた。顔の血を涙が洗い流していく。

悔しい。

守れなかったことが。

憎い。

自分の私欲の為にフェイを殺したアーサーが。

許せない。

何も出来なかった自分が。

何年も連絡を取っていなかった友人の為に映画を作るようなお人
よしに、自分は何もすることは出来なかった。込み上げる鳴咽の中
で、歌を詠む。

「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け……」

叫びのような声がこだまする。
朔はそのまま、空が明らむまで――声が枯れるまで、泣き続けた。

第六話『人形師の美意識』（前書き）

塞ぎ込んでいる朔をドールミュージアムに連れ出したテレーゼだが
……。

第六話『人形師の美意識』

□＋□

朔の首の傷は掻きむしられ、ただの二つの穴だったそれは、元の形がわからないくらいになっている。テレーゼは虚ろな眼をしている朔の首に手を伸ばしかけて、やめた。

私がすっかりしなくては。テレーゼは決意を胸に秘め、救急箱を開けた。取り出すのは消毒液と脱脂綿、そして包帯。脱脂綿に消毒液を染み込ませたテレーゼは、そのままそれを朔の傷に押し当てた。しみるのだろう、涙目になっている。

「もう十八なんだから、消毒されたくらいで泣きそうになんないの！」

「……転んだだけで大泣きするテレーゼ様にだけは言われたくありません」

テレーゼはほっとしたように笑った。ずっと無反応だったのだ。虚ろに空中を見つめたまま、話し掛けても返事をしてくれない――久し振りに聞いた朔の声は少し掠れていた。

「それはそれ、これはこれよ。だいいち守護者なら、道端の石ころを払って歩くくらいのことをしなさいよ」

「虫を殺さないように箒持って歩く宗教じゃないんですから……」
テレーゼは微笑した。完全にいつも通りとはいかないが、さっきまでよりは大分マシだ。首に包帯を巻きながら朔に聞く。

「苦しくない？」

「大丈夫です」

「……よし、出来た。ところで、今日ドールミュージアムがオープンするらしいんだけど、ついて来てくれない？」

「いいですよ」

気晴らしになるかどうかはわからないが、とりあえずとにかく外

に連れ出したほうがいい——ジェイドにそう言いながら渡されたチラシをテレーゼは握りしめた。

「……ドールミュージアムって、つまりからくり人形展みたいなものですか？」

「古今東西ありとあらゆる人形があるらしいわ。もちろんからくり人形もね。興味あるの？」

「少し、ですけど」

ジェイドはいいチョイスをしたようだ。さすが有能秘書。テレーゼは花のように顔を綻ばせた。



ドールミュージアムは市立美術館の横に作られていた。朔は目を輝かせてビスクドールを見るテレーゼを見ながら、首の包帯に触れた。

「——人形に興味があるの？」

不意に声をかけられ、朔は振り返った。ブロンドの髪に空色の瞳——おそらくは相当な美人の部類に入るような女が立っていた。

「いや……俺は付き添いで」

「ああ、あそこのかわいらしいお嬢さんね。どうぞゆっくりしていつて。私の作品もあるのよ」

「人形師なんですか？」

「そう。ステリィア||リバーというのよ」

朔の質問に女は頷いた。そしてしげしげと朔を見つめる。

「……あのお嬢さんも綺麗だけれど、貴方も綺麗ね」

「え……？」

女——ステリィアは朔に手を伸ばした。朔は振り払うことも出来ずに硬直する。

「貴方は一番美しいものが何か知っているかしら？」

「え……？」

「一番美しいものは『永遠』よ」

「永遠……」

朔がステリィアの言葉を繰り返したとき、テレーゼが朔を呼んだ。朔はステリィアに会釈をしてテレーゼのもとに向かう。ステリィアはそれを見ながら、美しい顔に歪んだ微笑を浮かべた。

◇＋◇

ステリィアⅡリバーの作品は精巧だった。テレーゼが息を呑む。

「すごい……」

「ステリィアⅡリバーは若手で最も人気のある人形師だ。テレーゼお嬢様に、その価値がどれほどおわかりになるかな？」

青を思わせる声。朔が反応する前に、テレーゼの心底嫌そうな声が、その人物の名を呼んだ。

「スピネル……何でいるのよ」

「人形を見に来たんだよ。悪いかい？」

「悪いに決まってるでしょ！　ていうかアンタ四年前、私の人形壊したじゃない！　こんな人形だらけのところに行ったら、人形に崇まれるわよ！」

スピネルはテレーゼの言葉に苦笑した。朔はそんなスピネルの右眼をじつと見る。

「あれはお前にも原因があるだろう。お前こそ崇られないように気をつけな」

「スピネルなんか知らない！」

テレーゼは舌を出すと、ずんずんと前に進んで行った。後に残された朔はスピネルに言う。

「あのさ……眼は……」

「心配するな。たいした傷じゃなかった。お前こそ……首、怪我したのか？」

「たいしたものじゃない。テレーゼ様が大袈裟に包帯を巻いただけだ」

スピネルは「ふうん」と呟いて、前に進んだ。朔もその隣を歩く。「……この前のことは、僕も考えなしだった。だからもうチャラにしよう」

「スピネル……」

「いいのか？ テレーゼ様を追いかけて」

「あ、ああ……」

朔は慌ててテレーゼを追った。テレーゼは角を曲がってすぐのところの人形をじっと見つめていた。

「この人形、本当に人間みたいね……」

「そうですね」

おまけに多種多様だ。白人、黒人、黄色人種——それ以外にも、ありとあらゆる肌の色と眼の色をした人形がいる。テレーゼはその中の一体を指差した。

「朔と同じ眼をしているわね」

朔はその人形と目を合わせる。朔と同じ黒髪、真紅の瞳——しばらくそれを見つめていると、朔の背に悪寒が走った。

——何だ？

体の中から違和感が広がっていく。そして、背筋を羽根のようなものでなぞられたような感触。朔は思わず人形から眼を逸らした。

「ふうん……やはり精巧だな。モデルがいるんだろうが……陶器とは思えない」

追いついたスピネルが声を上げた瞬間、違和感が消える。さっきのは何だったんだろうか。朔は首を捻った。

「スピネルみたいな、イヤミ言うしか脳のないお坊ちゃまに何がわかるのかしら？」

「ピアノを三日でやめた君に言われたくないね」

朔は溜息をついた。仲が悪いと言われている二人だが、実は気が合っているのではないだろうか。スピネルと言いつ争っているときだ

けに浮かべる歳相応の顔がそれを物語っている。

「スピネルの馬鹿！」

「君の方がよっぽど馬鹿だよ。……ん？」

スピネルは人形のほうに眼をやった。そしてテレゼを人形とは反対方向に突き飛ばす。

「何すんのよ！」

「人形を見るな、テレゼ！」

スピネルが叫んだ瞬間、一体の人形の眼から光が走った。朔は反射的に腕で眼を覆う。

「あら残念。せっかくみんなもっと美しくしてあげようと思ったのに」

「ステリィア||リバー……」

スピネルはステリィアを睨みつけた。ステリィアが高い笑い声をあげる。

「どうしてわかったの、坊ちゃん……いいえ、クール伯爵」

「それは言えないね。それよりお前……何故テレゼを狙った？」

「もちろん、綺麗だからよ。その美しさを永遠にしてあげようと思ったの」

朔は突き飛ばされたテレゼを抱き起こしながら、二人を見た。

スピネルの言葉が引っ掛かる。とりあえず逃げるに越したことはない。朔はテレゼを抱きかかえて、走り出した。

「逃がさないわよ！ 貴方達は皆、私の作品になるの！」

ステリィアが叫んだ瞬間、展示されている人形の眼から光が放たれた。四方を囲まれ、退路を絶たれる。朔はテレゼの眼を自分の手で塞ぎながら、舌打ちをした。

「朔……」

「眼を閉じてください、テレゼ様」

朔は光の間を縫って走る。しかしステリィアが指を鳴らすと、展示されていた人形が一斉に動き始めた。朔は銃を取り出して、人形を撃つ。

「駄目だ、月峰！　それは人形じゃない！」

「え……？」

スピネルの叫びに、朔は戸惑った。確かに人と見紛うようなものだが、人形は人形だ。しかしステリィアはスピネルの頭に銃を突きつけて微笑した。

「勘がいいわね、クール伯爵。そうよ、それは元々は人間——ちよっとした魔法を使って人形にしたの。美しいものをもっと美しくしてあげるためにね。さあ……この子の命が惜しければ、お嬢様を差し出さない」

「クール家は敵だ。^{かたき}それを守る必要はない。人質の人选を誤ったな」スピネルがそれでいい、というように小さく笑った。そして眼を紅く変化させながら、ステリィアの銃を掴む。

「【分解せよ】」

スピネルが言うのと、銃は砂のようになって地面に落ちた。ステリィアが眼を見開く。

「魔術を使えるのが自分だけだと思ったら大間違いだ」

ステリィアはくつくつと笑いながら、眼に指を当てた。それを外したとき、彼女の瞳は赤く燃え上がっていた。

「お前……『天然』か？」

「そうよ。目立つから擬態してるけどね。……さて、じゃあそろそろ本気出そうかしらね」

ステリィアが手を叩いた。しかし朔は動けない。この人形が何の罪もない人間なら、むやみに殺せはしない。

——死なない程度にやるしかない。

朔はなるべく致命傷にならないところを狙って銃を撃った。しかし、次から次へと襲ってくるので埒があかない。ましてや、腕の中にはテレーゼがいる。

「【縛せよ】！」

ステリィアが叫んだ瞬間、ロープが現れて体を拘束された。反射的にテレーゼを抱き寄せて離れないようにする。同時にスピネルも

体中を縛られた揚句、口を塞がれた。

「人工物は口を塞がれちゃ終わりでしょう、クール伯爵？」

スピネルは悔しそうにステリィアを睨む。ステリィアはそれを一蹴して、動けないでいる朔たちの前に進み出た。

「本当はそっちのお嬢さんだけでもよかったんだけど……ラッキーね。守護者がこんなに綺麗な子なんて」

ステリィアが指を鳴らす。その瞬間、ロープがまるで茨のようなものになった。

「まとめて人形にしてあげる」

棘が意思を持っているかのように肌を刺す。刺されたところから、違和感が広がっていく。本能が危険信号を鳴らしていた。

「……っ！」

もがけばもがくほど茨は食い込んでいく。この状態では墨染桜も抜けない。

テレーゼが強くしがみついて来た。その手は陶器のように硬く、冷たい。朔は眼を見開いた。

「やはり体が小さい方が早いみたいね」

ステリィアが言う、何かが背中をはい上がるのを感じた。侵蝕される。

内側から壊されていく。

全身をまるで血液のように巡るステリィアの支配。

自分が他者のものになるということへの本能的な恐怖が体を灼いた。

「……いや、だ」

支配されたくなんかない。

このまま人形になって終わるなんて嫌だ。

しかし支配は終わらない。人形化は既にほとんど終わっている。

肺が制圧されて息が出来なくなる。脳はまだなのか、思考だけが体の死を見ていた。

心臓に、死の触手が伸ばされる——

その瞬間、朔の体が紅い光に包まれた。瞳と同じ色の光に触れた茨は、砂のようになって地面に落ちていく。

「何だ……？」

急に体が軽くなる。ステリィアが驚いたように朔を見つめた。

「……今は、この女を。」

朔は墨染桜を抜いて、ステリィアに向かって行った。しかし見えない壁に阻まれる。

「……っ！」

魔術に対抗する術など知らない。朔はきつく唇を噛んだ。

「月峰！」

スピネルの声が響く。見ると、解放されたテレーゼがスピネルの縄をほどいていた。

「望めば、それがお前の力になる。天然のお前なら出来る！」

何を望む？ そうだ、自分は守護者だ。テレーゼを傷つける者は排除しなければ。朔は墨染桜を構え、再びステリィアに向かって行った。

「無駄よ」

見えない壁が朔を阻む。邪魔だ——朔がそう思った瞬間、墨染桜が紅い光を纏った。壁が壊れる。

朔は声をあげて、ステリィアを斬りつけた。血が雨のように朔に降り注ぐ。

「……ふふ……これで私も、永遠になれ……」

ステリィアは呟くように言って、眼を閉じた。呆然と立ち尽くす朔に、テレーゼが近づく。

「大丈夫？」

「俺は大丈夫です。テレーゼ様は？」

「大丈夫よ。それより——」

テレーゼが口をつぐむ。何を言うか迷っているようだ。見かねた

スピネルが口を挟む。

「かつて日本では魔術が研究されていた。その理由は四十五年ほど前に『天然』がたくさん生まれたためだ。月峰は年齢から言って、親が『天然』だったとかそういうことだろう」

「『天然』っていうと天然ボケみたいね……」

「テレーゼは口を挟むな。話がややこしくなる」

「はいはいわかりました！」

スピネルは溜息をついて、再び朔に向き直る。

「天然の場合、望まなくても魔術は発動される。攻撃された動物が毒を出すようにな。それが茨を解いた力だ」

「あれが……」

「あれはエネルギーの塊だが、見たところお前の力は火の属性らしい。僕は人工物故に、どの力も一応は使える。そのかわり、どれも中途半端なんだけど」

スピネルは朔に背を向けて続ける。

「——お前は、僕より数倍強い。少なくとも高い潜在能力がある。

それを活かすも活かさないもお前次第だ。既にお前は十分強いしな」

「俺がこの力を活かすことで、お前に何か得があるのか？ いやにこだわるじゃないか」

「僕は損得だけで動くような人間じゃないんでね。じゃあ、もし聞きたいことがあるなら電話かメールしてよ。僕はもう帰るから。疲れたんだ」



「スピネルの話なんだけど……」

帰り道、テレーゼが切り出した。朔は黙って先を促す。

「私は力を得る機会があるのなら、ものにしたほうがいいと思うの。もちろん朔が嫌ならいいけど……」

「俺はどうでもいいですよ。力には興味がないんです」

「ふうん。男って力に憧れるものだと思うってたけど」

テレーゼは道の石を蹴飛ばしながら言う。朔は苦笑した。

「人それぞれですよ。俺は……手応えのない力は怖いから嫌なんです。銃も苦手ですね」

「そうやってたくさん血飛沫浴びるような方がいいの？」

「刀とかだと、殺したという感触が残るんです。もし残らなかったら……簡単に人を殺してしまいうような気がしませんか？」

テレーゼは腕を組んで唸った。考えているのだろう。しばらくして、テレーゼは朔に向き直る。

「朔はそうならない。私はそう思うわ」

「テレーゼ様……」

「それにその点に関しては、私が貴方の手綱をしっかり握ってればいいだけだわ」

どうやらテレーゼは魔術を使わせたいらしい。朔はテレーゼの頭に手を置きながら聞いた。

「テレーゼ様は、どうして俺に魔術を使わせたいんですか？」

「――必要な気がするのよ」

テレーゼのキアノスブルーの瞳が曇った。朔はテレーゼの光にも似た金髪を優しく撫でる。

「テレーゼ様がそう言うなら、相談してみましようかね。補助として使うならいい力かもしれないし」

でも、自分にはあの力で人を殺している。そもそもそれが殺し屋になった理由なのだ。朔は眼を伏せる。

「でもスピネルに協力してもらうのもなあ……他に知ってる人いないのかしら」

「ジェイドなら何か知っているかもしれないね。でも、ジェイドはスパルタだろうな……」

「ジェイドよりはスピネルの方がいいと思うわ。ジェイドは忙しいし……。スピネルは当主だけど、すごく忙しいわけじゃないからね」

□
十
□

小面はそつと仮面を外して画面を見つめた。そこには道を歩くテレゼと朔が映っている。

「小面様、クール伯爵の処遇はどうなさいますか？」

「あんな中途半端な出来損ないは放っておけばいい。至宝を手に入れたとはいえ、こっちには彼と同レベルの潜在能力を持つメンバーが多くいる。戦いというものは基本、数が多い方が有利なものだ」

小面——ジェイドは翡翠の瞳を僅かに細めた。

「——般若。ステリィア||リバーの遺体は回収できたか？」

「ええ。証拠隠滅も完了しました。遺体の方は損傷も少なく……美しい斬り口でした」

「当然だろう。墨染桜は我が愛刀、寒緋桜の対となる名刀だ」

ジェイドはくつくつと笑った。同時に右眼が僅かに紅く染まる。

「さて……私はそろそろ仕事に戻らなければ」

ジェイドは画面に映るテレゼにナイフを突き刺してから席を立った。

第七話『狗の記憶』（前書き）

スピネルに魔術指南を受けに行った朔が、大変なことに……。。

第七話『狗の記憶』



クール家は青に満ち溢れている。そもそもスピネルも青ばかり身につけている。朔は白地に青の薔薇が描かれたティーカップでアルグレイを飲む。アルグレイは確か、テレーゼが一番好きな紅茶だ。

「テレーゼは元気？」

「ドールミュージアムで昨日会っただろ……」

「テレーゼは突然高熱を出すからね。昨日会ったからといって安心は出来ないよ」

朔がいくら恋愛に疎くても、これではバレバレだ。朔は悪戯っぽい笑みを浮かべてスピネルに言う。

「テレーゼ様のこと、好きなのか？」

「――さて、魔術の話だけ……」

朔は明らかに話を逸らすスピネルの額を小突いた。スピネルの表情は目隠しのせいでわからないが、あらわになっている耳は赤く染まっている。スピネルは咳ばらいをした。

「無駄話はこのくらいにしよう。とりあえず、魔術の話だ」

スピネルは紙束を朔に投げつけた。朔は左手でそれを掴む。

「魔術というものは、簡単に言えばイメージの具現化なんだ。炎をイメージすれば炎が出る」

「イメージの具現化……」

「言葉はそれを補助するためのツールだ。少しややこしい話になるけど……言葉はイメージを抽象化して、体内を巡る、青血石が擬態した血液にそれを伝えるんだ」

さっぱりわからない。朔は首を捻った。

「例えば、僕が術者でお前が青血石だでしょう。普通の魔術はつま

り、僕が琥珀色で、苦い飲み物が飲みたいとイメージでお前に伝えることと同じだ。でもお前にしてみれば、『コーヒー』と言ってもらった方がいちいち色や匂いや味を伝えられるより楽だろう？ 僕の方も『コーヒー』で伝わるならその方が楽だ。魔術における言葉とは、青血石と術者のコミュニケーションを円滑にするものだ」

「よくわからないけど……つまり、言葉を使えば楽に魔術を使えるということか？」

「単純に言えばね。僕みたいな人工物は言葉がないと使えない。でも天然は簡単なものなら二度目から、そうでなくても慣れてくれば言葉なしでも使える」

つまり最初は言葉が必要だが、だんだんいらなくなるということか。朔は成程、と頷いた。

「使う言葉は『燃えろ』などのように単純なものから、複雑な事象を引き起こすような長い言葉まで幅広がある。ある程度の言葉はそれに書いておいたから、使い勝手のいいものは何度も使っておくといい」

「言うだけでいいのか？」

「もちろんイメージは必要だよ。ただ、月峰は天然だから……単純なものから始めればすぐにコツは掴めるだろう。魔術といっても所詮は技術だしな」

要は剣術と同じ。朔は墨染桜に視線を落とした。馴れるまではいちいち筋肉の動きを感じなければならぬが、体が覚え始めたら何も考えなくても出来る。おうおうにして、技術とはそういうものだ。「一対一なら昨日みたいに、エネルギーを武器にまとわせるというのも有効だろうけどな。現に魔術なんか使わなくなってお前は守護者としての使命を全うして来た」

「魔術はあくまで補助にするつもりだ。でも墨染桜が使えないシチュエーションがあるかもしれないしな……」

「そうか。じゃあそろそろ魔術の種類の話に移ろう」



青い薔薇が咲く庭を抜けると、そこにはただの広い空間があった。平たく言うのと、何もない。

「魔術の練習はいつもここでやっているんだ。何もないからね」

「気になったんだけどさ、使用人とかって……」

「住み込みはいないよ。僕は守護者もつけていないし」

スピネルは言いながら、目隠しを外した。紅の瞳が月明かりの下で輝く。

「まずは『錬成』についてだ。お前には必要のない話だが、一応話しておこう。僕が青から赤に目の色を変えることを錬成と言う。馴れれば一気に赤い状態、つまりルベドにもっていけるんだけど、馴れるまではそうもいかないんだ」

スピネルは目に手を翳した。紅い瞳が黒に変化する。まるで夜のような深い色だ。

「これが第一段階、つまりニグレドだ。死や腐敗を象徴する。この状態で使えるのは『呪術』のみなんだ。呪術にどんなものがあるかは、紙を見てくれればいい」

スピネルは胸に差していた青い薔薇を右手に乗せると、ゆっくり口を開いた。

「【貴きものよ、腐り堕ちよ】」

薔薇は見る間に枯れ、腐り落ちていく。朔は目を見開いた。

「今のを人間に使えば、指を三本ぐらい腐らせることが出来るだろうな。これは最も簡単な呪術だ」

「……試してみていいか？」

朔は目に手を翳しながら言う。先程のスピネルをイメージしながら、瞳に力を込める。

「変わった？」

「大丈夫だよ。流石だね。イメージさえ出来れば、一番難しい錬成

もクリアしてしまうなんて……やはり天然は違うな」

朔は墨染桜を少しだけ抜いて、白刃に自分の顔を映す。確かに瞳は黒だ。日本人の典型である黒髪に黒眼——朔は寂しげに微笑した。「それが出来ればさっきの術は簡単だよ。そもそも、普通の人間がルベド状態の青血石を使っただけで呪術は使える」

「ジェイドが前にウェアリーに使われたやつもそうか？」

「そうだよ。あれは『蟲』ってやつなんだけど。その次の話をしていいかい？」

朔は無言でスピネルを促した。スピネルは再び手を翳す。その手が離れたとき、彼の瞳は新雪のように白く変化していた。

「これがアルベド。再生を象徴する。ここで使えるのは『治癒』等の術だ。呪術にはこれで対応することが多いね」

スピネルは枯れた薔薇に手を乗せ、謳うように言う。

「【命の巡りを繋げよ】」

その言葉に、薔薇は再び元のように青くなる。朔は不思議そうにそれを見た。

「植物で、しかも一輪だからここまで回復するけどな、死者の蘇生なんかは出来ない。瀕死の人間を救うには魔術より医療の方が適しているんだ」

「じゃなかったら医者廃業してるだろうな……」

「そもそも魔術は使える人が限られているし、認知度も低いからね。仮に医療を越えられても廃業はしないだろうけど。やってみるかい？」

朔は頷いて目を閉じる。白のイメージが広がったのを合図に目を開くと、世界が微妙に明るく見えた。

「アルベドの状態だと視力が良くなるらしいよ。何故かはわかっていないけどね」

スピネルは微笑を浮かべたまま、目の色を真紅に変えた。朔も同じようにする。朔にとってはいつも通りだ。

「これが『鍊成』の最終形態、ルベドだ。完全なもの、あるいは神

を象徴する。お前にとっては普通の状態だけだな。この状態では、ありとあらゆる術が使える。もちろん、ニグレドやアルベドで使えた術もだ。だからこの話はお前にする必要ななかったんだよ」スピネルは左手を伸ばし、叫ぶ。

「【風よ、その刃で空を裂け】！」

「……ッ！」

朔は思わず腕で体を庇った。まるで鎌鼬のように風が踊る。スピネルが手を下ろすと、風が止んだ。

「最近これを練習してるんだ」

「いきなり使うなよ……」

朔は溜息をついた。服の一部が切り裂かれている。お気に入りだったのに。

「大丈夫、力は調節したから」

そういう問題ではないのだが。朔は呆れたように首を振った。

「理論概要はこんなものでいいかな。あとは紙に書いてあるから。そっちはジェイドが書いた奴だから多分わかりやすいと思うし、わからなかったら聞けばいい」

スピネルは瞳の色を青に戻してから、目隠しをした。朔は不思議そうにスピネルを見る。

「あまり長居させると悪いから……本格的な練習は明日からだ。その紙には目を通しておけよ」

「別に今ここでやっていてもいいんだけど……」

「お前の都合じゃないんだよ、この鈍感！」

「え？」

「わかんないならいい！ 全く、人のことには敏感なくせに……」

◇＋◇

「わけわかんねえな、アイツ……」

朔は紙に目を通しながら夜道を歩く。今はほとんどがデジタルデ

「タの時代なのに、何故紙なんだろう。嫌がらせとしか思えない。スピネルは俺が嫌いなんだろうか？」

「いや、嫉妬^{シエラシー}か」

色恋沙汰なんてありえないが、半日も一緒にいるのだ。嫉妬も仕方ないだろう。

「俺は恋愛になんか興味ないんだけどなあ……」

花雪とは歳が離れすぎていたから、恋人というよりは姉であり母であった。仮に今花雪が生きていたら、彼女は三十二歳。アレンより一つ年上だ。

「……そういや、テレーゼ様って好きな人とかいるのか？」

朔は自分がスピネルに鈍感、と言われた理由にも気付かずに呟いた。テレーゼが屋敷の窓から外を眺め、朔の帰りを待ち望んでいることなど知るよしもない。

「――あ、そうだ」

朔は手を叩いた。せっかく外に出たのだから、テレーゼとアレンの好物であるラスクでも買って帰ろう。電子マネーはしばらくチャージしていないが、ラスクくらいなら大丈夫だろう。朔は交差点を左折し、商店街に向かった。

いつもは仕事中に来るために、ゆっくり見られない商店街を歩く。靴と石畳が規則正しいリズムを刻んだ。紙束を丸め、腰のベルトに差す。元々刀を差すためのベルトだから、紙が落ちることはない。

朔は周りを見回しながら、夜の街を楽しんだ。目指す店は、路地をちよつと入ったところにある。

朔が路地に入ろうとした瞬間、絹を裂くような叫びが聞こえた。

朔はその方向に目をやりながら、墨染桜の鯉口を切る。

「犬……？」

黒い犬が女を襲っていた。それも一頭ではない。朔は気配を消して犬に近付き、その犬を斬った。犬はその瞬間に、まるで幻だったかのように消えてしまう。

「消えた……？」

いたという気配すらない。朔は首を傾げた。

「あ、あの……ありがとうございます」

「あ、いや、別に……」

頭を下げる女に、朔は少し照れながら言葉を返した。テレエゼは守られて当然、と思っっているところがあるから、あまり礼を言ったりはしないのだ。しかしそんなこともすぐに頭の隅に追いやられる。さっきの犬が気になるのだ。朔は「もしや」と思い、ベルトに差した紙をめくった。

「これか……？」

呪術の一種、とそれには書いてあった。大きさは大型犬くらいで、色は黒——あの犬に酷似している。でも、一体誰が？

女は特別身なりがいいわけでもないし、かといって悪いわけでもない。平凡であることが一番の特徴であるような人だ。呪われる理由などなさそうだが——

「きゃあああっ！」

今度は別の女の悲鳴が聞こえて来て、朔は思考を中断させられた。声の元に向かうと、先程よりもさらに多い——百頭以上の犬が、道を歩く男や女を襲っていた。

「『狗』は、腐敗の呪術……」

人を生きたまま腐らせる、強力な呪術だ。朔は墨染桜を抜き、それに炎を纏わせた。

さっきまで読んでいた紙の内容を思い出す。そうだ。呪術はその更に上の段階の魔術で打ち消せる——

朔は炎のおかげで攻撃範囲が広くなった愛刀で、『狗』を斬り伏せる。しかし『狗』は減らない。むしろ増えているのだ。朔は舌打ちをしながら周りを見た。パニックに陥った人達が逃げ惑っている。腐臭が漂い始めた。

「間に合わない……っ！」

朔は左手を伸ばし、炎蛇で『狗』を滅していく。しかし、次々に増殖していく『狗』達を相手に、徐々に息が上がり始めた。街の人

間が全員逃げたら手を引こう。そう思って息を整える。

「【浄化の炎よ！ 煉獄の紅蓮よ！ 悪しき獣を灼き尽くせ】！」
覚えたばかりの言葉を叫ぶと、朔の周囲にいた『狗』は一瞬で消し飛んだ。しかし、その円の外側にいた『狗』達が一斉に朔に襲い掛かる。死角はない。後ろから一頭が朔にのしかかり、右肩に牙を立てた。

「く、う……！」

傷口から腐敗が始まる。気分が悪くなるような臭いが鼻をついた。炎を纏わせた墨染桜で『狗』を薙ぎ払うが、際限なく押し寄せる『狗』達に、朔の体力が底を尽きはじめた。

「……あ、ぐっ……！」

喉笛に噛みつかれる。頼みの綱である声帯も腐っていく。氣力を振り絞り戦うが、きりのない攻撃に意識が奪われていく。

不意に『狗』達が連携して朔の体を押し倒す。朔は起き上がろうとするが、元々華奢である上に体力を失った朔にとって『狗』は重く、朔はそのまま石畳の上に縫いつけられた。

「くッ……」

『狗』は舌なめずりをしてから、朔の首筋をざらざらとした舌で舐めた。鳥肌が立つ。

「い、や……」

腐りかけた声帯からは蚊の鳴くような声しか出ない。墨染を握る右の手は腐敗が進み、動かすことは出来なかった。

『狗』はねっとりとし朔の耳を舐める。その瞬間朔の頭の中で、何かが割れる音がした。

□＋□

自室で仕事をしていたジェイドはふと手を止めた。寒緋桜が不自然に光っている。ジェイドはゆっくりと愛刀を抜いた。

「これは……共鳴、か？」

霊刀、あるいは妖刀とも言われる寒緋桜には不思議な力がある。この刀の兄弟刀であり、朔の愛刀でもある墨染桜もまたしかりだ。

「朔に何かあったのか？」

ジェイドは寒緋桜を鞘に納め、ジャケットを羽織る。何もなければそれでいい。でももし何かあったら。急いで部屋を出ようとしたちょうどその時、電話が鳴った。

「……何だ？」

《小面様、ウェストベリー街で『狗』が大量発生したそうです！》慌てたような般若の声。まさか——ジェイドの脳裏を最悪の予想が掠めた。朔が歸りにちよつと寄り道をしたりするならば、おそらくウェストベリー街だろう。まだ歸って来ていないことから考えて、十中八九寄り道をしている。ジェイドの顔が青ざめた。

「被害状況は！？」

《ウェストベリー街A地区では三十名が重傷、五名が死亡。B地区では十名が軽傷、あとはわかっていません。C地区は重軽傷者合わせて三十二人です。死者はまだわかりません》

「今すぐB地区に向かってくれ。私もすぐに行く」

朔の戦闘力が高い。スピネルに手ほどきを受けた後なら『狗』とも戦えるだろう。だとしたら、朔がいるのは明らかに被害が少ないB地区だ。

「持ちこたえてくれるといいが……」

ジェイドは右眼を赤く変化させる。

「ようやくここまで回復したんだが……仕方がない。【我をウェストベリー街B地区に運べ】！」



「……いや……来るな……」

記憶が巡る。景色は英国の商店街ではなく、どこかの研究所のようなところが変わっていた。しかし仕切り程度だった壁は全て崩れ

ている。

狗が朔を地面に押し倒す。そしてねっとり耳を舐める。体が痺れて動かなくなった。

腐り落ちた手が横にある。

誰の手だ？——大人の男の手。

高い叫び声と、男の呻き声。

狗に喰われようとしている自分——

「……やだ……やめろ……」

声が重なる。幼い声と、震えた声。誰の声だ？ 自分の声だ。

満ちる腐臭。

折り重なる死体。

白衣をきた男の腕。

「……おと……さん……」

口をついた日本語の響きに、朔は目を見開いた。

（父親……？）

朔は記憶を辿ろうとする。しかし、現実の牙がそれを邪魔した。

『狗』が左肩の肉を喰らい、陶醉したように笑む。

「ち、くしょ……っ！」

怖い。

このまま喰われてしまうのか。

記憶の中の自分と現実が重なり合う。朔は声の出ない喉で叫んだ。

「……た、すけて……かゆ、き……！」

『狗』が左胸に噛みついた。激痛に意識が飛ぶ——

□＋□

「朔！」

ジェイドは朔の左胸に噛みついた『狗』を斬り捨てた。しかし他の『狗』は朔から離れようとしない。

「小面様！」

般若が駆け寄ってくる。ジェイドは般若の面を剥ぎ取り、叫ぶように言った。

「完全浄化の言葉は覚えているな!？」

「勿論です!」

「私一人ではおそらく足りない。だから同時に唱えてくれ!」

ジェイドの声と般若の声が重なり、詩のような言葉を唱え始める。

「【全てを焼き尽くす煉獄の炎よ、根の国から来たりし邪なるものを灼き、聖母のごとき光明で世界を照らし給え】!」

詠唱が終わると、『狗』は全て消え去った。ジェイドは右眼を押さえて地面に膝をつく。

「小面様!」

「やはりこれは魔力を消耗するな……」

朔の体は生きながら腐り、左腕はすでに体から離れている。ジェイドはゆっくりと朔の額に手を当てた。

「魔術を使えるようになったなら、これも効くはず……」

ジェイドは優しい声で、朔に語るように言葉を紡ぐ。

「【気高き紅の華よ、今眠りから覚め爛漫と咲き誇れ】」

言葉が終わると、朔の体がぼんやりと紅く発光し始めた。体内を巡る青血石が活動を初めたのだろう。このままにしておけば、青血石が元の姿に戻ろうとする作用によって体の傷も癒えるはずだ。

「私は朔を屋敷に運ぶ。さっきの完全浄化でA地区やC地区の『狗』も消えただろうから、あとは任せるよ」

「わかりました。では、お氣をつけて」

「ああ」

ジェイドは朔を抱きかかえて、歩き出した。



研究所は白を基調としていた。それが『狗』によって黒く染まっていた。際限なく現れる黒いものに白衣を着た男が立ち向かっていた。

た。男は刀を振りかざして叫ぶ。

「【全てを焼き尽くす煉獄の炎よ、根の国から来たりし邪よこしまなるものを焼き、聖母のごとき光明で世界を照らし給え】！」

『狗』が消し飛ぶ。男はほっとしたように息を吐いて、朔の方に向かって来た。

「怪我はないか？」

男の瞳は澄んだ紅。肩ほどまである黒髪を一つに結わえている。

———父親。

これが自分の父親か。朔は目を細めた。まるで鏡を見ているようだ。

「泣かなくていい。俺が守ってやるからな、朔」

頭の上に大きな手。朔は安心したように笑った。しかし響き渡る警報に再び顔を曇らせる。

「月峰博士！」

ドアが開き、白衣を着た女が入って来た。黒く長い髪を二つに結い、その瞳は澄んだ紅。

———花雪……！

記憶より若い。二十歳くらいだろうか。花雪は男に近付いた。

「他の区で『狗』や『蟲』を初めとするありとあらゆる呪術が発動しています。おそらく青血石に反応して増殖しているものだと思います」

「わかった。花雪は朔を見てくれ。すぐに戻るから」

「わかりました」

花雪が朔を抱き寄せる。懐かしい感触だ。張りのある肌に、桜の匂い———

「そんな泣きそうな顔をするな。すぐ戻るから」

行ってはいけない。心臓が早くなる。

もう二度とここには帰れなくなってしまうから。

行くな。朔は手をのばした。男はその手に刀を——墨染桜を握らせる。

「お守りだ。いい子にしてるんだぞ？」

男は白衣の裾を靡かせながら部屋を出ていく。駄目だ。朔は叫ぼうとした。

花雪はそんな朔を優しく抱きしめる――――



「――月峰君！」

目を開けると、そこにはジェイドがいた。ジェイドは朔の額に手を当て、朔の顔を覗き込む。

「大丈夫ですか？　すごくうなされていましたが……」

「俺は、一体……？」

「ウェストベリー街で『狗』に襲われていたんです。体の具合はどうですか？」

傷は残っているし、まだあちこち痛いけど、腐敗していたところはすっかり元に戻っていた。

「ジェイド……」

「どうしました？」

「俺は昔、『狗』に襲われたことがある……思い出したんだ」
歯がかちかちと音を立てる。

怖い――――朔は耳を塞いだ。

「月峰君……」

「研究所みたいなところで……みんな死んだ……」
思い出す。

腐り落ちた父親の手。

戻っては来なかった笑顔。

折り重なる腐敗した死体。

『狗』にのしかかられ耳を舐められた――――

「……く、るな……いや……」

「月峰君……」

ジェイドは朔の髪を撫でた。

「ここには何も怖いことなんてありません。安心して下さい」

「気休めを……言うな……っ」

「月峰君……」

「安全なところなんてないんだ！ 休める場所なんて、どこにも……！」

ジェイドは朔をそっと抱きしめた。心臓の音が同調する。

「大丈夫です。今は、私がいます」

「ジェイド……」

朔は震える手で、ジェイドの背中に爪を立てた。

第八話『父親の死』

□＋□

「安全なところなんてないんだ！　休める場所なんて、どこにも……！」

震える肩を抱き寄せる。絹糸のように滑らかな髪に指を絡め、諭すように言う。

「大丈夫です。今は、私がいます」

「ジェイド……」

背中に爪を立てられる。同時に着ていたワイシャツが熱く濡れ始めた。

（この子が私の前で泣いたのは、久しぶりだな……）

あの日は泣かなかった。ただ真紅の瞳に絶望を映していたのだ。喰い荒らされた死体の前で、呆然と立ちすくんだ姿を今でも覚えている。ジェイドは朔をさらに強く抱き、自分の胸に押し付けた。

泣いてもいいのだと、伝えるために。

朔はしばらくそうしていたが、やがてゆっくりとジェイドから離れた。目は充血し、まるで巨大な紅玉を嵌め込んだようになってい。ジェイドは思わずくすりと笑った。

「……ありがとう、ジェイド」

「いえいえ。それより、月峰君……」

「何だ？」

「お嬢様が烈火の如く怒っていましたよ？」

自分以外の人間のためにボロボロになるとはどういうことだ、と。ジェイドも同意見であった。ジェイドは朔をベッドに押し付け、低い声で言う。

「月峰君はお人よし過ぎます」

「ジェイド……？」

「ウェストベリー街で『狗』に襲われている月峰君を見たときは心臓が冷えましたよ」

敢えて耳元で囁くと、朔の肩が震えた。どうやら敏感らしい。ジェイドは朔の体を人差し指でなぞる。

「ん……ジェイド、っ……」

「二度とあんな無茶はしないでください」

くすぐったいのか、朔は体をよじる。充血した目が恨めしそうにジェイドを見た。

「敏感ですね、月峰君……」

「っ、ど……して……ジェイド……」

「指でなぞられたくらいで音を上げますか？」

これは罰なのだ、と耳元で囁く。朔は体を震わせた。本当は罰でも悪戯でもない。ただの魔術だ。

「ジェイド……っ、もう、やめっ……」

「『罰』というのは嘘ですよ。これは魔術の一種で、体内に呪術が残っていないか探すためのものです。スピネルのように千里眼を持つていれば、必要のないものですが」

「ジェイドも、使えるのか……？」

「ええ。最初から子供に力を付与するわけがないでしょう？　まずは自分にやっただけです。失敗しましたけど。そのかわり錬成なしでも、治癒魔術の簡単なものまでなら使えます」

ジェイドは朔の左胸で指を止めた。心臓の脈動とは違う、何かの脈動がある。

「呪術が心臓と癒着していますね。この程度なら放っておけば治りますが、念のため取っておきましょう」

ジェイドは右手を朔の左胸にうずめた。普通はこの時点で痛いはずだが、朔の表情は変わらない。さすが元殺し屋。痛みには強いようだ。

濡れた音が部屋に満ちる。ジェイドは微笑を浮かべて、脈動する心臓に癒着するものに触れた。それを切り離すと、朔の口から呻き

が漏れる。ジェイドはゆっくりと手を抜き、朔の顔を覗き込んだ。

「終わりましたよ、月峰君」

「……どうも」

「今日はもう、ゆっくり眠りなさい。疲れたでしょう？」

朔は緩く頷くと、布団を首元まで上げた。ジェイドは左手を朔の額に置く。

「【よい夢を】」

ジェイドの声に導かれるように、朔の瞼がゆっくりと下りた。

□＋□

朔の部屋のドアを閉め、ジェイドは息を吐いた。

（記憶が戻ってしまったか……）

忘れたままでいさせてやることは出来ないとわかっていたが、まさかこんなことがきっかけで引き出されてしまうとは。ジェイドは唇を噛んだ。うなされていた時の言葉からして、思い出したのは『ブラック・ウエンスデー暗黒の水曜日』、つまり十二年前の十月二十四日のことだろう。よりによって一番凄惨な記憶を――ジェイドはドアのほうをちらりと見やった。

応急処置として、夢を見ないようにする魔術をかけた。そうでもないと思えないだろう。しかしそれにも限界がある。記憶を消す魔術がないわけではない。だがそれはその日までの一切の記憶に蓋をするものだ。それを使えば混乱の元となる。

「花雪……君なら、どうする？」

呟いた言葉は、虚しく自分の鼓膜を通り過ぎる。ジェイドは自室に向かう廊下を、何度も振り返りながら歩いた。

自室に入り、椅子に体を預ける。ジェイドは机の引き出しからウイスキーのボトルを出した。琥珀色のそれを、まるで喉を焼くよう

に流し込む。ジェイドは飲み下すと同時に、静かに涙を零した。

十二年の歳月は、あの忌まわしい日の記憶を薄れさせてはくれなかった。逆に悲しみも憎しみも募るばかりだ。あの時の二倍の年齢になっても、その強さは変わらない。心はいつまでも血を流しているのだ。

鮮明に思い出せる。折り重なる死体や、腐り落ちた体の一部。地獄絵図という言葉すら生温いと思えるほどの凄惨な光景を。そして『怪物』と呼ばれた自分を庇い死んでいった人間を。眼鏡の下にある真紅の瞳を輝かせて夢を語っていたその人に、朔は年々似てきている。澄んだ紅の双眸はもちろんのこと、流れるような黒髪や真珠を思わせる肌もそうだ。ジェイドは再びウイスキーを体に注いだ。

「千怜さん……」
チサト

千怜は——朔の父は自分が殺したも同然だ。だからせめて、朔を守ろうと思ったのだ。もう会うこともないと思っていたのに、再会してしまったのだから。ジェイドは胎児のように丸くなり、体を抱いた。

唐突に電話のベルになる。ジェイドは通話ボタンを押し、溜息混じりに応えた。

《——久しぶりだな、小面様》

「柏木……死んだはずじゃ……」

《崖から落ちても命だけは助かったんだよ。最新の医療のおかげでそれより小面——いや、ジェイド。俺からのプレゼントは気に入ってくれたかい？》

ジェイドは歯噛みした。死んだはずだ、と選択肢から消したというのに、まさかそれが正解だったとは。

「貴様ッ……！」

《『至宝』を傷つけたことを怒ってるのか？》

「当然だ。それにお前は私達を裏切り、あの惨劇の引き金を引いた。お前への怒りが収まることはない。たとえこの身が滅びようとも……！」

《そうか。そんなお前にもう一つプレゼントがある。メールを見ろ》

柏木のプレゼントなどロクなものではない。ジェイドはしぶしぶ受信ボックスを開いた。未開封のメールを選択すると、そこには首の画像——ジェイドは息を飲んだ。

「般若……」

《ふふ……気に入ってくれたかい？》

「貴様……何故、アイツを殺した!？」

《『至宝』である俺を殺そうとしたからだ。当然のことだろう？》

「貴様は『至宝』などではない!」

ジェイドが叫ぶと、柏木はくつくつと笑った。

《牙を失った『怪物』には言われたくないな》

ジェイドは訝しげに眼を細める。犬の遠吠えが二重に聞こえるのだ。直接、そして受話器から。ジェイドは自室の窓を開け、外を見下ろす。塀の上に黒い外套を着た男が——柏木が立っていた。

《ようやく気付いたか》

「何故、ここに……」

《何故？ 決まってるだろ、千怜のタカラモノを壊しに来たんだ》

ジェイドは怒りに任せて窓から飛び降りた。同時に柏木も跳躍し、庭に侵入する。ジェイドは寒緋桜を抜きながら柏木を斬りつけた。

「何故貴様は千怜さんをそこまで憎む？ 殺してもまだ足りないのか!？」

「憎む？ 憎んでなどいない。蔑んでいるだけだ。アイツは力を持ちながら使おうとしない。ただの臆病者だ」

「それが何故朔を殺す理由になる!？」

「殺すのが愉^タしいからだよ！ 別にあれを殺す理由はないが、殺したらお前が女の顔になるのを再び見れるかもしれないからな。想像するだけで興奮するよ」

快楽の導くままに力を使い人を殺しているというのか。ジェイドは真紅と翡翠の瞳で柏木を睨みつけた。

「ウェストベリー街で『狗』を使ったのも、般若を殺したのも愉しかったからか!？」

「ああ、そうだ。女の叫び声は好物だな。特に般若は愉しかったよ。最期までお前のことを呼んでたぜ？ お前は朔につきつきりで来れるはずなどないのに」

喉の奥で音が鳴る。もし般若に全て任せて帰ったりしなければ、自分を慕ってくれた女を失うことはなかったかもしれない。そんな考えが頭をよぎって動きが止まってしまう。彼女は強い。だから信頼して任せた。だがそれは正しかったのだろうか。それとも私は間接的に手を下したのか。苦悩するジェイドを、柏木が見下ろす。

「いい顔をしている。それを見たかったんだ」

喉が震える。ジェイドは自分の右手の甲に傷をつけた。血が溢れる。

「どうして……貴方はそんな人ではなかったはずだ！」

「人は変わるものだ。俺は千怜を裏切ったあの日に本当の悦楽を知ったのさ。千怜を殺したのはフリードリヒ・メイプルウッドの命令だったがな」

「何故あんな奴に従った!？」

「あの人は臆病者じゃないからさ。力を有効に使おうとしていた」

「武力による恐怖政治が平和をもたらすはずはない！ 権力を掌握した人間は必ず暴走する！ あの人の理想は何もかも間違っているんだ！」

ジェイドは怒号と同時に、右手の傷口から真紅の珠を生み出した。それはジェイドの手を離れ、柏木を取り囲む。

「先に逝け……貴様の大好きなフリードリヒ様もあとで送ってやる」

「威勢がいいな。あの時とは大違いだ」

「人は変わるものなのだろう？」

ジェイドが指を鳴らすと、真紅の珠が柏木の肌に吸い付いて大きさを増した。

「貴様が授けた、この穢れた力で滅ぶといい」

球が発光すると、柏木の喉から絶叫がほとばしる。ジェイドはそれを冷たく見た。

「私は貴様と違い、力を付与された人間だ。人の力を奪い自分のものとする力をな！ 忘れたわけではあるまい？」

「こ、ろすのか……俺を、実の父親を……」

「――私の父親は十二年前に死んだ」

指を鳴らすと、珠が手の傷に戻る。心臓が強く脈打って、翡翠の眼が血の色に染まった。ジェイドは冷たく尖った言葉を放つ。

「【死ね】！」

柏木の体に火が点いた。これは骨すら残さずに人を灼く。ジェイドはのたうちまわる柏木を見下ろした。

「死んだふりをして大人しくしていればよかったのに……」

二度も逆鱗に触れたのだ。許されるはずはない。だが仮にも父親だ。情けがないわけではない。もし朔を傷つけさえしなければ見逃していただろう。ジェイドは地面に膝をついた。

憎んでいながらも名乗らないではいられなかった。ジェイドは嗚咽が漏れないように口を押さえる。ジェイドⅡオークスという名は、日本名を単純に英訳しただけのものなのだ。父親はそれに気付いていただろうか。

「――ジェイド」

不意に上から声が降ってくる。ジェイドは振り返らずに、それに応えた。

「何ですか、アレン？」

「何ですか……じゃねえよ。ひどい顔してるぜ？」

自分でもわかる。瞼が重いのだ。ジェイドはアレンから顔を背けた。

「いつから見えてたんですか？」

「最初から。屋敷の方には音が聞こえないようにしたから安心してくれよ」

「……そうですか。朔は――月峰君は、寝てますか？」

「ああ。今はテレゼがついてる」

ジェイドは芝生の上に座り込む。アレンはその横で胡座をかいた。「なあ、ジェイド……お前はこれでいいのか？ 俺はあの研究所にいることはいたが……日本人じゃないからな、国を取り戻したい気持ちには正直わからない。だけど……千怜は復讐なんて望んじやない」と、それだけは確実だと思う」

「そんなことは私だってわかってる！ だけど、あそこは私の唯一の場所だったんだ……それを取り戻すことにしか、生きる意義を見いだせない」

暖かい場所だった。若き科学者だけを集めたあの研究所は、光に満ちていたのだ。あの日、全てが崩れ去るまでは。

「俺はお前に協力すると約束した。だから、お前がどんな選択をしてもおれは協力を惜しまない」

「アレン……」

「お前が欲しいのは自分のままで生きられる場所だろ？ ならば俺はそのために戦うお前の背中を守る。守るのには馴れているんだ。守護者だからな」

ジェイドは眼を閉じてアレンに体を預けた。筋肉質の固い体に心が緩む。ジェイドは疲れたように微笑し、目を閉じた。

□＋□

気がつくくと、自室のベッドの上に寝かされていた。おそらくアレンが運んでくれたのだろう。ジェイドは溜息をつく。

「――朔の様子でも見に行くか」

おそらく寝ているだろうが。ジェイドはゆっくりと体を起こそうとして、気付く。

服が変えられているのだ。しかも着物に。着物は奥に押し込んでいたのに――ジェイドは深い溜息をついた。

「何を考えてるんだか全くわからないな……」

蚊紵の、男物の着物であるのだが、これでは正体を教えているようなものだ。

「まあ、このくらいなら言い訳出来るか……」

それよりも、アレレンが自分の体を見たということが問題だ。アレレンが自分に変な視線を注いだりすることはないだろうが、押し込めた本当の性が羞恥を訴える。胸に当てた手に伝わる、かすかな膨らみ。いつも巻いているはずの布は外されているらしい。

「変態……」

呟いても誰も答えはしない。ジェイドは自分の体を強く抱いた。子宮も卵巣も薬で破壊したこの体を女の体とはもはや呼べまい。それなのに心は何故女なのだろう。頬を冷たい涙が濡らした。魂が虚ろに渴いていく音が聞こえる。

「泣いている暇などない……そんな暇があるなら仇を討つことだけを考えるんだ……」

ジェイドは着物を脱ぎ捨て、ベッドの横のテーブルに畳んで置かれていた布を胸に巻き付けた。その上に黒いワイシャツを羽織り、同じ色のパンツに足を通す。もう迷う暇はないのだ。時間がないわけではない。だが心は安息の地を求め、自分を焦らせる。ジェイドは何かを振り切るように顔を洗い、朔の部屋に向かった。

静かに部屋に入ると、朔は緩やかな寝息を立てていた。気配を消して顔を覗き込むと、驚くほど長い睫毛が微かに揺れる。寝顔は更に千怜に似ていて、ジェイドは思わず息を止めた。唯一似ていないのは耳の形くらいしか思いつかない。ジェイドは朔の肌に指を落とした。それはまるで吸いついてくるかのように瑞々しい。

「君はどうしてこんなに美しい？」

女である自分より、この世に存在する誰よりも綺麗だ。ジェイドは花びらのように薄く小さな唇を指で開く。得体の知れない熱が胸を灼いた。甘く美しく享樂的な気配が身を捉える。ジェイドは指を抜き、自分の唇を朔のそれに合わせた。

「いくら記憶が戻っても、あんな昔のことは覚えてはいまい……？」
だけど自分はしっかりと覚えている。ふつくらとした小さな手に握りしめた可憐な白い花のブーケも、左手の薬指に嵌められたおもちゃの指輪もすっかりと焼き付いて離れない。忘れられたら少しは楽になるだろうか。顔を合わせるたびに情欲の糸に誘われることはなくなるだろうか。

「私は朔が一番好きだ」

千怜は届かない、崇高な存在だった。むしろ千怜に恋をしていたのは花雪だ。彼女はあの日、どこまでも自分の愛を貫いた。自分にはとても出来ない。愛している者の愛している者を愛し守り抜くなんてことは。好きだから、愛しているから触れたい。女を捨てても妄執のようにその感情が残っている。ジェイドは再び朔に口吻し、わずかに開いた隙間から舌を入れた。

「……ん」

舌を絡め、齒列をなぞると甘い声が漏れる。ジェイドは息が続かなくなるまで咥内を蹂躪し、浅く呼吸しながら唇を離した。銀の糸が一瞬だけ二人を繋ぐ。ジェイドは痛みを堪えるような微笑を浮かべた。

「快楽に弱いところは……親子だな」

その形が違うだけだ。柏木は――父親は人を傷つけることに愉悅を感じるし、自分はこの行為に体を熱くしている。浅ましい、吐き捨てるようにジェイドは呟いた。

「……さよなら、朔」

もう、忘れてしまおう。自分の気持ちを貫き、居場所を取り戻すために。

もう何も、この手には残っていないのだから。

第九話『暴走』



ウエストベリー街で『狗』に襲われてから二日経った。朔はベッドから体を起こし、背筋を伸ばす。二日臥せっていただけですっかり体が鈍^{ナマ}ってしまった気がする。テレーゼからは念のため五日間の暇をもらっているが、そろそろ体を動かすくらいはしたほうがいいかもしれない。それが出来るくらいには回復している。

朔はベッドから抜け出して、着ていた浴衣を脱ぎ落とした。傷だらけの体あらわになる。朔はその華奢な体を黒いＴシャツとジーンズに包んだ。特殊なベルトに、墨染桜を差すのも忘れない。身なりを整えると、朔はドアを開けた。

「――っと」

目の前にジェイドの顔があった。手にはお粥の乗ったお盆を持っている。

「何か用事でも？」

「あ、いや。ただ体を動かしたかっただけだ。ご飯の後でもいいよ」「体を動かせるくらいに回復しているのなら、もっとしっかりしたものの方がよかったですかね？」

ジェイドを部屋に入れると、彼はそう呟きながらベッドの横のテーブルにお盆を置いた。朔は顔の前で手を振り、椅子に座る。

「いただきます」

国教徒ではないから、食前の祈りなどはしない。ただ手を合わせて、真っ白なレンゲを手にとった。

「しかし、この家って米あったんだな」

「あいにくタイ米ですが……」

朔はお粥を掬って口に運んだ。シンプルな卵粥だが、おいしい。

「お粥なんて何年ぶりだろ……懐かしい味がする」

「それはよかった。実は味に自信がなかったんですよ。何だか薄い気がしまして」

「ってことは、これ……ジェイドが？」

ジェイドは静かに頷いた。『万能の秘書』とも言われているが、まさか料理も作るなんて。

「ええ。お口に合いましたか？」

「うん。俺はこのくらい味が薄いほうが好きだ」

「それはよかったです」

ジェイドはそう言って、空中に視線をさまよわせた。朔は訝しく思っジェイドに聞く。

「何かあったのか？」

「……え？」

「目が充血してる。寝不足なら、俺には構わず寝たほうが……」

ジェイドは力無く首を振った。いつものような覇気がない。朔はジェイドの顔を覗き込んだ。

「月峰君はまず、自分の心配をしてください」

「でも……」

「――旧い友人が死んだ。それだけですよ」

食い下がる朔に、ジェイドは言う。強い拒絶の匂い。朔は思わずジェイドの腕を握った。

「それだけ、じゃないだろ。人の死に馴れていたって、友人の死は悲しいものだ」

「月峰君……」

「俺だって……フエイのことを思い出すと未だに胸が痛い」

ジェイドは眼を伏せ、落ちた声で言う。

「彼女は……私を慕ってくれていたんです。私という人間を一番理解してくれていた……」

「ジェイド……」

朔が口を開こうとしたが、絹を裂くような悲鳴がそれを止めた。一瞬二人は顔を見合わせ、同時に部屋を出る。あの声はテレーゼの

声だ。

「テレゼ様ッ！」

テレゼの部屋のドアを開けると、そこには誰もいなかった。ただ、さっきまでテレゼがそこにいたことを示すように開かれたままの本がある。ジェイドはすぐさま携帯電話をかける。

「駄目ですね……アレンにもお嬢様にも繋がりません」

「二人とも連れ去られたと考えるのが妥当か。だがアレンはあの通りの大男だし……」

「転送魔術なら簡単ですけどね。自分の力で運ぶ必要はない……監視カメラの映像を見てみましょう。今、映像を転送してもらいますから」

ジェイドはそう言ってテレゼのノートパソコンの電源を入れた。すぐに官制室から送られて来た映像が映し出される。

「……相変わらず行動が迅速だな」

「——私は二度目ですから。サリユー||アンダーソンの時が初めてです」

ジェイドは不意に、驚いたように手を止めた。そこには阿亀オカメの面を着けた人間が立っていた。朔はそれを拡大する。

「どうして……」

ジェイドが呟く。朔はそれを遮るように言った。

「前にウェアリーが連れ去られたときと手口が同じだ。窓ガラスを割って侵入したわけじゃないようだが……」

「青血隊はそんなことをする集団ではありません。お嬢様には何かをされる理由もないですし……」

「とりあえず犯人探しより救出が優先だな。運よく下着に仕込んだ発信器は外されていないようだし」

テレゼには一応発信器をつけているが、普通それはすぐに発見されて捨てられてしまう。だが流石に下着を見ることはしなかったらしい。

「とりあえず行ってくる」

「一人で……ですか？ それに月峰君は病み上がりなのに」

「向こうに行けばアレンもいる」

朔は窓を開けて飛び降りた。ジェイドはそれを見送りながら唇を噛む。じわりと紅が広がった。

「どうして……」

○十○

誘拐は二回目だ。テレーゼは諦めたように息を吐いた。無駄に暴れると体力を奪われる。だからただ強く、阿亀の仮面を睨みつけた。「気丈だね。流石『死の天使』と呼ばれるだけある」

阿亀の仮面を外すと少年の貌が現れる。テレーゼはその少年の真紅の目に釘付けになった。紅は朔を思い出させる。酸素を多く含んだ綺麗な血の色だ。

「何が目的なの？ 金目的なら無駄よ」

「金なんかいらないよ。ただ君に死んでほしいだけ。本当は殺すのはまだ先にするつもりだったらしいけど……事情があつてね」

真紅の瞳が焰のように揺らめいた。テレーゼは体を固くする。

「何故私を殺さなければならぬの？」

「君と君の両親が壊したからだよ……僕たちの居場所をね。それもとびきり残酷な方法でね」

「……私はそんなことをした覚えはないわ」

「確かに君はあの頃まだ歩けもしなかった。だから罪があるのは君の両親だ。だが、君がその体の中に持っているものを取り出さないことには僕たちの世界は元に戻らないんだよね」

少年はテレーゼの胸に手を置いた。血が体を走る気配がする。体内から異質な熱が生まれ、内側から燃えていく気がした。

「私の中に一体何があるっていうの……？」

「そんなこと知ってどうするの？ どうせ今ここで死んじゃうのに」

阿亀はテレーゼの首輪につけられた鎖を引きながら、指を鳴らした。体を戒める縄が蛇に変わる。テレーゼは喉をこくりと上下させた。叫んではいけないと、プライドで感情を抑えつける。

蛇はテレーゼの体を這い、うなじや膝裏、そして脇の下に牙を立てる。熱い息が漏れ、テレーゼは悔しそうに唇を噛んだ。

「魔術は元々日本で研究されていたものだから、呪術には古くからある呪詛を参考に作られたものが多い。大体は巫蠱に関わる動物なんだけど……この『蛇』もその一つ。君が口を開けた瞬間、そこから胎内に入って君の体を壊していく」

テレーゼは呻いた。毒を吐きたいが、口を開いてはいけない。体を刺激して無理矢理口を開かせようとする『蛇』に耐えなければならぬのだ。噛み締めた唇から血の味がした。

「耐えるね。さすがだ」

まるで愛撫のように蛇が揺らめいた。湿った鱗が白い肌を埋め尽くしていく。テレーゼはただ、口を開かないことに全精力を傾けた。「君のお母さんが何故自殺したか知ってる？」

テレーゼは思わず阿亀の方に顔を向けた。母の死は、周囲には病死と言っているはずなのに。この少年は自殺であったことどころか理由まで知っているというのか。テレーゼは目に力を込めた。

「君のお母さんは後悔していたんだよ。君を生き返らせたことをね」テレーゼは瞠目した。それを狙っていたかのように『蛇』の動きが激しくなる。喉に噛みつかれ、テレーゼは小さな叫びを上げた。

『蛇』がその小さな穴を目掛けて勢いよく進んだ。

「――！」

「残念だね。まあよく頑張った方だとは思うけど」

口の中にいる『蛇』が、その体を舌に絡ませる。気持ち悪さに吐き出そうとするが、それも叶わない。やがて蛇は喉へと侵入し、体内に呪詛の吐息を吹きかけ始めた。

怖い。

指先まで、凍ったように動かなくなる。

「助け、て……」

「助けなんか来ませんよ。君の有能な守護者様はまだ臥せっているだろう？」

テレーゼは謔言のように朔、と呟き続けた。来てほしい気持ちと、来てほしくない気持ちがせめぎあう。まだ寝ていなければならぬはずの朔がここに来れば、きつとまた臥せってしまうことになる。けれども、来てくれると信じたい。二年前に交わした契約に縋りたいのだ。

少年が指を鳴らす。すると、『蛇』が狂ったように暴れ始めた。しかも内部で分裂したらしく、胎動は二つに増えている。

「テレーゼ様！」

頭上から響く声。まるで神の御使いのようだとテレーゼは思った。
「朔……ッ！」

「【清めたまえ】！」

朔が叫ぶと同時に、体を這っていた蛇が消える。テレーゼは力無く地面に倒れた。朔の細い腕がそれを受け止める。

「――すいません、遅くなりました」

優しく揺らめく紅の瞳。テレーゼはそれを見るなり、まるで深淵に落ちていくかのように意識を失った。

朔は少年に向き直り、拳銃の狙いを定める。

「目的は、何だ？」

「お会い出来て光栄です、月峰朔さん」

「俺は目的は何だと聞いているんだ」

「目的は単純です。奪われたものを取り返すことです。奪ったのはその子の両親で、奪われたものはその子の中にある」

「『どうということだ？』」

声が重なる。朔は阿亀に銃を向けたまま振り返り、声の主を見る。そこには小面の面をつけた、男とも女ともつかない人間が立っていた。

◇＋◇

「これはどういうことだ？」

小面は低い声で阿亀に問う。その声は変声器でも使っているのだろうか――硬質で金属的だ。

「計画を遂行するには時期尚早だと言っていたはずだが？」

「――僕はもう、貴方を信用しないことに決めたんです」

「何故だ？」

「貴方は守るべきものの優先順位を間違え、その結果般若が死んだ。貴方が殺したようなものだ！ だから僕はもう一人でやろうと決めた。僕も『至宝』の一人――貴方に出来ることは、僕にも出来るはずだ」

朔は逡巡した。今のうちなら逃げられる。逃げた方がいいのだ。しかし何故か足が動かなかった。拳銃を下ろし様子を伺う。

「般若の件は全て私に非がある。君が般若を慕っていたことは知っている。私を殺したければ殺せばいい」

「素直に殺してやりはしませんよ！」

阿亀が手を掲げると、炎が朔を囲んだ。阿亀はくつくつと笑う。

「同じ気持ちを味わってもらいますよ。大切なものを殺される痛みをね！」

「やめろ！」

硬質な声が叫ぶ。朔はテレ－ゼを抱きかかえたまま、目の前に立ちただかる焔の壁を見つめた。

混乱していた。

二人は青血隊の一員でありながら仲間割れをした。そして今自分が殺されようとしている。「大切なものを殺される痛み」を味わわせるために。

――つまり自分は小面にとって大切な人ということだ。だが、心当たりはない。

「朔……」

テレーゼが弱い声で名前を呼び、朔ははっと現実に戻された。透明な青の瞳を見つめ返すと、テレーゼは呻くように言う。

「……体が……熱いの……ッ」

「何か、されたんですか？」

「『蛇』が、中に……っ、ああっ！」

テレーゼは体をのけ反らせた。慌てて床に寝かせて体を見ると、腹部がぼこぼこ蠢いている。この症状にも、『蛇』という名称にも心当たりがあった。これが予想通り呪術なら、取り出すのは容易なはずだ。

「……痛いですが、我慢して下さい」

朔はテレーゼの腹に手を沈み込ませ、体を這い回る『蛇』を掴んだ。テレーゼの唇から呻きが上がる。引き上げようとすると、テレーゼが痛みのせいなのか暴れ始めた。

「我慢しろ」

「……ん、あ……くっ……！」

一匹を焼き殺し、もう一匹の方を掴む。するとそれは朔の手を摺り抜けるようにして、朔の体に潜り込んだ。腕の中を『蛇』が這う。

「朔！」

「……っ！」

『蛇』が次々分裂して体内を移動していく。時折血管を食いちぎっているのか、肌の色が斑に染まる。

「くっ……ああッ！」

地面に爪を立てる。それを嘲笑うように、焰の壁が朔に迫ってきた。朔はゆっくり手を伸ばし水を放つが、焰の勢いに負けてしまう。

「……ッ、テレーゼ様……先に逃げてください……」

「でも……」

「このロープを……使えば、その窓から、外に……ッ！」

朔はかろうじて焰が届いていない窓を指差すと、テレーゼは首を振る。

「朔を置いてはいけないわ」

「……逃げ、ろ……俺はいいから……!」

言葉が続かない。体の中にいる『蛇』が一斉に動きを速めたのだ。声にならない叫びが喉を通り過ぎる。

「朔!」

機械のような声が耳朵を叩くと同時に、焰の壁が消し飛んだ。小面が朔に駆け寄る。

「な、んで……俺の、ことを……?」

「――いずれわかる。今は……」

小面は朔に小さな針を突き刺した。

「【浄化の刃よ、死の穢れを払いたまえ】」

針がゆっくりと体に沈んでいく。小面は朔の頬にゆっくりと手を伸ばした。

「二日経ったら針を抜け。その頃には『狗』の毒も完全に抜け切るだろう」

「どうして……知ってるんだ?」

「あいにくソースは教えられない」

小面はそう言うと、踵を返した。朔はその背中を呼び止める。

「待て……」

「何だ?」

「目的は……何故、テレゼ様を狙った?」

「私達から奪われたものをその子が持っているからだ。今はこれしか言えない」

小面はそう言いながら、まるで空気に溶けるように姿を消した。



「少し遅かったみたいですね……」

墨染桜を杖代わりに立ち上がりうっていると、鉄製のドアが軋

むような音を立てて開いた。そこにはジェイドとアレンが立っていた。

「何で来たんだよ、ジェイド……」

「相手が魔術しか使わないなら、私にだって相手くらい出来ますから。そこにいるのが首謀者ですか？」

朔は言われて初めて、床に倒れている阿亀に気付いた。血も何も流れていないが、おそらく死んでいるだろう。

「長居は無用よ。帰りましょう？」

テレーゼが朔の思考を遮るように言い、右手を差し出した。朔はその手を取って立ち上がる。

「――ありがとう、朔」

「テレーゼ様……」

テレーゼが礼を言うなんて珍しい。しかも微妙に視線がずれていく。変だ。

「どうしたの、朔？」

「テレーゼ様こそ」

「……っ、眠いだけよ。早く帰りましょう」

屋敷に帰るとすぐにベッドに行かされた。また寝てなければならぬのか。朔は溜息をついた。

「月峰君はじつとしているのは嫌いですか？」

ジェイドはベッドの横に腰掛けて言う。嫌いなわけではないが、何だか落ち着かないのだ。そう答えるとジェイドは苦笑した。

「今回は何か仕事した感じもしないし……殺したの俺じゃないからさ。顔は隠してたけど、多分青血隊でも上の方の奴だ」

「そうですか……」

「――青血隊とは何なんだ？ 前に世話になったと言っていた気がするけど……」

ジェイドは小さく溜息をついて朔を見る。

「元々日本で魔術の研究をしていた人達とその子供たちです。初め

はクール社に入り研究を続けていましたが、そのうちに『日本の復興』を遂げるために一斉にクール社を離れたんです」

「日本の復興……『奪われたものを取り返す』とはそういうことか？　だがそれがテレーゼ様とどう繋がる……？」

一つが繋がると別の場所が絡まる。朔は頭を抱えなくなった。

「そういうことならうつてつけがいるでしょう？」

「『根』か……確かにそうだな。ここで考えているよりはいい」

後でメールでも送ろう。『根』ならば断片的なものを少しは解明してくれるはずだ。何故テレーゼが狙われているかを知らなくては守るのも難しい。

そう思った時、ドアが控え目にノックされた。ジェイドが応える
とゆっくりドアが開く。

「――朔に話があるの。ジェイド、ちょっと席を外してくれないかしら？」

「わかりました。あまり長くならないようにして下さいね」

「わかっているわ」

テレーゼはジェイドと入れ代わり、ベッドの横に腰掛けた。長い髪が僅かに揺れる。

「話って何ですか？」

「――あの男に言われたの。母様は私を生き返らせたことを後悔して自殺したって……」

テレーゼの目尻に涙がにじむ。朔は左手を伸ばしてそれを拭った。

「あんな人間の言うことを信用してはいけません」

「でも……」

「だいたい人間が生き返るわけがないじゃないですか。白雪姫じゃあるまいし」

不意にテレーゼが体を乗り出し、朔に抱きついた。胸に濡れた感触がある。朔はゆっくりテレーゼの髪を梳いた。

「――仮にそうだとしたら、テレーゼ様はどうするつもりなんですか？　命を返上でもするつもりですか？　テレーゼ様が生き返るこ

とを望んだわけじゃないのに」

「朔……私は……」

「テレーゼ様が契約を果たすまで死んでもらっては困ります」

「——そうね。私は貴方の『望み』を見つけなければならぬんだわ」

テレーゼが朔の頬に手を伸ばす。子供らしい高い体温が心地いい。朔はその手を取り、薄紅の唇を落とした。

□＋□

「本当は殺してないんだろう？ あれは幻術だ」

「見抜けるようになったんですか、アレン？」

ジェイドはアールグレイを飲みながらアレンに目を遣る。アレンは呆れたように溜息をついた。

「全く……何を考えてるんだ、お前は」

「阿亀を殺したら私は青血隊を追われますよ。ただでさえ柏木の子供ということで信用されていないんですから。般若を死なせてしまったことで立場は危うくなっていますし」

「ジェイド……」

「今回は阿亀一人で済んだのでよかったのですが……お嬢様がある程度真実を知ってしまいましたね。月峰君もすぐに真実を掴んでしまうでしょう。それが予想に過ぎなくても十分な脅威です。スピネルのことも気になりますし」

だからと言って朔を殺すわけにはいかない。スピネルも利用価値はある。取るべき道は真っ向から勝負するしかない。

「仮に直接戦闘になっても柏木の魔力を奪ったので、力は十分にあります。他の人間もいるので、戦力はこちらの方が上です。スピネルと朔だけでは相手にすらなりませんよ」

「でもお前は……月峰と戦えるのか？」

「――難しいですね。彼を仲間に取り入れられればいいのですが」
本来、朔の居場所は青血隊の方なのだから。ジェイドは目を閉じた。

「……もし月峰が仲間にならなかったら？」

「考えはありますよ。元々朔を引き入れる予定はありませんでしたし」

「計画は変わらず実行するということでもいいんだな？」

ジェイドは頷いた。今回の阿亀のことは単なるイレギュラーと思えばいい。前と違うのは知らずに死ぬか、知りながら死ぬかだけだ。そんなものは瑣末事項なのだ。ただテレゼの心臓を取り出せればいい。そしてフリードリヒが奪ったデータさえあれば――ジェイドは静かに目を閉じた。



テレゼは朔の胸の上で寝息を立て始めた。朔は溜息について、テレゼをベッドに横たえる。

「今の俺に『望み』なんてあるんだろうか……」

低い次元で満たされてしまっている気がする。テレゼの守護者になったことで、世界からの疎外感がなくなった。それだけでもう、いいのかもしれないとさえ思う。

二年前に交わした契約――テレゼの命を守る代わりに、『望み』を見つけそれを叶えること。もし自分がこの場所に満足しているなら、現状の維持が『望み』なのか。しかしまたスラムに放り出されてもきつと何も感じはしない。二年前のテレゼの声が棘のように残っている。

『望み』がないなんて、寂しい人ね――そう、彼女は言ったのだ。

「早く俺を『寂しい人』から脱却させて下さい、テレーゼ様……」

母親の死について悩んでいる暇などない、そう告げて。

朔は窓から飛び降りた。

第十話『繋がる真実と決断』



『根』のところに向かう道すがら、今までわかった情報を整理する。しかし一つが繋がれば一つが絡まる、といった状況は変わらなかった。だが自分の過去だけは見え始めている。朔は静かに目を閉じた。

本来自分は、青血隊側の人間なのだろう。記憶の中にある研究所で魔術研究が行われていたとするならば、小面との関係もおぼろげに見えてくる。しかし仮面の下が見えない限り、どういう間柄だったのかはわからない。血縁か、それとも友人か。十二年前だったのだから、恋人はありえないだろう。だが一つだけ確実なのは、消えた記憶の中に小面はいるということだ。

しかし、わからない。もし本当に俺のことが大切ならば顔を見せるのではないだろうか。あのような状況とはいえ、十二年ぶりに会ったのだから。朔は頭を捻った。顔を見られたくない理由があるのだろうか。

わからないことはまだある。テレゼのことだ。テレゼは武器商人の娘として命を狙われることが圧倒的に多い。それが全く関係なかったのはサリユ一の一件くらいだろう。しかし今回は違う。テレゼの中にあるという『奪われたもの』が鍵なのは間違いあるまい。

「『母様は私を生き返らせたことを後悔して自殺した』か……」
この言葉の意味がわかれば、この疑問もすぐに解決するだろう。

「――待てよ。それなら旦那様に聞いた方が早いんじゃない？」

母親が知っていたのなら、父親も知っていた可能性は高いのではないか。だがすぐに否定する。

「……知っているなら俺を雇うはずがない」

敵であるクール社の人間を秘書に据えるような人だが、さすがに娘の命を狙う可能性がある人間を娘の守護者にはしないだろう。だがあの少年は「奪ったのはこの子の両親」と言った。フリードリヒが関係しているのは間違いないのだ。

「――なに難しい顔してんねん、朔」

歩きながら考え事などするものではない。後ろにいた『根』に全く気付かないなんて守護者失格だ。むろん、テレエゼがいるなら考え事などしないのだが。

「俺に依頼か？」

「ああ」

「ちようどよかった。今、でかい依頼が一つ片付いたとこなんや。ま、続きは店で聞こうか」

朔は『根』に促されるままに店に入り、カウンターに腰掛けた。

『根』は朔の隣に座り、水を置く。

「――もう体調はいいんか？ えらいことに巻き込まれたみたいやんか」

「ウェストベリー街の件か？ あれなら問題はない」

「でも物騒やなあ。アレなんかテロみたいなものやで。女王も心配しとったで？」

「女王って……」

『根』は情報屋としての腕を買われ、アメリカ女王の使用人兼愛人を務めている。その辺りは凄すぎてよくわからないが、まさかアメリカが自分のことを知っていたとは。

「そのアメリカ女王から聞いたんやけどな、最終的に般若の面を被った日本人の女が謎の犬を全部消したんやって。で、そいつに御礼をしたいけど見つからないから調べてくれって言われてな……昨日までその仕事をしとったわけや」

そこで繋がるのか。朔はゆっくりと息を吐いた。

「その女は死んでたんだろ？」

「何で知ってんねん……俺は徹夜をしてだな――」

「今回の依頼にどうもその女が関わってるらしくてな」

繋がる。小面は事態を収めるといふ役目を般若一人に負わせた。その結果彼女は死んだのだ。そのせいで阿亀は暴走した。

朔は水を飲み干してから、『根』のチョコレート色の目を見た。

「青血隊について調べてほしい」

「その女が所属していた組織やな。一応軽くは調べてあるで」

「どういう組織なんだ？」

「日本人の学者集団や。主に科学者やねんけどな。『暗黒の水曜日』の解明、ひいては日本の復興を目指しとる。本部は北海道にあるんや」

朔はカウンターを指で軽く叩く。聞きたいのはそういうことではない。朔の意思を読み取ったのか、『根』は右頬だけを上げた。

「集会の時は必ず全員面をつけるんや。そしてリーダーの小面の顔を見た奴は数少ない……っかほとんどのいに等しい。それからわかる通り、普通の組織ではない。ただ、温厚で問題行動は起こしとらん。いまんとこな」

「俺が知りたいのは青血隊とメイプルウッドの関係。それと小面の正体と——俺との関係だ」

「そういうことか……なるほど。でもお前との関係とは、どういうことや？」

『根』は朔の空になったグラスにミネラルウォーターを注ぎながら聞く。朔は息を吐いてから応える。

「それがわからないんだよ。おそらく消えた記憶に関わるんだろうが……。少しは思い出したけど、まだ断片的でさ」

「昔のこと、思い出したんか？」

「ほんの少しな。自分の父親が科学者だったとか、殺されたとか……そういうことだけ」

『根』の手からグラスが落ちる。水は入っていなかったが、僅かにひびが入った。

「——ってことは、お前の父親……月峰千怜か？」

「名前まではわからない」

「静岡にあった研究所の所長や。『暗黒の水曜日』の時に死んだことになったるが」

『根』の動揺が正直わからなかった。月峰千怜にはそれほどのインパクトがあるのだろうか。朔は首を傾げた。

「おそらくお前が月峰千怜の息子っちゅうのは間違いない。紅眼やったって言われとるしな」

「……それがそんなに驚くことか？」

「月峰千怜はメイプルウッド最凶の戦略兵器である『カマエル』の開発に携わったと言われているんや」

朔は目を見開いた。カマエルは一瞬で地球のほとんどを焼き尽くす凶悪な兵器だ。ジェイドやテレーゼはこれをあまり好いてはいない。

「ただ、本人は温厚で平和主義者だったらしいんやけどな」

「カマエルが完成したのは四年前だ。関わっていたとしてもかなり初期だな……」

最凶の兵器を開発した奴の息子が元殺し屋とは、因縁を感じざるを得ない。朔は溜息をついた。

「――なあ、朔」

「何だ？」

「こうは考えられん？ フリードリヒⅡメイプルウッドがカマエル製作に反対したお前の親父を消したと――」

「――可能性は、ある」

武器の貿易なんて、美しいものではない。ましてカマエルはメイプルウッドの切り札だ。その製作を反対したら、消されるのは間違いない。研究データさえ残っていればいいのだから。

「もしそうだとしたで。……お前は、どうするんや？」

「俺は旦那様に忠誠を誓ったわけではない。あくまでテレーゼ様だ」

朔は立ち上がり、バーの出口に向かう。これ以上憶測で話をして

も何にもならない。一刻も早く全てを解明してほしいのだ。

だが、収穫もあった。月峰千怜とメイプルウッドの関係――青血隊との繋がりも見え始めている。朔は礼として、『根』にポケットピストルを投げつけた。

「お、これ欲しかったんや。おおきに。じゃあ青血隊のことはしっかり調べとくさかい」

「頼む。じゃあ俺はこれで。そろそろお姫様が目覚める時間だ」



「どこ行ってたのよ！」

屋敷にテレーゼの怒号が響く。朔は溜息をついた。仮にもお嬢様がこんな大声を張り上げるものではない。貴族というわけではないが、それに近い立場にはあるのだから。

「『根』のところですよ」

「そうじゃなくて！ 貴方はちょっとくらい静かに寝ていられないわけ！？」

「そういう性分なんですよ……」

そもそもベッドに横になる、というのすら好きではない。殺し屋時代は木の上で寝たりしていたのだ。ふかふかのベッドに二年で順応できるはずはない。

「そんなんじや治る怪我也治らないわよ！」

「だいぶ落ち着いているので、大丈夫ですよ」

「大丈夫なわけないじゃない……貴方はただの人間なのよ？」

テレーゼは朔の頬に手を伸ばす。朔はその手を掴んでゆっくりと下ろした。

「今から寝るから大丈夫ですよ」

テレーゼはまだ頬を膨らませている。朔はそれを指でつついた。

「淑女レディーがそんな顔をするものではありませんよ」

「いつもはそんなこと言わないくせに……まあいいわ。早く休みな

さい」

テレーゼはそう言い残して朔の部屋を出て行った。朔はベッドに横になり天井を見つめる。

「しばらくは待つだけか……」

『根』は仕事が速い。おそらく明日にはかなりの部分の調査を終えているだろう。今日はおとなしく寝ていた方がいいのかもしれない。

「ただ、あまり具合悪くないんだよな……」

動ける体なのに寝ているのは性に合わない。まして昼間から寝る気になどなれない。

「でも、寝ないとテレーゼ様がうるさそうだしな……」

朔は溜息をつきながら布団を被った。

□＋□

「『根』に青血隊を調べさせるなんて……お前、本当に何を考えている？」

「君は本当に心配性だな、アレン。君はただ私を信じて動けばいいんだ。『根』は確かに有能な情報屋だ。朔は限りなく真実に近いものを手にするだろう」

「どうしてそんなリスクなことを……」

「不確定要素を減らしたい。敵なら敵と認識してしまいたいんだ。真実を知ってしまった後の彼の決断はおそらく揺らぎはしない。最終的に敵になるか味方になるかはわからないが、どちらかわからない状態で最後の戦いを仕掛けることの方がリスクだろう？」

味方ならば心強い。敵ならば対処が必要だ。テレーゼを殺す段になってそれがわからないのは危険過ぎる。

「スピネルが朔に魔術を与えたそもその理由は、朔という不確定要素の存在を投入することで計画を遅らせるためだったんだ。だからそれに乗って計画を遅らせる……なんていうのは避けたい。その

ためには朔の立場を固定する必要があるだろう？」

「本当にそれだけか？」

「まさか。だけど言えるのはこれだけだ」

理由は山のようにある。仮面の下にある顔は一つだけではないのだから当然だ。ジェイドは溜息をついて、ミネラルウォーターを飲み干した。

「……計画を早める。スピネルの作戦に乗らないために、そして私に向かう刃を逸らすためにな。朔は明日にでも真実を知るだろうし。私の正体まで知るかはわからないが」

「——そうか。わかった」



翌日、『根』のバーに行くと、目の下に隈を作った『根』が紅茶を飲んでいた。どうやら眠気覚ましにカフェインを摂取しているらしい。

「なんつーか……お疲れ」

「とりあえずまだ調査は続けるつもりやけど……出来よるトコまでやっておいたで。やけど……非現実的な話ばかりなんや」

魔術以上に非現実的なものがあるのだろうか。朔は『根』が差し出したプラスチック製のモニターを受け取った。これに情報を纏めてくれたのだろう。

「情報が増えたらそれに直接送信するさかい。まとめるの難儀やし」「どうも。……で、非現実的な話とはどういうことだ？」

朔はモニターの電源を入れながら『根』に聞いた。『根』は溜息をつきながら朔の隣に座る。

「青血隊の母体は朔の親父——つまり月峰千怜が所長を務める研究所や。そこでは若い学生や名だたる科学者を集めて魔術の研究をしようとしたんや。せやけどごつつう突拍子もへん研究やから、国が金を出してくれん。そこに手を差し延べたのが、当時はまだ当主になっ

てへんかったフリードリヒ・メイプルウッドや」

「つまり……魔術の研究をさせてやる代わりに、カマエルの開発もさせた？」

「カマエルの原動力はルベドと呼ばれる鉱物や。そら魔術に深く関わっとるらしい。要は魔術研究イコール武器開発やってんな」

『根』は朔の手からモニターを奪い、スクロールを始めた。ある程度のところまで下がってから指を離す。

「柏木、つう奴がおってな。そいつがメイプルウッドの支援を受けることを提案したらしい。最初はほんで上手くいった。月峰千怜の予想に反してフリードリヒが当主になるまでな」

フリードリヒは次男だ。確かに予想は出来まい。しかし先代のときより社が拡大しているのを見ると、次男を当主に据えるという判断は正しかったのだろう。

「兄のウェアリーは戦略兵器が好きではないらしい。やからカマエル開発をやメさせると踏んどったんやろ。平和主義の月峰千怜にしてみれば、カマエルやなんていっちゃん嫌な武器やろしな」

確かにそうだ。戦術兵器なら主に殺すのは兵士だが、戦略兵器の餌食となるのは市民だ。平和主義を標榜する人間ならば戦略兵器の方をより憎むだろう。

「せやけど当主になりよったフリードリヒはカマエル開発を急がせたちゅうわけや。やから月峰千怜はメイプルウッドと手を切ることに関心したんや。せやけど柏木はそれに反対し、フリードリヒ側についてちゅうわけや。元々仲は良うへんかったらしい」

「だから消したのか？ あの人にしては短絡的過ぎる」

「ここで、嬢ちゃんが出て来よるんや。フリードリヒが当主になりよったんはちょうど嬢ちゃんが生まれた頃や。こら知っとるな？ でも嬢ちゃんは心臓に疾患があって、生まれてから一ヶ月も経たへんうちに死の淵に立たされたんや」

そんな話、聞いたことがない。テレエゼは深窓の姫君とは程遠い頑丈な娘で、風邪すらひかない。しかもいつも走り回っている。心

臓に疾患があったなら、もう少し走り回らないようにさせるはずだ。朔は驚きと不審の目を『根』に向けた。

「ここからが非現実の話や。死の淵に立たされた嬢ちゃんを何とか助けたい思ったんが、嬢ちゃんの母親や。その母親は月峰千怜の研究する魔術に、人間を生き返らせることが出来る術があると知り、月峰千怜と接触したろとおもた……ってデータにはあんねんけどな、そないな方法あるわけないやろ？」

「確かに。お互いその辺には目をつぶろう。続けてくれ」

「うん。……で、月峰千怜に接触したろとおもた嬢ちゃんの母親は、月峰千怜の秘書みたいな奴に門前払いされるんや。メイプルウッドの人間やからな。そのうち嬢ちゃんが死んでまう。フリードリヒはそれを知り、研究所を襲撃する計画を立てたんや。まず柏木を使い、月峰千怜やその支持者を殺す。その混乱に乗じて、フリードリヒは研究データを、嬢ちゃんの母親は娘を蘇生させる方法を得ようとした」

「テレゼ様が死んでるというのがあまりに現実的ではないが、そこにも目をつぶろう。それで？」

「その計画は成功するんやけど、嬢ちゃんを蘇生させる時に問題が発生したんや。その問題のデータがあらへんのや、実は。多分、嬢ちゃんの母親が間ちごて試作カマエルの起爆装置を入れたんや。それが西暦2929年10月24日のことや。これで青血隊とメイプルウッドの因縁の話は終わりや」

「日本の崩壊は、試作カマエルな誤爆だったってことか……!？」
朔は目を見開いた。それならわかるはずはない。兵器の開発は重大機密だ。それに日本では、国内で戦略兵器を作ることは禁止されていたはずだ。真実を知る青血隊が何も言わなければ、他の人間に真実がわかるはずはない。

「試作カマエルの話は俺の推測や。せやけど、多分当たつとるやろ。今のカマエルの威力からして、十二年前は日本のほとんどを吹っ飛ばすくらいやったとしてもおかしくはない」

繋がり始める。

生き残った研究所のメンバーがそのまま青血隊となったなら、メイプルウッドではなくクールに入り込んだことも、フリードリヒを憎悪する気持ちもわかる。だがわからないのはテレゼのことだ。

『根』の話が全て本当ならば、蘇生術に秘密があるのだろう。

「青血隊の目的は仇討ちや。小面の正体とお前との関係までは調査が及んどらんし、嬢ちゃんの話も眉唾ものや。だがフリードリヒがお前の親父の殺害を指示したのは間違いない。つまりお前には嬢ちゃんを裏切るという選択もあるっちゅうことや」

「――少し考えさせてくれ。今のままだと、間違った答えを選びそうだ」

朔はモニターを手に取り、出口に向かって歩き始めた。その後ろを『根』がゆっくり追いかけ、呼び止める。

「俺はお前がどの道を選んだとしても、否定はせえへん。せやから自分が納得出来る道を選べ」

「――うん」

朔は頷き、店を後にした。まだ混乱している。頭を整理しなければならぬ。朔は息を吐いて歩き始めた。

「――おい」

不意に、青を思わせる声が響いた。それが誰かは、振り向かなくてもわかる。

「スピネル……」

「電話しても繋がらなかったから、テレゼに聞いたら多分ここだろうって。来いよ。話があるんだ」

「今は、ちょっと……」

混乱しているときに、スピネルの話を聞いている余裕はない。しかしスピネルは強引に朔の腕を引っ張った。

「お、おい……」

「時間がないんだ！」



「――時間がないってどういう……」

スピネルに腕を引かれるまま、朔は裏路地に連れていかれた。スピネルには似合わないスラム街だ。一瞬、タイムスリップでもしたような気分になる。

「青血隊が動き始める……」

「――え？」

スピネルは寂れた酒場のドアを開けた。赤毛のマスターがスピネルを一瞥し、すぐに目を逸らす。『根』の店と同じで、裏の人間のための所なのだろう。スピネルは奥の埃っぽいソファ―に腰掛けた。朔がその向かいに座ると同時に、スピネルは目に巻き付けた青い布を外す。

「情報屋のところに行ったということは、青血隊の話を少しは聞いたんだろう？ 何故、メイプルウッドを狙っているのか……とか」

「――ああ」

「彼らがあそこまで巨大化したのは父の助力があつてこそだ。利害が一致するからな。クール家にとってメイプルウッドは邪魔な存在だ。だが僕は違う。フリードリヒなどどうなってもいいが、テレ―ゼは……失いたくない」

珍しく素直なのは、焦りからか。朔は黙って続きを促した。

「小面にとってお前は戦いにくい相手だ。魔術の使えないお前は無視していい存在だったが、魔術を手に入れたお前は敵にすれば厄介で、味方にすれば心強い存在になった。僕はそれによって計画を先延ばしにしたかった」

スピネルはまくし立てるように言う。深い青の両目が、強く朔を見た。

「――その目論みは成功しかけていた。だが、そうもいけなくなつた」

小面は確かに「時期尚早」と言った。おそらく阿亀が計画を漏ら

したから、向こうも焦っているのだろう。

「――憶測だけだな。あえてゆっくり計画を実行する可能性もないことはない。ただ、小面の青血隊内での立場を考えると……僕なら、計画を前倒しにするだろう」

「小面の、立場？」

「何だ、それは情報屋から聞いていないのか。小面は研究所襲撃の主犯である柏木の――娘なんだ。だからこそ、アイツの立場は危うい」

柏木の娘――確かにそれは立場を危うくするだろう。それに小面は、般若を死なせたとして阿亀に裏切られている。

「自分へ向けられる負の感情を、他に――メイプルウッドに逸らしたいってわけか。よくある話だ。俺が小面ならそうするな」

「それで、だ。お前はどっちにつくんだ？」

「今すぐ決めるのは無理だ。まだ、混乱してんだよ……」

「そんなの、直感で選べばいいだろ。悩んでも何にもならない」
激しく、烈しく。

スピネルの瞳が赤く燃える。

「――お前はもう、決めているはずだ」

そういえば、スピネルは千里を――人の心さえ見透かす眼を持っていた。もう彼は俺がどちらを選んでいいのか知っているのだ。朔は眼を伏せた。

果たしてこの道は正しいのか。

わからない。

記憶がないから、愛着もないだけではないのだろうか。

そんな仮定が頭を支配する。

こんな時にさえ、自分が何を望んでいるのかがわからない。

どうせわからないのなら、博打でもいい。

ただ一つだけ、賭けてみたいものがある。

「俺は――」

――『望み』がほしい。

第十一話『それぞれの道へ』



「――お前はもう、決めているはずだ」

そういえば、スピネルは千里を――人の心さえ見透かす眼を持っていた。もう彼は俺がどちらを選んでいるのか知っているのだ。朔は眼を伏せた。

果たしてこの道は正しいのか。

わからない。

記憶がないから、愛着もないだけでは無いのだろうか。

そんな考えが頭を支配する。

こんな時にさえ、自分が何を望んでいるのかわからない。

しかし答えは、出ているのだ。

「――俺は、テレゼを護る」

「よかった。心と違うことを言ったら張り倒してやろうかと思っていたんだ」

心を見られているとわかっていて、嘘をつく奴などいるのだろうか。スピネルはそれに応えるように、悲しげに笑う。

「中にはいるんだよ。嘘をつくことに馴れきってしまった人間がね。たとえば心を見透かされているのがわかっていても、そいつは嘘をつく。いや……真実を口に出来ない」

スピネルは顔を曇らせ、目隠しの青い布を弄ぶ。沈黙が流れた。朔はいつの間にか、マスターが置いていった水を飲み干す。氷がいやに大きな音を立てた。

「――アイツは本当に嘘ばかりつく……」

スピネルはストローで、無意味に水を掻き回しながら呟いた。氷が水の渦の中で踊る。その様子は混乱して、目を回しているようにも見えた。

「小面——いや、柏木翠は常に真実を隠している。僕らを欺き続けている」

「『僕ら』ってことは、俺も小面に欺かれてるってことか？」

スピネルは水を掻き回すのをやめ、朔を見つめた。

「本名を言ったらすぐに気付くと思ったんだがな……」

スピネルは視線を上げ、朔の後ろにある写真を見遣る。長い嘴クチバシをもつ、蒼く美しい鳥だ。朔はつられて、その写真に目をやった。

「——kingfisherか。或る詩人はハルシオンhalcyonという波を沈める伝説の鳥になぞらえたと言うが……」

「日本語では翡翠カワセミだな。雄が翡で、雌が——」

朔の頭を矢が貫く。朔は動きを止めた。

——翡翠はヒスイ、とも読める。

朔は驚きながらも、奇妙な冷静さをもってスピネルに目を向けた。心の中で問う。自分の予想は当たっているのかと。スピネルは静かに頷いた。

「——その可能性を考えなかったわけではないようだな」

考えなかったわけではない。元クール社の研究員というだけで、十分怪しい。それ以上に、ジェイドが小面なら納得できる言動がいくつかあった。朔はストローで氷をつつきながらスピネルと目を合わせた。スピネルは足を組み替えて言う。

「敵のトップはジェイドだ。知らないだろうが、お前が幼い頃はいつも一緒にいたらしい。だからこそアイツにとってお前は戦いにくい相手だ」

テレーゼはその美しさと武器商人の血筋から『死の天使』と呼ばれているが、スピネルは聡明さと冷酷さ、そして伯爵という地位から『氷の伯爵』と呼ばれている。朔はそんなことを唐突に思い出した。残虐なのに気高い微笑を浮かべたスピネルを、朔は睨むように見る。

「——子供のくせに随分と残酷なことを考えるな、スピネル。俺にジェイドを殺させるつもりか？」

「ジェイドにはそれなりの報いを受けてもらわないといけない。お前に殺されるのは一番ショックだろうな……何せ、お前から貰った玩具の指輪を未だに大切に持っているような奴だ」

空気が澱んでいく。スピネルは子供らしくない、まるで霧に潜む殺人鬼のような表情を浮かべた。戦慄が走る。こういう顔は、前にも何度か見たことがある。

——本気だ。

スピネルは本気でジェイドを殺させるつもりだ。そこにあるのはもはやテレゼへの愛情だけではないだろう。朔は思わず後退りした。スピネルは立ち上がり、朔の方にゆっくり手を伸ばす。

「——お前の心は驚くほど読みやすいな」

スピネルは冷笑を浮かべたまま、朔の白い首を絞め上げた。ときれとぎれの息が漏れる。触れ合った部分からは、確かに憎悪の波動が感じられた。

「僕はテレゼが好きだ。テレゼを失いたくはない。——そして、ジェイドとお前を憎んでいるんだ」

「……っ、スピネル……放せっ……！」

人は余程単純な人間でない限り、一つの理由だけでは動かない。スピネルを動かすのは愛情と憎しみという、一見相反する感情なのだ。しかし愛情は憎しみに変わりやすい。愛情の彼岸のものではなく、同胞とも言うべき存在だ。スピネルは冷たく笑い、手の力を緩めた。朔は酸素を大量に吸い込み、体を折って咳込む。

スピネルは朔の前髪を掴み、上に持ち上げた。

「お前と馴れ合うつもりはない。もしお前がテレゼを裏切ったら……お前を殺す」

「一度忠誠を誓ったのに裏切るのは主義に反する」

「——祖国より自分の主義と希望をとる、か。月峰のそういうところは嫌いじゃない」

スピネルは朔の髪を離し、悪戯っぽい微笑を浮かべた。全てを見透かすその微笑はとても厄介だ。朔は小さく溜息をついた。

——信用はできる。スピネルは俺を裏切っても、テレーゼを裏切ったりはしない。

背中を預けられはしないが、共闘なら出来る。朔は闇色の笑顔を浮かべた。

□＋□

緑色のプラスチックが輝くおもちゃの指輪。ジェイドはそれを左手の薬指に嵌めた。

それを見るたび、この十二年間が胸に去来する。特に後半の二年はぞっとするほど濃密だった。朔と再会してからは——

最初は忘れられたことを嘆いた。その次は堪らなく愛しくなった。そして子供の戯れに縛られ続ける自分を自覚した。愛情は綺麗ではない。朔への気持ち募るたび、テレーゼへの憎しみも募る。愛する人の愛するものを愛すなどという境地には到達出来そうもなかった。

触れたい。

満たしたい。

女でなくなった体のどこにその浅ましい欲望は眠るのだろう。朔を前にすると、自分はまるでただの快樂に従順な遊女だ。あそびめ

いや、朔でなくても——

スピネルは朔に似ている。魔術を使うために眼を紅くしたときなどは、幼い頃の面影がよぎるほどだ。そのせいで自分はあやまちを犯してしまったのだ。

朔と再会する二年前、つまり今から四年前——ジェイドはそこまですべて考えて、首を振った。

「私は最低だな……そんなことは、前からわかっていたが」

スピネルがテレーゼを好きになる理由はわかる。テレーゼは考えていることと言っていることの差がない、単純な娘だ。だからこそスピネルは彼女といえると安心出来るのだ。

「私は逆だな」

嘘ばかりだ。スピネルはだから恐れる。心と口が分裂したような自分を、ジェイドは笑った。

ジェイドは瑠璃色の着物をさっと着て、帯に寒緋桜を差す。そして小面の面で顔を隠した。

滑稽な格好だ、と思う。自分は小面——可憐な娘などではない。嫉妬に狂った女——橋姫や般若、あるいは真蛇に近いだろう。

憎しみがたぎる。穏やかな面の下には鬼女が微笑んでいた。

「——そろそろ、か」

メイプルウッド社のシステムが自動的にダウンするように仕掛けをしている。後は乗り込んでフリードリヒを殺すだけだ。銃火器は使用しない。魔術とそれらは相性が悪いからだ。

唯一、あの最悪の爆弾だけを——魔術は受け入れた。

だがそれもすでにその力を奪っている。そのおかげで、今のジェイドには身にあまるほどの魔力が在った。この日のために十二年間生きてきた——体に纏わりつく魔力の重みは、その歳月の重みに似ている。

「月よ、我が前途を——照らし給え」

日の光を夜に教える月は今日も蒼い。糸のような月はどこか、朔の持つ墨染桜にも似ていた。



「えらい頼りないな。大丈夫かいな？」

「——だから言っただろう。これは博打だ」

初対面のスピネルと『根』の間には陰悪なムードが流れている。というより、スピネルには『根』と仲良くやる気はないようだ。朔は溜息をついた。前途多難どころの話ではない。

「だいたいクールとメイプルウッドは敵やんか。信用していいんか？」

「俺のことは平気で裏切るだろうが、テレーゼのことは裏切らないだろう。その点は問題ない」

スピネルとの関係は、殺し屋同士の共闘に似ている。敵が同じであっても、背中を預けてはいけない。しかし挟み打ちなら可能だ。

対して『根』との関係は逆だ。背中を預けられるが、敵はあくまで自分で討つ必要がある。それを考慮して、布陣をしなければならぬだろう。

「しかしお前ら、よう似とるなあ」

「侮辱の言葉として受け取っておくよ、情報屋」

「『根』でええって言うとするやん」

「生憎、馴れ合うつもりはない。僕はテレーゼを守ればそれでいい」

スピネルはテレーゼしか守る気はない。だが青血隊はフリードリヒにも人を送り込むだろう。隊長である小面——つまりジェイドはどちらに向かうか。自分ならフリードリヒだ。明らかにそちらの方が難しい戦いになる。テレーゼを守る人間は基本的に守護者の二人だけなのだ。

「スピネルはもちろんテレーゼの護衛だな。『根』は旦那様の方——こちらは守れ、とは言わない。敵の力になるべく削いでくれ。ある程度倒したらテレーゼの護衛について欲しい」

「つーことは……元当主は見捨ててもええってことか？」

「そのくらいはやらせてやれ。俺も父親の仇が討ちたくないわけではないしな」

『根』はおどけながら頷いた。スピネルは無言かつ無表情だ。朔は溜息をつく。

「——スピネル」

「お前の指図など受けなくても、僕はテレーゼを守る」

「そりゃ安心だ。じゃあすぐに配置につくことにしよう」

——その時すでにジェイドが動いているとは、三人のうちの

誰にも想像が出来なかった。

□十□

——あと三分でシステムが落ちる。

ジェイドは静かにカウントダウンを始めた。横には曲見シヤクミの面を掛けた男が立つ。青血隊の三人いる参謀のうちの一人で、般若の後を引き継ぎジェイドの右腕となった。

般若が一番信用出来た。あるいはここに花雪がいたなら。ジェイドはそこまで考えて首を振った。死んだ人間のためにも必ず勝たなくては。

勝てるはずだ。殺し屋が二十人束になっても勝てるだけの精鋭がここにはいる。数は多いが質が高くないテレゼ側の布陣とは対照的だ。テレゼの方にはアレンがいる。アレンがこちら側の人間だということは誰にも掴まれないようにしてあるのだ。さすがの朔でも油断するだろう。スピネルの千里眼でも見抜けないようにしているのだから。

——あと一分。

突入の準備は整った。目指す敵は最上階にいる。転送魔術ですぐにそこに行くつもりだ。駆けつける間など与えない。

それに——ジェイドは笑う。自分がいないメイプルウッドの連中など、烏合の衆だ。籬たがの外れた桶など使い物にならない。ただ唯一警戒すべきは——

(スピネル……いや、朔がどう動くか——だな)

テレゼ側についた、とアレンから報告があったばかりだ。スピネルをこちらに配置することはしないだろう。スピネルが従うはずはない。ただ元殺し屋だけに、裏には通じている。戦闘屋を雇う可能性もあるだろう。そうなれば確実に一人は死人が出る。

——時間だ。

「全員、くれぐれも慎重に。では、行くぞ！」

下は混乱している。ジェイドは仮面の下で笑いながら、社長室のドアを開けた。

「――誰だ!？」

フリードリヒの守護者が銃を向ける。曲見がすぐさま炎の槍でそれを貫いた。フリードリヒの守護者はテレゼのそれとは比べものにならないほど弱い。何故なら――

ジェイドは泰然と椅子に座るフリードリヒを睨みつけた。

「――時が来た、というわけか」

ジェイドは無言で面を外す。どうせ隠す必要などない。

「十二年前はただの子供だったが……随分と成長したな」

「毎日見ていただろう？ さあ、十二年前に貴様が奪った物を返してもらおうか」

フリードリヒは立ち上がり、柔和な微笑を浮かべる。テレゼとは違い、その表情からは何も読めない。ジェイドは寒緋桜の鯉口を切りながら、フリードリヒを睨みつけた。

「それならここにある」

フリードリヒが小さな黒い箱を指し示した瞬間、銃弾の嵐が吹き荒れた。ジェイドと曲見はすぐにシールドを作り、それを防ぐ。システムがダウンしても、この迎撃システムはダウンしない。すぐに第二波が襲ってくる。だがこれはシナリオ通りの動きでしかない。

「【この身にたぎる飢えた血よ、全てを喰らい尽くし給え】！」

ジェイドの右手の甲を突き破って、無数の紅い珠が飛び出した。それらは刃となって、壁に仕込まれた武器を破壊していく。部屋の空気に鉄の匂いと甘い匂いが混じる。ジェイドが指を鳴らすと同時に、曲見とその他三人の男がフリードリヒを押さえ、増髪マスカミの面をつけた女が黒い箱を取った。これで目的の半分は果たされた。ジェイドは残忍な微笑を浮かべる。

寒緋桜を抜く。紫の光が走った。

「――素直に殺されてやるものか!」

フリードリヒの瞳が薄い青から紅に転じた。鍊成――ジェイドは

目を細める。

「――この私に魔術で勝負を挑むとは……愚かとか言いようがない」

「私は柏木を越えた」

フリードリヒは体を封じられながらも笑う。

「【我が『蠱毒』よ、敵を討て】！」

フリードリヒが叫ぶと、ゆらりと影が立ち上って人の形になった。それは目にも留まらぬ速さでジェイドを床に押し倒す。

「影を使った『蠱毒』だと……!？」

呪術は巫蠱術を下に敷いている。『蠱毒』はその中でも最凶の術――『狗』や『蟲』など全ての呪術を戦わせ、生き残ったものを使役するものだ。だが人の影をそれに使うとは。ジェイドは寒緋桜を『蠱毒』に突き刺した。しかし消滅させることは出来ない。

「それは私の影だ。私が死んでもその『蠱毒』は滅びぬ！」

「――それはどうかな」

ジェイドは『蠱毒』を曲見に任せ、叫ぶように唱える。

「【闇よ、全ての燭を掻き消し給え】！」

光が消える。

ジェイドは薔薇色の唇に笑みを浮かべたまま、寒緋桜で闇を薙ぎ払う。

叫びが上がる。同時にどよめきも上がった。

「光がなければ影は存在できない。そして私は眼をつぶっていても人を斬れる。首までは落とせないが」

「こ、んな……ところで……ッ！」

「――見苦しい。始末しろ」

ジェイドの一声で、三発の銃声が響いた。脳天を打ち抜かれたら、さすがに死ぬだろう。

ジェイドは引き揚げを命じた。すぐにテレーゼのところに向かわなければ。

「ちょい待て」

場違いなほど明るい声が響く。ジェイドは眼を見開いた。

「情報屋……」

「知つとるみたいやな。まあ俺は有名やし？」

「何の用だ？」

「言うわけないやんか。敵やで？」

朔の作戦が読めない。ジェイドは寒緋桜を握りしめた。情報屋に戦闘が出来るのだろうか。

「――闘うのか、一人で？」

「朔の命令に従うのが俺の意志やからな」

『根』の手には無数のコードが見える。ジェイドは眼を細めた。

「ほな、行くで」

まるで意志を持つかのようにコードが動いた。何が起きたか解らない隊員達はすぐに捕らえられてしまう。元々科学者ゆえに、戦闘は苦手なのだ。

「ぼやぼやするな！」

「――お前もな」

首にコードが巻きつく。ジェイドはそれを寒緋桜で叩き斬ろうとした。しかし、斬れない。

「それは朔でも斬れねえよ」

「――うアッ！」

まるで雷が落ちたように、一瞬だけ辺りが明るくなった。体が痺れる。

「ちよつとショットガンより刺激的やろ？」

周りを伺うと、数人が床に倒れている。ジェイドは痺れる右手を挙げ、叫んだ。

「【風よ、刃となりて空を裂け】！」

突風が『根』の眼を塞ぐ。その隙について、ジェイドは寒緋桜を振るった。しかし致命傷は負わせられない。

「電撃くらったくせに元気やな」

巻き付けられたコードの上を滑るように短剣が向かってくる。ジエイドは素早くその柄を掴んだ。

しかし他の場所で絶叫が上がる。

「――強いが、実戦には慣れていないようやな。それにこの暗闇や」
「くッ……！」

「――危ねえな……っと」

『根』は水の刃を辛うじて避ける。魔術にはまだ慣れていないようだ。ジエイドは畳み掛けるように『根』に魔術の砲撃を浴びせた。『根』が体勢を崩すと同時にコードが外れる。ジエイドはそのまま深追いはせずに全員に退却を命じた。

ジエイド達は一瞬で消え、『根』は携帯のライトで辺りを照らした。

「四人……まあ、少しは役に立てたかな」

□＋□

――誤算だった。

まさか情報屋に戦闘が出来るとは。それに、慣れていた。こちらは訓練はしているが実戦経験には乏しい。

――数で圧すしかない、か。

戦いにおいて勝利を収めるには戦力と戦術と戦略が必要だ。戦術は向こうの方が上である可能性もある。朔のように魔術も武術も使える人間は特に厄介だ。戦略はどちらもあってないようなもの。そして数はこちらが上――普通にいけば、勝てる。魔術は小規模な爆撃くらいなら防げるのだ。

――テレーゼの確保を最優先に。

本部で迎え撃てば必ず勝てる。朔達を適当にいなして、とりあえず日本に連れていこう。アレンがいれば可能はずだ。

——そろそろ覚悟を決めなければ。
ジェイドは左手の薬指に嵌めた指輪を外し、踏みつけて——壊した。



「勝手に人のベッドに座らないでよ！」

「わめくな。僕の鼓膜は繊細なんだ」

テレーゼには緊張感の欠片カケラもない。スピネルは表情が固いが、テレーゼは自分が狙われているというのに異常に元気だ。ジェイドが首謀者だと知らないからかもしれないが。

「だいたい何でスピネルに守られなくちゃいけないわけ？」

「——この脳天気が。相手は何人いるかわからないだ。人は多いに越したことはない」

「でもあの人形師とやったときは全然活躍出来なかったじゃない」
スピネルは溜息をついた。確かにテレーゼの言うことにも一理ある。人工物であるが故の弱点をジェイドが知らないはずはない。そもそもスピネルに力を与えたのはジェイドなのだ。

「口を塞がれても術が発動できるようになったから、問題はない。
うちの会社でもちゃんと魔術は研究しているんだよ。——副作用がないわけではないが」

「副作用？」

テレーゼはスピネルの眼を覗き込む。何だかんだ言って心配しているのかもしれない。

「頭痛がするんだ。でも薬を飲めば大丈夫だから」

「それならいいけど。朔の足だけは引っ張らないでよ？」

「……はいはい」

スピネルは溜息をつきながら横目で朔を睨みつける。だが今のスピネルに『氷の伯爵』の影はない。テレーゼがいるからだろう。朔が息を吐いた瞬間、携帯電話が鳴り響いた。

「――もしもし」

《青血隊の連中が多分そっちに向かった。四人しか殺れなかった――ゴメン》

「――わかった。こっちで待ってる」

『根』を差し向けたのは、青血隊の性格を見るためだ。『根』を生かしているということは、目標以外の殺しはなるべく避ける方向らしい。――少なくとも、ジェイドは。

朔は携帯を閉じ、スピネルを見た。スピネルは素早く頷く。テレーゼも何かを察知したのか、澄んだ青の眼を朔に向けた。

「朔……？」

「スピネルとアレンはテレーゼ様を連れて『飛んで』くれ。こっちに来る連中は俺が殺る」

スピネルとアレンは同時に眼を見開いた。

「一人で戦うつもりか？」

「ここにテレーゼがいないとわかればすぐにここから……少なくとも何人かはテレーゼ様の捜索に向かわせるだろう。俺はなるべく力を削いで、すぐに後を追う」

発信器は全て外した。スピネルには相手を攪乱させるような術も使える。時間は稼げるはずだ。

「――朔」

テレーゼが朔の頬に手を伸ばす。背伸びをしたテレーゼは、そのまま朔の唇に自分のそれを合わせた。

「テレーゼ様……」

「――死なないでね、朔」

強く透明な瞳――

眼が逸らせない。テレーゼの眼はあの日と……契約を結んだ日と同じだ。

どこか懐かしいような感じもする。それは花雪に似ているからだろうか。

「――必ず、生きてテレーゼ様をお守りします。だから心配しな

いで下さい」

「朔……」

朔は片膝を立てて跪^{ひざまづ}き、テレーゼの右手に自分の唇を落とした。

「テレーゼ様に、神の加護があらんことを」

テレーゼは主人の顔になり、ゆっくりと頷いた。そしてアレンとスピネルを伴い、朔に背を向ける。

「――神様なんていないんじゃないの、朔？」

「いませんよ、そんなもの。だけど仮にいるんなら……とて
て」

「私の神はいつだって貴方よ。じゃあ、健闘を祈るわ」

テレーゼがそう言うと同時に、スピネルが指を鳴らした。

第十二話『再会と涙』

□＋□

突入した青血隊を出迎えたのは朔一人だった。テレーゼがどこにいるかはすでにアレンから聞いてわかっている。スピネルは転送魔術を乱発して逃げているが、すぐに追いついてしまおうだろう。それでもここに部隊を残したのは――朔を殺さずに確保するためだ。――無理なら、殺すしかない。

あの研究所に『至宝』は欠かせない存在だ。いわば象徴なのだ。しかし七人の『至宝』のうち、四人は既に青血隊の中にいる。朔がいなくても大丈夫ではあるのだ。朔が特別視されるのは、千怜の息子であるというのが大きい。

――なるべく殺さずに捕らえたい。

ジェイドと朔は同時に愛刀を抜いた。朔が地面を蹴る。ジェイド以外のメンバーは朔を一斉に取り囲んだ。

朔は焰を纏った刃を振るう。威嚇だ。破壊力は高くない。一瞬で場は膠着状態になった。

「――朔」

ジェイドは一步前に進み出た。翡翠と真紅の瞳がぶつかる。

「君を殺したくはないんだ。だから――」

「投降してくれってか？ 嫌だね」

「――ならば」

ジェイドは先陣をきって朔を斬りつけた。しかし踏み込みが浅くて避けられてしまう。朔は素早く墨染桜を振るい、ジェイドに斬りかかる。ジェイドは寒緋桜の鰐元でそれを受けた。余程強い力で打ち込まれたらしく、手に痺れが走る。

朔の背中に向かって、曲見が短剣を投げる。朔は素早く振り向いてそれを墨染桜で受け止めた。

埒があかない、と思ったのだろう。朔は自分のいたところに手榴弾を投げ、高く跳躍した。眼を灼くような光と煙が視界を遮る。ジェイドが再び視界を取り戻したときには、五人が床に倒れていた。全で一太刀で仕留めている。躊躇いは、ない。

「【焰よ、檻となりて敵を捕らえよ】！」

曲見が叫び、朔を焰で覆う。朔はすぐさま、露を帯びた刃で火を斬り伏せた。しかし、四方から放たれる炎の矢に肩を射抜かれてしまう。

「くッ……」

朔は呻いたが、肩を押さえることもせずに墨染桜を薙ぎ払う。風が吹き荒れる。ジェイドはその瞬間、自分の懷まで朔が侵入するのを許した。防御壁でかろうじて刃を防ぐ。しかし朔は愛刀に紅い光を纏わせ、それすらも破壊する。ジェイドは深く踏み込んで、寒緋桜を振るった。朔は逃げ切れず、切っ先が腹を傷つける。

血が流れた。浅いから、致命傷ではない。しかしジェイドの手は震えを隠せなくなった。

迷いを見破られる。ジェイドは袈裟掛けに斬りつけられた。しかし浅い。

——躊躇、している。

「……さ、く」

「——お前を殺したくはない。頼むから……」

「ここまで人を巻き込んでおいて、引くことは出来ない。たとえば君が私の大切な人であっても……！」

動きを止めた朔を曲見が放った炎蛇が襲う。ジェイドは眼を見開いた。思わず手を伸ばす——

「——避ける、朔！」

ジェイドの喉から、え、と音が漏れた。その瞬間、柱や青血隊の連中が切断されていく。集中出来なくなったのか、炎蛇も形を維持できなくなっていた。

「——遅いぞ、『根』」

「充電してたんや。レーザーカッター使うんは久しぶりやからな」
魔術の集中砲火が『根』に浴びせられる。朔はそれを無効化するための魔術を発動させた。自然、ジェイドに背を向ける形になる。流石に斬られた傷が痛み、動くのは難しい。

「——でも、今なら。」

ジェイドは懷から麻醉銃を取り出し、狙いを定めた。同時に、叫ぶ。

「【我らを『約束の地』へ導け】！」

○十○

スピネルが三度目に『飛んだ』とき、とうとう青血隊に追いつかれた。いや、彼らは待ち伏せしていたのだ。スピネルが眼を細める。「アレン」クレイア……お前、青血隊と通じていたのか」

スピネルの瞳が紅くなる。アレンはそれを見て、にやりと笑った。「——う、そ……アレンが……」

「気付くべきだった。ジェイドなら、僕の千里眼に対する策を講じないはずがない」

あつという間に囲まれる。テレーゼは不安げにスピネルを見た。

「——そこから動くな、テレーゼ」

スピネルはテレーゼの周囲を結界で覆う。しかも三重に張られている。テレーゼはスピネルを心配そうに見た。

「『言葉』なしでも術を発動するには、強いイメージを頭に描く必要がある。今まで僕ら人工物が言葉を必要としたのは、イメージを描けなかったからだ」

スピネルが右腕を伸ばすと、手首の辺りから悪魔の翼のようなものが現れた。

「ちよつと脳をいじってもらったんだが、それでも駄目だった。だから考えを変えたんだ」

スピネルの右手から黒い珠が放出された。それは敵を追撃し始め

る。

「――頭に緻密なデータを描けばいいってね」

様々な色の絶叫が響き渡る。アレンを含め数名が地面に倒れた。しかし青血隊側も黙ってはいない。全方向からの魔術攻撃を防ぎきれずに地面に膝をついた。

「――スピネル！」

「黙ってろ、テレーゼ。気が散る」

「だって……」

「お前は――月峰の心配でもしている」

スピネルは吐き捨てるように言い、再び黒い珠を発射した。同時に指を鳴らす。すると、珠に当たり倒れた人間がむっくりと起き上がった。

「仲間に裏切られる気持ちを味わうといい」

立ち上がった人間達は、かつての仲間を攻撃する。テレーゼは驚いてそれを見た。そうしている間にも、スピネルは手駒を増やしていく。五人の仮面の男達がテレーゼの周りを囲んだ。

「スピネル……」

『水の伯爵』そのものの冷たい表情。しかし時折テレーゼを見る眼は優しい。テレーゼは祈るようにスピネルの背中を見つめた。

しかし涼やかな声が、テレーゼとスピネルの動きを止めた。

「――思ったよりやるな、スピネル」

「ジェイド……」

ジェイドの着物は無惨に切れてしまっている。胸の浅い傷もあらわになっていた。テレーゼは自分を囲んでいたスピネルの手駒を押し退けて、前におどり出る。

「――朔は!？」

「自分より従者の心配か。実に貴女らしい」

「質問に答えて!」

叫ぶテレーゼの前にスピネルが立つ。いくら結界があるといえども、ジェイドの前では無駄なのだ。

「——それは自分の眼で確かめるといい」

ジェイドが指を鳴らした瞬間、轟音と閃光が全てを途切れさせた。

◇＋◇

体の痛みで、朔は眼を覚ました。

両手は頭上で纏め上げられ、天井から釣られている。足はぎりぎり地面につかないくらいだ。一番体力を奪う拘束の仕方だが、傷にはしっかり手当がされている。朔は溜息をついた。

躊躇いを見せてしまった。それが今の結果を招いたのだ。本当は動けなくなるくらいに傷つけるはずだったのに。朔は唇を噛んだ。

（どうしてあんなときに思いだしちゃうんだよ……）

ジェイドが着物を着ていたせいだろうか。失われた記憶がまた戻ってしまった。

自分とジェイド、いや柏木翠は同じだ——だから、斬るのを躊躇った。

翠は『至宝』と呼ばれた七人の中で、唯一人工的に力を付与された人間だ。いや、天然である父親から不完全に力を受け継いでいた。普通の天然であれば、魔力は死なない限り尽きない。しかし翠の魔力は有限だった。だからこそ、父親である柏木は他人から魔力を『奪う』力を与えた。それ故に純粹に暴力的な強さでいえば、翠は『至宝』の中でも最強だ。

だからこそ研究所の人達は、陰で翠を『怪物』と呼び、迫害した。自分と柏木と花雪、そして千怜を除いては——

（だから俺を殺したくなかったのか……）

柏木も花雪も千怜も今は亡い。縋れるとしたら朔だけだったのだろう。

実行犯である柏木の娘であり、他者から力を奪う『怪物』——その苦しさは、わからなくもない。

自分も同じなのだ。スラムで迫害されていたときの苦しみは、何

年経っても消えない。だが、それなら何故自分を迫害した人間を率いてテレーゼを殺そうとしているのだろう。もし仮に成功して日本が元に戻ったとしても、そこに翠の居場所はない。

そこまで考えて、朔は首を振った。青血隊のリーダーである翠には、英雄という椅子が用意されるのかもしれない。少なくとも迫害されることはもうない。だが奪う力がなくなるわけではない。魔術を使うものにとって、それは恐ろしい力だろう。

——敵がいなくなれば、また迫害は始まる。

要は贅なのだ。理由さえこじつけられれば誰でもいい。だから仮に翠がスケープゴートを自ら設定し、うまく人を乗せられたら翠は安住の地を得られる。だが翠にそれが出来るとは思えない。翠は『怪物』という名とは裏腹に、とても優しい人だった。

今でも多分、根底にあるものは変わっていない。人はそう簡単に変わりはしないのだ。残虐な横顔は、仮面に過ぎない——

「翠……」

気付いて欲しい。テレーゼの死の先には何も待ってはいないと。朔は頭を垂れて祈った。

テレーゼはどうしているだろうか。もしスピネルが闘っているとしたら、苦しい戦いを強いられているだろう。

（テレーゼがここにいれば……）

朔は一瞬そう考え、自分でそれに驚いた。テレーゼにいてほしいと思ったのは何故だろう。皆目見当がつかない。朔はぼんやりとコンクリートの壁に眼をやった。

不意に、壁に無造作に立て掛けられていた墨染桜が不自然に動き始めた。朔は眼を細めてそれを見る。カタカタと音を立てていた愛刀は、やがてひとりでに鞘から抜け出た。

刀身が澄んだ紅に輝く。動けない朔の足元に、墨染桜が滑るよう移動した。

『——朔』

聞こえて来たのは自分と同じ声。だけでもっと深く優しい。朔は驚きに眼を見開く。同時に手首を釣っている鎖が切れた。朔はいきなりのことに対応できず、床に叩きつけられる。

「……っ」

朔は痛む手首をさすりながら、紅く光る墨染桜を手にとった。

『傷は痛むか？』

「いや、大丈夫」

『ならよかった。翠も治療はしていたが、焦っていたからね』

そんなことより、と朔は墨染桜を見た。刀が喋るなんて。しかも自分と同じ声で。魔術が在るのだから、それくらいはおかしくないと思うが、やはり思わず頬をつねってしまう。

墨染桜が纏う光が像を結ぶ。それは、自分とよく似た人間だった。しかし、わかる。これは自分ではない。

「――父、さん……？」

『そうだ。正確に言うとう月峰千怜の残留思念あるいは魂の断片、とあったところか』

朔は声が出せなくなった。固まるその肩に、千怜が手を置く。

『大きくなったな、朔――』

「――悪いが今はのんびりしている場合じゃないんだ、父さん」

『テレーゼ嬢のことなら心配いらないよ。翠が術を行うのは明日だろうからね』

「――何を、根拠に」

普通なら一刻も早く決行するはずだ。しかし千怜は悲しそうに微笑して、朔の頬を包み込む。

『明日は新月だから。翠は新月の日が一番調子がいいらしい』

「でも……」

『――テレーゼ嬢がいないと不安かい？』

確かに不安だ。でもそれはテレーゼの安否を気にしているだけだ。しかし千怜の言葉は胸に引っ掛かる。

「……とりあえず、早く助けないと」

『朔は本当にせっかちだな。その前に俺の話を聞いてくれ』

「いいけど、手短に済ませてくれ」

千怜は苦笑するように手を口の前に置いた。どこことなくそれは翠の仕種に似ている。

『——結論から言うのと、だ。テレーゼ嬢を殺さずに翠達の目的を達成する方法はないことはない』

ないことはない、とは微妙な言い方だ。とんでもない裏があるのかもしれない。

「その方法は？」

『それには大きな代償が要る。お前もそれを知っていたはずだ』

「そんな方法、俺は——」

『お前は確かに知っていたよ。だけど忘れてしまったんだ。だが忘れたものならば、思い出せばいい——』

千怜は朔の額に指を置く。その瞬間、朔の頭は真紅に包まれた。



「——千怜さん！」

花雪は地面に倒れた千怜に駆け寄った。千怜は力なく花雪に手を伸ばす。

「どうして……こんなッ……！」

「泣くな、花雪……綺麗な顔が、台無しだよ」

「でも……！」

朔は立ちすくんでいた。目の前の事実を受け入れられない。腐り落ちた父親の右手、そしてあまりに弱々しい笑顔——感情も表情も摩滅してしまったように白くなる。

「——こっちにおいで、朔……」

「いやだ！」

行っってはいけない気がした。行けば、そのまま手から擦り抜けてしまいそうだ。朔は首を振り、てこでも動かないと目に力を込める。

「案ずることはないよ。さあ、こっちにおいで」

千怜は優しい言葉とは裏腹に、魔術を使って朔の足を動かす。いつもはこんなことはしない。焦っているのは明らかだった。

「――聞いてくれ……もうすぐ『カマエル』が爆発する。あれは試作だから、スイッチが入ってから爆発まで時間がかかる。だからその間に……なるべく遠くに飛んでくれ。俺は『カマエル』の被害を最小限に抑えるため、今から出来る限りのものを『封印』する。だから……」

「そんな状態で『封印』なんて……解除出来るのはあなたしかないのに！」

叫ぶように花雪が言う。しかし千怜は静かに微笑した。

「――朔も、出来る。年齢が追いついていないだけだ。朔が封印を解除出来る日には……『カマエル』の負の遺産もなくなっているだろう」

千怜は痛みを堪えるように笑い、朔の額に指を置いた。

「言葉は覚えているね？」

朔は頷く。その言葉はもしものときのために、と繰り返して教えられていた。封印する言葉も、解除の言葉も。

「――ならば、好きなところに飛びなさい。そして朔が十分に大人になったら……またここに帰って来るといい」

「でも、お父さん……！」

「案ずることはない。お前がここに帰って来るときに、また会える……」



「『封印』した、ということは……『暗黒の水曜日』とテレゼ様は無関係なのか？」

『フリードリヒはテレゼ嬢の心臓にカマエルの起爆装置の一部を組み込ませたんだ。実験も兼ねて、俺達を吹っ飛ばそうとした。も

ちろん起爆から爆発するまで時間がかかるのも知っていたんだ。その間に逃げたんだよ。関係あるといえば関係ある。直接の原因ではないけれど』

「だったらすぐに『封印』を解除すれば……」

千怜は紅い瞳でじっと朔を見る。朔は息を飲んだ。

『解除の代償はあまりに重い。全てを思い出した今ならわかるだろう？ それに翠達がとうとうとしている方法でも解除出来るんだ』

「わかってる。だけど……」

朔は千怜に眼を向けた。柔らかい笑みが、言葉を促す。

「それでも俺は——」

天秤にかけるまでもない。だけど決して自分がどうなってもいいという捨て鉢な気持ちになっているわけでもない。朔の胸には今、複数の『望み』がひしめき合っていた。

「忘れたら、また覚えればいい。だから俺は全ての記憶を捧げよう」言葉にすると、不安が消えた。真紅の瞳に光が灯る。

「記憶を失うのは確かに怖い。だけどテレゼを失うのはもっと怖いんだ。一人で生きて来たはずなのに——傍にいたいんだ」

どうしてかはわからない。でもテレゼの傍が自分の生きる場所だと、妙な確信を持って言える。そんな朔を見て、千怜はくすりと笑みを浮かべた。

『——そうか。それなら行くといい。次会う時は俺のこと等忘れているだろうが……また、覚えてくれるか？』

「約束するよ、父さん——」

朔が言うと、墨染桜はひとりでに鞆に戻った。朔はそれを腰に差す。僅かにそのあたりが暖かい。

「——待ってろ。今すぐ行くから」

朔は暗い部屋を出て、力強く地面を蹴った。

青血隊が紅い眼を光らせる中で、テレーゼは食事を摂っていた。ジェイドは呆れたように溜息をつく。

「よく敵の作った食事が食べられるな」

「毒殺する気はないみたいだし……貴方の料理なんかこれまでも何度か食べているわ。それに……スピネルからある程度のことは聞いているわ。貴方がお父様を殺したことも」

「そのお父様が朔の父親を殺させたことも？」

ジェイドの言葉にテレーゼは体を強張らせた。知らないわけではない。眼を逸らしていたのに、わざわざ眼を向けさせられたのだ。テレーゼの声が震える。

「——知ってる、わ。お母様が私を救うために青血石を奪い、『カマエル』を起爆させてしまったことも」

「スピネルは知っている全てを教えたんだな。ならば話は早い」

ジェイドは紅く伸びた爪をテレーゼの右手に突き刺した。テレーゼは眼を見開く。

「痛覚は麻痺させる。君は注射一つで大泣きするからな」

「……ッ」

「決行は明日だ。その間に遺言でも考えておくといい」

ジェイドが爪を引っ込めると、テレーゼは荒く息を吐いた。心臓が妙な音を立てる。刺されたところに、黒い逆五芒星の陣が浮かび上がった。

「これで君は、もう私からも死からも逃れられない」

ジェイドは右の頬だけを上げて残忍に笑った。心臓が鈍く鼓動を刻む。

「ジェイド……」

「——何だ？」

「朔は、どうしているの？」

ジェイドはくつくつと笑った。引き攣った、どこか自嘲的な笑いだ。

「最期に、会いたいですか？」

「ジェイド……」

「会わせてあげますよ。ただし、二人とも動けないようにしますが」
ジェイドは怪しく笑い、部屋を出て行く。朔を迎えに行くのだろう。ジェイドが扉を閉めた途端、残る青血隊のメンバーがひそひそと話を始めた。手にはそれぞれ剣呑な武器を持っている。

（青龍刀にクレイモア、フランベルジェまであるわね……でも、何故こんな古い武器を……？）

ジェイドも日本刀を差していた。個性派集団と言われる殺し屋達ですら、今ではほとんどが銃か毒を使う。稀にワイヤー使いなんていうのもいるが、朔のように刃物を使うのは珍しい。何故彼等は銃を持たないのだろう。テレーゼの中に、黒く小さな疑惑が浮かんた。（魔術と相性が悪いのかしら……でもスピネルが携帯している武器に刃物はないはず……）

スピネルは守護者をつけていないから、自分の身を守るためにある程度の武器を携帯していた。それと魔術を組み合わせたのを見たことはないが、おそらくはそれも可能だから持ち歩いているのだろう。そうでない可能性がないわけではないが。

テレーゼは先のことから眼を逸らすように考え続けた。自分が死ぬなんてことはまだ受け入れられない。しかしぼんやりと朔のことを思った。

（会えなくなるのね……）

見ることも、触ることも、話すことも出来なくなる。死後のことなどわからない。元々テレーゼは信心深い方ではないのだ。死はわからない。ただ、朔と二度と会えなくなるのは紛れもない事実だ。暖かいものが赤いワンピースを濡らしていく。テレーゼは嗚呼、と溜息をついた。敵の前でこんな無様に泣いてしまうなんて。次々と溢れる涙を、サテンの生地が弾いていく。テレーゼは涙を拭おうとして、逆にしゃくり上げた。

死ぬときは潔く。そう決めていた。子供らしい無邪気さで、命乞いをする人間を醜いと思っていた。でも朔に会えなくなるというそ

の一点が、心を変容させる。

「……死にたく、ない……」

自分の命と引き換えに沢山の人間が死んだのだとしても、自分の生がどれだけ罪深くて、ただ朔の傍にいたい、とテレーゼは泣いた。



「容易に抜け出せないようにしたはずだが……」

「事情があつてな。俺の力ではない。――翠、話を聞いてくれないか？」

「私達の仲間となる、という言葉以外は聞きたくないな」

しかししっかりと聞く体勢ではある。朔は翠の腕を掴んでゆつくりと話し始めた。

「テレーゼ様を殺す以外にも手はあるんだ。俺ならそれが出来る。」

――思い出したんだ、父さんに教えてもらったことを」

翠は眼を見開いた。翡翠の瞳に動揺が広がる。朔はその眼をじっと見ながら続けた。

「まだ引き返せる。旦那様は死んだけど……それは俺が望んだことでもあるし。テレーゼが何も悪くないことくらい、お前ならわかるだろう？」

「テレーゼが悪くないことなど始めからわかっている……でも、『怪物』は『天使』を喰い殺すものだろう？」

「翠……ッ」

「他の方法があるとしても……既に遅い。それに出来るのが朔だけならば意味はない」

凍えそうになるくらい、荒れた声だった。朔は思わず翠の頬に手を伸ばす。

「――青血隊は、本当にお前の居場所なのか？」

「――ッ、そうでなければ……十二年もこんなことに時間を費やし

たりしない……！」

「……やっぱり、復讐はお前自身の本当の意志ではないんだな？」

本当に望んでいたなら、「こんなこと」などとは言わない。しかし翠は朔から眼を逸らし、首を振った。

「君がどれだけ小手先でやりくりしたって、積み重ねた思いは変えられない！ 【縛せよ】！」

朔の手首が黒いワイヤーによって拘束される。僅かに身じろぎすると、浅い傷が走った。

「翠……」

「その名前で呼ぶな！ 私はもう朔の知っている柏木翠ではない！」

「いや、お前は変わってなどいない。変わってしまったなら、何故俺を殺さなかった？」

翠は唇を噛みながらも、無言で朔を歩かせた。

「たとえば他に方法があるとしても、私が朔の言うように柏木翠である自分を捨ててきていないとしても……もう元には戻れない。君を傷つけたことには変わらない」

翠は朔の腹部に巻かれた包帯に手を伸ばしかけて、やめた。かわりに、自分の傷に触れる。

「——もう、駄目なんだ。私はこの十二年で沢山のものを捨てて、傷つけてきた。蒔いた種は刈り取らねばならない。君が黙ってさえいれば、全てが完結する」

朔は眼をみはった。その可能性について、考えなかったわけではない。だけどそのために沢山のものを捨てるなんて、普通は出来ない。

「——死ぬ、つもりか」

「私を罰してくれる神はいないんだから、そうするしかないだろう？」

かつての自分と同じだ。人を殺した報いを受けたがっていた自分と——朔は翠に手を伸ばそうとして、手首を拘束するワイヤーと格闘した。

「私は最低な人間なんだ。人間に力を付与すれば不幸になるだけだとわかっていながら、スピネルに力を与え……揚句の果てに彼を酷く傷つけた。そして憎む相手の右腕となり、沢山の人間を社会的あるいは精神的に殺した。テレーゼを殺せば君を目茶苦茶に傷つけることになる。それで私の罪は完成するんだ。私は『怪物』として死ぬことが出来る」

わかるからこそ、言い返せない。自分もテレーゼに出会う前は罰を望んでいた。自分の罪は贖いきれない。だから、殺してくれと――朔は歯噛みして、口をつぐんだ。

「どうしてそんな目で見る？ 私は君を傷つけようとしてるのに」

「お前が俺を傷つけたいと思ってないからだ。お願いだ――俺に従ってくれ」

翠は振り向き、朔の唇に自分のそれを重ねた。声が出せなくなる。

「――何も、言うな」

翠は悲しく笑い、朔の背中を押した。

重厚なドアを開けると、目に涙を溜めたテレーゼがこちらを見た。黒革の手錠が白い肌に浮かび上がる。

「朔……」

翠は指を鳴らして、口を塞いでいた術を解く。テレーゼは声を震わせながら、それでも強く言った。

「――ごめんなさい、朔……約束は守れそうにないわ」

「テレーゼ様……どうして……」

「――それで全てが終わるなら、いいと思うの」

朔は唇を強く噛んだ。鉄の味が広がる。

「朔は、幸せになって。それだけが言いたかったの」

「テレーゼ様……」

「私は約束を破るわ。契約は解消するから、だから――」

勝手に話が進んでしまっている。朔が口を開こうとすると、テレーゼはそれを遮った。

「青血石で蘇生した人間は、死の刻印を刻んでからじゃないと死ねない」

テレーゼは手錠に繋がれた右手の甲を朔に見せる。そこには逆五芒星が中心に描かれた陣があった。

「今の私は誰にだって簡単に殺すことが出来る。半分死んでいるようなものよ」

「――テレーゼ」

翠が低い声でテレーゼを呼ぶ。テレーゼは怪訝そうな眼を翠に向けた。

「――刻印を刻めば誰でも殺せると、誰から聞いた？」

「え……」

テレーゼが不安げに視線を動かした瞬間、曲見の持っていた青龍刀が翠の腹部を貫いた。背中から刃が生えたように見える。

「なん……で……？」

はじめに声を上げたのはテレーゼだ。曲見はくつくつと笑う。

「死の刻印を刻めるのは翠と月峰千怜だけだ。だが、その後は誰でも出来る。『至宝』――魔力の強い人間でなくてもな。もうコイツは――用済みなんだ」

第十三話『燔祭』



「死の刻印を刻めるのは翠と月峰千怜だけだ。だが、その後は誰でも出来る。『至宝』——魔力の強い人間でなくてもな。もうコイツは——用済みなんだ」

テレーゼは叫ぶように曲見に言い返す。

「そんな……今まで一緒にやってきた仲間なんじゃないの!？」

「……お嬢、様……」

「ジェイドがいたから成功したっていうのに、どうして……!」

曲見は歪んだ笑みを浮かべ、テレーゼを見る。

「翠は毒だ。毒をもって毒を制すことが出来るうちはいいが、外部に毒がなくなったら排除しなければならぬ」

翠の力が切れたのか、朔を縛っていたワイヤーが消える。朔は素早く墨染桜を抜き、テレーゼの手錠を切った。そしてそのまま、翠に振り下ろされた大剣を薙ぎ払う。

「——さ、く……いいんだ、もう……」

「俺はよくない! 俺はテレーゼもお前も守れる方法を知っている。そしてそれが出来る。それなのにお前が死んだら何の意味もない!」
翠は力無く笑う。顔からどんどん色が無くなっていく。テレーゼが翠に駆け寄った。朔はそちらにちら、と眼をやってから曲見達を見る。

「——なあ、翠。これが……お前の求めた結末か?」

「これでいい……私が後の世界に、不要なことは……わかっていたから……ッ」

「そうか。じゃあ俺はお前の敵として……お前の望む結末など、この手で破壊してしまおう。【我が身に宿る紅き華よ、その香を地に満たせ】!」

翠の傷が紅く輝く。自分の魔力を相手に分けることで、相手を治療する魔術だ。朔はそのまま墨染桜を正眼に構える。

朔と曲見達が睨み合っていると、天井に亀裂が入った。ぽっかり開いた穴からスピネルと『根』が降りてくる。

「待たせたな、月峰」

「『根』……」

「やることあるんやろ？　話は後や。その間だけは守ってやるさかい」

朔は頷いた。今こそあの術をやらなければ。テレーゼを守り、翠の望みをくじくために。

『根』とスピネルは、朔達を庇うように立った。『根』がレーザーカッター用のコードを自分の手首に巻き付けながら言う。

「邪魔したら輪切りになるで？」

曲見達は『根』とスピネルに向かい攻撃を仕掛ける。二人はそれをいなしながら、彼等の得物を破壊していく。朔はそれを一瞥してから、テレーゼの頬に手を伸ばす。

「テレーゼ様は、翠の傍にいて下さい。俺にはやらなければならないことがあるんです」

「朔……」

「忘れないうちに言うておく。俺の『望み』は、貴女の傍で生きること——だから契約を破棄するなんて、もう言わないでくれ」

朔はそう言って、部屋を出た。術を行うところは誰にも見られたくない。朔は外に向かって走った。

○十○

「エモノはひとつのこらず壊させてもろうたで。どうする？」
攻撃するのかしないのか。

『根』の言葉に、曲見達は答えない。しかし、一斉に魔術の砲火を浴びせた。

「――交渉、決裂やな」

『根』は飛び上がってコードを操作した。見えない刃が魔術とぶつかり合う。スピネルも同時に手首に生やした翼から、黒い弾丸を発射した。

テレーゼはジェイドの横に座り込んでそれを眺めていたが、やがて気を取り直したようにジェイドの傷口に目をやった。テレーゼは咄嗟に自分のワンピースを破いてジェイドの腹に巻き付ける。ジェイドは驚いたようにテレーゼを見た。

「どうして……私は、貴女を殺そうとしたのに……」

「素直にありがとうって言ったら？」

ジェイドは何かを堪えるように笑った。テレーゼはその顔を覗き込む。

「礼なんて言えない……私はもう、死んだ方がいい……それを、彼らは望んでいるのだから……」

「貴方は自分を殺そうとした人間に従うの？ 貴方を守ろうとした朔じゃなくて……」

ジェイドは目を逸らした。迷いがよぎる。しかし、やがてゆるゆると首を振った。

「……朔の優しさは、私には重過ぎる……私は彼に優しくしてもらうような人間じゃ……」

「ねえ、ジェイド……朔だって、人殺しなのよ？」

ジェイドは眼を見開いた。テレーゼはそのまま続ける。

「貴方が殺したり傷つけたりした人間の数よりも、朔が殺した人間の数の方が多いわ。貴方が罪深いなら、朔もまた罪深い。だけど朔は、それでも生きる道を選んだの。朔に出来るなら貴方にだって、その道を選ぶことが出来るはずよ……？」

「テレーゼ様……」

「――それに貴方は、居場所が欲しかったから必死になっていたんでしょ？ 心が読めない私にだって、そのくらいはわかるわ」

テレーゼはジェイドの手をきつく握り締めた。

「貴方の居場所なら、ここにあるわ」

「お嬢様……」

「私はまた、皆で暮らしたいわ。今度は嘘も裏切りもなく……」

ジェイドはゆっくりとテレーゼが伸ばした手を取った。テレーゼの顔が綻ぶ。

「貴女はやはり——花雪に、似ている」

ジェイドはそう呟きながら、ゆっくりと体を起こした。傷が痛むのか、端正な顔が僅かに歪む。

「……っ、」

「ジェイド……」

ジェイドが戦いを続ける曲見達に何か言おうとした瞬間——

「——やめなさい」

凜、と声が響いた。

全ての時間が止まる。そこにいたのは、腰までの豊かな黒髪を持った女だった。瑠璃紺地に桜が咲く着物を着て、手には長い棒を持っている。

「花雪……」

「一は全であり、全は一である。私達は同じものから生まれたもの——それを知っているあなたたちが、何故人を迫害し、殺そうとするのです？」

——花雪。

テレーゼは眼を見開いて、その紅い光を纏った女を見た。それは朔が以前口にした名前だ。彼女がそこにいるだけで、空気が変わる。冬の朝のような清冽な風が吹いた。

「——前にも言ったはずよ。私の朋友^{とも}を傷つける人は私が許さない
と」

「花雪……どうして……」

「貴女は私の掛け替えのない人の一人だから」

花雪はそう言って、棒を一回転させた。ただの木だったそれが、
紅い石に変わる。

「戦いを続けますか？」

花雪は静かに問う。曲見達はすぐに白旗を揚げた。花雪はそれほど強そうには見えないのに。テレーゼは首を傾げた。

「――花雪の力は『戦意を失わせる』……ある意味、最も強い」

「弱点は、発動に時間がかかるところね。ところで傷は大丈夫なの？」

ジェイドは頷いた。花雪は静かにジェイドに近付き、その頬に手を伸ばす。

「――力を貸してほしいの、翠」

「力を……？」

「私はこれから行かなくちゃならないの。『始まりの地』に……」
ジェイドは微かに驚きを見せた。

「どうして……あそこは危険だ」

「わかっているわ。だけど私は朔の願いも、翠が本当に願っていることも叶えてあげたい。それに私はもう、死んでいるから問題はな
いはずよ」

「朔の願い……？ それはどういうことだ？」

花雪はジェイドの琥珀色の髪を指に巻き付けた。そして頬を僅かに上げて笑う。

「皆を救うには、朔の記憶を犠牲にしなければならないの。だけど
十一年前と違って、朔は記憶を失いたくないと思っているわ。だから私は……」

「――わかった。私の魔力でいいのなら、いくらでも差し出そう」
ジェイドは自分の親指を強く噛んだ。一瞬だけ遅れて血が滲む。
花雪も同じように、白い指に紅い珠を乗せた。二人はそれをゆつくりと合わせる。

「――ありがとう、翠。それじゃあ私は行くわね」
立ち去ろうとした花雪は、しかし急に立ち止まる。

「——そうそう、忘れていたわ」

花雪はジェイドの左手を取り、その薬指に指輪を嵌める。翡翠に似せたプラスチックが輝く、銀色の玩具の指輪だ。

「——っ、これ……」

「大事な物でしょう？ もう、手放しては駄目よ」

花雪はそう言い残して、溶けるように消えた。

◇＋◇

朔は蒼い海を臨んでいた。北の海は南の海に比べて透明度が低い。プラントンを沢山含んでいるからだ。海水を掬う朔に、千怜が問う。

『いいのか、本当に……』

「テレーゼも翠も守るにはこれしかない。忘れるのは悲しいけど……だけど、それ以上に二人は大切だ」

朔は何かを振り切るように立ち上がり、墨染桜をの刃先で自分の周りに円を描いた。円が閉じたとき、紅く透明な壁が空まで突き抜ける。

「【領域設定完了】」

円の外に、紅い靄が立ち上る。朔はそれを確認してから言葉を続けた。

「【我は初めてであり終わりである。途切れのない円環であり、尾をくわえた蛇であり、朔であり晦である】」

少しずつ頭が白くなっていく。手に持っている墨染桜の刀身が紅く輝いた。

「【我が安らかなる風よ、生きとし生ける全てのものをこの円環に還らせ給え】」

去来する。

花雪と過ごした日々。胸を裂くような悲しい記憶。

まるで走馬灯のように記憶が巡る。

「【昼を照らす陽光よ、夜に燈る星月よ。始まりの名の下に、一つの光と為り給え】」

血に濡れた記憶が在る。だけどその中で、『根』やフェイという友人と出会った。『根』はどんな無茶な依頼のときもサポートをしてくれたし、共同戦線を張ったりもした。今だって自分のために戦ってくれる。

フェイは誰も触れようとしなかった部分に土足で入り込み、目茶苦茶に踏み荒らした。だけどそれが、何故か自分を安心させた。

墨染桜が透明な紅に変わる。まるで青血石で出来た刃のようだ。

「【地を隔て、地を結ぶ大洋よ。海を隔て、海を結ぶ大地よ。我が声に応え、一であり全であるこの第一の地へと立ち戻れ】」

思い出す。

テレーゼと出会った日を。

そして、結んだ契約があった。自分の『望み』を見つけ、それを叶える代わりにテレーゼを守ると。この契約がずっと続けばいい。忘れてしまってもテレーゼを守りたい。

「【天よ、地よ。今一つに溶け合い、総てを内包する渦と為れ】」
テレーゼと過ごした二年間は、気付かなかったけれど煌めいていた。優しくも気高くも、全てを真っ直ぐに見つめる青の瞳の透明さが愛しい。そして偽りの中に真実を燈した、翠の翡翠のような瞳が懐かしい。

頬を、涙のようなものが伝う。しかしそれは華のような香りを放っている。

——もうすぐ、終わってしまう。

この『言葉』が永遠に続けばいいのに。そう思ってしまう。

「【光であり闇であり、空であり大地であり、陸であり海であり、陽であり月であり星であり、数多の生であり、汝であり我である混沌よ。鍵を開け、再び世界を成し給え】」

——嗚呼。

朔は眼を閉じる。もうすぐ、全てを忘れてしまうのだ。

——ならばせめて最後まで、全ての記憶を見ていよう。

朔は始めに描いた円の中心に、墨染桜を突き立てた。

「【我が螺旋よ、鎖を裁ち切る刃と為れ】！」

——紅が眼を灼く中、テレーゼの声が聞こえた気がした。

全てが紅になる——



眼を開けると、そこには紅い空が広がっていた。夕焼けよりも深い、血のような空だ。

「ここは……？」

「ここは『始まりの地』。またの名を『終わりの地』とも言いわ」

まるで鈴のように響く声。朔は驚き、勢いよく振り向いた。

白磁のような肌、豊かな鴉の濡れ羽色の髪——鞍馬花雪が、そこにはいた。

「全てのものはここで始まり、ここで終わる。わかりやすいように言えば、ここは天国ね」

「俺は、死んだのか……？」

「いいえ。あなたは月峰朔の記憶だもの。体はしっかり生きているわ」

そうか、記憶は死んだのだ。朔はぼんやりと思った。現世の自分は何も覚えていないけれど、記憶は覚えている——何だか、複雑な気分だ。朔は視線を落とした。

「この地は始まりの物質であり、全ての源である青血石が支配しているの。今からあなたはその中に融合され、他の何かに再合成されて再び現世に戻ることになる」

「そうしたら、記憶は完全に失われるのか……？」

「そうね。何も残らないわ」

朔は眼を伏せた。生暖かい液体が頬を濡らすのが鬱陶しい。もう決めたはずなのに。記憶を捨てても、テレーゼや翠を守ると。

「――『イサクの燔祭』って知ってる？」

「旧約聖書だろ？ 信仰を試されるアブラハムの話だ」

「神は何故息子であるイサクの犠牲をアブラハムに強いたのか、わかる？」

朔は首を振った。聖書解釈とか、そういうのは好きではない。テレーゼが以前に言っていた気がするが、聞き流してしまっていた。

「それが一番大切なものだったからよ。だってそうじゃないと犠牲にならないでしょ？ 神に忠誠を誓いつつも、それだけは受け入れられないと思っていたのよ」

「……それがどうしたんだ？ 花雪は相変わらず話が回りくどいな」

「忘れたくは、ないでしょう？」

花雪は朔の目尻に唇を落とした。溢れる涙が花雪の桜色の唇を濡らしていく。

「朔を、試すわ。あなたが真に忘れたくないと願うなら、あなたは忘れないでいられる」

「試すって……」

「必要ないかもしれないけどね。あなたは変わったわ。それもこの二年で急に。やっぱりお嬢様のおかげ？」

自分は変わったのだろうか。朔は首を傾げた。変わったのかもしれない。テレーゼと過ごし、彼女を守る日々の中で。

「そう、かもな」

「……本当に試す必要はないかもね。だけどちゃんとやらないと、納得してくれないから」

「え……？」

花雪の手に、真紅の棒が現れた。紅い世界の中で、それは一際輝く。

「――ねえ、朔」

「何だ？」

「最後に言っておくわ。私は、あなたのことを世界で二番目に愛しているわ」

一番が千怜であることはわかっている。朔はゆつくりと花雪の額に唇を落とす。

「俺も、愛してる。――順番なんてつけられない」

全てが大切だ。どれも失いたくない。順番なんて、無理矢理自分や他人を納得させる手段でしかない。ここに在るのは、愛という気持ちだけだ。花雪は満開の桜のように笑い、朔に棒を向けた。

「――【我、汝の『望み』を問う】」

――その声を最後に、意識が途切れた。

終章 『朔と望のスパイラル』



「まだか、テレーゼ？」

「待って。今いいところ……」

朔は溜息をつきながら、テレーゼの読んでいる本を奪い取った。

今は引越しの準備をしているのであって、読書の時間ではないのだ。

「早くしろ。俺はもう終わった」

「私の前に本があるのが悪いのよ……」

「――脳天気な奴」

今まさに追い出されようとしているのがわからないのか。それともそれを受け入れたのか。テレーゼはいつもとは違う、質素な黒いワンピースに身を包んでいる。それが今の彼女の状況を示している気がした。

テレーゼはメイプルウッド社の相続権を失った。父親の財産の三分の二は手にできたが、一生暮らせるほどではない。家も伯父であるウェアリーに引き渡さなければならぬ。

今のテレーゼには何もない。それは自分が敢えてフリードリヒ殺害を止めようとしなかったことに起因するだろう。朔は眼を伏せた。「辛気臭い顔するんじゃないの。それともお嬢様じゃない私の傍にいるのは嫌？」

「そういうんじゃない。だけど旦那様が殺されるとわかって止めなかったのも、復讐を望んだのも事実だ」

テレーゼは馬鹿にしたように笑って、本を纏め始める。本好きだけあってかなりの冊数だ。今日中に終わるだろうか。

「――私は、朔がいればそれでいいわ。欲張りな貴方と違ってね」

「欲張りか？」

「欲張りよ。よく言えばお人よし。貴方には大切なものが多過ぎる

わ」

確かにそうかもしれない。朔は苦笑を浮かべた。『解除』の術を行ったときに、失いたくないものがあまりに多いことに気付いたのだ。

「――何もかもを守ろうとするとところは、親子ね」

「そうか？」

「全てを守りたいから『封印』なんてしたのだと思うわ。『解除』出来なかったらどうするつもりだったのかしら」

全てを守ろうとして、千怜は世界を混乱させた。まだ『カマエル』の爆発で壊滅状態になった方がよかったのかもしれない。しかし確かに救われた命は多かった。朔は溜息をつく。

「父さんはやり過ぎ……っていうか最初からカマエルを開発しなきゃよかったんだよ」

そうしたら、記憶を失うことを恐れずに済んだのに。朔はテレーゼの本を適当に纏めながら思った。

「――それより、朔。本当に日本で暮らす気はないの？」

「翠には誘われてるけど……どうせ『飛べ』るし、行きたくなったらすぐ行ける」

翠は残念に思うだろうが、しばらくは英国に残りたい。色々と整理したいことがあるのだ。

「まあ、今の日本は混乱してるからね。行くなら落ち着いてからがいいわ。でも私はもっと日本を見てみたいわ。あなたが生まれた国だもの」

「英国と大して変わらないけど……って、おい！ 何でせっかく纏めたのに崩してるんだ！？」

テレーゼは朔が適当に纏めた本を崩している。どうやらこだわりがあるようだ。

「ちゃんと分類してるのよ」

「じゃあさっさとやれよ……纏めないと飛ばすときにすごく疲れるんだから」

「はいはい」

テレーゼが本をまとめ始めたのを、朔はぼんやりと見つめた。これから行くところは、昔暮らしたスラムの近くだ。今なら多分向き合える気がする。自分の過去の痛みと。

「――ちゃんと、日本に埋めてやったほうがいいのかな……」

「ん？ どうしたの？」

「いや、花雪を日本に埋めた方がいいのかな……と思って。花雪にとってはあそこが一番居心地がいいだろ？」

でも、とテレーゼは手を止めずに言う。

「八年間、そのままの状態ですに埋まっているとは思えられないわ」

「――それもそうか」

「それに……あの人は多分、朔がそう考えてくれただけで嬉しいと思っっているんじゃないかしら？」

朔は応えずに天井を仰いだ。花雪の形見だと、いつも傍に置いていた墨染桜はない。封印を解除したときに、耐え切れずに折れてしまったらしい。腰に重みがないのは何となく心細い。

「――でももう、戦う必要もないのか」

テレーゼがメイプルウッドから離れてしまえば、狙われる可能性はかなり減る。ゼロではないが、拳銃が一つあれば十分に事足りる。しかし墨染桜は武器ではなく象徴だった。だから胸に穴が開いたように寂しくなる。

朔は膝を抱えて座り込んだ。

「――引越しの日が近いというのに、呆れるくらい片付いていませんね」

不意に、声が響く。

一瞬ここにいるはずがないと思うが、そういえば『飛べ』るのだと思い直す。

「翠……」

「引越し祝いに来たんですが、この分ではまだ先のことのようにですね。テレーゼは片付けの最中に本を読んでいますからね」

そう言うと、翠は背中の包みを解いた。中から出て来たのは一振りの日本刀——朔は思わず息を呑んだ。墨染桜と似た気配がするが、どこか違う。

「これは墨染桜の兄弟刀——私が持つ寒緋桜の兄弟刀でもあります。銘は『紅枝垂』——朔にこれを持ってほしいんです」

朔は刀に吸い寄せられるように、それを手に取った。鞘も柄も、不思議と手に馴染む。それは兄弟刀だからなのだろうか。朔はゆっくりと紅枝垂を鞘から抜いた。

懐かしい、と思った。朔は刀身に視線を滑らせる。

「——でも、どうして俺に……」

「朔に何かあれば、すぐに私に伝わるからですよ。寒緋桜は長兄ですから、いつも弟を気にかけているんです。私が朔を気にかけているように」

翠は朔の首筋にそっと指を伸ばした。サリユーにつけられた牙痕には、痂カサフタができつつある。翠はそれに気付いたのか、柔らかく笑った。

「……もしかしたら私もこちらで暮らすことになるかもしれません」

「え、でも研究なら日本の方が……」

「——少しだけ、自分の人生を生きなくなっただけです」

翠は朔の頬を掴み、自分の方に引き寄せた。唇が触れ合う。

「——お楽しみのところ、悪いんだけど」

不機嫌なテレーゼの声が翠の動きを止める。翠は不満そうにテレーゼを見た。

「何ですか？」

「朔は私のなんだからねっ！」

「今は、でしょう？」

翠は悪戯っぽく笑った。今までに見たこともないくらい澄んだ笑顔だ。どこか子供っぽいが、芯がある。花雪の笑顔にも似ている気

がした。

終わったんだ——その笑顔が、朔にそう思わせた。

□＋□

「お疲れ様、『根』」

キングサイズのベッドに横になったアメリカの、青く短い髪を梳く。アメリカは体を撫でられた猫のように『根』に擦り寄った。

「疲れるほどのことはしてへんで？　今回は朔の独壇場や」

「でも戦闘なんて久しぶりだったでしょう？」

アメリカは『根』の着ているワイシャツのボタンを丁寧に外していく。きちんと磨かれた爪が、黒いシャツによく映えた。

「……朔達はこれからどうするの？」

「とりあえず一年くらい遊んで暮らせる金はあるみたいや。せやからその間に仕事を探すつもりやって。嬢ちゃんを上为学校にやるつもりみたいやしな。公立の寄宿学校なら安いから、そこに入れるつもりらしい」

「そう……」

アメリカは『根』の胸板に手を置いた。左胸から右脇腹に渡る大きな古傷をなぞる。『根』はその手首を掴んだ。

「何や、えらい朔のこと気にするやんか」

「心配しないで。私が愛してるのはあなただけよ」

そういうことではない。何かそこはかとなく厄介事の匂いがするのだ。

（今はまだ気にせんでもええか……）

確かに疲れた。ここで休息するのも悪くない。『根』はアメリカの肩口に顔をうずめ、そこに熱く紅い舌を這わせた。

「……でも今回はわりといいエンディングやったな。そう思わへん？」

「そうね。考えうる最良の結末よ……フリードリヒも死んでくれた

し。これではらくは楽に外交を進められそうよ。クール伯爵が強大化することはないだろうし。むしろ彼は事業を縮小すると言っているわ」

アメリカは女王とは思えない、口角を上げただけの歪な笑みを浮かべる。闇に属する微笑だ。それなのに願うのはあくまで平和で。

『根』はこれから起こることを予期しながらも、アメリカを抱きしめた。



テレーゼがようやく本を纏めたので、朔達はすぐに新居に飛んだ。新居は今までの十分の一以下の広さだ。テレーゼは本棚に本を納めながら言う。

「通信制はやっぱ無理よね……」

「……」

「寄宿っていつでも週一で帰れるみたいだし、寮も一人部屋で食堂だけ共用だからいいけど……同年代の子ってスピネル以外に知り合いいないから」

不安なのだろう。朔は自分の荷物を適当に整理している手を止め、テレーゼをそっと抱きしめた。

「寄宿は飛び級する人が少ないから、多分まわりより少しだけ年下だ。怖いなら学校なんか行かなくてもいい。九年生だから、一応今年で義務教育は終わるし」

「朔……」

「俺は学校にはいい思い出がないから、無理強いはしない。それに本当は――離れていたくない」

テレーゼはくすりと笑った。朔の細い背中に腕を回されると、温もりが交差する気がした。

「行ってみて、嫌だったらやめて帰ってくるわ。仮に学校が気に入ったとしても毎週帰ってくる。それでも寂しいなら、『飛んで』き

てよ」

「――わかった」

いつからこんなにテレエゼが大切だったのだろう。今となってはわからない。でも一つだけ、確実にわかるものがある。

「これからも、お前がそれを望まなくなるときまで……俺はお前の守護者だ。何かあったらすぐに呼べ。いいな？」

「朔こそ。私は貴方が望まなくなるときまで、貴方の傍にいるわ」

新たな契約を結ぼう。

それは物語の終わりであり、新しい物語の始まり。

ツゴモリ
晦であり朔である。

始まりと終わりはいつも同一。

だから終わりを恐れることも、始まりを恐れることもないのだ。

終章『朔と望のスパイラル』（後書き）

朔「第一部完結したってさ」

テレーゼ「……ってことは第二部あるのよね？」

翠「第二部は私よりスピネルや『根』が活躍するらしいですよ」

『根』「で、嬢ちゃんには新たな出会いが！ 大丈夫かいな、朔」

朔「ていうか俺、次回も大変なことになるんだよな」

スピネル「それが作者に愛されてる証だよ。あの人、書いてるときだけサディスティックになるから」

翠「十二歳からサディスティックという言葉が出るなんて、世も末ですね」

テレーゼ「そういえば、次回は女王様も出てくるわよ」

スピネル「女王様ってあの……にしお〇すみこみたいな……」

全員「違う！！！！」

第二部主要登場人物

◇月峰 朔

性別…男 / 年齢…18歳

誕生日…12月25日 / 血液型…O

国籍…英国 / 人種…日本人

容貌・容姿…黒髪、紅眼。女顔。

身長…162cm / 体重…45kg

職業…元殺し屋。今はテレーゼの昼の守護者。第二部では変わる。

宗教…無神論者

性格…嘘はつかないが隠し事はする。

長所…実は直球。

欠点…痩せ我慢する。

趣味…刀の手入れと訓練

特技…戦い全般

好物…キジ（自分で撃ち落とす） / 嫌いなモノ…小松菜

武器…日本刀、拳銃、クナイ、毒、魔術 etc.

◇テレーゼ・アルトリート・メイプルウッド「テレーゼⅡメイプル
ウッドは省略形」

(Therese Astrid Maplewood)

性別…女 / 年齢…12歳

誕生日…9月30日 / 血液型…B

国籍…英国 / 人種…ドイツ人とのクォーター。（祖母がドイツ

人）

容貌・容姿…金髪碧眼、かなり美人。

身長…142cm / 体重…36kg

職業…学生。飛び級したので9年生（義務教育最終学年）。二部

からは10年生。(中途編入)

宗教…英国国教会

性格…かなり直球。感情の波が激しい。気位が高く、強気。

長所…正直。

欠点…挑発に乗りやすい。

趣味…読書

特技…速読

好物…ラスク / 嫌いなモノ…苦いもの

◇ジェイドルオークス(Jade Oaks)

本名…柏木翠

性別…女 / 年齢…24

誕生日…5月2日 / 血液型…AB

国籍…英国 / 人種…日本人とイギリス人のハーフ

容貌・容姿…翡翠色の瞳、琥珀色(栗色)の髪

身長…165cm / 体重…50kg

職業…フリードリヒの秘書。二部は変わる。

宗教…特定のものは無い。

性格…普段は物腰が柔らかな好青年。実際は朔至上主義の妖しい

姐さん。

長所…朔には優しい。一途。

欠点…相当嘘つき。

趣味…研究。

特技…実は万能かもしれない。

好物…和食 / 嫌いなモノ…見苦しいもの

武器…日本刀、ナイフ、魔術etc.

◇『根』^{ルート}

本名…アナトール・ジュネ(Anatole Genet)※嫌いなので誰にも呼ばせない。

性別…男 / 年齢…23

誕生日…8月9日 / 血液型…B

国籍…仏 / 人種…仏人

容貌・容姿…チョコレート色の髪と瞳。髪の毛はツンツンと逆立っている。

身長…176cm / 体重…65kg

職業…情報屋、バーのマスター、女王の愛人。

宗教…カトリック

性格…陽気。

長所…表裏がないところ。

欠点…先のことを考えない。

趣味…パソコンをカスタマイズすること

特技…情報処理。

好物…糖分 / 嫌いなモノ…塩分

武器…コード（電氣流したり、レーザーカッター出したり）、ナイフ

◇スピネル・アンバー・クール

(Spinel Amber Kool)

性別…男 / 年齢…12

誕生日…12月23日 / 血液型…O

国籍…英国 / 人種…英国人

容貌・容姿…黒髪に蒼い眼。朔の幼い頃に似ているらしい。

身長…146cm / 体重…39kg

職業…クール社の社長。

宗教…英国国教会

性格…素直になれない。

長所…一途。

欠点…一途すぎてたまに屈折する。人間嫌い。

趣味…読書、テレゼをからかうこと。

特技…四則演算

好物…冷たいもの / 嫌いなモノ…生暖かいもの

武器…魔術

◇アメリカ・イーリイ・デイルフェンベーカー (Amelia Ely Diefenbaker)

性別…女 / 年齢…21

誕生日…6月4日 / 血液型…AB

国籍…英国 / 人種…英国人

容姿・容姿…青いショートヘア (染髪)、水色の瞳

身長…160cm / 体重…53kg

職業…英国女王 (17歳で即位)

宗教…英国国教会

性格…目的のためなら何でもする。国民を愛している。

長所…情熱的。頭脳明晰。

欠点…手段を選ばない。

趣味…料理

特技…ワインの目利き

好物…甘いもの / 嫌いなモノ…酢豚のパイナップル

武器…自分の部下や愛人。

◇メレディス・ゴダ・アーベントロート (Meredith Gouda Abendroth)

通称…メル

性別…男 / 年齢…18

誕生日…4月3日 / 血液型…A

国籍…英国 / 人種…ドイツ人と英国人のハーフ。

容姿・容姿…金髪のショートヘア、青い瞳。好青年という感じ。

身長…179cm / 体重…69kg

職業…チェスタートン (C h e s t e r t o n) 寄宿学校生徒会長 (12年生)

宗教…英国国教会

性格…正義感が強い。

長所…自分の意見を曲げない。

欠点…頑固

趣味…読書

特技…人の名前を覚えること

好物…サーモンのムニエル / 嫌いなモノ…トマト

◇メリッサ・エインズワース (M e l i s s a A i n s w o r t h)

通称…ピギー・アン (スラム出身のため)

性別…女 / 年齢…14

誕生日…10月24日 / 血液型…B

国籍…英国 / 人種…英国人

容貌・容姿…赤毛で三つ編み。緑色の眼。赤毛のアン風。

身長…153 cm / 体重…43 kg

職業…チェスタートン寄宿学校10年生。

宗教…英国国教会

性格…内気。優しい。

長所…人の気持ちを優先。

欠点…優柔不断。

趣味…編物、裁縫

特技…見ただけで服の構造を理解する

好物…甘いもの / 嫌いなモノ…小松菜

第二部く幻の月 序章



『幻の月』

パープルムーン

『紫月』

『月』

『ムラサキ』――――

この紫色の錠剤はそう呼ばれている。名前が沢山あるのは、それが正規の薬でないからだ。

服用方法は四種類。水と一緒に飲み込むか、水に溶かして注射するか、炙って煙を吸うか、葡萄と血を混ぜたような味がするそれを奥歯でかみ砕くかだ。そうすれば君は簡単に天国に行ける。そして素敵な力を手に入れられる。その力があれば、君は人気者にもなれるし、気に入らない人間を殺すのも可能だ。

試しに飲んでみないか？

依存性が怖いかい？

だけど心配はいらないよ。この薬は漢方の成分を多く含んでいるから体に害はない。タバコなんかよりずっといいんだ。それでも不安なら、まずは錠剤を砕いてちよつとだけ飲んでみるといい。効果はもちろん落ちるけど、少しだけでも君は十分に力を得られる。

わかるかい？

君は殺せるんだよ？ 君の大切なお母さんを殺したアイツを。

そして抜け出せるんだ。この薄汚い街から。

この薬さえ使えば、君は何だって出来る。

副作用なんてないよ。薬だって進化しているんだから。いつまでも昔の常識に囚われていちゃいけないよ。

飲んでみたい？ そうか、わかってくれて嬉しいよ。

じゃあまずは半分ずつにしよう。飲み方はどれがいい？
口移し？ そんな娼婦みたいなこと言わないでくれよ。君は確かに売春をしている。そして僕は君を買った。だけど僕は君の体を買ったんじゃない。君の未来に投資したんだ。
詳しいことは、菓を飲んでから話すよ。



倫敦は小雨や曇天が多い。霧の街、とも言われる。

その霧は切り裂き魔を匿い、魔性を抱く。魑魅魍魎が跋扈するという古都・京都もそうだが、この街にはどこか陰惨な気配が横たわる。『根』はそう思いながら、霧の中を歩いた。

視界が悪い。何も見えはしない。だが気配だけは確かに感じている。自分ではなく、自分の隣の人間を狙っている。『根』は隣を歩くフードを被った女に声をかけた。

「――尾行られてんな。心当たりはあるか、アメリカ？」

「ありすぎてわからないわね。叔父様の差し向けた刺客かしら？」

「――違うな。あの気配の消し方はシロウトやで？」

気配も殺気も消えている。しかし、それは機械の手を借りている。それを見破るのはたやすい。『根』は口角を上げて笑んだ。

「何の用や？」

『根』はブレスレットから透明なワイヤーを繰り出し、空間を切り裂いた。黒い服を着た男がそこから姿を表す。男は荒く呼吸をし、充血した目でアメリカと『根』を睨みつけた。青い瞳の中央にある瞳孔は開ききっている。

「――ジャンキー風情が女王様に何の用や？」

男は何も言わずに『根』に向かって走り出す。『根』はその場から一步も動かず、ワイヤーで男を縛り上げた。動きが単調過ぎる。

『根』は溜息をついて男に聞いた。

「俺がちつとでも力を込めればお前はバラバラ死体や。正直に話せ

ば死体にはならずにすむさかい、さっさと目的を吐け」

男はぶつぶつと何かを呟く。『根』は苛々して男の胸倉を掴んだ。

「もっとはっきり言いや！」

「【――つら……たま……】！」

男の声はほとんど聞き取れなかった。しかし『根』の体を電撃が貫く。

「魔術を使いやがるんか……」

だが魔術使用者特有の瞳の紅化がない。男の目は濁った紫色に染まっていた。

「だが俺はもっと強い奴を知ってるで？」

『根』は手首を動かし、仕込みナイフを取り出した。それで男の首筋を切りつける。毒を塗っているため、浅くても致命傷だ。男はすぐに地面に倒れた。

「終わったで、アメリカ」

「うん……」

アメリカはまだ暖かい男にそっと手を合わせる。『根』はそれは怪訝そうに見た。

「何故自分を殺そうとした人間に……」

「人の死は、誰のものだって悲しいのよ」

「そういうもんか？」

裏の世界では、死を見ない日の方が珍しかった。そのせいなのか、いつしか死を悼む心も忌まわしいと思う心も失った。死はただ、無なのだ。『根』は死体に自分のハンカチをかけるアメリカを眺めながら、今頃郊外の街に向かっている友人を思った。

かつて『死人花』――朔は、殺した標的に曼珠沙華を供えた。例外は殺し損ねたサリユーだけだ。それ以降は『死人花』ではないから別の話である。だから彼はいつしか曼珠沙華の異称である、死人花と呼ばれるようになったのだ。

何故そんなことをするのかと聞いたことがある。朔は表情を変えずに、静かに言った。「どんな人間の死も、誰かが悼むべきだ」と。

アメリカの姿が、そんな朔と重なる。『根』は僅かに目を細めた。



「チェスタートン公爵か……適当な理由をつけて断るわけにはいかないな」

スピネルはチェスタートン公爵からの手紙を見て、溜息をついた。自分が経営している寄宿学校でのパーティーに参加してほしいという内容である。伝達手段に手紙を使ったり、やたらとパーティーを開きたがるころは無駄をこそ愛する貴族の象徴だ。公爵のそういうところは嫌いではないし、自分にも無駄を愛する心はある。しかし人が集まるところは苦手だ。特に学校は嫌いなのだ。

「ジェイド……いや、翠がいれば代わりに行かせただけだな」

翠がクール社にいた時代は、よく自分の代役をさせた。その経験はメイプルウッドでも生かされていた。何と言っても翠は女性の心を掴むのが上手い。女性なのだから当たり前かもしれないが。

「しかし公爵ともなると、行かなければまずいな……代役もないし」

階級など名目的な存在、と言われて久しいが、爵位が上の人間の誘いは断らないほうがいい。亡きフリードリヒⅡメイプルウッドもそうすることで事業を有利に進めていた。もちろん、その傍らには翠がいたのだが。

「気が重い……」

千里眼を持つ故に人が大勢いるところでは、心が見えすぎて具合が悪くなる。翠も心を見せない方法は見つけたものの、力自体を封じる方法はわからないらしい。クール社の研究チームもまたしかりだ。

「しかも、何で学校……」

子供の心は、時に大人より生々しい。殊に崩壊している今の学校においては、子供の心は荒みきっているだろう。あまりに歪んだ心

は怖い。スピネルは目を隠した青い布の上に手を乗せた。

「公爵に挨拶したらすぐに帰ろう……」

公爵自体は善良な、いい人間だ。パーティーで何度か目にしたが、心と口が直結している、素直でおおらかな人物であった。もちろんテレーゼのように、千里眼などなくても心が見えるくらい単純なわけではなかったが。

スピネルは青いクローゼットを開けて、服を適当に見繕い始めた。



朔は流れていく景色を退屈そうに眺めた。隣に座るテレーゼは、暑い本を夢中で読んでいる。学校に着くまでに読み終わってしまうのではないだろうか。朔は少しだけ心配になった。

フリードリヒの遺した金はかなり額の。テレーゼを三年間寄宿学校に通わせ、大学を卒業させてやることが出来るくらいはある。しかし、できれば寄宿学校での三年は通信に変えたい。そうするだけのお金はなかった。こちらにも生活があるのだ。とりあえず稼ぐ方法を見つけないことには、どうにもならない。朔は駅で買った求人誌を開いた。

「何だか……求人誌を見てる朔って面白いわね」

「からかうな。お前だって通信の方がいいだろ？」

「私はどっちでもいいわよ。学校にも興味があるし」

「……期待しないほうがいい」

朔は短く呟いて、求人誌のページをめくった。表の職というものは学歴を重視する。義務教育すら満足に受けていない朔の受け皿はどこにもなかった。やはり守護者ガーディアンという表と裏の境界くらいがいいのかもしれない。守護者の求人なら『根』に聞けばいい。朔は求人誌をゆっくり閉じた。テレーゼも本を閉じる。

「フェイノールトの映画を見れば、期待しない方がいいのはわかるわ。だけど私立だから少しはマシだろうし、そんなに悪いことば

かりじゃないと思うわ」

「俺はそうは思わない」

「行ってみなきゃわからないわよ。でも、何かあったら飛んできてね？」

勿論そうするつもりだ。テレーゼは十年生として入るわけだが、寄宿学校の生徒はめったに飛び級はしない。しかしテレーゼは飛び級をしているため、クラスでは一番年下になるだろう。それだけで既に、迫害の対象となる危険性を孕んでいる。何かあったら文字通り飛んでいくつもりだ。翠には散々過保護だと言われたが、そうやってしまうくらいに朔にとって学校は嫌な場所だった。

（俺くらい酷いことをされることはないだろうが……）

あれは街を仕切っていたゼラスの策略によるところも多かった。花雪と自分という存在を迫害することで、街を纏めようとしていたのだ。つまりはスケープゴートである。

「学校の図書館には古書も沢山置いていらしいわ。だから私、司書手伝いの係をやる決めているの」

「本当に好きだよな……何がそんなに面白いんだ？」

「好きというよりはもはや習性ね。本がないと生きていけないわ」
そういえば、フェイもそんなことを言っていた気がする。朔は無駄になった求人誌を弄びながら思いを馳せた。

仮にテレーゼが、自分にとってのフェイや『根』のような友人を見つけられたら、学校も悪くないのかもしれない。テレーゼには友人と呼べる人間はほとんどいない。関わりがないからだ。スピネルは友人なのかもしれないが、家はかつて敵同士であったから、友情で片付けられないものもある。

「寮って二人部屋だよな？」

「そうよ。寮長が気を遣って一番歳が近い子と同室にしてくれたみたい」

「寄宿学校で飛び級なら、相当頭がいいんだな。それか一年生のとくに頑張ったかだよな」

同室の人間が読書好きならいいのだけれど、とテレーゼは呟いた。テレーゼには趣味らしい趣味はそのくらいしかないのだ。

もし自分がすぐにいい職に就けても、最低一年は学校に通うことになる。せめて同室の子とくらいは仲良くやってほしい。

そんなことを考えているうちに、電車が止まった。公爵の作った私立学校だけあって、もうすでに校門が見えるくらいに駅から近い。

「――ほとんど城だな」

「そりゃあ公爵様の学校だからね。明日なんかパーティーなんだから。制服で参加らしいけどね」

寄宿学校にはドレスを買う金がない人間もいる。おそらくそれに配慮したのだろう。そういえば、制服もやたら安かった。英国貴族には「貴族たるもの、人のために何かをしなくては」という強迫観念があるのだろうか。不気味なくらい慈悲に溢れている。下に施しをしてやろう、という選民意識も感じられないことはないが。

「公爵は呆れるほど貴族趣味と聞いたわ。精神もどっぷりそれに浸かってるって。だから普通の公立学校とは違うと思うわ。そこらの金を浪費しているだけの奴とは違うわ」

「……そうだといいんだけどな」

テレーゼは小さいスツケースを引きながら、校門に向かって歩いていく。校章にも使われている双頭の獅子が朔達を出迎える。テレーゼは予め配布されているカードキーで鉄の門扉の鍵を開けた。朔がついて来られるのはここまでだ。ここから先は身内でなければ入れない。

「……じゃあ、行ってくるわね」

「ああ」

「電話するし、メールもするから」

「うん」

「――だから、そんな悲しそうな顔をしないで？」

それはこっちの台詞だ。テレーゼの顔は今にも泣き出しそうだ。

朔は苦笑して、テレゼの額に自分の唇を落とす。

「帰れるときは、なるべく帰って来いよ」

「わかった。それじゃあ、職探し頑張ってね」

朔は城のような建物に吸い込まれて行くテレゼをいつまでも見送っていた。



「どう？ 薬を飲んだ感想は。何だか力が漲ってくる感じがしないかい？」

「体が……熱い……」

「最初だけだよ。ほら、鏡を見てごらん？」

女は虚ろな目で鏡を見た。すると、驚きからか一瞬正氣に戻る。

「目の色が……」

「それは君が力を得たしるしだよ」

澄んだ紫——どうやらこの娼婦は薬と相性がいいようだ。相性が悪ければ色は濁る。そしてあまりに相性が悪いと薬に吞まれてしまう。

成功だ。たった半錠でこれだけ効き目があるとは。男は右頬だけを上げて笑みを浮かべた。

「君の力を解放して、それであの男を殺すんだ。君の母親を殺し、僕の兄を殺したあの男を。僕と、一緒に……」

娼婦は男に舌を絡ませた。流石にプロだけあって上手い。薬の興奮作用のせいか、男にも女の熱が移った。

「一緒に行こう、天国に……」

この薄汚い街を、抜け出して。

粗末なベッドの上で抱き合う二人を、蒼い月が冷たく見下ろしていた。

第二部く幻の月 序章（後書き）

テレーゼ「第二部が始まったわね、朔」

朔「最初からダークで……大丈夫だろうか……」

テレーゼ「作者の座右の銘は『冒頭には死体を転がせ』らしいわよ」

朔「こういう意味じゃないだろ！？ 確かに第一部も二部も死体転がってたけど！」

テレーゼ「そうね。だいたいこれ、推理小説じゃないし。元は印象的な冒頭にしろって意味なんだけど……」

朔「印象的とか言ったら、作者は街一つ爆破するぞ！」

テレーゼ「だからいつまでも冒頭には死体だと思っときゃいいのよ」

朔「この作者に普通のラブコメは書けないみたいだな……」

テレーゼ「まあ、一部とうってかわって朔と私のラブラブデイズを書いてもらってもいいけど……」

朔「それもそれで……あれだな」

テレーゼ「あれって何よ！」

第一話『深い森の入口で』



十二月一日午後六時――

臙脂色の制服に身を包んだテレーゼはパーティーで浮かれる大広間の片隅に佇んでいた。いつもは横に朔かアレンがいたのに、今はいない。それがどれだけ心細いことなのかをテレーゼは改めて認識していた。

「ご飯食べたら帰ろうかな……」

「相変わらず食い意地だけは張ってるな、テレーゼ」

臙脂を基調とした空間に響く、青を思わせる幼い声。テレーゼは弾かれたように顔を上げた。そこには目に紅い布を巻いたスピネルがいる。

「スピネル……どうして？」

「公爵に招待されたんだ。別にお前に会いに来たわけじゃない」

スピネルがこういう場所に顔を出すのは珍しいが、公爵に招待されたのならそれも道理だ。身分が上の者の誘いは受けておくべきなのだ。

「お前が寄宿学校に入るのは聞いていたが、チェスタートンとはな。悪い選択ではない」

「――それはジェイド……じゃなくて翠に言っで。朔は猛反対していたから」

「月峰の気持ちはわからないでもない。学校なんてロクなところじゃないんだ」

スピネルはそう言うのとテレーゼの胸のポケットに赤い薔薇を差した。珍しく青薔薇ではない。よく見ると、今日のスピネルの服装は赤を基調としている。どうりで近づいてくるのがわからなかった。

「だが制服は似合っている。肌が白いから臙脂が映えて鮮やかだ」

「世辞が上手になったのね。まるで翠だわ」

「僕は翠ほど嘘つきではない。ところで、テレゼー——」

スピネルはテレゼの髪を一筋掬った。そしてそれに唇を落とす。
「せっかくの機会だ。パーティーを楽しもう」

「……そうね」

「——ラスク何十枚食べる気だ？」

ラスクばかり皿に盛っていると、心底呆れたような声がした。テレゼは頬を膨らませる。

「いいじゃない、好きなんだから！」

「栄養バランスを考えろ。そのうちウエストのくびれがなくなっても知らないぜ？」

「そういうのセクハラって言うのよ、スピネル」

「ふん、怖いもの知らずの男姫おのこひめにセクハラも何もあったものか」

スピネルは栄養バランスを考えているらしく、野菜と肉を半分くらい盛っている。確かにラスクが多すぎるかもしれない。しかし一度盛ったら、戻してはいけないのだ。

「——君はラスクが好きなんだね、テレゼ」メイプルウッド嬢

「え……」

自分と同じ臍脂のブレザーを着た男がにこやかに微笑みながら言った。自分と同じ、透明な青色の瞳と輝くような金髪。黒ぶちの眼鏡が理性的で端正な顔立ちをさらに引き立てていた。

「ああ、自己紹介が遅れたね。僕はメレディス・ゴード・アーベントロート。このチェスタートン寄宿学校の生徒会長だ」

「アーベントロート？ ドイツ系なんですか？」

「そう。父がドイツ人でね。ドイツ語読みの方が好きなんだ。君と同じだね」

スピネルは不機嫌そうにメレディスに言う。

「——随分とお詳しいじゃないか、生徒会長様」

「チェスタートン公が言っていたんだよ、クール伯爵」

スピネルは目隠しをするりと外した。どうやら嘘ではないか確かめるつもりらしい。

「嘘ではないようだな。だがレディの扱いはまだまだだ。レディについての情報を知っていることは隠すものだよ」

敵意を剥き出しにしている。氷の伯爵というより、炎の伯爵だ。テレーゼは溜息をついた。

「あの、メレディスさん――」

「ああ、メルでいい。長いからね。どうしたんだい？」

「チェスタートン公はどこにいらっしゃるのですか？ 挨拶がしたいわ」

「ああ、奥のほうにいるよ。名前を言えば、すぐに通してくれるよ」
テレーゼは赤いチェックのスカートをつまみ、メレディス――メルに礼をした。

「ありがとうございます。これからよろしくお願いしますね」

「ああ。何かあったらすぐに言ってくれ」

テレーゼは頷き、スピネルの手を引いた。これ以上二人を近くにいさせてはいけない。スピネルは突然爆発してしまうのだから。

「――スピネル」

「あいつは信用出来ない。しっかりと見えなかったが……何かある」

「だからってトゲトゲしすぎよ。全く……貴族のくせにそういうとこだけ庶民的よね」

スピネルは海色の目を細める。不機嫌なときの癖だ。テレーゼはゆっくりとスピネルの髪を撫でた。

「――あの人には近づかないようにするわ、だから……」

「別にお前を心配しているわけじゃない。僕に合わせて交友関係を狭めるな」

弱冠八歳で伯爵になってしまったスピネルには、同年代の友人が自分しかいないのをテレーゼは知っていた。交友関係が狭いのは力のせいだけではない。だが力がなければ、おそらくもっと社交的だ

っただろう。

「――ねえ、スピネル」

テレーゼは再び目の回りに紅い布を巻きつけているスピネルに言う。

「何だ？」

「寂しいなら言えればいいのに」

「――僕はお前がわかってくれればいい。それより、チェスタートン公のところに行くんだろう？」

スピネルは氷が融けるときのように、柔らかく笑って右手を差し出す。テレーゼはゆっくりとその手を取った。



「守護者の職よりいいのがあるで？ 土日は休みで、勤務時間は朝十時から夕方五時まで。給料はお前がメイプルウッドからもらってたんとほぼ同額や」

『根』はそう言うのと、一気に水をあおった。どうやら珍しく二日酔いになったらしい。

「条件が良すぎて不安だな。一体何の仕事だ？」

「俺の母国語では騎士。マザータングつまり女王アメリカの護衛や。シユバリエちようどの前一人退職したんや」

「騎士……仕事内容は守護者と対して変わらないよな？」

女王の騎士なら、貴族の守護者なんかよりも人が多いから仕事としては楽だ。テレーゼのときのように、一人で十二時間はつらすぎる。

「嬢ちゃんるときよりは楽やで」

「だろうな。だが……裏がないわけではないだろう？ お前のくれる仕事はいつもそうだ。お前のせいで何度死にかけたことか……」

「何や、人を死神のように。でも確かに裏はあるんや。お前にはある薬を狩ってもらう」

朔は水を飲み干してから、狩人のような笑みを浮かべた。

「どうやら、最初からその仕事を紹介するつもりだったようだな」

「……まあな。葉狩りは骨が折れるが……今回は特にやばそうや。下手すりゃ命に関わるで？」

『根』の用意する仕事だ、そのくらいの覚悟は出来ている。しかし表向きは女王の騎士——テレーゼやその祖母にも胸を張って口にできる職業だ。朔は微笑を浮かべる。

「表向きは裏の仕事ではない仕事を探していたんだ。俺は表の仕事では稼げない。表面上は騎士、つまり下級貴族にもなれる。——願ってもない好条件だ。その話、乗った」

「よかった。もう名前登録してもうたから、断られたらどないしようかと思ってたで」

「ふん、断るなんてこれっぽっちも思ってなかったくせに」

『根』とはそういう人間だ。断ると思っていなから、わざわざ嫌いな硬水を出したりする。そして暗に告げるのだ。「お前のことは何でも知っている」と——

「ところで、葉について聞かせてほしいんだけど」

『紫月』が一番有名な名前やな。まだそんな流行ってるわけやない。だがその葉でラリった野郎がこの前お忍びデート中のアメリカを殺ろうとしたんや。だから、広まる前に狩ったろうちゅうことやな」

「——聞いたことないな」

「俺は知ってたで？ 一部のスラムではかなり蔓延しとる。基本的には高揚感や興奮状態が得られるんや。神様になった気分になるらしい」

スラムと葉はもはや切れない仲だ。金がなく、体を売れもしない男はだいたい売人になる。一時期だけだがやったこともある。

金持ち連中が娼婦に使うパターンもある。それが一番厄介なのだ。「ヤバイのはそれだけやない。あの葉はただの葉やないと思う。アメリカを襲った奴は……魔術を使っと思ったんや」

「魔術……だから俺を頼みにしたわけか」

「お前ならクール伯や柏木の姉ちゃんとも連絡取れるしな」

魔術——朔は目を閉じた。実は封印を解除して以来、あまり使っていない。使うと思い出してしまいたいそうなのだ。父親や花雪との、あの短くて濃密な時間を。墨染桜に宿っていた二人の魂の残滓は、刀が失われたと同時に消えてしまったらしい。

「——腑に落ちないことがあるんや」

「何だ？」

「魔術を使つとるときは目が紅くなる。だが、アメリカを襲った奴は紫色になつとった。変やろ？」

「魔術で瞳の色を擬態させたまま力を使うことは可能だ。だが紫ならば……確かに妙だ」

そもそも擬態させたまま力を使うのはかなり難しい。葉でラリった人間には不可能だ。出来る人間は青血隊でも翠くらいしかない。「とりあえず心当たりがないか、翠とスピネルに聞いてみる。表の仕事はいつからだ？」

「来週からならいつでもいいで？」

「わかった。ありがとな、『根』」

朔はそう言うと、店を後にした。その後ろ姿を『根』は静かに見送る。

「断らんとは思ってたけどな……断ってほしかったで、俺は」



パーティーが終わると、テレーゼは溜息をついた。

「ラスク美味しかったなあ……」

「パーティーの感想それだけかよ！ 僕は人酔いはするわチェスタートン公にワイン飲まされるで大変だったんだ！」

「……さて寮に戻らなきゃ。今日、同室の人が家から戻ってくるのよね。部屋に本が沢山置いてあったから、友達になれるかも」

ぐったりしているスピネルをテレーゼは軽く無視して歩き始めた。スピネルは溜息をついてそれを止める。

「――早速ホームシックか？ 前途多難だな」

「勝手に人の心を見ないでよ、スピネルの馬鹿っ！」

「見てねえよ。目隠しもしてるし。今のはただのハッター……でもな、テレーゼ」

「何よ」

「お前を援助出来るくらいの金はある。もしどうしても学校が嫌なら……」

テレーゼは月明かりのように微笑した。ふわりと風が薫る。

「スピネルの援助なんかいらないわよ。元は敵同士なんだし。じゃあ、またね」

「……お前はそういう奴だよ。わかったよ。じゃあな」

スピネルとテレーゼは、同時に反対方向に歩き始めた。夏の終わりの悲しい風が吹く。テレーゼは途中で足を止めて、音を立てずに振り返った。背筋を伸ばして歩いていくスピネルの背中が小さくなる。

どうしてだろう。朔の傍にいたときには二人が似ているなんて気付かなかったのに、今は似ていると思ってしまうのだ。朔に会いたい、とテレーゼは呟いた。

寮に戻ると、ルームメイトは既に部屋で本を読んでいた。フェイ
|| ノールトの『That's all there is.』――
テレーゼは顔を綻ばせる。

「はじめまして」

声をかけると、赤毛のルームメイトはゆっくり振り返った。眼鏡の下にあるのは翠のそれよりも深い、まるで森林のような緑色の双眸。頬に散らばるそばかすが印象的だ。テレーゼと比べれば地味で凡庸であるが、いい人そうだとテレーゼは思った。

「はじめまして。私はテレーゼ・アルトリート・メイプルウッド、

十二歳よ」

「私はメリッサ・エインズワース。十四歳でクラスではあなたと同じ」

「よろしく」

テレーゼが笑むと、メリッサははにかんだように笑みを返した。テレーゼは二段ベッドに目をやり、メリッサに言う。

「上と下、どっちがいい？」

「私は上……元から上を使っていたし」

「そう、よかった。私は下の方が好きなのよ」

テレーゼは臍脂のブレザーをばさり、と脱いで二段ベッドの下に投げた。翠がいたら青筋を立てて怒りそうだ。

「そういえば、メリッサ。フェイノールトが好きなの？」

「この本はメルが貸してくれて……あ、メルっていうのは……」

「生徒会長？」

「そう。私のこと、いつも気にかけてくださって……私なんか、スラム出身のピギーなのに」

人はスラム出身の人間を卑下してピギーと呼ぶ。テレーゼは憤慨して言った。

「それは生徒会長の行動の方が正しいわね。スラムの人間だって、貴族だって、本を正せば血と肉と骨の塊なんだから」

「ふふ、貴女って面白い人ね。普通『本を正せば人間なんだから』って言わない？」

「人間なんて所詮アニマルなのよ。それよりその本、面白い？ 私は大好きな一冊だけ……」

メリッサは本の上に自分の右手を乗せながら言う。

「とても面白いわ。主人公がかっこいいし。だけど、殺し屋が美化されている気がして……そこはちょっと苦手かしら」

殺し屋——フェイが朔をモデルに描いたキャラクターだ。フェイ個人の感情からか、確かにかなり美化されている。本人には朔がそう見えていたのかもしれないが。メリッサの感想は普通なのだ。そ

れはメリッサが普通の人間だということも指し示している。テレゼは少しだけ目を伏せた。

「確かに殺し屋の殺しを正当化しているのはいただけないわね。生きるためとはいえ、汚れた仕事だわ。だけど私は殺さなきゃ生きていけない世界もおかしいと思うし、殺し屋もまた被害者かもしれないと思う。もちろん、何もしてないのに殺された人が一番の被害者だけ」

「――やっぱり貴女、面白い人ね。ちょっと価値観が他人と違うかも。私の好きな人に少しだけ似てるわ」

メリッサは顔を、自分の髪と同じくらい赤くしながら言った。テレゼは悪戯っぽく笑う。

「好きな人って生徒会長？」

「う、うん……そうだけど……」

「へえ……上手いといいいね！」

「で、でも、メルはすごく人気あるから……」

ああいう好青年タイプは人気があるよな、とテレゼは一人で頷いた。女に優しくして、人気があるといえば翠だ。女だと知って、成程と思ったが。

もしかしたらスピネルがメルを気に入らなかったのは、翠と似ているからではないだろうか。スピネルはかつて翠をクール社から追い出した張本人なのだから。



《――何？ 今パーティー帰りですごく疲れてるんだけど》

電話が繋がった瞬間、スピネルの不機嫌な声が耳を刺した。スピネル、というのは棘を意味するということを思わず思い出すくらいだ。朔は溜息をついた。

「じゃあ明日、また電話す……」

《テレゼに会った。チェスタートンに入ったんだな》

「え？　――ああ」

《チェスタートンはお前が思っているよりはまともな学校だと思う。だけどテレゼはああいう世界で生きるには正直過ぎる》

朔は目を伏せた。そんなことはわかっている。しかし、少なくとも数ヶ月は通わせなければならぬのだ。

《――僕は援助してやりたいけど、テレゼには断られた。だがこうなったのもジェイド……いや、翠の責任だからな。アイツをもう一度クール社で雇うことにした。本人も了承している。その給料はテレゼの学費として半分くらい口座に振り込むことにした》

「――そうか。ありがとう」

それなら少しはテレゼを辞めさせるのが早くなるかもしれない。本人が辞めたくないといったら、他のことに回せばいいのだから。朔は安心したように笑った。

《ところで、用件は何だ？　ものによっては答えてやらないこともない》

「――あのさ、『紫月』って知ってるか？　紫色の錠剤なんだけど」

《あいにく、知らないな》

「そうか。じゃあ……薬で魔術を使えるようにするのは可能か？」

スピネルは少し考え込んでから、するすると糸を繰り出すように答える。

《『人工』を作るときは、造血幹細胞に擬態させた青血石を含んだ骨髓を移植する。つまり重要なのは血液だ。天然とそうでない人間とでは多少血が違うんだよ。薬の成分は血液に乗って体の様々な部分に運ばれるから……理論上は可能だ。だがそんな薬はまだ作れていない。翠ならば知っているかもしれないがな。でも、何でそんなことを……いや、聞くのはやめよう。厄介事の匂いがある》

「それが賢明だ」

《――あまり危険なことはするなよ。テレゼが心配する》

朔は苦笑しながら頷いた。スピネルはいつだってテレゼ至上主義だ。

「努力するよ。じゃあな」

《——ああ》

電話を切った後、一人きりになった部屋の中で朔は溜息をついた。庭もないこの狭い家では、満足に刀を振り回すことすら出来ない。一人がこれほど退屈なことは知らなかった。

「——『紫月』のことも調べる……っていても『根』が掴めていないんじゃない、俺には無理だな」

朔はソファーに横になって天井を見上げた。テレーゼが越してきたときに貼付けた星型のステッカーが見える。テレーゼが心配だというのは建前だ。本当はただ、傍にいたいだけ。朔は諦めたように目を閉じた。

「……寝るか」



「コイツも使えそうにない」

男は、自分の上で讒言を呟く娼婦を蹴り飛ばした。女の虚ろな目が男を見る。

「ラリってやがるな。アイツが上手くいったから女なら、と思ったが違うようだ」

男は紫色の錠剤を飲み込み、女の首を絞めた。嬌声にも似たうめき声上がる。

「ふん。アイツに勝っているのは顔だけのようだな。娼婦のくせに技術もイマイチ、声も中途半端……どうせなら椿姫くらいの娼婦を目指せばいいのに」

男は手を離して、女の舌を引っ張った。女の顔が痛みと快楽に歪む。

「冥土の土産に、魔術を教えてやる」

男はくつくつと笑い、女の額に手を当てた。

「【闇よ、我に仇なす敵に絶望を与えよ】！」

「……あ、く……ッ」

「もっと綺麗に鳴けよ。せっかく魂を壊してあげたんだからさあ……」

女は絶叫を上げて、弛緩する。それを見下ろす男の目は、澄んだ紫色に輝いていた。

第一話『深い森の入口で』（後書き）

朔「第一部が九月三十日で、第二部が十二月一日から始まるということ、第一部の出来事って相当短い期間の話だったんだな」

テレーゼ「第一部と二部の間もあまり開いてないしね。朔が就職できないくらいに」

朔「うるさい！ 俺は学歴詐称してるっつーか卒業証明書が偽造だから、マトモな職には就けないんだ！」

テレーゼ「ってことはあの履歴書嘘なの？」

朔「うん。ていうか履歴書は本当に適当に書いたから」

テレーゼ「……ま、いいか。ねえねえ、朔。生徒会長いい人だよね？」

朔「いや、俺知らないし。ていうか俺、最近スピネルがかわいと思う」

テレーゼ「ま、まさか本当にそっちの趣味が……」

朔「……どうしてそういう解釈になるんだ？」

テレーゼ「だってフェイの小説には、男同士のキスシーンや女装して男をたぶらかしてるシーンがあったわよ」

朔「それは仕事だから……」

テレーゼ「変態貴族を殺すときに、唇に毒を塗ってキスしたりしたの？」

朔「……殺し屋時代のことは聞くな」

第二話『迷いの途（ミチ）』



「くだらない小説だ。そう思わないか？」

男は娼婦に足を洗わせながら聞いた。顔は人並み以下だが、器量は申し分ないその娼婦は曖昧に笑う。薬を使ってもいないのに、足への刺激だけで快楽に堕ちていきそうになる。よほど上手いのだろう。流石貴族の相手をする娼婦だけある。

「いくら可哀相な子でも人殺しは人殺し。不可触民は不可触民だと思わないかい？ それなのにあいつはあの街を抜け出して、のうのうと……僕らより遥かにいい生活を送っている。僕の兄や君の母親を殺したくせに」

「そうね。憎らしいわ……いつになったら殺せるの？」

娼婦は男の足を拭き、静かにワイシャツを脱がしながら言った。白い手が焦らすようにゆっくり動く。男は思わず娼婦の手を取った。しかし彼女は「焦らないで」とでも言うようにそれを軽くいなす。

「本当は今すぐでも殺したいところだけどね、あの人がまだだと言うんだ。まあ、僕らもあの人の願いを叶えてあげないといけないから……もう少し我慢して。その間に力を磨くといい」

「あの人の計画の方は順調？」

「いや。馬鹿が一人暴走してね……感づかれないかと冷や冷やしているところだよ。彼女には優秀な情報屋がいるからね。何でも、あの人の父親が出資した施設で脳をいじられたらしいよ」

そのおかげで、一度に何代ものコンピュータを動かしたり、コード一本だけで様々な機械に介入できるらしい。だが、最強の魔術の前には無力だろう。

「まあ、最悪そっちがつぶれても……復讐が出来れば問題はない。そもそもあの人は、ドクターが死んだから、仕方なく組んだに過ぎ

ないし」

「ドクター？」

「『紫月』を開発して、最強の新しい魔術を作り出した人だよ。あの人も暴走したけど……いいところまで行ったんだ」

「あなたは自分の手で殺すことにはあまりこだわらないの？」

確かに不思議なことかもしれない。普通復讐とは、自分で殺すことにこだわる。しかし男は違った。

「僕はあいつが精神的苦痛を味わうところこそ見たい。うまい具合にその駒も手に入ったらし……元々はドクターの計画に沿うつもりだったんだけど、同じ手はもう使えないだろう？」

「そうね。それで、駒はどうするの？」

「――それはまだ決めかねてるんだけどな……」

完全にシャツを脱がされた男は、早急に娼婦の唇を奪う。憎しみが快楽を引き立てるのを、二人は静かに感じていた。



「一時限目から六時限目までは普通の授業……七時限目から十時限目まで補習……やっぱ九年にすればよかったかも……」

昨日はパーティーだったが、今日はうってかわって授業と補習――テレーゼはベッドにダイブして溜息をついた。

「あーもう！ 気晴らしに本でも読もうかな！」

「……目は全く休まらない気がするけど」

メリッサが小さい声で言うと、テレーゼは「確かにそうね」と呟いた。視力を矯正するレーザー治療も安いわけではない。少しは休ませなければならぬだろう。

「じゃあ風呂でも行こうかな。ここの大浴場ってアロマバスなんですよ？」

「そうよ」

「メリッサ、一緒に行かない？ 私、どうも道が不安で……ここ、

すごく広いじゃない？」

テレーゼが言うと、メリッサは静かに首を振る。

「私なんかと一緒にいちゃダメよ」

「どうして？」

「ピギーと一緒にいる人間もピギー扱いされてしまうの。だから……」

「それはそう扱う人間の方が間違ってるの！ ほら、行きましょう？」

テレーゼは強引にメリッサの手を引く。メリッサはテレーゼの勢いに押され、ついに首を縦に振った。

「何で階段がこんなにあるわけ？ わけわかんない！」

「そのうち慣れると思うわ。よく使うところは限られてるし」

テレーゼは文句を言いながらも、ところどころにかかっている絵を目印に道を覚える。しかし明日、また勉強を詰め込まれたら忘れそうな気もしていた。

「明日は演劇の授業があるのよね？ どんな授業なの？」

「クラスを四つの班に分けて、二ヶ月で一つの劇を完成させるの。四つの中で先生が一番いいと思った班は、舞台で演じることが出来るのよ。明日からは新しいものをやるから、授業にはついていけるわ」

「やっぱリシェイクスピアとかやるの？」

「そうね。我が国最高の劇作家だし。でも、現代劇をやったりする班もあるわ。他には、昔の映画を題材にしたり……『風とともに去りぬ』とか」

スカーレット・オハラ役は多分取り合いになるのだろう。テレーゼは一人で納得した。メリッサは声が綺麗だから、演劇なんかには向いているかもしれない。しかし彼女がスカーレットやジュリエットを演じることがまずないだろう。それくらいは、テレーゼにもわかった。

話しているうちに風呂につき、テレゼは脱衣所で豪快に服を脱ぎ始めた。メイプルウッドは爵位がないため、服を自分で脱いだことがないということはない。逆にスピネルは自分で服を脱いだことも、体を洗ったこともない。テレゼはそんなことを何気なく思い出しながら、ゆっくりと服を脱ぐメリッサを横目で見た。

肌が白い。まるで真珠のようだ。首から背中にかけての曲線や、コルセットなど必要ないであろうウエスト。そして長く細い、しなやかな脚——テレゼはその身体から目が離せなくなった。

「そんな、見ないでよ……」

「あ、ごめんなさい。でもあまりに綺麗な身体だったから……。その、私……今まであまり女の人と関わりがなかったから」

「あなたの方が綺麗よ。細いし……」

「確かに太ってはいないけど、いかんせん胸がなくて……」

まだ女性としての成長は始まっていない。これからなのだ。そう言い聞かせるものの、たった二つ年上だけのメリッサの女の体を見てしまうと、自信をなくしてしまう。

（朔が巨乳フェチだったらどうしよう……）

朔は非常にストイックだ。だが十八歳なのだから、そういうことの一つや二つは考えているだろう。テレゼは溜息をついた。

「どうしたの？」

「男ってやっぱり巨乳の方が好きなのかしら」

メリッサは吹き出した。それから、脱衣所のロッカーを叩きながら言う。

「あなたって本当に面白いわね。……もしかして、好きな人がいるの？」

「まあ、ね……一応両思いのつもりなんだけど。十八歳のくせにストイックで……私じゃムラムラしないわけ？　とか思っちゃう」

「それはあなたを大切に思ってるからよ、きっと。まだ若いから……とか思っているのかも」

そうだといいいけれど。でも、少しくらい……と思ってしまうのだ。

そうでなければ朔は、翠の妖しい魅力に靡いてしまうかもしれない。そもそも翠は朔の初恋の相手なのだから。

「彼のことはいいわ、もう。早くお風呂に入りましょう?」

「ええ、そうね」

テレーゼは素早く暗証番号を入力して浴室の扉を開けた。中から女の声が聞こえる。女子風呂なのだから当然のことだが、テレーゼには新鮮だった。

テレーゼが使えるシャワーがないかと辺りを見回すと、突然飛沫が背中に飛び散った。はっとして後ろを見ると、メリッサに冷水シャワーを浴びせている女生徒がいる。

「何してるの!？」

テレーゼはその女生徒の手首を掴む。よく見ると、それは級長のクレアだった。

「何してるって、ピギーを洗ってあげてるのよ」

「私は貴女の心を洗ったほうがいいと思うけど?」

「ふん、ガキのくせに」

「ボキャブラリーが少ないのね。人間のレベルが知れてしまうわ。もっと本をお読みになったらどう? ここの図書館の蔵書は素晴らしいと聞いたけど」

「アンタ、このピギー・アンを庇うわけ?」

メリッサはその燃えるような赤毛から、「アン」とも呼ばれている。もちろんモンゴメリの名作になぞらえてだ。クレアが読んでいるとは思えないが。テレーゼは嘲笑を浮かべた。

「そうよ。私のルームメイトだもの」

「――そう。それなら……」

クレアはテレーゼを突き飛ばし、彼女を浴槽の中に入れる。テレーゼはクレアを睨みつけるが、そんなささやかな抵抗を嘲笑うようにクレアの脚がテレーゼの頭を踏みつけた。

「やめてください! テレーゼはまだ新入りで、何も知らないんです!」

メリッサが叫んで、クレアを押し止める。

「触らないでよ、ピギーのくせに！」

「きゃあっ！」

突き飛ばされ、メリッサが浴室の床に倒れる。テレーゼは咄嗟に自分の頭に乗せられた足首を掴んだ。それを引っ張って無理矢理浴槽に落とす。

「何でこんな酷いことをするの！？」

「そんなの、ピギーがこんなところに来てるからよ。害虫は追い出さなきゃ」

「そうでもしないとクラスを纏められないからじゃなくて？ まあ、教養のない級長様にはそんな世の中の真理なんかわからないわよね」

「アンタ、何様のつもり？」

「そうね……『テレーゼ様』かしら？」

クレアは唇を噛んで、大浴場を出て行った。言葉では勝てないと思ったのだろうか。口論の相手としてはレベルが低すぎる。テレーゼは溜息をついた。

「ああもう、私の血と涙と汗の結晶である髪を踏みつけるなんて許せない！ 大変なんだから！ リンスしたりヘアパックしたり……」

「ねえ、テレーゼ……それより……」

「それよりじゃないわよ！ ああ、腹が立つったら！」

浴室は声が響く。テレーゼの怒りはそれに後押しされ、さらに増幅した。

「ほら、メリッサも早く入って！ 嫌なことは水に流すわよ！」

「う、うん……」

次の日、テレーゼとメリッサがクラスルームに入ると、空気が凍った。クラスメイトの小さな囁きが耳を刺す。

（何、これ……嫌だ）

胸を得体の知れない痛みが襲う。今までに向けられたことのない感情に戸惑っているということなど、テレーゼにはわかるはずもな

かった。気にしていないふりをして窓際の席に座ろうとする。しかしそこには、鳥糞トリモチのようなものがべっとりとついていた。

「誰かが、私の椅子を利用して鳥を捕まえようとしたみたいね。確かに窓際だし、有効かも」

テレーゼは冗談めかして呟き、その粘り気のあるものを取り除こうとした。しかし、突然後ろから背中を蹴られる。怒りに任せて振り向くと、そこには沢山のクラスメイトがいた。女だけではない。テレーゼの背筋に怯えが走った。

今まで、何度も死に瀕してきた。しかし今ほど怖いと思ったときはない。どうしてだろう。別に殺されようとしているわけでもないのに。テレーゼは体を固くした。

(朔……)

級長のクレアが何かを喚きながら、テレーゼを蹴り飛ばす。テレーゼはなす術もなく床に叩きつけられた。

「……っ！」

「まだうちのルールがわかってないみたいだからさ、教えてあげるよ」

「……さぞかしくだらないルールなんでしょうね」

声が震えているのが自分でもわかる。しかしテレーゼは気丈な態度を貫いた。メリッサのためではない。自分のプライドのために。しかし少しだけ開けられた窓から入る風が、嘲笑うようにテレーゼの髪を弄んだ。

「ルールその一。級長である私に逆らってはいけない」

くだらない。クレアの家は確か子爵だったが、そんなものを笠に着て生きる人間は貴族の風上にも置けない。スピネルならそう言うだろう。テレーゼは嘲笑を浮かべた。

「私は私の良心に従うわ。貴女のような人間に従うなんて、虫酸が走る」

クレアはテレーゼを無視して続ける。

「ルールその二。クラスの輪を乱さないこと。何事も一致団結する

こと」

一致団結？ 違う。これは自分を敵に据えることで無理矢理まとまっていた青血隊と同じだ。それが最終的に壊れ、翠の腹に消えない傷を残したことをテレーゼは知っている。

「ルールその三。破ったら制裁。今すぐこれらのルールを守ってくれたら、貴女のスクールライフは保障するわ。こんな目にはもう二度と遭いたくないでしょう？」

「そうね。だけど……こんなものに屈するのは私のプライドが許さないわ」

得体の知れない胸の痛みに打ち勝つほどに、プライドは強かった。メイプルウッドの令嬢の特権を全て失ってもなお、誇りだけは生きている。テレーゼは青の瞳に炎を燈した。

「そう……貴女、後悔することになるわよ？」

「――しないわ」

テレーゼは強い光を湛えたまま、クレアを見た。しばらく膠着状態が続く。先に動いたのはクレアだった。鳩尾を蹴られ、吐き気が込み上げる。しかしテレーゼも負けじとクレアに殴り掛かった。

しかし、三歳年下である上に細身のテレーゼには分が悪い。クレアに吹っ飛ばされ、テレーゼは鳥糞だらけの椅子に頭をぶつけた。金の髪が巻き込まれる。

「……っ、最悪……」

テレーゼは髪から鳥糞を取り除くことに躍起になった。それをクレア達が笑う。胸の痛みは最高潮に達していた。目頭に生暖かいものが滲む。それを堪えようと目に入れたとき、テレーゼとクレアの前にメリッサが立ちはだかった。

「や……やめてください……テレーゼは、悪くない……」

「煩いんだよ、ピギーのくせに！」

「テレーゼは、ただ私に同情してくれてるだけ……だから、もうやめて！」

「煩いって言うてるのがわかんないの、ピギー・アン！」

怒りが胸を刺す。あまりに強いその痛みは胸から頭に上り――テレーゼの視界が、白く染まった。



「ん……」

視界が霞む。目を擦って体を起こすと、誰かの手がそれを押し止めた。

「駄目だよ、寝てないと……熱が三十八度もあるんだから」

「……メレディス……さん？」

優しく深い、森を吹き渡る風のような声には聞き覚えがあった。

テレーゼが怖ず怖ずと尋ねると、その人はくすりと笑う。

「そうだよ。覚えててくれたんだね。……あ、だけど『メル』でいいよ」

「メル……どうして、ここに……？」

「校医の先生が出払って……メリッサが途方に暮れてたから。それより大丈夫かい？ 倒れたって聞いたけど……」

昔から、旅行から帰るとよく熱を出した。疲れると熱を出す体質なのだろう。テレーゼは小さく笑った。

「突然熱を出すのはしょっちゅうなの。慣れないことだらけで疲れたのかも」

「初日はパーティーだったけど、次の日から普通の授業だったからね。そういえば、メリッサが言っていたけど……彼女を庇ったせいで酷い目に遭ったんだって？」

テレーゼはゆっくりと首を振った。

「あんなの……私はこれまで命を狙われてたりしたんだもの。それに比べたら……」

「それとはまた違うものだろう？ ああいうのは、相手の目的が不明瞭だから」

今までとは違うということには気付いていた。それはメルの言う

ように、相手の目的が不明瞭だということなのだろうか。それとも横に朔がないからだろうか。テレーゼにはわからなかった。

「……君は正しいことをしたのにね」

「メル……」

「秘密にしてるけど、実は僕もスラム出身でね。メリッサと同じ街にいたんだ。僕たちは幼なじみなんだよ。でも僕は運よく貴族の人に拾われてね……だから、なんだか彼女に申し訳なくて」

「……メルは悪くないわ。悪いのは、平気で人を傷つけるクレア達よ」

うなだれるメルにテレーゼは優しく言う。そういえばメルは朔と同じ年齢だ。そんな些細な一致が、テレーゼの心を少し暖めていた。
(学校も案外悪くないところよ、朔……)

今夜にでも電話して、そう言おう。いいところばかりのところはないが、悪いところばかりのところもまたないのだと。

「ありがとう。君は本当に純粹で……心が綺麗な人だ」

テレーゼは小さく首を振った。もし朔に出会っていなかったら、クレア達の方についていたかもしれない。朔という存在がなくても、メイプルウッドの令嬢としての矜持を保てたかどうかはわからない。朔に出会うことで、ある部分では潔癖に、またある部分では寛容になった気がするのだ。

「……だけどメリッサの味方をするのは、君にとってよいことにはならない」

「私は頑固なの。自分の意見は曲げないわ」



同じ頃、朔はアメリカの自室に招かれていた。もちろん『根』を伴って、である。紅枝垂を預け、すっかり丸腰になった朔は形通りに跪いた。

「公式な場じゃないから、そんなことをしなくてもいいわ。その

ソファ―に座って」

朔は言われた通りにソファ―に腰掛けた。アメリカはその向かい側に座る。

「騎士の仕事は来週からやってもらうわ。今日ここにあなたを呼んだのは――」

「『紫月』のことですか？」

「そうよ。ちょっとこれを見てほしいんだけど……」

アメリカは白い紙のようなモニターを出す。電源を入れると、そこには眼を見開いた女が現れた。どこかの病院のベッドにいるらしい。

「彼女は何者かに『紫月』を打たれたスラムの娼婦。しかし薬と相性が悪くてね……心が壊れてしまったの」

「お陰で事情聴取も出来へんのや。誰に打たれたかくらいは聞きたかったんやけどなあ」

「普通のドラッグは人によって、こんなに症状に差が出たりしないわ。『紫月』は、人によっては快楽と力を得られるけれど、人によっては心を壊す……極めて劣悪なドラッグよ」

朔は静かに頷いて、ベッドに横たわる女の顔をよく見た。何か喉に引っ掛かる。

「……！」

「――ようやく気付いたか」

『根』はおそらく女の素性を調べるうちに、たどり着いてしまったのだろう。意図的に殺した人間の数から抜いた、忘れてくても忘れられない大量殺人に。

「……ノースウッド街西区に住んでいて、名前はリリー。俺が殺したのは、その兄・トマージだ」

「相変わらずよう覚えてんな。頭パンクせえへん？」

朔は答えずにリリーの画像を見つめる。その眼には動揺の色が浮かんでいた。

「ノースウッド街が一番『紫月』の被害者が多いわ。もちろん他の

街にもいるけれど、売人たちはここを根城としている可能性が高いわ。だから、あなたに……」

「売人を潰せ、と？」

「そう。あなたの罪を雪ぐ^{すす}ためにも」

アメリカはにつこりと笑った。食えない女——目的は国民のためだが、手段は聖人君主とは程遠い。朔の心にある罪悪感を利用しようとしているこのしたたかな女は、処女王エリザベスと並び評されるだけのことはある。朔は唇を噛んだ。

「これは命令よ。もし背けばあなたを逮捕するわ——月峰朔」

今の自分が身軽でないこともわかっていだろう。アメリカ側には『根』がいる。朔はアメリカを睨みながら言った。

「——わかった」

「そう。もしうまく売人を捕らえられたら、報酬はたっぷり出すわよ」

人を脅しながら、アメリカの背筋は伸びている。仮にも人殺しの朔に対して、何も恐れを抱いていないようだ。それが彼女の気品なのか矜持なのか。朔にはわからなかったが、一人の顔が脳裏を過ぎる。

（似ているな、テレゼと……）

二人とも気位が高い。プライドが高いとも言うだろう。朔は差し出されたアメリカの手を取った。

「……期間は？」

「なるべく早くがいいわね。こんな子を出したくないもの。『根』も、王室の金も武器も自由に使って構わないわ」

「武器は十分だ。王室の装飾銃は魅力的だが、装飾銃は嫌いなんだ」
胸の奥がちりと痛んだ。まさかあの事件の記憶を掘り返されるとは思わなかったのだ。

「——話はそれだけですか、女王陛下」

「え、ええ……」

「——帰るんか、朔？」

朔はゆっくり頷いた。『根』は見送るつもりなのだろう、立ち上がる。しかし朔はそれを断った。

「……少し、一人にしてくれ」



朔はノースウッド街が見えるバーで強い酒をあおっていた。今のこの姿のままでは街に入ればしない。入りたいとも思えなかった。

「ちよっと飲み過ぎじゃないかい、兄ちゃん？」

「……そんなことない」

元々酒には弱い。しかし何故か全く酔えなかった。

アメリカが自分を利用するのも道理だ。それはわかっている。スラムの情報は錯綜しやすい。『根』だけにやらせればかなり骨が折れるだろう。しかし、無理に蓋をしたものを掘り返され混乱したのも事実だった。

正しいことをしたとは思っていない。だが、彼らが正しかったとも言えない。朔は溜息をついた。

(テレーゼのためには、割り切るしかない……)

喉をアルコールで焼くかのように酒をそそぐ。しかしそれを、白く細い手が止めた。

「……飲み過ぎですよ」

「翠……どうして……」

「スピネルから聞いていませんか？ 英国に戻って来たんです」

多分『飛ん』で来たのだろう。翠ならばわざわざ飛行機を使う必要はない。翠は朔の手から奪った酒を、ゆっくり口に含む。

「何かあったんですか？」

「――三十四人」

「え？」

「俺がノースウッド街で殺した人の数だ。女も子供関係なく、殺した」

あえて殺した数に入れてなかったが、正確に覚えている。
血で染めた。

自分の体を、墨染桜を。

そして灰色のスラム街を。

「――おれは、ひとごろしだ」

だんだん呂律が回らなくなる。翠は子供をあやすように、朔を自分の膝の上に寝かせた。

「知ってますよ、そんなこと。それでも私は君が好きです」

「みどり……」

「どんなに迫害されても、痛めつけられても、朔は生きたかったんでしょう？　そこがたとえスラム街でも。……私がそうだったように」

まるで聖女のように翠は笑う。髪を梳く手を懐かしいと思った。

昔も確かこんな風に翠と話をした。風邪を拗らせたとき、薄味の卵粥と一緒に。

「……帰りましょう、朔。いくらなんでも冷えますよ。話は私のアパートで聞きますよ」

朔は緩慢に頷き、その場に崩れ落ちた。どうやら急激に酔いが回ったらしい。翠はゆっくりと朔を抱きかかえた。

「君は軽いですね……相変わらず……」

翠は朔を抱きかかえたまま金を払い、店を出た。そのまま人のいないところに行き、一気に『飛ぶ』。翠はカードキーで扉を開け、黒色のベッドに朔を横たえた。

「朔……」

耳元で囁くと、朔は微かに肩を震わせた。相変わらず敏感だ。翠はそのまま朔に口吻する。アルコールの味がした。おそらくジンだろう。キスだけで酔ってしまいそうだ。

「全く……まだ十八のくせに、こんな強い酒なんか飲まないでくださいよ」

もう一度唇を合わせ、翠は僅かに開いた唇の隙間から自分の舌を

侵入させた。力の抜けた朔の舌を搦め捕り、酒の味を分かち合う。どちらのともつかない唾液が銀の糸になって溢れていく。翠は貪るように、それでいて慈しむように口内を蹂躪し続けた。

「――青血石の宝石言葉って知ってますか？」

息が続かなくなったところで唇を離すと、銀の糸が二人を繋いだ。朔は微かな寝息を立て続ける。どうやらアルコールが効いているらしい。翠は微笑しながら瞼に唇を落とす。

「青血石の宝石言葉は『渴望』というのですよ」

まるでグラスファイバーで出来たような、人間的な汚れのない、超越者のそれにも似た肌をなぞる。神話にある、その正体が石であるとも知らずに女を追い続けた憐れな王のように、朔を求め続けた。

「届かないものほど美しいとは、真実ですね」

あと一度だけ。

そう思って唇を合わせた瞬間、朔の携帯電話が鳴った。翠は溜息をつきながら表示された名前を見る。

「テレーゼか……」

意地悪しないで出ておこう。翠は通話ボタンを押した。

「どうしたんですか？」

《何で朔の携帯にかけたら翠が出るのよ……》

「朔が酔い潰れて寝ているからですよ」

え、とテレーゼが声を上げた。朔がアルコールを口にするのはほとんどなかったから意外に思っているのだろう。

「ところで朔に何か用事ですか？」

《特にないけど……声が聞きたくて》

「……何かあったんですか？ 声がいつもと違いますよ」

テレーゼは嘘が苦手だ。翠はその声にある種のわざとらしさを感じ取っていた。

《このくらいは覚悟してたわ。でも実際自分が標的になるのは……違うわね》

「いじめ、ですか？」

それは朔やスピネルが一番懸念していたことだ。たとえばテレゼに同年代の友人が出来る機会を奪ってしまってもそれを阻止しようとしている。既に遅いが――――翠は軽く溜息をついた。

「ある意味命を狙われるより恐ろしいことです。ましてあなたは今まで蝶よ花よと育てられたメイプルウッドの一人娘だ」

それを奪ったのは自分だが。翠は目を伏せた。

《朔なら『帰ってこい』と言うわね。だけど今の言葉はとても……貴女らしいわ》

「そうですか？」

《貴女は私が自活出来るようにうるさく言っていたじゃない。まるで小姑のように》

「あなたにとって私は小姑のようなものでしょう。私と朔は姉弟のようなものですから」

テレゼがしゃくり上げるのが聞こえる。翠は苦笑しながらテレゼに言った。

「頑張れ、とは言いません。あなたが頑張ったところで何かが変わるわけではない。だから、つらくなったらいつでも電話してくれて構いません。朔には言いづらいでしょう？」

《黙っててくれる……？》

「あなたが堪えられる間は黙っていきましょう」

少しだけ嘘をつく。スピネルならばすぐに見破るが、テレゼにはわからないだろう。朔は寝息を立てる朔の頭を撫でながら、テレゼが話すのを静かに聞いた。

ルームメイトのメリッサのこと。

クレアとのこと。

そして生徒会長であるメルのこと――――

順番はめちやくちゃで正直わかりづらかったが、話し終わったテレゼは少しすっきりしたようだった。

「―――そうですか。でも悪いことばかりではないようで、安心しま

した」

《私はすっかりしたわ。デトックスってやつかしら》

「私は岩盤浴か何かですか？」

冗談を言っていると、テレーゼはくすりと笑った。少しは元気になったようだ。

《ねえ、翠……？》

「何でしょう？」

《朔の誕生日……何がいいと思う？》

「何で私に聞くんですか？」

翠は苦笑した。おそらく朔に聞いたところでまともな答えは返ってこないことはわかりきっている。

《メリッサが好きな人へのプレゼントが武器のお手入れセットはあんまりだって言うのよ？》

「……確かにそれはあんまりですね」

《でも朔が好きそうなものはあまり知らなくて……》

「それこそ、そのメリッサさんに相談してみたらいいじゃないですか」

《——それもそうね。じゃあ、もう消灯の時間だから切るわね》

「——ええ」

翠はゆっくりと電話を切り、朔のポケットに携帯を入れた。朔が僅かに身じろぎする。

「やっぱり……言った方がいいですかね……」

テレーゼには普通の少女として生きてほしい。つまり、ある程度は自活出来るようになってほしかった。そのためには通信だけでは不十分だし、家庭教師チューターをつけるには金がかかりすぎる。寄宿学校が一番安価なのだ。

「朔のほうも大変なようですし……しばらくは黙っていきましょう」

翠は呟く。実は朔が、全ての会話を聞いていたとは知らずに――

第二話『迷いの途（ミチ）』（後書き）

スピネル「本当はすごくシリアスなシーンなんだろうけど、初めの方の、テレーゼとクレアがやりあってるところって……風呂場なんだよね。サービスシーンとは思えない」

翠「作者は『この会はサービスシーンだらけ』と言ってましたよ。私も脱げばよかったですかね」

スピネル「うーん……いいよ、翠は」

翠「それはどう解釈すればいいんでしょうか……？」

スピネル「翠は脱がなくても……設定が『妖しい姐さん』だし。そういうえば、一つ気になるんだけど……」

翠「何でしょう？」

スピネル「一部だと小面のときと普段と口調が違ったじゃないか。あれはどうなったんだ？」

翠「名前の呼び方は小面バージョンで統一してますよ。『朔』と呼んでいますし。普段の口調が変わらないのは、私が猫かぶりだからです」

スピネル「え……自分で言っちゃうんだ……」

第三話『マザーグースの狂気』



Ring-a-Ring-o' Roses,
A pocket full of posies,
Atishoo! Atishoo!
We all fall down.

その輪には、いつも入れなかった。きつく繫いだ手は決して離れず、朔を弾いていた。

「……頭痛い」

「そりゃあ、あれだけ飲めば頭も痛くなりますよ」

「ん……」

翠は苦笑しながら水を朔の目の前に置いた。ぼんやりと霞む頭にマザーグースが響く。朔は窓の方を見た。どうやら幻聴などではなく、外で子供が歌っているらしい。

「ここはスピネルが経営している孤児院が近くてね。いつも子供の声が聞こえるんですよ」

「へえ……」

「朝ご飯、食べられますか？」

「ん」

朔は小さく頷いた。焼き魚と味噌汁の匂いがする。日本食など久しぶりだ。朔はゆっくりとベッドから体を起こした。

「――今日は何か予定ありますか？」

「『根』からの情報次第だな。女王陛下の命令だから逆らえないし」「女王陛下下？」

「――あー、言ってなかったか。まあちょっと厄介なことになったるんだ」

とりあえず食べよう、と食卓につくと、翠が深く溜息をついた。

「――どうしたんだ？」

「いえ、ちょっと……」

翠は知らないのだろう。朔が昨日のテレゼとの会話を全て聞いていたということを。それで翠が悩んでいるとしたら、言ってしまった方がいいだろうか。どちらにせよ、アメリカに課せられた裏の仕事を片付けるまではテレゼを連れ戻せはしない。

「――テレゼのことなら」

翠は微かに肩を震わせて箸を止めた。どうやら凶星だったらしい。朔は苦笑を浮かべながら続ける。

「……全部聞いたから」

「女同士のトークを盗み聞きするなんて、朔も無粋なことをしますね」

「翠も、人の携帯に出るなんて非常識だろ」

翠は苦笑してワカメと豆腐の味噌汁を一口だけ飲む。朔も同じように、椀に口をつけてそれを飲む。白味噌と赤味噌をブレンドした、懐かしい味だ。花雪の作る味噌汁と同じ味――

「それで、どうするつもりですか？」

「女王の課題をクリアするまでは通わせる。だけど……」

朔は目を伏せた。命の危険に晒すか、それとも心を傷つけるか。本当はどちらも嫌だ。何とかして問題を解決出来ればいいのだが。

「……ルームメイトを見捨てろと言うわけにもいかないしな。俺が乗り込むわけにもいかないし……」

「乗り込めばいいじゃないですか？」

「……俺をモンスターペアレントにするつもりか」

「本当にいじめられてるんですから、別に構わないでしょう。まあ……普通はやりませんし、やったところで拗れるだけです」

確かにそうだ。それに、テレゼだけがいじめられないのでは意

味がない。テレーゼは他人がそういう目に遭っているのを見過ごすことが出来ない質だ。同じことを繰り返す可能性は十分ある。

「教師はあてにならないしな……」

「学校とはそういうところだと割り切れもしないですしね……。テレーゼに逆らえない雰囲気を作るのも、一番年下では難しいですし……いっそスピネル婚約者という事実を捏造でもしましょうか？」

「貴族の力を利用するってわけか。確かに有効だが、そんなことをした日には一生テレーゼに口きいてもらえなくなると思う」

「……ですよね」

そもそもテレーゼが潔癖でなければこんなことにはならなかったのだ。朔は溜息をついて味噌汁を飲み干した。

「とりあえず、こまめに連絡を取ってメンタルのケアをした方がいいですね」

「あともう少しでクリスマス休暇だしな……それまでは……」

その傷みを知りながら、何も出来ないなんて。朔は唇を噛んだ。いっそ辞めさせてしまおうという気持ちもなくなったわけではない。

「——この話はやめましょう。埒があきません。ところで、女王陛下の課した仕事とは一体何なんですか？」

「それは——」



目を覚ますと、もう昼になっていた。熱はすっかり引いていたが、念のためにと休まされたのだ。テレーゼは欠伸をしてベッドから起き上がった。外で子供が遊ぶ声が聞こえる。多分昼休みなのだろう。

「一年生かな……」

Ring—a Ring—o' Roses,
A pocket full of posies,
Atishoo! Atishoo!

We all fall down.

手を繋いで輪になり、マザーグースを口ずさむ。そんなことは今までしたことがない。テレーゼは目を伏せた。今まで娯楽は本しかなかったし、マザーグースもあまり教えてはもらえなかった。もちろん、電子書籍が主流になる中で、高額な紙の書籍を買い与えられていたのだが。

「そういえば、フェイの『That's all there is.』にもこの歌が出て来たわね」

本を引っ張り出し、ページを繰る。何度も読んだ本だから、どこにそれがあるかも覚えてしまった。子供の無邪気な遊びを静かに見つめていた殺し屋が、その子供達を殺してしまうシーンだ。

このシーンについて、朔に聞いたことはない。本当のことなのか、それともフェイのオリジナルなのか。今までは虚構だと思っていた。しかし輪になった子供達がスキップしたりしゃがんだりするのを見ると、もしかしたらと思うてしまう。

「……弱ってるのかしら、私」

朔が人殺しだということを理解はしていた。だけどその心に近づけたのは初めてだ。いつもはその間には深い溝があったというのに。まるで熱病のように殺意が鎌首をもたげる。テレーゼはきつく自分の体を抱いた。

鐘が鳴り、子供達が校舎に戻っていく。それを見届けてから、テレーゼは携帯電話を手を取った。メールが五通も届いている。しかも全て朔からだ。

「朔……」

朔からのメールはいつも短い。しかし五通のメールのほとんどは、普段なら決して送ってこないような世間話ばかりだった。

「不自然すぎる……話したわね、翠……」

テレーゼは五通のメールを全て保護してから、そのメールにゆっくりと目を通した。

「女王の騎士って……いきなり下級貴族じゃない……」

どうやら裏があるらしいことは仄めかされている。だが騎士になれば安定した高額給料が得られるだろう。テレーゼは顔を綻ばせた。

「でも、私以外の人間を守るというのは気に入らないわね」

騎士は大多数の一人で守護者とは違うが、それでも自分以外の人間の護衛だということには変わりない。テレーゼは溜息をついた。

「やめろとは言えないし、朔には他に出来る仕事なんかないわよね……」

国籍は英国だから問題なく全ての職業につけるが、義務教育すらろくに受けていない朔には就ける職業などほとんどないだろう。アメリカ直属の騎士になったことすら奇跡のようなことだ。

「騎士、か……もう私の守護者ではないのね……」

頬に何か生暖かいものが伝う。それが涙だと気付くのに、しばらくかかった。

「Ring—a—Ring—o— Roses, — (薔薇の花輪を作りました)」

マザーグースを口ずさむ。日本の「かごめかごめ」のように恐ろしい意味があるとも言われているこの歌は、それでも普通の子供の代名詞のようで、懂れてしまうものだった。

Ring—a—Ring—o— Roses, — (薔薇の花輪を作りました)

A pocket full of posies, — (ポケットを花束でいっぱいにして)

Atishoo! Atishoo! — (はつくしょん! はつくしょん!)

We all fall down. — (皆で一緒に転びました)

「朔の馬鹿……」

自分のことを考えてくれているのはわかる。だけど朔は気付いていない。テレーゼが自分と似通った存在であることに。テレーゼは枕をきつく抱きしめた。

確信があった。朔には無邪気に遊ぶ子供を殺すだけの狂気が潜んでいる。そして、自分にも。



朔の話聞き終えた翠は深く溜息をついた。沈黙が流れる。先にそれを破ったのは翠だった。

「魔力を人為的に付与するというのは、千怜さんよりも柏木の研究に近いですね。柏木が英国にいながら、メイプルウッドとの関係が切れていたことから考えるに……その薬を柏木が作り、誰かに渡した可能性は高いです」

「柏木……」

「父が『紫月』の開発者なら、その薬との相性があるような……不完全な薬であることの説明もつきます。間違はなく死んでいるんですから」

朔は翠を一瞥し、すぐに目を逸らした。おそらく無意識だろうが、翠は柏木を「父」と呼んだ。それが魚の小骨のように引っ掛かる。翠は父親への情を未だに捨てていないのだ。逆に憎めば憎むほど、情が募ってしまうのかもしれない。

「……これはあくまで予想ですけどね。もしかしたら、英国にも魔術を研究している機関があるのかもしれませんが」

「だが、柏木と女王に何らかの関係があったわけではないだろうな……」

もしあるなら、『根』が真っ先に気付くだろう。『根』からかつてこっそり教えられた反アメリカ勢力の顔を思い起こす。変わり者の彼女には敵が多い。特に叔父であるディーフェンベーカー公が彼

女を亡き者にしようとしているのは有名だ。だが、そのあたりとの関わりもおそらくないだろう。

「科学者というのは、自分の研究がどれほど試したくなるものです。爆弾を作れば実験したくなる。そしてその威力を目の当たりにして恐怖を覚えてしまうものです。千怜さんも魔術の威力に恐怖を覚えた一人です。柏木はそれを臆病だと罵りました。柏木とはそういう男です。もしかしたらただ威力を試すただけに薬を渡したのかもしれない。私はもう、他人に魔力なんか与えたくないですけどね」

「翠……」

「普通の人間に魔力を与えれば、その人間の未来を振曲げることになります。スピネルを見ればわかるでしょう？」

確かにそうかもしれない。しかし、翠が彼に力を与えたからテレ―ゼが救われたのだ。もしスピネルが何の力も持っていなかったら、おそらく今の瞬間は存在しないだろう。だが翠は、自嘲的に微笑する。

「――私は紛れも無く柏木の娘なのだと感じる瞬間が多々あります。私は自分の研究を人体で試したいという欲求に抗えなかった……それ、あんな子供に……」

「翠……」

「『紫月』の件、協力は惜しみませんよ。自分の数多の罪が、それで贖えるとは思いませんが」

翠は決意を秘めた目で笑った。朔は翠の手を取って笑う。

「……ありがとう」

「どうして朔が礼を言うんです？」

「俺と『根』だけじゃ不安だったし……何より、ノースウッド街に一人で行く勇氣はまだ……ないから」

「――行くんですか？」

朔はゆっくり頷いた。行かなければ始まらない。ノースウッド街は確かにスラムだが、貴族との関わりがある場所もある。薬の出所

の一つは、おそらくそこだろう。そこにはいくら『根』でも、入り込むのは難しい。それに『根』を隠れみのにして動きたいから、もう一人協力者が必要だったのだ。

「……翠」

「何でしょう？」

「――ノースウッド街に行く。なるべく早く仕事を終わらせたいからな」

「二日酔いは大丈夫ですか？」

苦笑しながら翠が聞く。答えはわかっているだろう。

「――俺は一応、凶悪な殺人者だからな」

ノースウッド街の外れにある高級娼館の前で、翠は軽く溜息をついた。

「わざわざ私が男装して、朔が女装する必要はあるんですか？」

「顔が割れてるかもしれないからな。女は顔を隠しやすい」

翠はいつもよりも少し華美なスーツを着ているが、朔はこのスラムの娼婦と同じような粗末なワンピースを着ている。擬態で目を黒く染め、魔術で髪もわずかに伸ばしている。魔力はそんなに必要がないが、維持するのが難しい魔術だ。

「性転換の魔術とか、整形の魔術とかあればいいんだけどな」

「魔術はそんな都合のいい力じゃないんです。ところで、ここで何をするんです？」

「『紫月』の売人の正体を掴むために、客として潜入する。薬の回収もしたいな。成分がわかれば、解毒剤も作れるかもしれない。ここでは、翠はまだ父親が生きているために爵位を持たない道楽貴族のどら息子。俺はそいつに買われた、初めてで右も左もわからない新人娼婦だ」

翠は怪しく笑う。朔はそれを見て、やはり翠を選んでよかったと思った。かつて同じことを『根』やフェイとやったが、二人ともあまり気品があるとは言えない。バレやしないかとひやひやしたもの

だ。それに引き換え、翠はどこか上品である。おそらく女性故なのだろう。

「爵位は子爵あたりがいいですかね。それなら……ジョン・オールドリッチという、うってつけの人物がいます」

「社交界に顔を出しているような奴では駄目だ。顔が割れる」

「社交界に顔は出しているけれど、問題はありません。彼は特殊メイクおよび変装の天才で、誰も素顔を見たことがないというおかしな人であり、かなり好色な人間です。私とも面識がありますから、いざとなったら私に変装していることにすればいい」

翠は微かに笑う。社交界や貴族の世界に関しては、やはりフリードリヒの秘書をしていた翠の方が詳しいらしい。朔は笑みを返し、娼館のドアを開けた。

スラムの中とは思えない。内装には悪趣味な程、金を使っている。今は金がほとんど採れないというのに。朔は小さく溜息をついた。

執事風の格好をした、娼館の主人が翠に近付く。

「いらっしゃいませ。本日はどうなさいますか？」

「僕はここに来るのは初めてなんだ。オススメはあるかな？」

「それでしたら、この薄汚い娘を美しく飾り立ててから、奥にいる娘たちと混せて愉しむのはどうでしょう？　少しお高いですが人気ですよ」

そのコースがいい。手を握ってそう伝えたと、翠は主人に笑いかけた。

「それにしよう。ところで、これに服を着せるのは僕で構わないね？」

「ええ。真っ直ぐ進んだところにある部屋に様々な衣装を用意してあります。好きなものをお選びください」

「わかった。ああ、あと奥の女達も着替えさせておいてくれ。ここには和服もあるのだろう？」

主人は嫌らしい笑みを浮かべて頷いた。翠も同じような笑みを返す。かつては万能秘書だっただけあるのかもしれないが、何だか複

雑だ。

「行くぞ。たっぷり可愛がってやる」

（微妙に楽しんでる気がしないでもないな……）

このようなところに来ると、何故かそういう嗜好を目覚めさせてしまう人もいる。かつてフェイに服を脱がされたのもこういうシチュエーションだった。翠はまだ、本当は女だと知っているからいい。フェイの時は、本気で斬りたくなった。

奥の部屋に入ると、翠は服を選び始めた。朔は椅子に座ってそれをぼんやりと眺める。

「他に客はいないんですか？」

「いや、だいたい俺らと同じコースを選ぶからな……大変なことになってると思う」

「道楽貴族の乱交パーティーということですか。くだらない」

「ここはまだ、本番は禁止だからマシなほうだと思うけどな。まあそれ以外はありなんだけど」

翠は黒地に八重桜の着物を少しアレンジしたような、所謂和ゴス風の服を手を取った。朔は溜息をつく。

「頼むから普通のにしてくれ……」

「問答無用」

翠は笑って、朔の着ている粗末なワンピースを脱がせにかかった。朔は体をよじって抵抗する。

「……朔」

「っ……耳元でしゃべるなッ……」

「私は朔が好きです」

「……な、んで……このタイミングで……」

わけがわからないままに口づけられた。離そうと開いた僅かな隙間から素早く舌が入ってくる。抵抗出来ないまま、腰の力が一気に抜けた。

「……っ、はあっ……どうして……」

「朔を見ていると気が狂いそうになるんです。触れたくて仕方がな

い」

「今は、仕事中だろ……」

「そうですよ。だから朔は初々しい娼婦を演じていればいい」

悪寒が走る。翠の狂気じみた心を見せられた気がした。道を歩いている子供を見て、ふとその腹にナイフを突き立てたくなるような衝動にも似ている。朔は服を着せる翠の指に耐えた。狂気は狂気に引きずられる。何かを剥がされていくような気がした。

「翠……」

「今の私はオールドリッチ卿ですよ。さあ、着替えも終わったことだし……行きましようか。——ところで、ここの代金は？」

「領収書取って。後でアメリカ陛下に請求するから」

翠は「そうですか」と呟くと、朔の手を引く。魔境とも言える部屋の扉を開けると、葡萄と血を混ぜたような甘い匂いがした。

「……何やらマズイ気配がしますね。この匂い、何だかわかりますか？」

朔は首を振った。どこかで嗅いだ気もするが、思い出せない。

「青血石を昇華するとかいう匂いがするんです。でもあれを昇華してしまうと何故か性質が変化してしまうんですよ」

翠は朔の口を塞ぎながら言う。

「五感を敏感にするけれど、頭は麻痺します。こういうところには似合いの性質ですね」

「頭がクラクラする……どうしてお前は平気なんだ……？」

「私は特殊ですから。それより……続行出来ますか？」

「ああ……」

頭に紫色の靄がかかる。朔は体を翠に預けた。しかし、肌が触れると声が上がってしまう。それに耐えながら前に進むと、朔の目には虚ろな目をした沢山の女と金髪の男が映った。

「——おや、先客がいるようだな」

「先に楽しんでるよ。——柏木翠」

「何のことかな？」

翠の声には微塵の動揺も滲まない。しかしその声の主はくつくつと笑った。

「そちらのかわいい娘は月峰の息子か？ 私はオリヴァーディーフエンベーカーだ」

朔と翠は同時に目を見開いた。それはアメリカの叔父の名だ。朔は頭を押さえながらガーターベルトに差したナイフを抜く。

「そんな物騒なものを出すのはよせ」

翠に口を塞がれていても、その隙間から甘い匂いが侵入する。指先から力が抜けそうになる。得物を離さないでいられるのはひとえに訓練の成果だろう。

「……朔！」

朦朧とした意識に、謔言のようにマザーグースが響く。しかし少しだけ歌詞が違う。朔の頭は、それに気付けないほど麻痺していた。

Ring—a—Ring—o' Corpses, —（死体の輪を作りましょう）

A pocket full of poisons, —（ポケットを毒でいっぱいにして）

Atishoo! Atishoo! —（はつくしょん！ はつくしょん！）

We all fall down. —（みんなで転びましょう）

歌につき動かされるように、朔はゆらりと動き始めた。翠はそれを渾身の力で止める。

「【縛せよ】！」

翠は朔の体を魔術の鎖で拘束し、意識を奪う。そしてオリヴァを睨みつけた。

「貴様……っ！」

「どうやら奴の話は本当だったらしいな。マザーグースを歌う子供を殺したというのは」

「記憶を引き出したのか……。『奴』とは誰だ？」

「このスラムの殺された王——その、弟さ。君の父親が引き合わせてくれたが、死んでしまったから……協力してるんだ」

オリヴァの狙いはアメリカだ。そして協力者の狙いはおそらく朔だろう。翠は右手の甲から紅い珠を出した。

「【喰らい尽くし給え】！」

「……その力に対抗する術がないとでも？ 【日と月を、嘲り憎む

2匹の獣。灼熱を飲み込む屈強な身体、魔力を飲み干す巨大な器。

追って追いつき天災降らしめ、飲めよ飲み込めスコル・ハティ】！」

二匹の獣が現れ、全てを吸い尽くすはずの翠の紅珠を飲み込んでいく。翠は目を見開いた。

「……っ！」

「これを喰われたら、お前は半分の力しか持たない出来損ないだ。

『怪物』がこの程度とは……笑えるな」

「……っ、仕方ない……」

とりあえず逃げるのが最優先だ。翠は朔の右手を掴み、中指を強く噛む。血の味が広がる。同時に指を鳴らすと、オリヴァの体が水の檻に包まれた。動きを止められるのは一瞬でいい。

「『転送』！」

「……っ！」

翠はベッドに朔を横たえようと、胸を押さえて倒れ込んだ。まさか紅珠を奪われるとは思わなかった。だが裏に柏木がいるなら、その力に対抗する術を用意していてもおかしくはなかった。気付けなかった自分の失態だ。朔から少しだけ力を奪って逃げて来たが、回復するには時間がかかるだろう。

「収穫はありましたけどね……」

朔が殺したスラムのボス。その弟が敵であることはわかった。おそらく『紫月』で魔術集団を作りだし、アメリカと朔を殺すつもり

なのだろう。あんな風に、娼館で香のように『紫月』を焚いていた
ら、すぐに皆中毒になってしまう。あの中に魔術に目覚める者もい
るだろう。時間はあまりない。

「復讐……否定できないのが、悲しいですね」

自分も少し前までは復讐に燃えていたのだ。それをあっさりと断
罪することは出来ない。翠は息を吐いた。

「対策をしなければ……スピネルにも協力してもらおうかありませ
んね」

一番戦闘力を有する朔が、『紫月』に参っていては話にならない。
回復が間に合うかどうか分からない。翠は唇を噛んだ。



「あの人がドクターの娘とやりあったらしい。ま、こっちの優性勝
ちみたいだけど。でも使えない娼婦の始末は失敗したって。ドクタ
ーの娘だけあって判断は早いみたい。いくら逃げるためとはいえ、
躊躇なく力を奪ったみたいだしね」

「勝てるの……？」

「だって、柏木翠を殺す理由はない。あの化け物も『紫月』の影響
はしっかり受けるみたいだし……僕の正体も暫くはバレないさ」

男は言葉を切って、校庭で遊ぶ子供を見つめた。ブレザーとワイ
シャツを脱ぎ捨てると、右肩から左の腰にかけて大きな傷がある。
女はその傷に唇を寄せた。

Ring-a-Ring-o' Roses,
A pocket full of posies,
A tishoo! A tishoo!
We all fall down.

手を繋いでしゃがみ込む子供——そう、ちょうどその時に自分は

斬られたのだ。三十四人目として。

「アイツは僕が死んだと思ってるだろうし……何より、ボスに弟なんていないんだから」

男は笑いながら口ずさむ。

R i n g — a — R i n g — o — C o r p s e s, — (死体の輪
を作りましょう)

A p o c k e t f u l l o f p o i s o n s, — (ポケ
ットを毒でいっぱいにして)

A t i s h o o ! A t i s h o o ! — (はっくしょん! はっ
くしょん!) —————

第三話『マザーグースの狂気』（後書き）

翠「作中のマザーグースの訳、及び替え歌は作者が辞書を引きながら作ったものですので、悪しからず」

テレーゼ「かごめかごめみたいなものよね、これ」

翠「そうですね。怖い解釈があるところもそうですし」

テレーゼ「薔薇色の発疹はペストの兆候で、ポケットの花はペストを防ぐための薬草、くしゃみは末期症状、そして最後には皆倒れて死んでしまったっていう解釈があるのよ。本当かどうかはわからないけど」

翠「ちなみに作者がイギリスに血生臭いイメージを抱いたのは、マザーグースの『誰が駒鳥殺したの？』らしいですよ」

テレーゼ「じゃあ京都は？」

翠「陰陽師の見すぎでしょう」

テレーゼ「あ、それで片付けるんだ……」

第四話『糸』



朔が目を開けると、翠の翡翠色の目が心配そうに自分を覗き込んでいるのが見えた。

「みどり……？」

「具合はどうですか？」

「まだ、ちよつと頭がクラクラする……」

翠は朔の額に手を当てた。水を使う仕事でもしていたのか、その手は冷たい。火照った体に、それはどこか心地よかった。

「昨日のこと、覚えてますか……？」

「何となくは……頭に靄がかかったみたいになって……殺したくなつた」

「あれから少し考えてみたんですよ、データを纏めるのも兼ねて。おそらくディーフェンベーカー公はあの娼婦たち、そして私を始末するつもりだったんでしょう」

翠はコーヒーを飲みながら言う。その香りが朔の頭をも覚醒させた。

「――自分の手を汚さずに、か」

「あれはおそらく一種の催眠でしょう。薬で意識を朦朧とさせた上で、あの歌を聞かせて殺しへと誘導する。魔術でも何でもありません。それで、私の父が引き合わせたという公爵の協力者ですが……」
「――それが引っ掛かるんだ。ゼラスに兄弟はいなかったはずなんだ」

ボスだけに、兄弟がいればすぐにわかるはずだ。朔は腕組みをした。

「妹がいたという話も聞きませんか？」

「……お前じゃあるまいし。ゼラスは独りっ子だ。あのスラムでは

子供は一人までと決められていた」

「決められていた？」

「人が増えすぎるといけないからってな。当時の国王が決めたんだ。でも娼婦が妊娠してしまうことがあって……そういう奴はゼラスに殺されていた」

「恐怖政治というわけですか」

翠は嘲笑を浮かべた。外の人間から見れば、時代遅れのコミュニケーションなのだろう。しかし朔にとっては、それが世界だったのだ。

「元々国から支払われる援助金を均等に分配するために作ったリダーなのでしょう？ そんな恐怖政治で大丈夫だったんですか？」

「スケープゴートがいたからな。お前にもわかるだろう？」

青血隊にとってのスケープゴートはテレーゼとフリードリヒで、翠はそれを定めた人間だ。翠は小さく溜息をつきながらネクタイを結び始める。

「皮肉ですか？ ……でも、それなら腑に落ちないことがあります」

「何故花雪を殺したのか、か？」

「そうです。スケープゴートを殺せば民衆の不満が自分に向く可能性がある。私のように、それでもやらなきゃならない事態だったわけでもないでしょう？ 見せしめならもっと目立つやり方をすればいい。強姦致死なんて……朔を怒らせるくらいしか効果がないでしょう」

「さらっと強姦致死とか言うなよ……女なんだからさ」

翠は不機嫌そうに顔を逸らした。相変わらず男装はやめないが、仕種が少し女らしくなった気がする。本人は多分気付いていないだろう。

「……変なところにツツコミを入れないでください。とにかく、花雪の死には腑に落ちないところが多い」

「過失なんじゃないのか？」

「花雪は力を持たないのに、何故そんなことをする必要があるんです？ 今の朔なら屈辱を味わわせて、おとなしくさせる方法もあり

ますが」

花雪は普通の人間から言ったら無力かもしれない。だが、と朔は食い下がった。

「花雪の『戦意を失わせる』という力について奴らが知っていたなら？」

「可能性がないわけではありません。何らかの事故で力を出した可能性もありますし……朔を見くびっていた可能性は大いにありますしね。この問題は、本人が死んでしまった以上説明するのは不可能です。今すべきなのは……『ゼラスの弟』の正体を掴むことです」

「そうだな。でも実際、皆目見当もつかない……弟みたいな存在なら腐るほどいたし、その誰もが俺を恨んでいるだろう」

翠は溜息をつきながら上着を羽織る。どこかに出かけるのだろうか。朔は首を傾げた。

「どこか行くのか？」

「今日から仕事なんです。スピネルの秘書としてね。まあ、前と違って第二秘書ですから仕事は大分楽ですが」

「そうか」

「朔は寝ていていいですよ。家に帰ってもどうせ一人でしょう？」
一度起きたら、もう寝られない。どうせなら『根』と連絡を取った方がいいだろう。朔はゆっくりと立ち上がった。

「……あれを吸って、よく立ってられますね。天然には特に毒ですよ」

「そうなのか？」

「青血石は基本的に液体か固体の状態で使うものです。昨日あの部屋で焚いていたのが本当に『紫月』なら、『紫月』はおそらく固体から昇華して気体にした青血石を、何らかの方法でまた固体に戻したものでしょう。普通の青血石とはもはや違う存在になっています。朔がそれを体に入れることは、A型の血をB型に入れるようなものです」

無学だから、翠の話はよくわからない。しかし『根』ならば何か

を掴むかもしれない。朔は翠と一緒に身仕度を整え始めた。

「……翠、朝は食べたのか？」

「ええ。生憎トーストくらいしかありませんが、食べてもいいですよ」

「いや、『根』に出してもらおうから」

「そうですか」

翠はリビングの黒いソファーの上にある鞆を手にとった。そして黒い革の手袋を嵌める。

「朔、携帯取ってくれませんか？」

「ん、わかった」

机の充電スポットに置かれた携帯を取って翠に手渡そうとするが、その手は何故か擦れ違った。鈍い音が聞こえる。

「翠！」

「……っ、ただの貧血ですよ。気にしないでください」

「でも……」

ただの貧血、と言うが昨日が昨日だけに心配だ。しかし翠は素早く立ち上がり、いつものように笑みを浮かべながら携帯を受け取る。

「そんなに心配なら、血を分けて下さい」

「は……？」

「冗談ですよ。私は吸血鬼じゃありません」

翠は笑いながら指を鳴らした。瞬時に姿が消える。どうやら『飛んだ』らしい。クール社なら突然出現しても驚かれはしないだろう。だが先程の翠の態度がどこか引っ掛かった。

「無茶するからな、翠は……」



「青血石にそんな秘密があったとはなあ……世の中の的には謎の鉱物なわけやろ？」

「成分の解明より性質の解明が先になってしまったらしい。その辺

は青血隊の奴らが詳しいだろうけど」

「今は研究に戻ったんやってな。まあ、それは置いて……そのゼラスの弟ってのが引っ掛かるな」

『根』は頭に何本ものコードを繋げ、コンピュータを何台も同時に動かしながら言った。

「とりあえず、ディーフェンベーカー公と柏木の関係は掴めたんや。だがこの柏木が厄介でな。自分の痕跡をほとんど消してやがんのや。相当頭はええみたいやな」

「一応翠の父親だしな……」

「それやないって、オフィーリア。それはさっきも出したやん。……ああそうそうそれや、コーディリア。——あ、今のはこっちの話やから気にすんな、朔」

そんなものはわかっている。『根』は複数台のコンピュータを動かすために、一台一台に名前を付けているのだ。相変わらず人間離れした所業だ。

「おいおい、ゴネリル……そうくるかあ？　ジュリエットと言ってること違うやん」

「——シェイクスピアか」

どうやら今回コンピュータに付けている名前はシェイクスピアの劇から取られたものらしい。『根』はコンピュータをカスタムする度に全ての名前を変えるから、もう覚えたくもない。朔は邪魔にならないように奥の椅子に座って『根』の仕事を眺めた。

「うーん……あらへんなあ、柏木の記録……ディーフェンベーカー公のときも、向こうが情報残しとっただけやしな」

「……柏木とゼラスの弟の標的は俺だろうな。どちらが誘ったかは知らないが。俺が女王側にいれば自ずと明らかにはなるだろう」

「でも後手には回りたくないやん」

『根』は溜息をついて腕に点滴の針を刺した。どうやら食事もせずに調べているらしい。

「何でそこまで……飯くらい食べればいいだろ」

「アメリカにも朔にも恩があるからな。早めに返したいんや」

「そのうち口から食えなくなっても知らないぜ？」

「大丈夫やって」

『根』は椅子に背中を預ける。しかしその間もコンピュータはフル稼動しているのだ。

「今朝翠と話したんだけどさ……花雪の死が過失でなく故意なら、その理由は何だと思う？」

「さあな……お前が今くらい強かったら、『ゼラスを殺してもらうため』っていう説もあるんやけどさ。ゼラスは実はアホで、ブレインのみが優秀だった場合の話やけど」

「……実際それなら、作戦は成功してるな。だがその場合、今回の事件にその裏切り者は無関係だ」

自分に怨みを持つ人間は掃いて捨てるほどいる。娼婦の中にも、家族を殺された人間はいる。何せ、三十四人も殺したのだ。あの時は冷静ではなかったから、もしかしたらもっと殺しているかもしれない。朔は目を閉じた。

「共倒れになって欲しかった可能性もあるな。実際死にかけたんやろ？」

「撃たれたからな。魔術使ってなかったら確実に死んでた」

「普通やったら朔が負けるはずなんや。初めてやったわけやし……」

そうだ。普通は初めてであんなに人は殺せない。子供や女だけならまだしも、トマージのような頑強な男もいたのだ。自分に殺しの才能があったとしか思えない。嬉しくはないが。

「――なあ、朔」

急に『根』が声を落として言った。嫌な予感がする。『根』が真面目なときはろくなことがないのだ。

「メリッサ・エインズワースって知っとる？」

「ああ。父親はいなくて……母親は俺が殺した。確か二十人目だな」
「……嬢ちゃんのルームメイトや。娼婦歴ある奴洗ってたら出て来たで」

同室の子がメリッサという名前だということは知っていた。まさかそれがあのメリッサだとは。朔はその場に崩れ落ちるように膝をつく。

「――最悪、だな。テレーゼもあの事件を知らないわけじゃないが……」

「仮に嬢ちゃんが敵になったら戦えへんやろ」

「――否定はしない」

その時は自分が終わるときだろう。朔は配線だらけの天井を仰いだ。

「メリッサも柏木との接点はなさそうやな……うーむ、娼婦の線もなしか？」

「交友関係はどうだ？ その中にいるかもしれない。お前が今調べた奴の中で、俺に怨みがありそうな奴をピックアップしようか？」

「ホンマに全員覚えてんのか？」

「数えられた分はほとんど覚えてる。唯一……三十四人目が名前を思い出せない。というかそいつをスラムで見たことがない」

「絞った方が早いしな。じゃあよろしく頼むで。データは後で送るさかい」

朔は頷き、『根』の家を出た。溜息をつきながら道を歩く。

「メリッサ・エインズワースか……」



霧が多いこの地では、雲一つない快晴というのは非常に珍しい。テレーゼは思わずその青過ぎる空に悪態をついた。

「綺麗過ぎて腹が立つわね……」

機嫌が悪いのは目覚ましより三十分も早く起きたからではない。朝からクレアに食事を駄目にされたからだ。腹が立つというよりは腹が空いている。

メリッサは生徒会室に用があるらしく、テレーゼは一人で校庭に

向かっていった。今日は体力作りと称したマラソンらしい。屋敷暮らしだったテレーゼに体力があるわけではない。憂鬱なのはそれも原因だった。

「いきなり千五百メートルなんて走れないわよ……」

一キロ越えてる時点でありえないのだ。屋敷の近くに街があったために、そんな距離を歩いたこともないかもしれない。テレーゼは深く溜息をついた。

「どうしたの？」

「ああ、メリッサ……千五百メートルって長いわよね……」

「この学校から美術館までの距離と同じと思えばたいしたことないわよ」

「……長い……あそこまで走っていくわけ？」

メリッサの言葉は逆効果だった。テレーゼは深々と溜息をついてうなだれる。雨が降って体育が中止になればいいのに。自分の瞳のように濃いブルーに染まった空が恨めしかった。

鐘が鳴ると同時に、赤毛を逆立てた奇天烈な教師が簡単な指示を出して準備運動をさせる。この準備運動でも四百メートルを走るのに、さらにまた走るなんて。この体育教師は髪型だけでなく、頭の中も奇天烈らしい。

「何でこんなに綺麗な空の下で、読書じゃなくて長距離走しなきゃならないのかしら……」

「普通は天気の良い日は読書じゃなくて運動だと思うけど……」

「それは私の常識ではないわ」

メリッサはテレーゼの言葉を聞くと、突然噴き出した。テレーゼは不思議そうにメリッサを見る。

「テレーゼは本当に面白いわね」

準備体操が終わり、千五百メートル走をすることになった。テレーゼとメリッサはなるべく後ろの方に並んだ。自分達が足が遅いのはわかっているのだ。テレーゼに関しては、短距離には自信があるが、長距離には自信がないという言い訳付きである。

「とりあえず完走すれば問題ないから、ゆっくり行こう?」

「うん」

テレーゼは溜息をつきながらもゆっくり走り始めた。このスピードでも、千五百メートルは保たないかもしれない。四百メートルトラックを三周と四分の三——景色が変わらないのはつまらないとテレーゼは思った。

二周目が終わった頃、テレーゼは既に疲れ切っていた。ほとんど歩いているのに近い。足が速い人等には、一周以上遅れている。メリッサは根気強く、テレーゼの横を走った。あまり息を切らしていないところを見るに、どうやら持久力はあるらしい。こんな授業を何年も受けていれば確かにそうなるかもしれない、とテレーゼは思った。

「大丈夫、テレーゼ?」

「しゃ……しゃべる気力が……勿体ない……」

喉の奥で鉄の味がする。長距離走なんて嫌いだ。テレーゼは叫びだしたかったが、そんな体力は残っていなかった。足が縛れそうになるのを堪えて、ようやく三周目に入る。

「きや……」

突然誰かがぶつかってきて、テレーゼは派手に転んだ。反射的にその誰かを睨みつける。それは級長のクレアといつも一緒にいる人だった。テレーゼは舌打ちをしながら立ち上がる。

「大丈夫……?」

「ちよっと擦りむいただけよ、メリッサ。こんなの唾つけとけば治るわ」

実際は痛い、少しだけ強がる。あと三百メートルなんだから。そう思って走り出したテレーゼは顔にかかる髪に違和感を感じた。

「あれ……カチューシャがない……?」

メリッサは気付かなかったという顔をした。ふと前を見ると、さっきぶつかって来た奴がゴール近くで赤いカチューシャを振っている。テレーゼは唇を強く噛み締めた。

「ちよっ……テレゼ!？」

体力は限界に近かったが、テレゼはいきなりスピードを上げた。ゴールまでの距離がみるみる縮まっていく。メリッサも慌ててスピードを上げた。

「――返して!」

ゴールまで後十メートルまで近付いたとき、テレゼは叫んだ。その間にも走り続け、五メートル――三メートル――あと、少し。その時、鈍い音が響いた。カチューシャは目の前の少女の足の下で、無残に割れていた。テレゼの視界が白に塗り潰される。

痛かった。

もう、どこが痛いかわからないくらいに。

テレゼはその場に座り込み、泣きながらカチューシャの残骸を拾った。

「うう……痛い……」

テレゼは体育が終わるとすぐに保健室で治療を受けた。消毒液以上に、カチューシャを失った痛手が大きい。

決して特別なものではない。むしろただの赤いプラスチックで、どこにでも売っている。しかし朔が買ってくれたというだけで、それはどんな宝物よりも価値を持っていた。メリッサは「直してあげる」と言ったが、本当に直るのだろうか。テレゼは涙を零し続けた。

「傷が痛むの?」

校医が優しく聞く。テレゼは激しく首を振った。

「……違う……でも痛い……」

「心が痛いよね、テレゼ」

「……うう、もうわかんない……だけど……」

校医は優しく頭を撫でた。頭にあった、ちよっとした重みがない。その喪失感はかなり大きかった。

「――テレゼ、直ったよ!」

メリッサがそう言いながらドアを開けて、保健室に入ってきた。手には確かにすっかり元通りになったカチューシャが握られている。テレーゼは涙を浮かべた目を見開いた。

「すごい……どうやって……？」

「ちよつとだけプラスチックスを溶かしたの。溶接ってやつよ。用務員のおじさんがてつだってくれたの」

「ありがとう……」

テレーゼは泣きながらメリッサに抱き着く。メリッサは苦笑しながらも、優しくテレーゼの髪を梳いた。



「――ちよつと予想外の展開だったけど、まあいいか。むしろ自然に出来たし、あの子も全然気付いていない」

男は晴れすぎた空を見ながら呟いた。これで下準備はほとんど整ったのだ。男はくつくつと笑う。

「これでいい……これでアイツは袋の鼠だ……」

もう逃げられはしない。

張り巡らされた糸にかかった蝶と同じだ。

――――あとは、味わうだけ。

「せいぜい、踊り狂うがいい……僕のかわいい生贄――」

第四話『糸』（後書き）

スピネル「体力ないな、お前」

テレーゼ「じゃあスピネルは走れるの？」

スピネル「……」

テレーゼ「スピネルって確実に私より運動不足よね」

スピネル「いや、腹筋と背筋と腕立て伏せと背が高くなる努力はいつもしている。月峰にも言っておけ。女である翠より小さいなんて、男として悲しいだろうとな！」

朔「……いや、俺いるんだけど……」

第五話『愛さない人と愛する人』



十二月八日、午前九時——

女王の騎士としては初めての謁見だ。朔は深々と溜息をつく。

「堅苦しい……一度会ってるのに」

「まあまあ。騎士服似合っとるやん」

アメリカのカラーである青い革の手袋と、同じ色の特殊繊維で作られたレッグカバー。黒のピッタリしたつなぎの上に、手袋とレッグカバーを出すように水色のタートルネックの上着を羽織っている。トレードマークである刀は、しっかり腰に収まっていた。朔は手でうちわを作り、自分に風を送り込む。この騎士服はかなり暑いのだ。

「これでも軽量化かつ通気性を良くしたらしいが……暑い」

「そりゃあ、一応全身防弾出来るようになったからな。レーザーカッターならズタズタになるけど」

「——自慢じゃないが、俺は防弾用のものを身につけたのは初めてだ」

「そうやったな……」

相手がマシンガンだろうが、防ぐ手はないわけではない。弾避けは流石に一発が限界だが、墨染桜は特殊らしく、ある程度の弾丸は切り捨てられた。兄弟刀である紅枝垂もその辺りは同じらしい。

「まあ、これがありゃあマシンガンの雨の中に突っ込んでも大丈夫やで？」

「頭撃たれたら終わりだろ、これ」

「だから特殊防弾帽と、防弾マスクがあるわけやん」

暑いから身につけたくない。防弾マスクは首から鼻までをぴったりに覆うのだ。確かに空気を取り入れる穴は空いているが、それも気休め程度でしかない。朔は溜息をつくよりなかった。暑いのも寒い

のも嫌いだが、暑いのは特に嫌いなのだ。

「――月峰様」

メイドがしずしずと歩いて来て、朔を呼んだ。どうやら叙任式の準備が整ったらしい。朔は『根』に手を振ってメイドについていく。いくら愛人の彼でも、さすがに叙任式には出られないらしい。

「どうぞ」

メイドはそう言ってゆつくりと謁見の間の扉を開けた。きらびやかな装飾品と物々しい騎士や重臣、そして玉座に座るアメリカが朔を出迎える。アメリカは目が醒めるようなブルーのドレスを着て、裏を見せない、月のような微笑を浮かべている。

朔は女王の前に進み出て、静かに跪き頭を垂れた。アメリカが横に立っていた騎士から刃先のない『慈悲の剣』を受け取り、鞘を抜く。そして静かに朔の近くまで降りて来た。『慈悲の剣』が突きつけられる。

「――我、英国王アメリカ・イーリィ・ディーフェンベーカーは汝、月峰朔を王室騎士に任命する」

厳かな声と烈しい気迫。朔は思わず息を飲んだ。こんな女など見たことがない。気高い女王が纏う気配は、殺気にすら似ている。女王陛下であるアメリカとは初めて会った、と朔は呟いた。

『慈悲の剣』で肩を軽く叩かれる。朔はその部分に微かな熱を感じた。

「心からの忠誠を誓います――アメリカ陛下」

「馴れないことが多く大変かもしれないが、頑張って下さい」

「――Yes, my Lord.」

この言葉をテレーゼ以外に言う日が来るとは思っていなかった。朔は誰にもわからないように目を伏せた。

短い式典が終わり、持ち場につこうと城内を歩いていると、アメリカに呼び止められた。人が近くにいないので、さっと振り返る。普通は失礼に当たるので、してはいけない行為だ。

「叔父様が関わっているというのは聞いたわ」

「――それで？」

「伐てるかしら、叔父様を」

「公爵を討って情報を聞き出すと？　――それは無理だ」

アメリカは驚いたように朔を見る。

「まだ『紫月』に対抗する手段がない。その製作に柏木が関わっているんだ、魔術に関する知識は向こうが上だろう」

「そうかあ……薬を潰すのも簡単じゃないようね」

だが報酬のためには潰さなくてはならない。テレーゼが最悪の状態にいるのを見過ごすわけにはいかなかった。

「――でも必ず、潰す」

「テレーゼお嬢様のため？」

「ああ」

「愛しているのね……うらやましいわ」

アメリカの声に陰が差す。

「……お前は、どうなんだ」

「私は誰も愛さないわ。全てを愛するために」

それは「国と結婚した」というバージン・クイーンのようにでありながら、少し違っていた。朔が何も言えずにいると、アメリカは小さく笑う。

「神様はもしかしたら、全てを知ってしまったが故に誰も愛せなかったのかもしれない。あなたはと思う？」

「――神様なんていないと思うけど」

朔は踵を返して持ち場に向かって歩き始めた。アメリカの姿に何故かテレーゼがちらつく。朔はそれを振り払うように足を早めた。



同日、午後一時――

「仕事速いな……研究者より向いてるんじゃないか？」

「研究者にも情報処理能力は必要ですよ」

スピネルは翠の入れた紅茶を飲みながら、膨大なデータに目を通していた。いくら十二歳といっても社長は社長なのだ。甘えも妥協も許されない。

「――しかしスピネル、本気ですか？」

「何がだ」

「兵器部門を縮小し、新事業を展開するという話です」

「ああ、それか。だが兵器と無関係なわけではない。うちの兵器は威力よりも正確さを重視する。そのために高性能な人工知能を搭載しているのは知ってるな？」

「ですが、遊園地とは……子供の発想ですね」

反対意見はかなり出ている。フリードリヒの死によってメイプルウッドが揺らいでいる今こそ、世界の兵器生産のシェアリング一位の座を取り戻すべきではないかと。

「……何が言いたい、翠」

「スピネルなら見ればわかるでしょう」

「――反対派のことは知っている。だが必ず最高のテーマパークを作ってやる」

「そこで提案なんですが」

翠はスピネルの前に小さなチップを置いた。スピネルは顔をあげる。

「買収すれば、ゼロからやるより安くつきますよ。これは良さそうな企業のリストです」

「いつの間に……。わかった、見ておくよ」

「――一つ聞かせてください。貴方が兵器部門を縮小したいのは、クール家の血塗られた歴史を清算するためですか？」

「悪名高い氷の一族の歴史などそう簡単には清算できないさ。これは、終わらせるためだ」

翠は全てを理解し、微笑を浮かべた。家を終わらせるのは簡単だ。子供を作らなければいい。だがそんな単純な終わりは争いを生むだ

けだ。スピネルの最終目的はクール社を解体すること――

「では私は、貴方の第二の脳となり、最終決戦^{ラグナロク}を生き抜くとしましよう」

「嘘ではないようだな」

「この期に及んで貴方に嘘なんてつきませんよ……っ」

翠はこめかみを押さえて、傍にあった机を掴む。スピネルが心配そうな顔をして立ち上がった。

「大丈夫か、翠？」

「せっかく柏木の力を奪い尽くしたんですが……半分以上失ってしまいました」

「回復はどれくらいかかる？」

「心配してくれてるんですか？」

「――当たり前だろ」

三年前は追い出したのに、と皮肉を言うのは憚られた。翠は力無く微笑する。

「心配はありませんよ。すぐに回復します。ただ、しばらく『紅珠』は使えませんけどね」

しばらくどころか、数年は使えないかもしれない。翠は溜息をついた。朔の足手まといにはなりたくないが、これでは役立たずだ。

「――『紅珠』にこだわるな」

「こだわってなんかいませんよ」

「いや、お前はこだわってる。父親を憎むほどに、その力を忌むほどに固執してしまうんだ」

「――っ」

確かにそうかもしれない。いや、スピネルが言うからそうなのだろう。彼は本人すら気付けない心の奥深くさえ、その目で見てしまうのだ。全てを見透かされるのは、怖い。翠はスピネルの手を振り払った。

「……仕事に戻ります」

「何馬鹿なことを言ってるんだ。体調が悪いなら休め」

「そういうわけにはいきません。私も一応社会人なんですから。それにデスクワークなら問題ありません」
踵を返す。背中に注がれる心配そうな視線を振り払うように、翠は足早に執務室を出た。



Ring—a—Ring—o— Corpses, — (死体の輪を作りましょう)

A pocket full of poisons, — (ポケットを毒でいっぱいにして)

Atishoo! Atishoo! — (はっくしょん! はっくしょん!)

We all fall down. — (みんなで転びましょう)

男がマザーグースを口ずさむと、女はそれを悲しげに見つめた。
女の深い森のような緑の瞳が陰る。

「どうした? 作戦は成功したんだから喜べばいいだろう?」

「——本当に、あの子を巻き込むの?」

女は男に体を預けるようにしな垂れかかる。男は女の体を弄びながら答えた。

「アイツはあの子を殊の外大切に思っているらしい……精神的にも、肉体的にも苦痛を味わってもらうにはあの子を利用するのがいい」

「それなら、こちら側に引き込むという手も……」

「寝返りはしないさ。君は二番目以下なんだから」

「だけど……あの子は、何もしてないのよ」

女は高い嬌声を上げる。まるで鳥のように美しい、と男は思った。
従順だけではない、張りのあるしなやかな体だ。その声も、仕種も。

「罪人に惚れた時点で、もう罪人だよ」

「でも、殺したわけじゃないわ……」

「ほだされたのかい？　でも前に言っただろう？　あの子は本当は死ぬはずの人間だったんだ。ドクターが言っていたじゃないか」

「……私のせいでいじめられてるのに、これ以上苦しめることは出来ない……」

男は軽やかに指を弾く。すると、黒い霧が女の首を取り囲んだ。

「――【裁き給え】」

「……ん……あ、や……やめてっ、くるしっ……」

「僕に逆らうの？」

「……ち、が……でもっ……」

喘ぐ女の顎を、男はゆっくりと持ち上げた。涙がその白い手を濡らしていく。

「――ねえ、君が従うべきなのは誰？」

「……は、……も、やめ……ごめんなさっ……」

「答えなよ」

「私は、あな、ただけに……っ」

黒い霧は徐々に女の体を覆いつくしていく。女は苦しげに、それでも美しい声で喘いだ。

「君は僕のかわいい駒鳥だ……逃げることは許さないし、君にはもう羽などない」

「……ん、はあっ……」

男は女の唇を乱暴に奪う。舌を差し込むと、水溜まりに触れているような音がぴちやり、と鳴る。喘ぎながらも女は舌を絡めた。さすが高名な娼婦だ。男はくつくつと笑う。

「君は傷ついた……いいんだよ、誰かにそれをぶつけても……」

「はい……」

霧を消すと、女は潤んだ瞳で誘うように男を見た。男は唇を歪めて笑う。

「君が仕掛けたトラップが切り札だ。だから解除なんてしちゃいけない。したらすぐにわかるんだからね？」

「はい……」

「それでいいんだよ、僕のかわいい駒鳥さん……」



今日も一日が終わる——

テレーゼはアロマバスに浸かりながら天井を見上げた。クリスマス休暇までもう少し。プレゼントはまだ決まっていない。

「風呂から上がったなら街に出てみようかしら」

夜遅くまで開いている店があったはずだ。テレーゼは腕組みをした。

「アクセサリーとか、あんまり身につけてないしなあ……」

「——テレーゼ」

「あ、メリッサ。どこ行ってたの？」

「……ちよっと買い物に」

メリッサがどこにもいなかったから、一人で風呂に入っていたのだ。こんなことならもう少し遅く来ればよかったかもしれない。

「何かあったの？ 元気がないわね、メリッサ」

「うん……」

メリッサは静かに浴槽に入った。その深い森のような瞳は愁いに染まっている。

「誰かに何か言われたの？」

「そういうんじゃないくて……私は、ある人を裏切るようなことをしてしまったの」

裏切り——それは、少し前にこの目で散々見た。翠はフリードリヒを裏切り、アレンはテレーゼを裏切り、青血隊は翠を裏切った。そして一時は自分も朔を裏切り、死を受け入れたのだ。テレーゼは淡いピンク色の湯を掬っては戻す行為を無意味に繰り返す。

「昔、お母様が読んでくれた本にね、『裏切らない男』が出て来るものがあったの。だけどその男は誰のことも愛そうとはしなかった。

『恋人と親友が対立を始めたとしたら、親友につけば恋人を裏切ることになるし、恋人につけば親友を裏切ることになってしまう。だから誰も愛さない。親友も恋人もいらない』と言うのよ。もしかしたら裏切りという行為は、人を愛しているから生じることかもしれないわ。だとしたら、メリッサは人を愛せる人なのよ」

「テレーゼ……私は……」

「神様じゃないんだから、完全に正しい生き方なんて出来やしないわ。だから気に病み過ぎないことよ」

軽く肩を叩くと、メリッサは体を震わせた。まずかっただろうか。朔もその気があるが、触れられることを嫌がる人は多い。テレーゼは呟くようにメリッサに謝った。

「いや、そうじゃなくて……びっくりしたただけだから……」

「そう？ それならいいんだけど……」

「――テレーゼは、心が綺麗なのね」

テレーゼは小さく首を振る。綺麗などではない。そうありたいとは常々思っているのだが。テレーゼは溜息について浴槽の縁に腰掛けた。

「……暗い話はもうやめましょう、メリッサ。気が滅入るわ。それよりクリスマスプレゼントなことで相談んだけど……」

「どうしたの？」

テレーゼは再び湯に肩まで浸かる。僅かに波紋が広がった。

「普段アクセサリーを身につけない人にアクセサリーはマズいかしら？」

「いいんじゃないかしら？ シンプルなのだったらいいかも……指輪とか」

「ゆ、指輪!？」

「別に婚約指輪とかじゃないんだから、そんな驚かなくても」

指輪というものは特別な意味を持つ。テレーゼは顔を赤らめた。

「でも、指輪ならわりと安く買えるよ？」

「そっか、指輪か……」

テレーゼは天井を見ながら笑った。指輪を女からプレゼントするのは珍しいかもしれないが、喜んでくれればいい。

「……よし、ちょっとお店行ってみよう。そういうわけだから、先に上がるね」

テレーゼはさっと浴槽から出る。メリッサは慌ただしく浴室から出ていくテレーゼの背中を、悲しげに見つめていた。

「ごめんなさい、テレーゼ……」

街に出たテレーゼは、大体のものはそろうだろうと考えて、百貨店に足を踏み入れた。門限はわりと遅いので、小一時間くらいは買いた物が出来るだろう。テレーゼは財布の中を覗き込んで、溜息をついた。

「しけてるわね……」

あまり高いものは買えそうにない。朔は小遣いを少ししか持たせてくれなかったのだ。それは仕方がない。テレーゼは気を取り直して、アクセサリー売場を探すために店内地図を見つめた。

「やあ、どうしたんだい？」

「せ、生徒会長！」

「だからメルでいいって。ところで、何を買いに来たのかい？」

適当に答えようとメルを見た瞬間、テレーゼは名案を思いついた。メルなら朔と同じ十八歳だし、こういう指輪がいいかわかるかもしれない。

「クリスマスプレゼントを……指輪にしようかな、と思っているんだけど……付き合ってくれませんか？」

「僕でいいなら。僕は気晴らしに來ただけだからね」

「メルも誰かにクリスマスプレゼント買えばいいんじゃない？」

「そうしようかな。選ぶの手伝ってくれるかい？」

「もちろんよ」

テレーゼとメルは一緒にアクセサリー売場に向かった。指輪コーナーに行くと、途方に暮れそうな数の指輪が並んでいる。細い銀の

シンプルな指輪から、スカルの派手なものまで。あまり派手なものはやめたほうがいいだろう。朔がそういったものを身につけるとは思えない。

「メルはどれがいいと思う？」

「そうだなあ……これとかは？」

メルは少し厚めの、ゴツゴツとしたシルバーリングを指差した。確かにシンプルだが、朔がつけるには無骨過ぎる。

「もうちょっと細身のほうがいいかな……あと、なるべくシンプルなのがいいわ」

「普段アクセサリーはつけない人なのかい？」

「全然つけないわ。私なんかはわりと身につける方だけど」

「そうだよな。ピアスも開けてるし」

テレーゼは曖昧に微笑した。実はこのピアスは発信器なのだ。だから朔が知ろうと思えば、自分の場所はすぐにわかる。下着に仕込んだ発信器と合わせれば、より正確に場所を特定できる。本当はもう必要のないもののはずだが、今までの生活をすぐには変えられず、なかなか外せないのだ。

「この指輪なんかどうかな？ ピンキーリングだけど」

メルが指差したのはペアリングだった。テレーゼは顔を赤らめる。

「べ、ペアリングなんて……そんな……」

「小指の指輪はお守りなんだ。だから気にすることはないよ。僕はこれをオススメするな。値段も手頃だし」

言われてみれば、確かにそうだ。二つを重ねればクロスモチーフが浮き上がるシンプルなデザインといい、これ以上のものはないだろう。この指輪なら、チェーンに通してネックレスにしてもいいかもしれない。

「そうね、これがいいわ。ありがとうメル」

「いや、それほどでもないよ。それより僕のプレゼント選びにも付き合ってくれるかい？」

「喜んで。ちなみに、誰にあげるの？」

「勿論メリッサに」

メルは柔らかに笑いながら、ネックレス売場に移動した。テレーゼはまるでチェシャ猫のように下世話ににやにやと笑う。どうやら二人はいい感じらしい。

「メリッサにはこれとか似合うと思うわ」

テレーゼは小さなクロスがぶら下がるネックレスを指差した。メルはそれを手に取って眺める。

「確かに可憐で、彼女にとっても合ってるね。君に頼んで正解だったよ」

「私も、メルに頼んでよかったわ。これで悩みは解決ね!」

テレーゼはスキップをしながらレジに向かった。ラッピングサービスは丁重に断り、小さな袋に入れてもらった指輪を鞆にしまった。メルはラッピングを頼んだようだ。テレーゼは店内を見ながらメルを待つ。

「そろそろ門限だし、帰ろうか」

ラッピングが終わったらしいメルが、テレーゼに声をかける。テレーゼはゆっくりと頷いた。

百貨店を出ると、冷たい風が吹いていた。テレーゼは慌てて手袋を嵌める。メルもさっと紺色のマフラーを巻いていた。

「さむ……」

「そうだね。もしかしたら雪が降るかもな」

「雪が降ると、私はいつも日本の詩を思い出すわ。『汚れつちまつた悲しみに』っていう中原中也の詩なんだけど……知ってる?」

メルは静かに首を振った。おそらく普通は知らないのだろう。紙の本をわざわざ手に入れるような好事家も、さすがに日本の古い詩までは守備範囲外なのだろう。

「お母様が英訳したものをよく読んでくれたの。日本語の方は二年前に教えてもらったのだけど」

「悲しみが汚れるとはどういうことだろうね……僕も読んでみたいな」

「私もいまいちよくわからないのよ。悲しみが汚れるってどういうことかなって。でも雰囲気が好きなの」

そんなことを話しているうちに、寮に着いてしまった。テレーゼはメルに手を振り、玄関で別れる。扉を開けた瞬間、温かい風が吹いて来た。

「そろそろ点呼ね……急がなきゃ」

テレーゼは階段を二段飛ばしで駆け上がった。三階にある部屋に入ると、メリッサがぼんやりと窓を開けて、外を見ていた。

「ただいま、メリッサ」

「……お帰り」

もしかして風呂で言っていたことについて、まだ悩んでいたのかもしれない。テレーゼはメリッサの肩にショールをかける。

「風邪ひくわよ」

「ありがとう……」

「そろそろ点呼だから、窓を閉めたほうがいいわ」

テレーゼが言うのと、メリッサは弱々しく頷いて窓を閉める。その時、空から白い花びらが舞い降りた。

「ねえ、メリッサ！ 初雪よ！」

「本当ね……今年は少し早いわ」

雪はまるで桜のようにも見える。テレーゼの脳裏に朔の姿が過ぎった。早く、クリスマスに——朔の十九回目の誕生日になればいいのに。朔に会いたい。声が聞きたい。テレーゼは雪を見ながら溜息をついた。



「雪か……」

メル——メレディスは照明を落とした部屋の中で、小さく呟いた。雪は全てを覆い隠してしまう。罪も、悲しみも——

「雪は嫌いだ」

ひらひら舞う、花のような雪。それは、メレデイスにとって忌まわしい女の代名詞だったのだ。全ての罪を赦し、受け入れて浄化しようとする――それは、本当に雪のような人だった。

「偽善者は嫌いなんだ……僕が忌み子であるのは紛れも無い事実だ」
なのにあの女は――鞍馬花雪は。

「こちらが裏切らなければ、いつか向こうが裏切ったんだ……」
花雪が一番大切に思っていたのが自分でないことくらいわかっている。自分は誰にとっても一番ではないのだ。

期待をさせないでほしかった。メレデイスは雪を掻き消すように乱暴にカーテンを閉める。しかし脳裏をよぎる花雪の白過ぎる手や澄んだ声は掻き消せそうになかった。

「八年前の計画を、終わらせなくては……」

月峰朔が生きている限り、この苦悩は終わらない。メレデイスは紫色の錠剤を口を含み、くつくつと笑った。

「『紫月』――いや、正確には『幻の月』、か。ドクターも月峰には固執していたようだな……」

幻の、見えない月。それが新月を示すということは、説明されるまでもなく理解できた。

「――そろそろ、仕上げだ」

メレデイスは紫色の瞳を静かに閉じた。

第五話『愛さない人と愛する人』（後書き）

朔「俺って昔から誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントを一緒にされるんだよね。夏生まれの人は二個もらえるのに」

翠「鏡の国ならいいんですけどね。クリスマスではない日のプレゼントも、誕生日ではない日のプレゼントも人より一つ多くもらえます」

朔「へえ……」

翠「ちなみに朔の誕生日は二月二十九日から十二月二十五日まで悩み、閏年かそうでない年を考えるのが面倒で、十二月二十五日になったそうです」

朔「四年に一度しか誕生日が来ないよりは、いいかもしれないな……」

翠「ちなみに、スピネルの誕生日は十二月二十三日です。すっかり忘れられてますが」

朔「ああ、アイツもクリスマスと誕生日同時に祝われてしまうわけか……」

翠「ああ、ちなみに次回からこのふざけた後書きはなくなります」

朔「え、何で？」

翠「『あまりにシリアスな展開なので、インターバルを入れたくな

い
』だそうで
」

朔「じゃあ最初からやるなよ……」

第六話『ユダの影』



部屋のドアが静かに開いた。メレデイスがそちらに目をやると、俯いて拳を握り締めたメリッサが立っていた。いつも結んでいる赤毛は解かれ、肩にかかっている。メレデイスは静かにメリッサを自分のベッドの傍に呼んだ。

「どうしたんだ？」

「薬……」

メリッサの言葉に、メレデイスは微笑した。もう耐性がつき、一日に半錠だけでは足りなくなってしまったようだ。いくら依存性は低いとはいえ、あることはある。それがない薬などこの世にはまだ存在しないからだ。おまけに『紫月』は興奮剤まで入っている。それによる快楽から逃れられる人間は少ないだろう。

「いいよ、おいで」

ベッドの上に座らせる。メリッサはおどおどとメレデイスを見た。「薬ならいくらでもあげる。でも、君がすべきことをしなければ話は別だ」

メリッサの赤い唇に薬を押し付けながら言う。メリッサの体が目に見えて震え始めた。どうやら禁断症状らしい。この状態なら、メリッサは必ず言うことを聞くだろう。人は一度味わった快楽から逃れられるほど強くはない。

「――返事は？」

耳元で囁くと、彼女の足の先まで力が入った。娼婦としての生活が長いせいか、こんなときでもメリッサは無意識に男を誘う。

「……わ、かりました……メレデイス様」

「いい子だね、君は」

薬をメリッサの口内に滑り込ませ、そのまま唇を合わせた。十四

歳とは思えない妖艶な舌遣いが悦楽を呼び覚ます。美しく可憐なものを汚す喜びに、下半身が熱を持った。

汚したかった。こんな風に、あの花雪を。

メリッサを抱きしめると、彼女は体を鋭敏に震わせた。瞳が紫に変わっている。おそらくトリップが始まったのだろう。

「メレ……デイス、様……あっ」

「君の声は綺麗だ。まるで金糸雀だ」

何でもない、ただ触れるだけの行為が二人を愉悦の地獄に誘う。

「メリッサ……」

「何で、すか……？」

「君の主は、君の一番は誰？」

「メレデイス様です」

メレデイスはうつそりと微笑した。今のメリッサは美しい人形だ。燃えるような赤毛を梳く。

「じゃあ、メリッサ……ちゃんと出来るよね？」

「メレデイス様のためなら……」

違う、葉のためだろう。だが『紫月』がこの手に有る限り、彼女は自分のものだ。メレデイスはそつとメリッサのネグリジェを脱がせた。



十二月九日、午後一時——

テレーゼとメリッサはカフェでサンドイッチを食べていた。いつもは食堂なのだが、今日は外の雪を見たくてここに来たのだ。

「結構積もったわね」

「そうね……」

「でも、世界には一晩で二メートル近く積もる場所もあるのよ」

テレーゼが言うと、メリッサは驚いたように目を見開いた。

「そんなところに住めるの？」

「結構住んでるわよ。だいたい、住めなかったらロシアに人いないわよ」

「あ、そっか……」

メリッサはどうも世界に疎い。飛び級するくらい頭はいいはずだが。テレーゼは呆れたように息を吐いた。

「でもロシアって寒いけど……高気圧が近くにあるから天気はいいのかもしれないわね。天気がいいと放射冷却でさらに寒くなるけど」

「バナナで釘が打てるくらい？」

「……確かにそのくらい寒いけど、バナナで釘を打つ必要はないわよね」

テレーゼはそう言うってから、ココアラテを飲んだ。冬はこれに限る。体が内側から温まった。メリッサはアイスコーヒを飲んでいいる。見ているだけで寒くなりそうだが、アイスコーヒが一番安いからそれを選んだのだろう。

「私、一度でいいから地吹雪を体験してみたいのよ。だけど皆悪趣味だって」

「住んでいる人に見てみたらまったもんじゃないんじゃない？」

「でも昔の日本には『地吹雪体験ツアー』というものがあったらしいわよ」

朔も翠もそれについては知っていたが、散々悪趣味だと言っていた。どうやら地吹雪は物凄く大変なものらしい。

「……そういえば、メリッサはクリスマス休暇どうするの？」

「私は学校に残るわ。どうせ一人暮らしだもの。援助してくれる人はいるけど」

「何なら、私の家に来ない？」

「……いいわよ」

メリッサの声に棘が混じる。テレーゼは慌てて俯いた。

「ご、ごめん……その……」

「好きな人といちゃつくところを見せつけられたくないもの。クリスマス休暇は二人水入らずで過ごすべきだわ。それに、メルも残る

から」

「そっか。それならメリッサも寂しくなくていいわね」

メルはどうやら、メリッサを好いているようだし。テレーゼは昨日のことを思い出しながらにやにやと笑った。

「どうしたの、変な顔して」

変な顔だったらしい。テレーゼは慌てて顔を元に戻した。バレたらメリッサの喜びが半減するだろう。ごまかすために、またココアを飲む。

「ところで、メリッサはクリスマスプレゼント用意した？」

「うん……」

「何にしたの？」

「テレーゼこそ」

テレーゼは左手をメリッサの前に出した。その小指には、昨日買ったピンクリングが光る。

「ペアリングよ。合わせると十字架が浮かび上がるの」

「私は、短剣^{ダガー}モチーフのシルバーアクセサリーよ。意外に難しくてね……昨日ようやく完成したの」

「メリッサって器用よね。このカチューシャ直したときもそう思ったけど」

ありがとう、とメリッサは笑う。深い緑の瞳が木漏れ日のように優しい色になる。テレーゼもつられて笑みを返した。

「テレーゼは不器用よね」

「う、うるさいわね……」

おそらくこの前の家庭科の時間のことを言っているのだろう。テレーゼは「並縫いが波縫いになっている」と日本語者にしかわからない厭味を朔に言われたことがあるくらい、裁縫が苦手だ。対してメリッサは服を見ただけで型紙を作れるくらいに手先が器用である。この前の家庭科は、ほとんどをメリッサに手伝ってもらったのだ。

「テレーゼが針持っていると危なっかしいのよね。普通血が出るまで

指に刺す人なんかいないわよ」

「これから上手くなるもん！」

通信制だと単位に家庭科はないが、寄宿学校にはしっかりとある。うまくならないと落第の危機だ。落第したら厳格な祖母に厭味を言われるのは必至だろう。テレーゼは溜息をついた。

その瞬間、テレーゼの頭を熱が襲った。広がる琥珀色の匂い。どうやらコーヒーらしい。テレーゼは犯人であろうクレアを睨みつけた。

「ごめんねえ、手が滑っちゃった」

「……随分都合よく手が滑るのね」

猫撫で声が耳に障る。メリッサがおろおろとテレーゼとクレアとその子分たちを見ていた。カフェには人がほとんどいない。五限目が休講だからとゆっくりしていたのが災いしたようだ。

「アンタさあ、自分の立場わかってる？ 今のアンタはもうメイプルウツドの人間じゃないのよ」

「だから何？ 私が相続権を失ったことが貴女に関係あるの？」

「――生意氣」

クレアはテレーゼの腹を蹴り上げた。咄嗟に受け身をとるが、間に合わない。テレーゼは咳をして床に倒れた。

それをいいことにリンチが始まる。くだらない、とテレーゼは吐き捨てるように思った。彼女達はただ単に気に入らないのだ。どんな目に遭っても光を失わない気高いテレーゼの目が。彼女達に従わない、無意味なほど高いプライドが。

テレーゼは侮蔑し、嘲笑する。

だがそれは痛む心を無視した虚ろな表情だった。危害を加えられれば痛いし、心はそれ以上に傷を負う。テレーゼは目をつぶって朔の姿を思い浮かべた。

艶のある黒髪、引き込まれそうな紅の瞳。色の薄い唇から零れる声は、夜と昼の境を漂う優しくも強い音色だ。

(朔……)

今すぐ傍に来てほしい。テレーゼは体を丸めた。

「――ねえ、ピギー」

クレアがメリッサを呼ぶ。ねっとりとしたタールのような声が不快だ。テレーゼは唇を噛み締める。

「アンタもやりなよ。また前みたいになりたくないでしょ？」

「……っ」

「ほら、こんな風に」

テレーゼは思う。何故、誰も助けてはくれないのかと。ここには監視カメラがある。それなのに誰もこの惨劇を見ていないのか。メリッサは迷っているようだった。当たり前だ。こんな目には誰も遭いたくない。

痛みを知る人間は優しくなれると言うが、それは嘘だ。優しくなれる人もいるというのが正確だ。痛みを知る人間の中には、自分を護ることに長けてしまう人も含まれている。強いものに従い、弱きを虐げる。その流れを読んで、強いものにつくことが処世術なのだ。だけど、とテレーゼは思った。

メリッサだけは、味方でいてほしい。

「……メリ、ツサ……」

「前と同じことをしてあげようか？ さすがにあの生徒会長も二度目には堪えられずに失脚するでしょうね」

「メルには手を出さないで！」

「あの人本当に腹が立つんだよね。スラムのボスの弟だか知らないけどさ、生徒会長なんてやっちゃって。身の程を知らないって感じ」

「やめて！ メルは何も関係ないじゃない！」

メリッサが叫ぶ。彼女は本当にメルが好きなのだ。テレーゼは虚ろにメリッサを見た。

「――私なら、どうする？」

「大好きな会長のためだと思えば、出来るでしょ？」

卑劣過ぎる。テレーゼは顔をしかめた。前に何があったかは知ら

ないが、クレア達ならきつとえげつないことをやったに違いない。
メリッサの瞳が濁ったように感じられた。テレーゼは諦めたように目を閉じる。

———貴女はやっぱり、メルを選ぶのね。

メリッサの拳が腹に入る。しかしためらっている分、あまり痛くはない。それをクレア達は囁し立てる。

「もっとやっちゃいな！ そしたら仲間に入れてあげる」

メリッサは無表情でテレーゼの腹を革靴で踏みつけた。しかしその瞳からは涙が零れ落ちる。

それは悲しい、みどりいろ、だった。



「——何してるんだ？」

ランチタイムだというのに画面を睨みつけている翠に、スピネルは呆れて言った。どうやら仕事ではないようだが、食事中くらいは休まなければ、眼精疲労が溜まってしまいうだろう。翠の仕事はほとんどデスクワークなのだから。

「柏木が遺した研究データを見ているんです。『紫月』のヒントがないかと思って……ですが、あまり収穫はありませんね。あの人が英国に来てからのデータがあればいいんですが」

「何とかして、『紫月』を一錠手に入れられないのか？」

「無理ですね。こちら側の状況が完全に把握されていますから、朔を動かした時点で気付かれるでしょう。おそらく女王陛下の騎士か使用人に内通者がいるかと……少なからずオリヴァ派もいるようですよ」

「内通者の特定はしないのか？」

「時間の無駄です。向こうは多分もう、ウェストベリー街での事件があった頃には計画を遂行し始めているでしょうから」

翠はテーブルを人差し指で叩きながら言った。スピネルは目を細

める。

「何故断言できる？」

「オリヴァの目的は陛下の殺害、しかしその協力者の目的は朔を殺すことです。そして柏木は朔を憎んでいた……となると、ウェストベリー街の事件は柏木の暴走だったと考えれば筋は通ります。柏木はおそらく、薬を本当に完成させるには膨大な月日が必要だと気付いたのでしょう」

「つまり抜け駆けしたってことか」

「おそらくは。柏木には『紫月』などいませんし、さっさと殺したかったでしょう。あの人は気が短いですしね」

翠はコーヒールを一口飲んで、また画面に目を移した。スピネルは頬杖についてそれを見る。

「……で、公爵に協力しているのが誰なのかはわかったのかよ」

「そこは私の管轄外です。ですが年齢の下限はわかりますよ」

「年齢？」

「国からスラムに金がおりるようになったのが二十一年前です。その頃から子供の数を制限したのです、それより前に生まれているのは確実です。朔がその兄を殺したという娼婦は二十二歳でしたし」
そんなものはほとんど限定できていないに近いだろう。スピネルは溜息をついた。

「それがわかったところで何になる。実際何もわかっていないに等しいようだな」

「生憎、その通りです。朔は『ゼラスに兄弟はいない』と言っていますし。今、『根』がスラム近隣の病院のカルテを漁っているところです。いまだにゼラスのすら見つかっていませんが」

「ゼラスのすら？」

「ええ。妙でしょう？ まるで誰かが意図的に隠したようだ」

ゼラスが生まれたのは三十年近く前だ。おそらくデータが消されても気付かないだろう。翠は片頬だけを上げて笑った。

「多分『根』はもう少しで掴みますよ」

「……そうか」

「スピネルは彼が嫌いなんです。自分と同じ、体を弄られた人間だからですか？」

「僕の体を弄ったのはお前だろう。それを赦したつもりはない」

翠はスピネルの言葉を聞くと、不敵に笑った。

「赦してもらおうなんて思っていないですよ。ですが、『根』は君より残酷な弄られ方をしています。あまり同情しないほうがいい」

翠はスピネルの顎を掴んで上を向かせた。スピネルは周りを気にして、翠に非難めいた視線を向ける。社内ではスピネルが上なのだ。「心配しなくても……少し力をもらうだけです」

翠は交差させた指でスピネルの口を開け、『紅珠』を入れる。スピネルは不満げに翠を見た。

「今である必要はないだろう」

「知らないんですか？ 君はこの時間帯が一番魔力の質がいいんです」

翠が指を鳴らすと、『紅珠』は彼女の手には吸収されていった。翠の目が一瞬だけ紅く光る。

「朔からも少しずつもらって、ようやく柏木の力を奪う前くらいに回復しました。まだ『紅珠』は小さいものしか出せませんが……あれを出すには君の力を奪った方が早い」

「僕は人工物だからな」

溜息混じりにスピネルが言った瞬間、近くにある大聖堂の鐘が鳴った。午後の始業時間だ。

「……では、私は仕事に戻りますよ」

翠はさっとノートパソコンを片付け、コーヒーカップを返却口に置いた。スピネルはそれをぼんやりと見つめる。食堂にはもう、翠とスピネルしか残っていなかった。

「――翠」

「何ですか？」

「……いや、何でもない」

翠の華奢な体を覆い尽くす黒い霧が見えた。しかしそれは一瞬で消えてしまう。何故だか心臓が速くなった。

——まるでその霧が、翠を喰らおうとしているように見えたから。

嫌な予感が、した。



何人にも蹴られ続け、テレーゼの意識は徐々に朦朧としてきた。白く光る景色の中で、テレーゼは微かな声を聞く。

「何をしてるんだ！」

緩慢に首を動かすと、黒い腕章が見えた。それは生徒会の人間である証だ。テレーゼは譫言のように呟く。

「メル……」

不意に、体が浮いた。テレーゼは驚きに目を見開く。しかしメルはそれに気付かずと言った。

「何があったかは知らないけれど、このような暴力行為を見過ごすわけにはいかないな。本当なら即退学だ」

「私を退学に出来るかしら？」

そういえばクレアは子爵だった、とテレーゼは虚ろに思った。しかしメルは静かに笑う。

「勿論可能ですよ。僕は生徒の中ではトップだ。直接退学は言い渡せないが、この問題を生徒総会にかけて貴女たちを裁くことも出来る。それに、僕の養父が公爵位にあることを忘れたわけではあるまい？」

「くっ……」

「このことは全て理事長に報告させてもらう。それまで部屋で謹慎している。もちろん全員だ」

メルはそう言い残して、テレーゼを抱えたままカフェを出た。石畳の廊下を歩いていく。テレーゼは慌ててメルに言った。

「あ、あの！ 一人で歩けます……」

「いや、心配だし……とりあえず僕の部屋に運ぶけど、いいかな？」
「え、えっと……部屋？」

メルは頷いた。確かに生徒会長の部屋は広い。しかし一応男の部屋だ。一人で男の部屋に入るなんて、と朔なら言うかもしれない。でもメルなら万が一にも間違いはないだろう。テレーゼはそのままメルに従った。

「着いたよ」

メルは自室のドアを開ける。そこには黒を基調とした広い部屋があった。必要最低限の物しか置いていない。二つの個性がひしめき合って雑然としているテレーゼ達の部屋とは大違いだった。メルはその、キングサイズのベッドの上にテレーゼを横たえる。

「体は痛まない？」

「あ……大丈夫です」

体が沈み込んでしまいそうなくらいふかふかのベッド。少し前はこんなベッドが普通だったのだ。テレーゼは溜息をついた。

「——なかなかなくならないんだよ。ああいうことは。社会を纏めるにはどうしてもスケープゴートが要る。僕がいたスラムもそうだった」

「メル……」

「それなしで纏められればいいんだけどね。でもそんなことは神様にしかできない」

テレーゼは曖昧に頷いた。確かにそうだ。国を纏めるには外部に敵を作ればいい、と父も言っていた。だけど————テレーゼは呟く。

「一つに纏まる必要はあるの？」

「僕も統一する必要はないと思う。最低限が満たされていればね。だけど飢えた場所には強固な共同体が必要だと僕は思うな」

「……私はそうは思わない。だけど、私の考えは理想主義的過ぎる」とお父様によく言われたわ。だから現実はそうなんでしょうね」

テレーゼはプラネタリウムのように星が描かれた天井をぼんやりと見つめた。まだ微かに痛む体が「これが現実だ」と囁きかける。

——スケープゴートなんて、嫌だ。

自分になるのも、誰かがなるのも。だからメリッサを庇った。しかしそれは現実を見ない少女の馬鹿な行為だったのかもしれない。メリッサの悲しいみどりいろを思い出す。

「……私は今まで、盲目だったんだわ。世界についてわかっている気になっていた」

もしかしたら、メリッサを助けなかった方が彼女を傷つけずに済んだかもしれない。涙を流すテレーゼを、メルは静かに見つめていた。



メレデイスは思案した。少し早いが、ここで計画を実行に移すのがよいだろうか。テレーゼは泣き疲れて眠っている。これ以上のチャンスはないように思えた。

携帯電話を出し、バスルームに入る。テレーゼに声を聞かれないためだ。短縮の一番を押すと、すぐに繋がった。待っていたのか、それとも暇なのか。メレデイスは苦笑した。

《どうした、メレデイス？》

「そっちはどうだ？」

《今すぐでも大丈夫だ。とりあえず三十人は確保した》

メレデイスは笑った。どうやらこの男はよっぽど王位が欲しいらしい。三十人も用意するとは。十人でいいと言ったはずだが。

「そうか。こちらでもいいの外順調だ。メリッサのおかげでな」

《……そうか。それで、用件は？》

「今日中に城に突入しろ。時間を稼ぐために、正面からな。……できるな？」

《もちろんだ》

電話を切る。次は二番——メリッサだ。こちらもすぐに繋がる。

「——今、どこにいる？」

《部屋に……》

「そろそろ動く。準備をしておけ」

《はい……》

メリッサの声は震えている。おそらく泣いていたのだろう。あんなことで——馬鹿馬鹿しい。メレディスはいらだたしく思いながら、携帯を閉じた。

メリッサ・エインズワース——彼女は昔から臆病だった。大人の言葉を鵜呑みにして、朔を恐れていた。その目で真実を知ろうともせずに。

「あれなら、テレゼの方がよほど真実に近い」

彼女はその両の眼で、物事の本質を見極めようとしている。何が正しいのかを判断する天秤を自らの中に持っているのだ。それが備わったのが、武器商人という環境のせいなのか、それとも生まれもつてのことなのか。それはわからない。だが、テレゼは。

「……あの女に、少し似ているな」

ゼラスは一度、彼女に言ったことがある。「月峰朔を裏切れば、お前を迫害するのはやめる」と。しかし彼女はそれを是としなかった。それを口実として後に殺されてしまうということがわかっていたなら、彼女はどうしただろう。それでも朔を庇い続けたのだろうか。メレディスは昔に引き戻される思考を振り切るように、服を着たまま冷水のシャワーを浴びた。ワイシャツが濡れて肌に貼りつく。そうだ。今は花雪のことなど考えている場合ではない。オリヴァが明日城に攻め込むなら、こちらも早く準備をしなければ。メレディスは再び携帯を手を取った。

少し間が開いて、面倒そうな声が聞こえて来た。何だか後ろが騒がしい。どうやら場末のバーにでもいるようだ。

「今日中に城に攻め込む。お前はその間、なるべく時間を稼いでく

れ」

電話の向こうの男は笑って、「殺さなくていいのか」と言う。メレデイスは表情を変えずに応えた。

「苦痛の量が減るだろう、それじゃあ」

《悪趣味。サド。鬼畜》

「その言葉、そのままお前に返すよ」

《お前と違って俺はフェミニストなんや》

よく言う。何人もの女を騙しているくせに。確かに何人もの女を薬漬けにした、自分ほどではないのかもしれないが。

「お前は時間を稼いでくれればいい。それも、少しの間だけだ。そうでないと女王のところに誰も辿り着けなくなる」

《あの薬ってそのくらいしか強くならへんのか？》

「いや。薬には十分な威力がある。だが、身体能力は明らかに劣るだろう？」

《そういうことか》

「それじゃあ、頼む」

メレデイスは電話を切って部屋に戻った。急いで服を着替えて、冷蔵庫からグレープジュースを出す。そしてそれに粉末の『紫月』を溶かし混んだ。それを持って寝室の扉を開けると、制服の乱れを直しているテレーゼと目が合った。

「ごめんなさい、寝ちゃったみたいで……」

「構わないよ。それより、ジュース飲むかい？ フランスにあるワイン工場で作ったやつだから、きつとおいしいよ」

テレーゼは喉が渴いていたのか、喉を鳴らしながら豪快にグレープジュースを飲み干す。コップはすぐに空になった。

「これすごくおいしい！ ちょっと酸味が後を引く感じが……」

「そう、よかった。それすごく高いんだよね。僕はもらったんだけどさ」

「あの……メル？ もう一杯もらっていい？」

どうやらよほど気に入ったらしい。薬入りとは知らずに。メレデ

イスはテレゼの頭を撫でてから、再びグレープジュースを注ぐために台所に向かった。今度は『紫月』入りではない。あえてゆつくりとジュースを注ぎ、部屋に戻った。

「はい。もうないから大事に飲んで」

「うん」

テレゼは、今度は味わいながら赤紫の液体を喉に流し入れた。さっき飲んだ薬が効いてきたのか、瞳の色に赤が混じっていく。それは、ジュースが減っていくのと連動しているようだった。

テレゼの手からコップが落ちる。メレデイスは中身が零れないように、それを静かにキャッチした。

「メル……なんか、体が熱い……」

濡れた紫の瞳は濁っている。どうやらあまり相性は良くないらしい。しかし相性などどうでもいい。テレゼは駒でしかないのだから。

メレデイスは荒く息をするテレゼをベッドに横たえる。娼婦と違い興奮剤には耐性がないらしく、瞳は既に潤んでいる。

「かわいい」

「んむ……っ」

桃色の薔薇のような唇に自分のそれを重ねる。意識が朦朧としているのか、抵抗はない。おそらく触れられたことなどあまりない、幼い唇を舌で割り開く。縮こまっているテレゼの舌を捕らえて絡ませると、テレゼの鼻から甘い吐息が漏れた。

「……あ……メル……」

右耳を舌でなぞる。テレゼは体を小さくした。陶器のような肌が艶かしく赤くなる。

「ふふ……感じてる……?」

「ど、して……メル、んあっ……」

敏感なのは薬のせいだけではないだろう。まだ未熟な体が悦楽に汚れていく。メレデイスは歪に笑った。

「どうしてかって? ……傷つけるためだよ」

無傷の場所を切り刻むより、癒えない傷を化膿させるほうがいい。メレデイスはポケットに忍ばせたスイッチを押し、テレーゼに覆いかぶさった。

制服のリボンを外し、ブレザーとブラウスを脱がしていく。テレーゼもようやく状況を把握したのか、力のない抵抗を始める。初めて『紫月』を服用した状態では、体の熱に抗うのはどんな人間でも不可能だった。

「傷、つける……誰を……？」

「君の大切な人」

メレデイスは、テレーゼの手首を頭の上に纏めあげて、あらわになった首筋を見る。そこにゆっくり噛み付くと、テレーゼの唇から甘い声が漏れた。

「痛いのに感じてるんだ……もしかして、マゾ？」

「わ、たしは……サディスト、だもん……！」

「そうか。僕もサディストだよ。しかも異常なまでの、ね」

テレーゼの頬に手を伸ばす。それだけで、蕩けたような声が上がった。まるで金糸雀のように美しい声。それはメリッサの、どうしようもなく熱を誘う声にも似ていた。しかしその目は強い光を湛えて、メレデイスを睨みつけていた。

「……いい女だ。やはり、花雪に似ている。」

汚れていないから、汚したくなるのだ。テレーゼも花雪も雪のように汚しやすそうでありながら、なかなか汚れない。

テレーゼが薬に慣れて来たのだろう、先ほどより強い抵抗を始めた。メレデイスはテレーゼの細首を締め上げる。テレーゼはのけ反って、掠れた母音を漏らした。美しい顔が苦痛に歪む。

「僕は頭に二つ障害があってね。一つは体の成長が十五で止まるってやつ。もう一つはね……異常な加虐嗜好なんだ」

「……ン、ア」

「それで、僕の親は僕を幽閉することにしたんだ。最初は大人しくしてたけどさ……僕の双子の弟と二十歳の誕生日に親を殺したんだ」

テレーゼは目を見開く。当たり前だ。ここでは十八歳ということになっている。メレディスは青の目を細めて笑った。

「……め、る……もう……離してっ!」

テレーゼが途切れ途切れに叫ぶ。

その瞬間、彼女の瞳が深紅に輝いた。



「今日はもう上がっていいぞ」

「え?」

頼まれたレポートを渡すと、スピネルが言った。時刻は午後三時。まだ終業時間の三時間も前だ。

「……やりたいことがあるんだろう? こんなつまらない仕事なんかより」

スピネルはレポートに、退屈そうに目を通して言言った。翠は苦笑を浮かべる。

「仕事はつまらないものですよ。ですが……確かに色々やりたいことはあります。ここでやっても構いませんか?」

「いいけど……何故ここなんだ?」

「セキュリティの問題です。手を読まれたくはありませんから」

なるほど、とスピネルは呟いた。クール社のパソコンには、かなり嚴重な侵入警戒ソフトが組み込まれている。しかしそれも、腕のいいハッカーや情報屋なら易々と突破できるだろう。だが気休め程度にはなる。翠は社長室のコンピュータを起動させた。

「お願いがあるんですが」

「何だ?」

「テレーゼに連絡を取ってくれませんか?」

スピネルは首を傾げながら目隠しを取る。説明の手間が省けていい、と翠は思った。

「……なるほど。僕の携帯は軍用だからな。確かに傍受される可

能性は低い。相手の言葉も自動的に暗号化するしな」

「ディーフェンベーカー公が関わっているとすると、腕のいい情報屋を雇っている可能性はありますし」

「わかった」

スピネルはすぐに携帯電話を出して、短縮の一番を押した。スピーカーホンをオンにして机の上に置く。しかし電話が取られる気配はない。スピネルは舌打ちをした。

「――授業中かもしれませんね」

「だろうな……後でもう一度かけ直そう」

翠は画面を見つめて、小さく唸った。スピネルはちらりとそちらに目をやる。

「何か見つけたのか」

「ディーフェンベーカー公ってかなり身寄りのない子供を引き取って養子にしているんです。確かもう、二十人はいますね。その中に気になる人がいるんです」

ディーフェンベーカー公の養子の中で、一人だけ妙な人物がいる。

翠は素早く考えを巡らせた。

「一人だけ学校に通っている？ それは確かに妙だ」

「しかもチェスタートンの生徒会長です」

スピネルは瞠目した。翠はそれを不思議そうに見る。

「知ってるんですか？」

「会ったことがある」

「それで？」

翠は言外に何か見えたのか、と聞く。スピネルは腕を組んだ。

「どうやら言葉でものを考えるタイプじゃないようだな。はっきりとはしなかったが……何か、ものすごく歪んだものを感じた。人の命を弄んで快樂を得る類の、フリードリヒと似た感じだった」

「……おかしいところはもう一つあるんです」

思い過ぎかもしれない。そうだったらいい。しかしもし予想が真実だったなら。翠は溜息をついた。

「あまり疑いたくはないんですが」

「だが確かに妙だな。お前が少し調べただけで簡単に調べられるものが、何故アイツに調べられなかったのか……」

「アメリカ陛下の愛人であるのだから、公爵の養子について知らないわけではない。私のように単に忘れていた、ならいいのですが」

裏切りに敏感になっているだけなのかもしれない。翠は腹部に未だ残る傷を撫でた。

「あれが月峰を裏切るなら、相当な理由が必要だな。それほどまでに月峰を思っていた」

「そうですね……」

「……警戒していて損はないだろうな。ところで、生徒会長のことと言うのか？」

翠はこめかみを押さえた。今の段階ではただの予想だ。証拠はない。だが朔は警察と違って、それでも動いてしまうのだ。そうでなければサリューからテレーゼを救うことは出来なかっただろう。

「生徒会長が『紫月』を持っているという証拠さえあればいいんですよね……そのくらいなら、朔の手を煩わせることなどありません」

「……行くのか？」

「自分の目で見た方がいいでしょう？ スピネルはどうします？」

「愚問だ。行くに決まっているだろう」

おそらくは朔のことよりも、テレーゼのことを考えているのだ。スピネルはテレーゼ絶対主義なのだから。翠は苦笑を浮かべた。

「——それじゃあ、行きましょうか」

第七話『襲撃』



痛んだものなど一つもない、庭師の努力の結晶であろう青薔薇のアーチを抜けると、テレーゼが好んで身につけていたベルベットを思わせる滑らかな芝生が広がっている。これが裏庭だというのだから驚きだ。アメリカはその芝生の空間の中心で、静かに紅茶を飲んでいる。漂う気品は、やはり女王のものだ。朔は静かにアメリカに近付いた。

「――御用でしょうか、陛下」

「まあ、そこに座りなさい」

朔は促されるままに、アメリカの向かい側に座った。そして女王の顔色を伺う。何故呼び出されたのかがわからなかったからだ。何か『紫月』について新しいことでもわかったのだろうか。

「あの……陛下？」

当然のことのようにメイドがダージリンを運んで来て、さらにわけがわからなくなった。アメリカは当惑する朔をよそに、マカロンを口に運んでいる。

「そんなに緊張しなくてもいいわ、朔。ただ暇だから呼んだだけだもの」

「……は？」

暇だから――呼び出す理由としてはあまりに横暴過ぎる。朔は深々と溜息をついた。金持ちの子女というものは、横暴になるものなのだろうか。

「もちろんそれだけじゃないわ。でも理由の八割は暇つぶしに貴方と話がしたいからよ」

「俺は学がありませんから、陛下にとって面白い話は出来ませんが」
「謙遜は良くないわ。日本人の悪い癖ね。貴方は私の知らない世界

を沢山見て来たわ。だからこそ、貴方の意見を聞かせてほしいの」

アメリカはそう言ってから、再びマカロンをつまんだ。朔もアメリカに促されるまま、ピンク色のそれを口に運ぶ。苺味だろうと思つて口にしたらそれは、予想に反して桜の香りがした。

「緑茶にすればよかったわね。和洋折衷も考えものだわ」

単体で味わえば美味しいのだが、紅茶にはあまり合わない。朔は苦笑しながらも、もう一つマカロンを手にとった。

「――朔は『出生前診断』って知っているかしら？」

「人並みには」

「今の出生前診断では体の障害だけでなく、精神の障害まで調べることが出来るわ。それも早期の段階でね」

アメリカはそう言って、空を見つめた。空と同じ色の瞳には憂いが滲んでいる。

「男の人はあまり知らないかもしれないけど、本当に細かいところまでわかるのよ。心がどういう方向に傾きやすいか……つまり加虐指向なのか被虐指向なのか、そしてそれがどれだけ強いのかというところまでね。もしお腹の中の子が、普通より加虐指向が強かったとしたら……貴方ならどうする？」

アメリカは腹部を大事そうに撫でながら言う。

「それは男に聞いても……。まあ、俺が女なら気にせず産むかな。加虐指向も被虐指向もあくまでそうなりやすいってだけで、実際それがS Mに発展するか、はたまた猟奇殺人に発展するかはわからない」

「私もそう思うわ。……だけど、そう考えない人も多いのよ。私の祖父や父がそうだったように」

アメリカは胸元に輝くネックレスを指で弄りながら俯く。青い髪が影を作った。

「私は幸い、平々凡々だったの。でも叔父様は違ったわ。加虐指向の数値がかなり高いの。祖父いわく、もはやそれは一種の障害だそうよ」

確かに王は「君臨すれど、統治せず」という言葉が示すように、権力は持たない。しかし国家元首が乱心では確かに困るかもしれない。だがそれはただの可能性だ。そうなりやすい、というだけだ。「……だから叔父様は、本当は墮胎されるはずだったの。でも祖母が反対したのよ。私はそう聞いているわ」

何と言えいいのかわからなかった。朔は無言でアメリカから目を逸らす。アメリカはそれに気付いたのか、苦笑を浮かべた。「祖父は叔父様が王にならないようにと遺言を遺しているの。だから多分、私を殺してその遺言も処分してしまいたいのよ」

「悲しいことに、それが成し遂げられてしまうと検査結果通りになっちまうわけだけだな」

朔は空を仰いだ。オリヴァのやろうとしていることは、『化け物』と言われた自分がその通りに人を殺してしまったことにも似ている。だからオリヴァを断罪することは出来ない。朔は溜息をついた。

「……そうならないように、止められるといいんだけど」

「そうだな……」

アメリカは最後のマカロンをつまんだ。しかしなかなか口に運ぼうとはしない。

「――祖父は出生前診断で異常が出た子供を人として扱おうとはしなかったわ。もちろん、表面には出さなかったけれど……彼等を道具としてしか見ていなかったということは、よくわかるわ。家族である叔父様ですらそうだった……父上もまたそういう人だったわ。だから私は二人がすごく怖かったの」

アメリカの声が僅かに震える。朔はそれに気付いていないふりをして、紅茶を飲んだ。

「――私は叔父様が一番好きだったのよ」

それは聞かなくともわかる。アメリカはこの話の最中、「父」や「祖父」と言っていたのに対して、オリヴァのことはずっと「叔父様」と呼んでいたのだ。朔は静かにカップを置いて、アメリカを見る。

「昔に戻りたい……」

「オリヴァが今のようになったのはいつ頃からだ？」

「もう四年も前になるかしらね。祖父の遺言のことを父に教えられて……」

「そうか」

皮肉なことだ。オリヴァの加虐指向を呼び覚ましてしまったのが、それを警戒していたアメリカの祖父なのだ。朔はテーブルの上で拳をにぎりしめながら言う。

「人間は初めから生き方が決まっている存在なんだろうか……だとしたら何故、それに抗う心があるんだろう」

「『抗う心が人間なのだ』ってフェイノールトは言っていたわ。たとえ報われなくても、抗ってこそ人は人になれると」

だがそれは苦しい生き方だ。最後まで自分のジャーナリズムを貫いたフェイらしい言葉ではあるが。朔は陰り始めた空を眺めた。

「抗ってこそ、か……」

——何に抗えばいいのだろう。

わからない。そもそも自分は今まで何かに抗ったことがあっただろうか。

抗う人なら沢山見て来た。運命と戦い、たとえ手を血で濡らしても生きてきた人を見て来た。しかし自分はどうかだろう。

唇を噛む朔に、アメリカは優しく笑いかけた。

「貴方ほど何かに抗って生きてきた人を私は知らないわ」

まるで心を読んだかのような言葉だ。朔は力無く首を振る。しかしアメリカは構わず続けた。

「貴方は本当は、誰も傷つけたくなかったんでしょ？　しかしそれに抗い人を殺してきた」

「……違う」

「え……？」

「確かにそう思うときもある。だけど全てじゃない……殺しが楽しいと思ったときもあったんだ。幸せそうな子供の断末魔を聞きたく

なったり……俺の中には確かに狂気があって、俺はそれに抗えない。抗おうともしなかった」

朔は自分の体を抱いた。空に浮かぶ雲は徐々に灰色に染まっている。雨が降るかもしれない。

「貴方はいつだって抗おうとしているのよ、朔。少なくとも私はそう思うわ」

アメリカは白い木蓮のように笑って立ち上がった。朔もつられて立ち上がる。

「雨が降りそうね」

アメリカの言葉に反応したかのように、太陽が雲に隠れる。重く垂れ込めてくる空を見ると、城の正面の方から爆音が聞こえて来た。続いて、右耳に付けていた無線が叫ぶ。

《正面より約三十名の賊が侵入！ 総員直ちに持ち場につき、全力で陛下をお守りしろ！》

朔はアメリカの手を引いた。

「【漆の闇よ、我を護りたまえ】！」

アメリカと朔の周囲二メートルが、半透明の黒い膜に覆われた。

「――朔」

アメリカは朔の騎士服を引っ張った。朔は無言で振り返る。

「正面の方に行きなさい。もしこれが『紫月』を使った人達による襲撃なら、貴方がいかなないとどちらにも大きな損害が出るわ」

「だけど……」

アメリカを一人には出来ない。むろん、騎士達の数人はこちらに向かっているだろうが、心許ない。

どうするべきか――朔が目を閉じた瞬間、救いとも呼べる声が届いた。

「――朔」

「『根』、陛下を頼む！ 俺は正面の方で食い止めるから」

『根』はパーカーのポケットからコードを出して、頷いた。魔術は使えないが、一度青血隊と戦っている分だけ信頼できる。朔はす

ぐに正面の門まで飛んだ。



「……め、る……もう……離してっ!」

目が熱い。瞼ではなく眼球そのものが熱い。何かがせり上がって来て、爆発するような気配がした。まるで静電気のような音がして、メレデイスが呻きを上げる。

手が首から離れ、テレーゼは一気に大量の酸素を吸い込んでむせた。喉の奥で僅かに血の味がする。

「……っ、は……っ」

テレーゼは咳き込みながらもメレデイスを睨みつけた。メレデイスはそれを見てうつそりと笑う。

「そういえば君は青血石の力で生きているんだよな……さっきの電撃はそういうわけか」

「……?」

「わからないならいい。わかる必要などない」

メレデイスは起き上がったテレーゼを再びベッドに押し付けた。前を開けられた制服をさらに乱される。テレーゼは叫ぼうと口を開けるが、メレデイスは素早くテレーゼの口の中に自分のネクタイを押し込んだ。

「ん、ん——!」

「何言ってるか全然わかんないよ」

メレデイスの透明な紫色の目が細められる。全てを見られているような気がして、テレーゼは羞恥に肌を染めた。だが氣力を振り絞ってメレデイスを睨みつける。

「君ほど氣丈な女は初めてだ。——いや、花雪もそうか」

「……!」

花雪、という単語に体が反応する。メレデイスはそれを見て、右の口角を上げた。

「彼女がどうやって死んだかは知ってる？」

テレーゼは震えながら頷いた。全て朔から無理矢理聞き出したのだ。それがどんな惨状だったのかも知っている。

そして今、自分がその状況に置かれているということも。

「暴れられると困るからね……薬を追加しようか」

メレデイスはサイドテーブルの引き出しから細い注射器を取り出し、中に紫色の薬剤を入れた。テレーゼは逃げようと暴れるが、すぐに押さえ込まれてしまう。

「――大丈夫……すぐに何も考えられなくなるから」

首筋に小さな痛みが走る。薬が全て注がれると体が弛緩した。逃げなくては、と思うのに指一本思い通りにならない。そんなテレーゼを嘲笑うように、メレデイスの熱い舌が注射痕の上を這う。

もうメレデイスを睨みつける気力さえ、残ってはいなかった。

心が白く濁っていく。まるで眠りに落ちるその時にも似て、強く無に引きずられていく。

メレデイスの手が、幼い胸を包む下着に伸ばされる。しかし抗うことは出来ない。ただぼんやりと、そこには発信機が仕込んであることを思い出した。

(朔……)

朔が守護者だった頃は、この発信機が外されると警報が鳴る特殊な無線を左耳につけていた。今もつけていてくれるだろうか。テレーゼは最後の望みを懸けた。

――早く、外して。

テレーゼはメレデイスがこの下着の妙な点に気付かず、素直にフロントホックを外してくれるのを待った。

小さな音がして、ホックが外される。

あとはもう、朔が無線をつけてくれていることを祈るしかない。

(助けて、朔……)



城の正面では、一列に並んで銃を構えた騎士達と、同じように一列に並んだフードを被って顔を隠した三十人ほどの女達が違いの得物をぶつけ合っていた。

魔術も銃も、遠隔攻撃に長けている。だが攻撃できる範囲は魔術が上だ。一斉に火を放たれてしまえば、辺りは一気に焦土と化すだろう。押されているのは騎士達の方だった。朔は素早く叫ぶ。

「【水よ、我を地獄の業火から護る盾となり給え】！」

騎士達の手前に薄い水の壁が出来る。相手は焰の魔術を中心に使っているから、これで防げるはずだ。目論見通り、放たれた大量の炎蛇は盾に阻まれてこちらには届かない。騎士達は驚きの目で朔を見つめた。

「今のは何だ……？」

騎士団長が全員の疑問を代弁する。

「今は説明している場合ではありません。とりあえず彼等を何とかしなければ」

「あ、ああ……」

しかし数が多すぎる。どうすればいいだろうか。一瞬考えた瞬間、黒い『狗』が一斉に向かって来た。始めは水の壁に阻まれて消滅していたが、徐々に数が増える。そのうち『狗』の腐敗の力が水の力を上回り、壁は完全に破壊された。騎士達は『狗』に銃弾を浴びせる。しかしそれは通用しなかった。朔は素早く紅枝垂の鯉口を切り、前線に躍り出る。

「【全てを焼き尽くす煉獄の炎よ、根の国から来たりし邪なるものを灼き、聖母のごとき光明で世界を照らし給え】！」

完全浄化の呪文——『狗』ならこれで十分なはずだ。しかし『狗』は消えない。朔は舌打ちをして、炎を纏わせた刀を振るった。

——何故、滅せられない？

一匹も斬れないのはおかしい。その疑問に答えたのは、数日前に聞いたばかりの声だった。

「これは君が知っている魔術とは違う」

「オリヴァ……」

「私の狙いはアメリカただ一人。通してくれば攻撃はしない」

そう言われて通してしまうのはただの馬鹿だ。朔はオリヴァを睨みつけ、紅枝垂を正眼に構える。

「この呪術は、普通の呪術にドクターが改良を加えたもの。実戦で使うのは初めてだが、君が知る魔術で対抗することは出来ないはずだ」

「ならば術者を攻撃すればいいだけの話だ」

朔は高く跳躍して、敵の懷に飛び込んだ。もとより接近戦の方が得意なのだ。峰打ちで一度に五人を気絶させる。狗の数が少しだけ減ったが、それは騎士達に向かって駆け出していく。朔がそちらに気を取られた瞬間、オリヴァが空気の塊を飛ばす。朔はしかし、すんでのところでそれをかわした。

騎士達の方から叫び声が聞こえる。風が腐敗臭を運んで来た。朔はそちらに時々目をやりながら、フードを被った女達を失神させていく。術者が意識を失えば、魔術は形を保てない。それは改良されても変わらないようだった。

いくら魔術を得ても、身体能力が上がるわけではない。女達は成す術もなく地面に倒れ伏していた。殺してはいない。だがしばらくは目を覚まさないだろう。

「……やはり、強いな」

「当たり前だ。年季が違う」

あと十人——朔は自分に向かって放たれた火球をよける。しかしよけたところに、猛烈な電撃を浴びせられた。視界が白く染まる。だが動けないわけではない。

「【母なる地よ、我が声に応え敵を捕らえよ】！」

芝生が生えた土が盛り上がり、オリヴァ達の体を拘束する。朔は立て続けに術を放つ。

「【闇よ、死にも似た深き眠りを与えたまえ】！」

「【水よ、全てを返す鏡となれ】！」

同時にオリヴァが叫ぶ。朔は返って来た自分の術を、すんでのところでよけた。オリヴァが返しきれなかった眠りの呪文が効いたらしく、三十人ほどいた娼婦達は全員倒れていた。騎士達も城の中に逃げたのか、『狗』に襲われた人の姿すらなかった。

「……これを狙っていたのか、月峰朔」

「お前こそ」

オリヴァはおそらく、娼婦を使う気などなかったのだ。朔はその透明な紫の瞳を睨みつける。不本意だが、自分とオリヴァの二人だけを残すという思惑は一緒だったらしい。

「――聞きたいことがある」

朔はオリヴァの頸動脈に、紅枝垂を突き付けた。しかし怯む気配はない。『紫月』の作用だろうか。朔はいらだたしげに、刀を持つ手に力を込める。

「お前に協力しているのは……ゼラスの弟とは、誰だ？」

「教えるわけがないだろう？」

オリヴァは胸元からオイルライターほどの大きさのものを出して、その黒いボタンを押した。小さな音でマザーグースが流れ始める。いや、歌詞が一部違う。

Ring—a—Ring—o—Corpses, —（死体の輪を作りましょう）

A pocket full of poisons, —（ポケットを毒でいっぱいにして）

Atishoo! Atishoo! —（はっくしょん！ はっくしょん！）

We all fall down. —（みんなで転びましょう）

あの時娼館で聞いた歌だ。朔の意識は何故か白濁としてきた。体から力が抜ける。

「な……んだ……？」

「やはりまだ暗示が生きているらしいな。もう十年も前だと言っていたが」

オリヴァの声に靄がかかる。その代わりに、心臓が驚くほど強く脈打った。息が荒くなる。隠していた衝動が暴走を始める。

原因はおそらくあの歌だろう。朔は紅枝垂を納め、小さなナイフを取り出した。この状態で紅枝垂のような長い刀を振るったら何が起こるかわからないからだ。

心臓がうるさい。体が思うように動かない。朔は血の味がするまで唇を強く噛んだ。

「暗示……？ 何の、ことだ？」

「サブリミナル効果というのは知っているか？」

朔は頷いた。最近の配信音楽の中にはサブリミナル効果で精神病を治そうとするものすらある。もちろん、立証はされているようだ。人の中にある自己治癒力を活性化させることが出来るらしい。

「この歌には、聞こえはしないが……加虐指向を引き出すような音が入っている。特にお前はこれに強く反応するように暗示をかけられているんだ。八年以上も前にな」

「意味が、わからない……っ！」

「わかる必要はない。死ぬ前にはわかるだろう」

オリヴァはにやりと笑って朔に近づき、そのまま城の中へと飛んだ。見渡すとさっきまでいた芝生の原がある。アメリカの青い髪と、『根』の茶色のそれがちらりと見えた。

「——久しぶりだな、アメリカ」

「叔父様……」

「お前はいつも言っていたな。『お祖父様やお父様は間違っている。人はあらかじめ決まっている存在ではない』と……だが私は違うと思う。人は結局動物で、定められた衝動に抗うことなど出来ない！だから私もその通りに生きるしかないんだ」

オリヴァがアメリカに向かって火球を放つ。朔は素早く水を出し

てそれを打ち消した。

「まだ理性を保っていられるとは……」

オリヴァが感嘆の声を上げる。しかし正直限界が近かった。微かに響くマザーグースが狂気へと朔を誘う。壊せ、と腰の辺りに重く低い声がした。

「朔に何をしたの!？」

アメリカがオリヴァを問い詰める声が遠く聞こえる。オリヴァは薄く笑った。

「これは私と同じような存在……生まれながらに加虐指向が強い人間だ。それを活性化しているだけだよ。いわばこれに屈したときの月峰朔が、本当の月峰朔なんだ」

自我が途切れ始める。抗うことの出来ない、熱病のようなものが内部から沸き上がって来た。朔はナイフを構え直す。

「——ようやく堕ちたか」

くつくつと、オリヴァが笑った。

破壊衝動が体を支配していく。朔はナイフを持ったまま、アメリカのいる方向に足を踏み出した。高く跳躍して腕を突き出す。しかし、その腕は『根』のワイヤーに捕われた。

「朔!」

「正氣に戻そうとしても無駄だ。八年前はそこにいる全員を斬るまで止まらなかった」

「そんなら、お前も死ぬで?」

「……それでいい」

オリヴァが答えた瞬間、朔はワイヤーを引きちぎった。『根』は舌打ちをする。

「馬鹿力やな。そんな細い体のどこにそんな力があるんだか」

それは朔が正氣を失っていることの、何よりの証明だった。普段はより武器を滑らかに扱うために力をセーブしているのだ。『根』はコードを朔に向かって投げる。それは意志を持つかのように朔の体に絡みつき、電気を流した。出力は少し強いスタンガンと同じく

らい。動けなくなるくらいだが、それで十分だ。しかし朔は全く動きを鈍らせず、紅枝垂を抜いた。

「くっ……」

『根』はコードを刀身に巻き付けて攻撃を防ぐ。しかしそれも時間の問題だろう。『根』は朔の懷に潜り込み、鳩尾に拳を叩き込むとする。しかし、それを察知した朔は素早く後ろに引いた。

「【魔から出る焰よ、業火と変じ彼の者を灰塵とせよ】！」

巨大な焰の竜が『根』に向かう。『根』はアメリカを庇いながら攻撃をかわす。しかしよけきれなかった左腕に激痛が走る。

「――『根』！」

アメリカが叫ぶ声も、既に朔には届かなかった。朔は再び紅枝垂を構えて『根』に切り掛かる。

――その時。

朔の左耳の奥で、鼓膜が破れそうなくらいの警報が鳴り響いた。動きが止まる。意識が急激にクリアになった。

朔は振り返り、素早くオリヴァに峰打ちをくらわせた。オリヴァは目にも留まらぬ朔の動きに対応出来ず、芝生の上に倒れる。朔は紅枝垂を鞘に納め、『根』に向き直った。

「朔……」

「テレーゼの発信機が外された」

「え？」

もしその身に危険が迫ったなら、下着につけている発信機を外すように言っている。そのために、テレーゼの下着は全て前にも後ろにもホックがついているという、特殊な形をしているのだ。

「――テレーゼのところに行く」

朔は短く言い捨てて、『根』達に背を向けた。しかし『根』は、その背中に歪んだ笑みを向ける。

「行かせへんで、朔」

「え……？」

朔は驚いたように振り返った。

そこにはアメリカの首筋にナイフを突きつけている、『根』がいた。その表情は今までに見たことがないような冥い笑みで。朔の喉から、掠れた声が漏れた。

「――何の、真似だ」

「見ればわかるやんか。俺はお前とアメリカを裏切ったっちゅうことや」

「……笑えない冗談はよせ」

「冗談やない」

頭が事態に追いつかない。朔は子供のように首を振った。

「う、そだ……冗談だって言えよ!」

「せやから冗談でも夢でもないんや。俺はこの事件に一枚噛んでる。けど別にお前を殺したくて協力したわけやない……」

「私と、叔父様……祖父の血縁の者が目的ね?」

頸動脈にナイフを当てられているというのに、凜としたいものの口調でアメリカは『根』に問う。『根』はにやりと笑った。

「そうや。俺をこんな体にした奴に復讐してやりたかったけど、施設に出資したアメリカのじいさんは死んどるし……せやから末代まで崇ってやろうっちゅうわけだ」

アメリカはどうやら全ての事情を理解したようだ。しかし朔には解せないところがいくつもある。だがその疑問のうちの一つでも、口に出せたものはなかった。

さっきの警報も気になる。『根』がこのタイミングで動き出したことからして、テレーゼの身に何かが起こっているのは間違いない。『根』は自分をテレーゼのところに行かせたくないのだ。それなら、逆にテレーゼのところに向かうのが得策だろう。

頭ではわかっている。しかし、指一本すら動きはしなかった。

「……なん、で」

何かが壊れていく。それは八年前、花雪の汚された屍を見た時にも似ている。視界が闇色に侵食され始めた。

「知ってしまったのね……」

アメリカが呟くように言った。『根』が息を呑む気配が伝わってくる。

「貴方に施された手術は、貴方の寿命を縮めた……ファイルにはそう書いてあったわ」

「知ってたのか」

「——どういうことだ？」

目の前に突きつけられた事実を見ることが出来なかった。本当は理解しているのだ。何故『根』が自分を裏切ることが出来たのか、その理由を。そして『根』が本当に望んでいることを。

「俺は、あと二週間と二日の命や。アメリカのじいさんが出資した施設で頭を弄られたせいだな」

「——皮肉だな」

そうやな、と『根』は笑う。だがそれはとても虚ろだった。朔は唇を噛んで、紅枝垂の柄を握りしめる。

——何でよりにもよって、クリスマスなんだ。

やはり、神なんてどこにもいない。朔は思った。ゆっくりと紅枝垂を抜く。刀身を紫の光が走った。

躊躇いはない。

朔は『根』に向かって足を踏み出した。

「それで、いいんや——」

そう『根』が呟く声が、聞こえた気がした。

第八話『廻り出した崩壊』



そこには異様で淫靡な光景が広がっていた。スピネルが怒りに任せて叫びをあげる。

「【冥夜に身を伏す業火の灯火よ。今こそ降り立ち破邪の鉄槌と成せ】！」

メレデイスを炎が襲う。翠はメレデイスがそれに気を取られている隙に、テレーゼを抱き上げ、服の乱れを直した。

「み、どり……遅いわよ……」

「すいません。でももう大丈夫ですよ」

テレーゼは憔悴しきった微笑を浮かべて目を閉じる。翠は瞳を紅化させて、メレデイスを睨みつけた。スピネルも同様にメレデイスに鋭い瞳を向けている。

「女性にこんなことをするなんて……最低ですね、メレデイス・ゴード・アーベントロート」

「少し前までその娘を殺そうとしていた君には言われたくないな」

「女というものがわかっていないようですね。まあ、貴方のような人にわかられたくもないですが」

テレーゼの瞳は紫色に変わっていた。間違いなく薬を打たれているだろう。余裕の表情を浮かべながらも、翠は内心焦っていた。おそらく天然に近いほど薬との相性は悪い。幼い頃に体内に青血石を埋め込まれたテレーゼは、天然に限りなく近い体をしているのだ。出来るだけ早く薬を抜かなくては。しかし逃げることは出来ないだろう。翠は唇を噛んでから、叫ぶように言った。

「【我が紅き獣よ、欲望のままに全てを喰らい尽くせ】！」

翠の右手の甲から現れた紅珠が、まるで狼のように姿を変えてメレデイスに突進する。スピネルも、間髪入れずに叫ぶ。

「【炎よ、本能のままに敵を飲み込め】！」

メレディスは舌打ちをしてその両方をよけ、指を鳴らした。何もない空間から、赤毛の少女が現れる。

「メリッサ・エインズワース……」

それはテレーゼと同室の少女だ。翠は歯噛みをする。スラム出身だとテレーゼに聞いたとき、その可能性を考えなかった自分を悔いていた。

「――何を呆けている、翠」

スピネルは自分が何を考えているかなど、手に取るようにわかっているだろう。それ故の言葉に、翠は僅かに笑った。

「私がメレディスをやります。スピネルはあの赤毛の娘をお願いします」

テレーゼを床に横たえてから、翠はスピネルに言う。スピネルは無言で頷く。それと同時に足を踏み出した。



メリッサの紫の双眸はメレディスを、そしてそれと対峙している翠を見つめていた。自分には興味がないらしい。スピネルは右手首に小さな蝙蝠の翼を生やし、指先から黒い弾を放った。もちろん威嚇のためだ。

「お前の相手は僕だ」

薬のせいか、メリッサの意識は混沌としている。やりにくい、とスピネルは思った。たいていの人間は考えてから動く。ことに魔術は考えなければ発動すら出来ない。だから千里眼があれば、人工であるが故の不利な点は埋められる。しかしこの混乱した意識の持ち主では、そのような戦い方は難しい。

（メレディスの方がやりやすいが……翠の感情もあるだろうしな）

翠はテレーゼのためになど戦わないのだ。あくまで朔のためである。だからこそメレディスには怒りを感じているのだろう。

（要はメレデイスとの戦いに集中したいということだ）

メリッサを倒す必要はない。だが、翠達の戦闘に介入させてはいけない。スピネルは戦いを始めた翠を睨むメリッサの眼前に、黒い炎を出現させた。

「二度も言わせるな。お前の敵はこの僕だ」

メリッサの目に、ようやく闘志の炎が燃える。スピネルは右頬だけで笑って、左足で床を蹴った。同時にメリッサも跳び上がる。

「闇よ、その混沌の力で全てを飲み込みたまえ」！

「光よ、その身で全ての闇を暴きたまえ」！

放った術はすぐに霧散させられる。しかしスピネルは余裕の表情を見せた。柏木が後ろにいたのなら、普通の魔術には対応出来て当たり前だろう。スピネルは指を鳴らして右手首の翼を黒い弓矢に変形させた。

「風よ、刃となりて敵を切り裂け」！

メリッサが叫ぶ。スピネルは腕を胸の前で交差させ、体を黒い球体で包んだ。メリッサが舌打ちをする。スピネルは間髪入れずに、球体の中から三本の黒い矢を放った。

「きゃあっ！」

矢が刺さったところから壊死が始まる。スピネルは冷たくメリッサを見たまま、再び弓を引いた。

「これは悪魔レラジェの弓。これは相手に壊疽傷を与える。心筋は再生しない組織だ。――どうなるかは、わかるだろう？」

「脅しているの？」

「降伏すればこれ以上の攻撃はしない」

「私はメレデイス様のため、そして母さんの仇を討つわ。たとえば、それで死んでしまったとしても」

「――そうか、残念だ」

言葉に嘘はないようだ。スピネルはメリッサに向かって再び矢を放った。今度はさすがに防御される。

しかし、スピネルにはメリッサの次の行動が見えていた。放たれ

た炎をかわし、メリッサの懷に入り込む。そして魔力で硬化した拳を叩き込むと、メリッサは床に倒れた。とりあえずこれで一安心――

しかし、床に倒れたメリッサは氣力を振り絞って術を放つ。しかもスピネルではなく、翠にだ。翠は氣付く様子もない。様子がおかしい。

「――翠！」

翠とメリッサの間に立ちはだかり、防御結界を張ろうとする。しかし間に合わず、腹の肉が一気にえぐられた。

「くっ……【闇の光よ、彼のものに安らぎを】！」

スピネルはメリッサに眠りの術を放ちながら床に倒れる。翡翠色の瞳が自分を心配そうに見つめているのがわかった。



メレデイスを選んだのは、二つの理由があった。一つは朔との關係を聞き出すため。もう一つはメレデイスを見たときに、悟ったことが一つあったからだ。翠は魔術で隠していた寒緋桜を抜き、メレデイスを睨みつけた。スピネルではなく自分を見つめているメリッサが氣になるが、それはスピネルがどうにかしてくるだろう。そのくらいには信用していた。

「本当はこのまま首をはねてもいいが……確認したいことがある」
翠は寒緋桜を上段に構えた。防御よりも攻撃を重視した構えを選んだのは、威圧のためだ。

「確認？」

「貴様は復讐のために動いているのではない。そうだろう？」

メレデイスは嗤った。どうやら正解のようである。

「さすがドクターの娘と言うべきか……勘がいいね」

「私はあれを父親だと思ったことはない！」

否定したい。メレデイスの表情は、父親のそれに酷似しているの

だ。翠はそのままメレデイスを袈裟掛けに斬りつけた。しかし体を引かれて、僅かに服を切り裂くに留まる。翠は思わず舌打ちをした。「舌打ちなんてするもんじゃない。仮にも女の子が」

「貴様にだけは女を諭されたくはないな」

「気丈だね……やはり鞍馬花雪に育てられただけはある」

柏木と繋がりがあったのなら、日本が崩壊するまで、花雪が母親代わりをつとめていたことくらいは知っているだろう。しかしメレデイスの言葉には、それ以外の含みがあるような気がしてならない。翠は翡翠の双眸を細めた。

「何も知らないようだな。まあ、それも道理か」

「……」

翠は無言で、メレデイスの頸動脈に刀を突きつけた。少しでも力を入れれば死が訪れるというのに、メレデイスは余裕の表情を崩さない。「何か、ものすごく歪んだものを感じた」というスピネルの言葉を思い出す。確かに歪んでいる。刀を突きつけられて平然としていられる人間に、普通の者などいはいはしない。

「教えてあげるよ。僕の計画をね」

メレデイスに攻撃の意思はないようだ。むしろ、計画を話したがっている。翠は身構えながらも続きを促した。

「僕は本当は十八歳じゃない。君よりも年上——三十一歳なんだ。だけど体の成長は十五歳で完全に停止した。そのことは出生前診断で既にわかっていたんだけど、双子の弟がいたからね……墮ろすことはできなかった」

「それが貴様の計画に何の関係が？」

「まあ、焦らずに聞いてくれよ。僕には体の成長が止まる障害と、異常なほどに高い加虐指向があった。だから僕の両親は僕を二十年間幽閉した……でも、二十歳になってすぐに弟のゼラスと両親を殺した。父親はボスだったから、ゼラスはそれを継いでボスになった。僕はそれを補佐していたわけだよ。でも、僕は満たされなかった。何かを壊したいと体が疼くんだ！ 両親を殺したときのように傷つ

けて傷つけて……壊したい！ だから僕は決めたんだよ。もっと大規模な破壊の計画を立てようってね！」

狂っている。翠は吐き捨てるように思った。これでは『カマエル』を作らせたフリードリヒや、それに賛同した柏木と変わらない。メレデイスは興奮してきたのか、熱っぽく『計画』について語り始める。

「僕はゼラスを利用して、計画を推し進めた。月峰朔を迫害してその心に傷をつけ、鞍馬花雪の死によって心を壊し暴走させる……そこまではうまくいったんだ。ああ、もちろん朔が暴走しなかったとさのために、ある音を聞かせると加虐嗜好に目覚めて、殺戮マシーンになるように暗示もかけておいたんだけどね。覚えがあるだろうか？ 娼館で、君は目の当たりにしたはずだ」

「マザーグース……」

「朔がマザーグースを歌って遊んでいた子供を皆殺しにしたのはそういうわけ。僕は刀に脂が巻いていたから助かったけどね」

初めてオリヴァと対峙したときのことを思い出す。あの時の朔は確かに様子が変だった。『紫月』の影響以上に、その暗示の影響があったに違いない。翠は唇を噛んだ。

「だけど一つだけ誤算があった」

「……朔とゼラスが、相打ちにならなかったことか？」

「そう。察しがいいね。でも僕は諦めたんだ。朔も街を出て行ったし……自分の手はなるべく汚したくないし。僕は誰かが傷つくのを外から眺めるのが好きなんだよ」

「だが……柏木に出会って、計画を練り直したというわけか」

柏木は実際、千怜を超える頭脳の持ち主だ。メレデイスの存在を知ることもおそらく容易だっただろう。そして、朔の殺害を提案した——まるで手に取るように、それが理解できた。

「朔が死ねば、僕の計画は終わる。とどめはメリッサに刺してもらうつもりだよ。彼女は母親を殺された復讐をしたがっているからね」「彼女の母親はお前が殺したようなものだろう！」

「そうだね。でもメリッサにはそんな真実なんか必要ない。ぶつける場所があればいい」

理解できてしまう自分が嫌だ。少し前まで、テレーゼを殺そうとしていた自分はメリッサと何ら変わりはない。

「……っ」

「でも計画がちょっと崩れちゃったなあ……本当は、前みたいに大切な人が犯されているのを見せてあげるつもりだったんだけど」

ほら、とメレディスはリモコンをちらつかせる。はっと天井を見ると、そこには小型のビデオカメラがあった。撮られていたのか――翠は拳を握りしめた。

「貴様……っ！」

翠は素早く紅珠から狼のような獣を作り出した。しかし、すぐに風の刃で破壊されてしまう。怒りに任せたせいで、上手く力を練り込めなかったのだ。

「――そういえば、君も女だったね。テレーゼの代わりに僕の駒にしてあげようか？」

腰に手が触れる。戦慄が肌を這う。しかし翠は気丈にメレディスを睨みつけた。

「貴様はここで、殺す！」

そう叫んだ瞬間、スピネルの声が聞こえた。

「――翠！」

スピネルは翠を庇い、メリッサの術を受けて倒れた。スピネルはしかし、呻きながらも術を紡ぐ。

「【闇の光よ、彼のものに安らぎを】！」

そう言いながら床に倒れたスピネルを、翠は呆然と見つめた。怒りが体を灼いていく。しかし動き出すのはメレディスの方が早かった。

「くっ……」

メレディスの手が体に埋められていく。スピネル以外の人間の手が、体に入るのは初めてだ。体の奥底から、まるで水溜まりに触っ

ているような血濡れた音が響く。

「……本当に、完膚無きまでに破壊されているんだね」

「……手を、抜け……っ！」

壊された子宮あたりにあったメレデイスの手はゆっくり上って行き、とうとう心臓に触れた。翠は体を固くする。これは命を握られたも同然だ。

「君みたいな女の苦しむ顔というのも、見物だろうな。朔への供物にしてやるよ」

「……ん、あっ」

耳元で囁かれて、体から力が抜けていく。それを狙ったかのように、メレデイスが翠の心臓を握った。絶叫が迸る。視界が様々な色に染まり、時折分断されていく。

「いい声だ」

メレデイスの表情が恍惚に歪む。痛みで何もかもがわからなくなる。

——もう、駄目……！

意識を手放してしまいそうになった瞬間、メレデイスの手が抜ける。翠はその場に膝をついた。翠は何故急にやめたのかと思い、メレデイスの腕を見る。そこには、三本の細身のナイフが刺さっていた。

メレデイスは、嗤う。

「ようやく来たね、朔——」



躊躇いはない。

朔は『根』に向かって足を踏み出した。

「それで、いいんや——」

そう『根』が呟く声が、聞こえた気がした。その表情は穏やかである。

——いや、違う。

違和感があった。これは本当に、自分を裏切った人間の顔だろうか。そもそも、『根』は自分に殺されることを望んだりするだろうか。

だが裏切ったのは、事実。アメリカにナイフを向けているのを見ればわかる。

でも、おかしい。普通は近付いたら殺す、とアメリカを盾にするか、そうでなければさっさと殺してしまうはずだ。アメリカに恐怖を味わわせているにしても、アメリカがこれだけ落ち着き払っているとは意味がない。そもそも『根』はどのようなやり方は好まず、すぐに殺すのだ。

——まさか、そういうことなのか？

それなら合点がいく。『根』はそういう、食えないところがあるのだ。

朔は『根』を斬ろうとする手を、直前で無理矢理押さえつけた。勢いを強引に止めたせいで、体に痛みが走る。

「——何で、やめるんや」

わかっていくくせに。とぼけた白々しい演技の裏側に、安堵の表情が透けて見える。だが、もう少しだけ演技に付き合うのも悪くはない。朔は、冷たく紅い眼を『根』に向けた。

「どうせもうすぐ死ぬ人間を殺して何になる」

「……俺は、お前を裏切ったんやで？」

「自分を裏切った人間を、そいつの望み通りに殺してやるほど俺の心は広くない。それにお前は……いや、何でもない」

続きを言えば、さっきの言葉と矛盾してしまう。続きを言えば、『根』を殺さなくてはいけなくなってしまう。だから、言うことは出来なかった。

ただ、静かに喉元に刀を突きつける。しかしこれも、もはや茶番だ。

「——お前の持っている、全ての情報を教えろ」

『根』は心が見えない微笑を浮かべる。お互いにわかりあっているながら演技を続ける滑稽さに笑っているようにも、何かを堪える苦しげな微笑にも見えた。『根』は低く淡々とした声で続ける。

「……敵はメレディス・ゴード・アーベントロート。ゼラスの双子の兄や。お前が三十四番目に斬った人間で、鞍馬花雪殺害を指示した張本人でもある」

手が、震えた。

花雪の仇——だがそれ以上に、テレーゼのことが気掛かりだった。メレディスという名は、テレーゼと翠の電話のときに聞いている。おそらく今は一緒にいるのだろう。

「——あれを殺して……過去を清算するんや、朔」

「『根』……やっぱり、お前——」

茶番を終わらせようと促すが、『根』は静かに首を振る。

「メレディスに誘われて、それに乗ったのは紛れも無い事実や。それに、アイツの言う通りに時間を稼いだのもまた事実」

「お前は本当に——いや、いい」

「食えない奴」、と言いかけてやめると、それまでずっと黙っていたアメリカが不満げに言う。

「二人だけでわかり合わないで。全然わからないわ。『根』は敵なの？ 味方なの？」

「お前らを殺しても俺が死ぬことには変わりあらへん。だから復讐なんて無駄なんや。だけどとりあえず従った方が情報は集めやすいしな」

つまりスパイだったということだ。誰にも気付かれないように、全てを欺いたのだ。朔は刀を納め、『根』の深い茶色の瞳を見る。ようやく見え透いた滑稽な会話が終わったようだ。

「メレディスはお前を苦しめてから殺すのが目的や。理由なんかあらへん。アイツはもう壊れてるんや。八年前より苛酷なことになるのは間違いあらへん」

「『根』……」

「ホンマは行かせたくないんや。せやけど、お前なら勝てるって信じてるで」

『根』が朔の肩を軽く叩いた。風が吹いて背中を押す。「信じてる」という言葉に偽りは無い。朔は小さく笑った。

『根』は信じていたから、騙せたのだろう。必ず止めると。『根』を殺したりはしないと。

———本当に、食えない奴。

朔は呟いてから、テレゼの元に飛ぼうとした。しかし、『根』に呼び止められる。

「何だ？」

『根』は朔の右耳に手を伸ばした。『根』が騎士用の無線に触れると、波の音のような雑音が耳に届く。朔は首を傾げた。

「嫌な音が聞こえへんようにな」

『根』は朔の背中をそっと押す。今度こそ朔は、テレゼのもとに向かった。

その胸に、僅かな悲哀を残して。

メレデイスの部屋に着き、彼の姿を認めた瞬間に朔は三本のナイフを投げていた。それはメレデイスの腕に全て命中する。メレデイスは顔を歪めて、翠の体から手を抜いた。翠は糸が切れたように、床に倒れる。しかしメレデイスはそれに見向きもせず、朔に笑いかけた。

「ようやく来たね、朔———」

「貴様を斬ったらすぐに帰る」

つれないなあ、と言いながらメレデイスは近付いてくる。朔は素早く紅枝垂を抜いた。

「せっかくの再会なんだから、愉しもうよ」

メレデイスは嗤いながら、オーディオの電源を入れた。マザーグースが流れ始める。しかし朔は余裕の笑みを浮かべた。右耳から聞こえる雑音が、その歌に隠された狂気の音を掻き消しているのだ。

「克服したの？ さすがだね。僕は君のように骨がある人間は好きだよ」

「お前に好かれても嬉しくない」

「昔より口が悪くなったね……スラムにいた頃は、『化け物』と言われるたびに泣きそうになっていたのに。まあ、そりゃあそうか」

メレデイスは言いながら、朔の間合いに入ってくる。あまりに素早い動きに、朔は対応しきれなかった。右眼に手が伸ばされる。

不意に、思い出した。あの忌ま忌ましい眼球の感触を。思い出したときには、体は動かなくなっていた。

「堕ちるといい……」

瞼を持ち上げられ、眼球に指が触れる。叫び出したくても、掠れた声しか出なかった。

「や、めろ……」

「【冥夜に身を伏す業火の灯火よ。今こそ降り立ち破邪の鉄槌と成せ】！」

凜、と翠の声が響いた。メレデイスの手が燃え上がる。メレデイスは舌打ちをしながら翠に眼を向ける。

——止めることは、出来なかった。

「【吹雪よ、魂を凍らせ、永遠なる絶望を】！」

「——翠！」

翠はメレデイスの術をもろに受けて、床に倒れた。微かに体が痙攣している。

「ああ……くう……！」

翠の額に脂汗が滲む。朔はメレデイスに掴みかかった。メレデイスはしかし、元殺し屋の朔が放つ壮絶な殺気をものともせず、笑う。

「お前達は精神攻撃の魔術は知らないだろう？ だがこれが、正真正銘最強の魔術だ。今頃その女が一番辛い記憶の中に閉じ込められているよ。多分、十二年前のことかな」

「てめえ……！」

十二年前の傷痕は、たとえ日本が元に戻ったとしても消えはしない。まして翠は、父親の裏切りもある――怒りが、朔の体を灼いた。

「いい眼をしている。君にはやはり絶望の紅が似合うよ。――でも八年前と同じようにテレーゼを犯そうと思ったんだけど、邪魔されちゃったしなあ」

この男ならそれくらいやるだろう。テレーゼの下着につけられた発信機が外されたことからわかる。朔はメレデイスを睨みつけた。「まあ、最後の切り札は残っているけどね」

メレデイスは指を鳴らして朔の背後に眼をやった。うなじに冷たい感覚が滑り落ちる。それは純粹な殺意だった。朔はゆっくりと振り返る。

そこには濁った紫の瞳をしたテレーゼがいた。

「メレデイス、貴様……」

考えなかったわけではない。だが、現実になるとは思いたくなかった。朔は唇を噛む。鉄と葡萄の味が滲んだ。

「何のために、こんなことを……」

ゼラスの仇などではない。「アイツはもう壊れてるんや」という『根』の言葉を思い出した。壊れている人間は殺し屋時代にも見て来た。しかしここまで歪んだ計画の渦中に立ったのは初めてだった。テレーゼの放つ殺気に体がすくみそうになる。

「――さあ、壊れろ」

メレデイスの声が響くと同時に、テレーゼの放つ炎の刃が朔の体を貫いた。

「かつ、く……!」

「殺さないと殺されるよ? ……ほら、八年前みたいに殺してみなよ」

「お前に、なんか……従わない……!」

「気丈だね……主に似たのかい？」

くつくつとメレデイスが嗤う。朔は素早く紅枝垂でメレデイスに斬りつける。しかしその前にテレーゼの放った電撃を浴びて、叫びを上げた。

「くっ……テレー、ゼ……」

「【闇よ、我に仇なす敵に絶望を与えよ】！」

匂い立つ紅の薔薇のような声が言葉を紡ぐ。朔は素早く目の前に結界を張った。しかしテレーゼの魔力が思いの外強く、すぐにひびが入る。

「【浄化の炎よ、邪を焼き払いたまえ】！」

牽制のために、テレーゼの髪の毛を掠めそうなところに火柱を出現させる。しかし、テレーゼは怯まずに、朔に術を叩き込んだ。

「――やはり好きな女とは戦えないか？」

「黙れ！」

血の味が喉元までせりあがってくるのを朔は耐えた。とりあえず眠らせよう。そう判断して朔は叫ぶ。

「【闇よ、死にも似た深き眠りを与えたまえ】！」

しかしそれはメレデイスによって阻まれた。メレデイスは柔らかく笑って、言う。

「眠らせるのは反則。城でもそうやって切り抜けたみたいだけど、駄目だよ」

「くっ……」

「ああ、そういえば……まだ城に僕の仲間がいるんだよね。君の友人を殺すために」

「出鱈目を言うな」

「――つまらないな。昔はもっと騙されやすかったはずだけど。仕方ない……あれを発動させるか」

朔はメレデイスの言葉に首を傾げた。メレデイスは静かに指を鳴らす。

——しかし、何も起こらなかった。

「ふふ……これは見物だね」

メレデイスが体を引いた瞬間、容赦なくテレーゼが雷の槍で朔を貫いた。

第九話 『狂宴は終わらない』 (前書き)

※少々性暴力表現、BLのような表現があります。苦手な人はご注意ください。

第九話『狂宴は終わらない』



「――仕方ない……あれを発動させるか」

朔はメレデイスの言葉に首を傾げた。メレデイスは静かに指を鳴らす。

――しかし、何も起こらなかった。

「ふふ……これは見物だね」

メレデイスが体を引いた瞬間、容赦なくテレゼが雷の槍で朔を貫いた。

朔が呻くと同時に、テレゼの高い悲鳴が上がる。朔は目を見開いた。

（何だ、今のは……）

しかしそれを解明する前に、再び雷の槍が放たれる。朔は素早く身を翻して、それをかわした。テレゼは舌打ちをして、今度は巨大な火球を出現させる。朔は紅枝垂を抜いて、その刀身に水を纏わせて火球を切り裂く。雷系の魔術よりも威力は弱いようだ。朔は、紅枝垂を鞘に納めながら思った。

（雷属性とは……テレゼらしいな）

得意な属性と、そうでないものの差が大きいのもテレゼらしい。翠のように得意な風属性だけではなく、他のものもかなり使いこなせるとなると相当厄介だ。

万能でないことはわかった。しかし、だからといって容赦なく攻撃するわけにもいかない。だが防戦一方では埒があかない。そもそも守るのは苦手なのだ。

「【天の怒りよ、光の洪水となりて総てを焼き尽くしたまえ】！」

テレーゼも埒があかないと思ったのだろうか。広範囲に攻撃する術を使ってきた。逃げ場はない。朔は急いで結界を張るが、間に合わない。

「くっ……！」

身を屈めてテレーゼの様子を伺うと、テレーゼも同じように腹部を押さえてうずくまっていた。

「メレディス……貴様、何をした……！？」

「君達の体を繋げたんだよ。つまり一心同体ってこと」

朔は唇を血が出るまで噛み締めた。卑劣過ぎる。これで完全に八方塞がりになってしまった。どうあがいても状況を打破できない。出来るのは、どちらも傷つけないように逃げることだけだ。だがさっきのように広範囲に作用する術を使われたらどうにもできない。強固な結界を張って消耗戦に持ち込むか、そうでなければテレーゼと自分との繋がりを切るしかない。

テレーゼは小技を連発して、朔を追い詰める。大技の連発は出来ないようだ。朔は攻撃をかわしながら、テレーゼを見た。術の媒介が、どこかにあるはずなのだ。

普通、人を繋げる魔術に使う媒介は髪の毛だ。少なくとも一人の髪の毛を必要とする。残りは、その人間が触れたものがあればいい。朔は口角を上げて笑った。条件を満たすものは一つしかない。テレーゼの攻撃をよけながら、一気に間合いを詰める。そして、テレーゼの金髪を飾る赤いカチューシャに手を伸ばした。その瞬間――

「――っ！？」

右の耳に嵌められた無線を、小さな紫炎の珠で正確に撃ち抜かれた。

即座に耳を塞ぐ。しかし指の隙間から、狂気に誘うマザーグースが侵入してきた。床に膝をついて、衝動を堪える。それに集中しすぎて、背後にメレディスが立ったのに気付くことが出来なかった。後ろから抱きしめられ、体を拘束される。メレディスの腕は優しく、かいな

まるで愛しさのあまりにそうされているような錯覚さえしてしまう。
しかしそこにあるのは狂気だ。

「小賢しい真似をするね。おかしいとは思っていたんだよ」

メレデイスは二つに割れた無線を握り潰した。朔の肩が震える。
メレデイスは耳を押さえる朔の手首を掴み、それをゆっくり引きはがした。

「嫌だ……やめろ……!」

「身を任せればいい……そうすれば、楽になれる」

朔は侵入して来る音を聞かないように、絶叫を上げた。しかしその口も塞がれてしまう。朔は駄々をこねる子供のように首を振った。
「恐れることはない。君はあるべき姿に戻ろうとしているだけだ。

誰も止めることは出来ない、僕と同じ狂った怪物に」

否定する言葉はもはや出てこなかった。本能が揺り動かされる。
拳を握り締めて儚い抵抗をする朔を嘲笑うように、メレデイスはその首筋に歯を立てた。

「ア、っ……」

甘い声を漏らし、朔は細く白い喉をのけ反らせた。しかし朔は歯を食いしばって、懸命に踏み止まる。

「昔とは違って強情だね。テレーゼがいるから?」

「う、るさい……黙れ……っ」

「僕はね、朔——強情な人間は好きだけど、素直じゃない人間は嫌いなんだよ。楽になりたいんだろう?」

首筋に針を刺される。目をやると、メレデイスの手には紫色の液体が入った注射器があった。朔は力のない抵抗をする。興奮作用のある『紫月』をここで打たれたら、間違いなく堕ちてしまう。朔は必死で意識を集中させ、注射器を風の刃で破壊した。中に入っていたものがゆっくりと垂れる。メレデイスはそれを素早く口に含み、朔に口づけた。

「なにす……んっ」

口移しで与えられるそれを、何とか飲み込まないようにと抗う。

しかしメレデイスの舌に翻弄され、遂に朔は陥落した。体がじわじわと熱くなり、心臓が速くなる。

理性の限界が、近かった。

「本能に抗うな」

「う……あつ……」

耳元で言われ、甘い吐息が漏れる。それが悔しくて唇を噛むが、敏感な体をなぞる指がそれを許さない。

「いや、だ……はなせ……っ」

「さあ、早く見せてくれ……八年前と同じように……」

朦朧とする意識が、感覚を引き戻していく。それは抗うことの出来ない破壊の快楽だった。戦慄にも似た愉悦が、体を走る。メレデイスはそれに気付いたのか、右耳に舌を這わせながら甘い言葉を吐く。しかしそれも、既に理解の外にあった。

ただ、破壊の音だけが体に響く。

もう抑えることは出来ない。

朔はゆっくりと歪んだ笑みを浮かべ、紅枝垂を抜いた。メレデイスはそれを見て、朔と同じ色の笑みを浮かべる。

「ようやく堕ちたね、朔」

メレデイスが指を鳴らし、体を解放する。朔はゆっくりと、夢遊病者のようにテレーゼの方に足を向けた。



メレデイスが指を鳴らすと、急に意識がクリアになった。さっきまで自分が何をしていたかは、全くわからない。朔の暗い紫色の瞳が、テレーゼの思考を止めていた。

ゆっくりと、朔は向かってくる。まるで何かに操られているように、その足取りは不確かだった。

「朔……」

呟くと、メレデイスは歪んだ笑みを浮かべながら、テレゼの後ろに立った。その間にも、朔は距離を詰めていく。

「『紫月』には興奮剤が含まれている。そしてこのマザーグースに隠された音は、抑えられた本能を活性化させる。つまり……これが朔の本来の姿だ。理性という仮面を剥ぎ取った獣なんだ」

意味がわからなかった。ただ、朔が普通でないことはわかる。あと三步で朔がテレゼの前に着くそのとき、メレデイスが笑いながら言った。

「――絶望の叫びをあげるといい」

今までのゆっくりとした動きが嘘のように、朔はテレゼに飛び掛かる。急なことで、テレゼはなす術もなく床に押し倒された。そして、まるでそこに縫い止めるかのように、右肩に刀が振り下ろされる。痛みにあげた絶叫は、朔の唇で封じられた。

テレゼは青の目をいっぱいに見開く。しかし朔は表情を変えずに、テレゼの口内を舌で蹂躪し始めた。あまりに乱暴な行為に、テレゼは反射的にその舌に噛みつく。血の味が広がった。しかし朔は止まらない。

胸元に置かれた手が、乱暴にテレゼの制服を引きちぎった。幼い体があらわになる。

これから何が起こるのか、知識がないわけではない。そもそも記憶が途切れる前、メレデイスにも同じことをされた。翠達のおかげで未遂に終わったが。

違う。そう思った。

メレデイスに触れたときよりも、恐怖が勝る。されていることは同じなのに。それは自分をいつも守ってくれる存在が自分を貪ろうとしているからなのか、それとも違うのかは―――わからなかった。

「やだ……朔……っ」

声は届かない。朔はタータンチェックのスカートを、音を立てて

破いた。反射的に足を閉じるが、朔は素早く体を割り込ませる。

「朔……っ！」

肌が外気に触れ、体に熱が灯る^{とも}。メレデイスに打たれた『紫月』の効果も、まだ完全に切れたわけではない。息が荒くなり、甘さを増していく。

自分はこのまま壊されるだろう。テレーゼは微かに思った。それでも他の男よりは、自分が一番愛した朔の方がいいのかもしれない。だけど、とテレーゼは思う。もし朔が正気に戻ってしまったら、体を紅と白で汚した自分を見て、何を思うだろう。

きつと傷ついて、自分を責めてしまふに違いない。心を閉ざしてしまうかもしれない。何故なら、きつと朔が見る光景は八年前のそれと酷似しているのだろうから。

（そういうことだったのね……）

メレデイスの目的は朔を完膚なきまでに傷つけること。既に癒えない傷をさらにえぐり、壊してしまうことだ。だから自分を犯そうとしたし、今の状況を笑顔で見つめているのだろう。

壊されるのは嫌だ。だったら、自分が守るしかない。

未成熟な胸に、乱暴に歯を立てる朔の頭を抱く。胸からは血が出ているが、そんなものに拘泥している暇はない。テレーゼは朔の頭を撫でながら言った。

「大丈夫よ、朔……」

おそらく花雪も、こう言っつて朔を抱きしめるだろう。まるで母のように優しく。

——朔のためなら母親にも、女にもなれる。

だから大丈夫、と囁く。止まらない行為も、もう恐ろしくはなかった。いや、恐ろしくないと言ったら嘘になる。でも、受け入れようと思ったのだ。

柔らかい黒髪の中に手を入れる。愛おしいと、そう思った。

「愛してる、朔……」

きつと初めて会ったあの時から。「神なんていない」と言った、

あの寂しい目を見たその時から、そう思っていたのだろう。

愛おしくて、愛^{かな}しくて、胸が詰まりそうになる。

「だから私は、決して貴方を拒絶しないわ」

朔の『望み』が自分の傍で生きることである限り、それを叶え続けなければならぬ。否、叶えたい。

それは自分の望みでもあるのだから。

突然、朔の力が弱まる。荒い呼吸も、徐々に落ち着いてきた。テレゼはそれに気付き、冬の太陽のように微笑する。

懐かしい真紅の双眸が、そこにはあった。

何が起きたのか、すぐに把握することは出来なかった。

しかし制服を引き裂かれ、体を傷つけられたテレゼや、自分の体に残る熱を鑑みれば――自分が何をしたかは、明らかだった。

それは確かに欲望だった。愛しいから、体を重ねたいと思っていた。しかし、それはまだ早いと思って抑えていたのだ。

この行為は、人を傷つけることにも使えるのだから。

眼前には、絶望が横たわっていた。声帯が震え、掠れた謔言が漏れる。しかしテレゼは、静かに微笑んだ。

「私は大丈夫よ、朔……」

大丈夫なはずはない。自分はテレゼにどうしようもない絶望を背負わせたのだ。それなのに、何故彼女は優しく髪を撫でてくれるのだろう。

「あ、あ……」

言葉は生まれない。テレゼは傷ついた胸に、朔の顔を押しつける。薔薇の匂いが嗅覚を優しく刺激した。

「私は大丈夫。傷ついてなんかいないわ」

「う……そだ……だって俺は……」

「ちよっと間違えただけよ。恋人同士なら、普通にやっていることだわ」

「違う……」

あれはそんな甘やかなものではない。かろうじて踏み止まったとはいえ、自分はテレーゼを犯したのだ。しかし、テレーゼは笑みを崩さない。

「何も違わないわ。貴方は迷うことなく私を選んだ。それは、私を愛しているということでしょう？」

「……だから、こんなことしたくなかったんだ……」

嗚咽が漏れる。何故泣いているのだろう、と自嘲的に思った。涙を流す資格など、自分にはないというのに。

「泣かないで。――私の眼を、見て」

テレーゼの手が頬に伸ばされ、嫌でもその透明な瞳が視界に入る。その眼は深い海のように優しく澄んでいて、迷いも嘘もない。全てを赦されているような気がした。

「――貴方を愛しているわ、朔」

「テレーゼ……」

テレーゼの声が、絶望を溶かしていく。罪悪感は胸を締めつけるけれど、闇は晴れていく。「愛している」という、その優しい言葉だけで。自分は単純だ、と思った。同時に、それはテレーゼの言葉だからだろうとも思った。

「……こういうこともしてみたいと、思っていたのよ」

冗談めかしてテレーゼが言う。朔は苦笑を浮かべた。

「――馬鹿、まだ早い」

「だったら、私がしかるべき年齢になったら……しかるべき場所で、もう少しロマンチックにやりましょう？ その時もまだ、貴方が私を愛していたら」

思う。その瞬間は遠くなどない。欲しいのは快楽ではなく、慈しみ合うような統一なのだ。自分は絶対その日まで変わらずテレーゼを思い続けられる。それが一番の望みなのだから。

「――ありがとう」

だから、笑う。テレーゼもつられるように笑った。

その笑顔が綺麗だと、改めて思った。



「何故だ……」

茫然自失の状態で、メレデイスは呟いた。目の前の光景を信じることは出来なかった。マザーグースの暗示は強力だ。それが甘い恋愛感情などという幻想に破られるはずはない。それなのにどうして、絶望は回避された？

そもそも計画は、それほど緻密というわけではなかった。あまりに緻密な計画は、予期せぬ事態が発生したときに簡単に壊れてしまうと言われたからだ。そして選択肢の多い、つまり保険の多い計画は半ば成功しかけていたのだ。それなのに、何故――

この事態は完全に予期できなかった。この計画の骨組みを作ったドクターでさえ。まさか朔が狂気を克服するとは――

朔はテレーゼの肩の傷を焼いてから、騎士服の上着を着せている。こちらのことは目に入っていないようだ。腹が立つ。愛など幻想でしかないのに、それがどうして狂気を看破できる？

「――くだらない」

吐き捨てる。それは虚しく空気を振動させた。

「――お前にはわからないさ、メレデイス」

朔は微笑した。その眼には、先程まではなかった強さがある。どこかそれは、花雪の眼差しにも似ていた。メレデイスはその考えを振り切るように言い返す。

「わかっていても思わないな。そんなものは所詮まやかしにすぎない」
「だが、そのまやかしがお前の計画を打ち破ったことをどう説明する？」

「そんなものは、希望や愛情なんてものは、一時的に与えられるものに過ぎない！ いずれ人は裏切り裏切られ、一人になる――」
全てが自分を裏切っていくのだ。あのマザーグースの歌のように、手を繋いだまま倒れ死んでいくことでしか、裏切りや心変わりを止

める術はない。閉じた輪の中で、一人残らず殺し尽くさなければならぬのだ。

「――過去しか見ないお前が、裏切り裏切られる未来を憂える資格などない」

朔の瞳が紅みを増す。それは爛々と、そして炯々とメレデイスを射抜いた。朔の持つ紅枝垂の刀身が、炎を纏って真紅に輝く。それは戦闘体勢に入った証だ。

「未来に一体何があるというんだ？」

メレデイスは一步踏み込み、何かを振り切るように叫ぶ。

「【闇よ、我に仇なす敵に絶望を与えよ】！」

朔は左手で浄化の炎を放ち、術を破壊しようとする。浄化と絶望がぶつかり、例えようのない不協和音を奏でた。朔はそのまま、炎で攻撃範囲を拡大した刀を振るう。化学繊維と肉が焦げる臭いがした。だが、傷は浅い。

メレデイスは体を引いた。そして両手に黒い球体を浮かべる。魔術を使った接近戦は珍しい。朔のように、武器な補助として魔術を使うなら別であるが。朔はそれを見て、一瞬だけ戸惑い――そして笑った。刀を鞘に納める。

そして、朔は両腕に炎を纏わせた。紅枝垂では長すぎると判断したのだろう。そういった判断は速い。戦い慣れている証拠だ。

右手の炎を下向きに放射し、それを原動力として朔は高く跳躍した。そしてメレデイスに左手の炎を伸ばしながら、重力に従って降りてくる。メレデイスはそれを、右手に浮かべた黒い球体で受け止めた。互いの魔術が相殺され、威力が落ちる。

朔は舌打ちをして、メレデイスから離れた。右手の炎で体を浮かせ、落下速度を緩める。しかし一瞬の間もあけず、メレデイスは朔の懷に飛び込む。朔は右手で攻撃を受け止めながら、メレデイスの顎を蹴り上げた。メレデイスは飛ばされ、壁に体を打ちつける。

「体術も心得ているとは、聞いていなかったな」

「体術なんてレベルじゃない。ただ年季が違うんでね」

「――確かにそうだな」

朔と同じように、黒い球体を推進力として一気に間合いを詰める。しかし朔の腕を掴もうとした左手は、炎で焼かれていく。メレデイスは素早く身を引いた。火傷を水の魔術で覆ってから、再び間合いを詰める。

「八年前とは動きが違うな」

「当たり前だ。――八年あれば、人は変わる」

八年前の狂宴のときも、朔は確かに強かった。トマージのような頑強な男も、油断していたとはいえ無惨に倒された。メリッサの母親もそうだ。しかし今は、その時よりもさらに動きが繊細で疾い。迷いのない戦い方なのだ。

「残念だよ。――あの時のままでいてくれたらよかったのに」

メレデイスの言葉を契機に、互いの魔術を眉間に突き付け合う。

そのまま戦闘は、膠着状態に陥った。空気が強張る。少しでも動けば、互いに致命傷を与え得るのだから当然だ。

「――懐かしいな」

メレデイスは、笑った。

八年前もこうやって対峙した。もちろん、あの時朔は真実など知らなかったが。だがあの時、自分は微かに思ったのだ。

――花雪への思いは、そこまで深いのかと。

知るはずのない首謀者を本能的に悟ってしまうくらいに、花雪を想っていたのか。そう思っていた。もしかしたら、本当にそうだったかもしれない。時は巻き戻せないから、真実は誰にもわかりはしないのだが。

「八年前……お前だけは、殺せなかった。殺したと、思っていたけれど」

「傷はまだ残っているよ」

緊張している状態で、まるで旧友のように言葉を交わす。それは滑稽だと、微かに思った。

「――お前を殺そうとしたときに、何故か殺してはいけないと……」

一瞬だけ思っただ」

メレデイスは答えない。だが、朔はゆっくりと続けた。

「墨染桜には、花雪の思いが宿っていた。だから多分……花雪は、お前を殺したくなかったんだ。これは、単なる予想だけだ」

「そんなことはないだろう。——花雪には、お前がいた」

しかし朔は首を振った。突き付けられていた炎の勢いが、少しだけ弱まる。

「だったら何で、花雪はお前に俺の出生前診断の結果を教えた？」

言葉に詰まる。花雪はもちろん、自分を狂わせるためにそんなことを教えたのではない。それはわかる。

「——それならば、何故？」

メレデイスの心に動揺が走る。今まで考えたことはなかった。いや、意識的に考えないようにしていたのだ。

「——認めたくなかったのだ。」

認めたら、弱くなりそうな気がしていたのだ。そう、だから認めてはいけない。朔に完全に敗北するまでは。メレデイスは笑みを浮かべた。

「——あの女の思考など、理解できないな」

そう言うってから、炎を纏った朔の右手首を掴む。浮かべていた黒い球体が割れた。朔は素早く炎を針にしてメレデイスに突き刺す。そしてメレデイスの腹を蹴りながら、自らの手首を掴むメレデイスの右腕を軽く殴った。そのまま勢いをつけ、後ろに飛ぶ。

メレデイスは舌打ちをした。遅れてメレデイスの右腕が燃え上がる。

「内部に炎を埋め込んだか」

朔は右腕を押さえている。おそらく相殺しきれなかった闇の魔術に蝕まれているのだろう。だが、その程度だ。天然の朔ならばじきに回復してしまうだろう。

そろそろ負けを認めてもいいかもしれない。メレデイスは思った。確かに腕はもう一本ある。しかしこれ以上は耐えられない。——

気付いてしまったから。

「――朔」

だから、名前を呼ぶ。朔は応えなかった。

――その代わり、烈しい氷の刃が朔を刺し貫く。

不意打ちに対応できずに倒れる朔を見ながら、メレデイスは目を見開いた。

そして、掠れた声が漏れる。

「――メリッ、サ」

鬼女のような形相で立ち上がったメリッサと、叫びながら朔に駆け寄るテレーゼを、メレデイスは呆然と見つめた。

テレーゼの絶叫が、耳を裂いた。

第十話『白い世界』



氷が朔を貫いた。まるで夜空に咲く花火のように、紅い血が舞う。テレーゼの喉から絶叫が迸った。

「朔！」

駆け寄って体を抱き寄せる。微かな吐息が、朔の桜の花弁のような唇から漏れた。だが意識はない。テレーゼは朔の体を乱暴に揺さぶった。

しかしその手を、メリッサの手が止める。テレーゼはメリッサの緑色の目を見て、そして息を飲む。それはさながら鬼女や般若のような形相だった。

「……ど、して……メリッサ……」

「私は母を殺されたの。母さんが死んでからは、まるで地獄のような日々だったわ。六歳なのに体を売らなきゃいけなかった気持ち貴女にわかる!？」

わかるはずはない。自分はついこの前まで、とても恵まれた生活を送っていたのだ。それでも、朔を殺すのは違うと思った。しかしメリッサは、テレーゼの制止も聞かずに紅枝垂を鞘から抜き、それを朔の左胸に突き刺す。

「いやあああっ！」

目の前に広がる赤を否定したかった。自分にとって紅は優しい、朔の瞳の色で、でも今ここに横たわる赤は朔を奪う色だ。そしてその赤の元凶であるメリッサの髪もまた、燃えるような赤毛だった。

テレーゼは涙で顔を汚しながら、朔のホルダーに入っていた拳銃を抜いた。安全装置を解除して引き金を引く。火薬の匂いが鼻をついた。メリッサが驚愕の瞳をテレーゼに向ける。

「許さないわ、絶対……っ！」

怒りと絶望が手元を震わせる。早く、とテレゼは思った。早く赤を排除して、紅を取り戻さなければ。そんな言葉が頭を支配する。心臓を握り潰されているような痛みがあった。

再び引き金を引く。狙いはメリッサの——左胸だ。



世界は白かった。白い砂漠のようにも見えた。足を踏み出せば、ガラスが擦れたような音がする。鳴砂というやつだ。今の世界にはほとんど残っていない。ということはここはこの世ではないのかもしれない。どこか他人事のように朔は思った。

「俺は、死んだのかな……」

実感がわかなかった。メレディスが自分に屈する瞬間に、メリッサに貫かれたのは覚えている。そして気がついたらここにいたのだ。自分が死んだとしたなら、あまりに呆気ない。

「どうすればいいんだ？」

見渡す限り、白い砂漠が続いている。空も同じく真っ白で、ただ蒼く透明な月だけがこの世界の唯一の色だった。その月はどこかテレゼの瞳にも似ている。どんな宝石よりも気高い蒼だ。

胸が痛む。テレゼを残して来てしまった。彼女は悲しむだろう。そう確信できるくらいには愛されている自覚があった。そしてテレゼを失った絶望が体を包む。

人は遅かれ早かれ死ぬものだ。だが、早過ぎると思った。もちろん『根』のように、早過ぎる上に理不尽な死の運命もある。自分の死は報いだ。それもわかる。それでも早いと思わずにはいられなかった。

————テレゼ無しで、世界を歩む自信はない。

朔は砂の上に俯せになり、涙を流した。何を振曲げても、テレゼの元に戻りたい。拳を握りしめても、掴むのは砂ばかりで手応えはない。諦めろと言われているという気がした。

「――早合点は良くないわよ、朔」

「え……？」

頭を撫でる細い指、俄かにする桜の香り。朔は驚いて、起き上がった。

「か、ゆき……」

藍色の矢絣の着物を着た花雪は、記憶と全く変わらない顔で微笑んだ。

「あっちの私には少し前に会ったわよね？ でもこっちの私は……八年ぶりだわ」

『あっちの私』とは、墨染桜に宿っていた魂の欠片の方だろう。それなら、今日の前にいる花雪は魂の本体だ。ならば自分はやはり死んだのだろう。朔は目を細めた。

「だから早合点は良くないと言ってるじゃない」

心を読んだように花雪が苦笑した。花雪の手が頬を包み込む。その手は水を使う仕事でもしていたかのように冷たくて、ふと翠を思い出した。

「私が呼んだのよ、朔。だから貴方はまだ生きているわ――元氣、とは言いがたいけれど」

「呼んだ？ ――何のために？」

不意に、抱き寄せられる。温もりを感じた気がした。

「――メルのこと、貴方に謝りたいと思っていたのよ」

「何で花雪が謝る必要が……？」

「結果的に彼を狂わせたのは私なのよ。……そんなつもりは、なかったけれど」

花雪は朔の肩に顔をうずめる。その部分に濡れた感触があって、泣いているのだろうと朔は思った。恐る恐る手を伸ばして花雪の背中を摩る。

「そんなつもりはなかった……ただ、救いたかっただけなのよ……」
「うん」

「弟みたいに、思っていたの……だから……」

「うん……」

花雪が自分を呼び寄せた理由が何となくわかった気がした。けど、もう大丈夫だとも思う。花雪の思いはきつと伝わったに違いない。最後に見た、どこか吹っ切れたような顔を思い出す。

「きつともう……大丈夫だよ。メレデイスは花雪の気持ちをわかってくれたと思う」

そう朔が言った瞬間、強い風が鳴砂を巻き上げた。朔は花雪を抱き寄せる。風が収まると同時に花雪は溜息をついた。

「——ついに白の世界まで……」

「え……?」

花雪は風が通り過ぎた方向に切なげな視線を送った。しかし、すぐに朔に優しい目を向ける。そして朔の手を取り、ゆっくりと立ち上がった。

「向こうの一分が、この世界での十分なの。だから……もう少し、傍にいて。——私たちが会えるのは、これで最後だから」

——これで本当に、最後。

朔は切なさを抱えながら、花雪の半歩後ろを歩く。石英の砂が立てる音も、どこか虚しく響いた。

「ここは『白の世界』といって……二つ目の死後の世界よ。魔力錬成でいう、アルベドの状態ね」

そういえば、アルベドの状態では瞳が白くなる。それならば、三つ目の死後の世界は封印を解除したときに見たような紅い世界なのだろうか。

「『紅の世界』はこの先にある。私は今からそこに向かって歩いていくのよ」

「——そうか」

何と返せばいいかわからなかった。いや、花雪もたいした返答は期待していないだろう。ただ静かに、白い砂漠を進む。

暫く無言で歩を進める。五十歩ほど歩いたところで、花雪が再び口を開く。

「――八年前、貴方を残して来てしまったことをとても後悔していたわ」

「過去形ってことは、今はしてないのか？」

「だって今は――貴方には、あの子がいるじゃない。私がいなくならなければ出会えなかったわ。いや、もしかしたら……最悪の形で出会っていたかもしれないわ。運命とは緻密で、一つが変わるだけで全てが変わるものだから」

「そうかもな……」

でももし花雪が生きていたなら、自分は人を殺す人生など歩まなかったかもしれない。結局のところ、仮定の答えは予想でしかないのだが。花雪は、白い空に浮かぶ蒼い月を見上げた。それは真円だったが、新月に違いないと朔は思った。この世界はきっと、新月さえ見ることが出来る。

「――ちゃんと、あの子を守るのよ。私のことなんか忘れていいから」

「言われなくても。それに、花雪のことは絶対忘れない」

テレーゼに降りかかる全てから、彼女を守りたい。彼女がその手を汚さなくてもいいように――

花雪が不意に、朔の顔を包み込む。懐かしい桜の匂いが、心を揺り動かした。優しく広がっていく薄紅の気配。

「――朔をここに呼んだのはね」 花雪の瞳が紅く染まる。そういえばスラムにいた頃には、彼女の真紅を見たことはなかった。あの頃の花雪は使えるはずの力を捨て、ただの非力な女になっていたのだと今ならわかる。それが、メレディスのためであるということも。「……私の力を、貴方にあげるため。ここではもう必要ないから。それに、この力を受け止められるだけの器が今の貴方にはある」

「器……？」

「『守りたいもの』の方が正確かしらね。それがなければ、力が貴方を拒絶する。でも、朔なら大丈夫ね」

花雪の手が真紅の光を纏う。それはだんだんと朔の体を暖めてい

った。まるで真綿に包まれているように心地よい脈動に包まれる。
朔はゆっくりと目を閉じた。

「【天の息吹よ風となり、生きとし生ける総てのものに安らかな風をもたらし給え。そして想いを連綿と繋ぎ、永久の絆とわと為し給え】」
花雪が謳うように言う。胸の辺りが、温かいものを流されたように綻んだ。確かに力を感じる。それは今まで使っていた力と似ていながらもどこか違う、柔らかいものだった。

「私は上手く使えなくて……結局色々な人を失ったわ。だけど貴方なら大丈夫だと——信じているわ」

「花雪……」

再び抱きしめられる。それは痛いほどで、朔の瞳から一筋の涙が零れた。もう会えないということをやく自覚し始めていたのだ。もう二度と、この桜の薫りに抱かれることもない——

「——そろそろ、時間ね」

朔は黙って頷いた。暫く花雪の鼓動を聞いてから、ゆっくり口を開く。八年前言えなかった言葉を言うために。しかし、その言葉はあまりに哀しくてなかなか出てこない。代わりに嗚咽だけが漏れる。「泣かないで。——私の眼を、見て」

その言葉に、朔は思わず笑みを零す。それはさっきテレゼが口にした言葉と同じだったからだ。花雪の漆黒に濡れる眼を見つめる。そこから流れる透明な一筋を拭い、言う。

「花雪こそ」

花雪の瞼に唇を落とす。いつの間にか、彼女の身長を追い抜いてしまったのだということによりやく気付き、朔は微笑った。

「——ねえ、朔」

「何？」

花雪は花のように柔らかく笑う。

「メルに伝えて。『貴方を実の弟みたいに愛してる』って」

「わかった。——ところで、花雪」

「何？」

「……俺のことは、どう思ってた？」

別れる前に聞いておきたかった。答えはもう、とっくの昔に知っていたけれど。

「そうね……息子みたいに、想っているわ」

朔は納得したようにゆっくり頷いた。過去形でなかったのが、少しでも嬉しかった。だからこそしっかりとした声音で、今度こそ言う。

——最後の、言葉を。

「さよなら、花雪」

花雪は儚く淡く、それでいて凜と笑う。

「うん……元気だね、朔」

花雪の言葉と同時に、風が吹く。少しでも巻き上げられた砂は、まるで桜のようにも雪のようにも見えた。



「許さないわ、絶対に……っ！」

メリッサの左胸に向けて引き金を引く。しかしそれがメリッサに当たることはなかった。テレーゼとメリッサは同時に眼を見開く。

「メル……」

メレデイスは左肩から血を流していた。メリッサを庇って弾を受けたのだ。

「——違うんだ、メリッサ」

メレデイスは力無く笑う。テレーゼは拳銃を下ろし、メレデイスをじっと見つめた。

「君の母親を殺すように……あの八年前の事件を起こすように仕向けたのは、僕なんだ」

「何を、言ってるの……」

「殺すなら、僕を殺せばいい」

「嘘よ！」

メリッサは耳を塞いで首を振る。しかしメレデイスの言っていることは真実で、その罪を受け入れた彼の表情は凜々している。その優しい表情は、メリッサに事実を認識させるには充分だった。

「本当……なの……？」

「僕は歪んでいたんだ。誰の優しさも受け入れることが出来ずに、姉のように慕っていたはずの人とその大切なものを壊すことで……何かを得ようとしていた」

「メル……」

「赦してほしいとは言わない。赦されるとは思っていない。――だから殺したいなら殺せばいいよ」

メリッサは嗚咽を漏らして床に膝をついた。肩を震わせながらも言葉を紡ぐ。

「……殺せる、わけ……ないじゃない……」

「メリッサ……」

「……母さんが死んでからは、本当に地獄だった……そこから助け出してくれたのは、メルじゃない……」

メリッサは縋りつくようにメレデイスに抱きついた。メレデイスはそれを戸惑いながらもしっかりと受け止め、その背を撫でる。

それがたとえ歪んだ形でも、メリッサには確かに救いだったのだろう。テレーゼは拳を強く握りしめた。けどもう、してしまったことは戻らない。怒りはテレーゼの中で燦っていた。

しかし、不意に――朔の右手が動いた。

「朔っ！」

「テレーゼ……？」

朔を揺さぶると、ゆっくりと真紅の瞳がテレーゼを見た。まるで堤防が決壊したかのように涙が零れる。テレーゼはそのまま、体が血で汚れるのも厭わずに朔を抱きしめた。

「――あんまり抱きつくな。その服レンタルなんだから」

今着せられている騎士服のことを言っているのだろう。確かに既に血で汚れてしまっている。

「朔のバカ……服くらい、クリーニングに出せばいいじゃない」

「その服は洗いにくいんだよ、バカ」

「バカじゃないもん……朔の方がバカだもん……」

泣きじゃくるテレエを、朔は優しく抱きしめた。涙の筋に唇を落として微笑を浮かべる。

「――泣くな、馬鹿」

髪を撫でられる。多分血がついてしまっているだろうな、と思いつながらそれが心地よかった。テレエはひとしきり泣いてから、ゆっくり朔から離れる。もう涙は出ない。

朔はテレエに一瞬眼をやってから、メリッサとメレディスを見た。そしてぽつりと言う。

「――花雪に会ったよ、メレディス」

メレディスは自分の腕の中にいるメリッサを一瞬見つめてから、答える。

「……何か言ってたか？」

「『貴方を実の弟みたいに愛してる』って」

「過去形じゃないのが、いいな」

その言葉は自分と同じで、朔は思わず笑った。しかしテレエは何か言いたげな目を朔に向ける。そこに込められた想いは、手に取るようにわかる。朔は微笑みだけを返した。

「お人よし過ぎるわよ、朔。私は赦せないわ」

テレエが朔にだけ聞こえるように呟く。朔は小さく頭を振った。
「赦したわけじゃない。だけど憎んだところで何も変わらないし、悲しみが続くだけだ……って、花雪なら言うだろうな。それにもう、全ては過去だ」

「朔……」

朔はメレデイス達に再び目をやる。そして凜とした、どこか花雪のそれにも似た声の調子で言った。

「もう終わりにしないか？ 俺達は多分、傷つきすぎたよ」

メレデイスは諦めたように、小さく笑う。

「――そうだな。だけど、僕のしたことは……赦されることじゃない」

朔は笑みを浮かべた。自分もかつては同じだった。だからメレデイスの気持ちがわかるのだ。罰が欲しい――そうすれば、気持ちは少しは楽になる。だからこそ、復讐などしてやらない。そのくらいには、彼を赦せない気持ちが燦^{くすぶ}っている。

「――俺は行くよ。全てを背負って未来を生きる」

テレーゼを抱き寄せる。高い体温が静かに伝わって来た。

「テレーゼとなら、それが出来ると思う」

メレデイスはぽつりと、どこか寂しそうに応える。

「愛しているんだな。だからこそ先を見つめられる……正直、少し羨ましいよ」

「メルにはメリッサがいるじゃない」

テレーゼがメレデイスに笑いかけた。

「――好きだから、プレゼント買ったんじゃないの？」

「プレゼント？」

テレーゼの言葉に、メリッサが反応する。メレデイスは顔を背けながらも、メリッサを優しく抱き寄せた。

「別に……たいしたものじゃないけど、でも確かに……テレーゼの言う通りかもしれないな」

どこか吹っ切れたような笑みを、四人はそれぞれの顔に浮かべた。

第十話『白い世界』（後書き）

朔「ようやく次で最終話だな……」

テレーゼ「第一部も二部もいいところ全て花雪に持ってかれてる気がする……ヒロイン私なのに……」

朔「第三部に期待……するほど出てこないかも、って作者が言ってた」

テレーゼ「作者にT字カミソリ入りの手紙を送りつけてやる！」

朔「T字なんだ……」

テレーゼ「——まあいいわ。エピソードがいきなりクリスマスまで飛ぶから注意しなさいよ」

朔「……あれ、今日は何日？」

テレーゼ「第六話から日付変わってないから九日ね」

朔「第一部より期間が短いんだな……」

テレーゼ「作者は『第二部はソナタの第二楽章だから』って。意味わかる？」

朔「ピアノ習ったことのない俺に聞くな」

テレーゼ「私も三日でやめたわよ」

スピネル「『繋ぎ』や『橋渡し』という意味だ。全く、これだから下賤の者は……」

テレーゼ「いたんだ、スピネル……」

スピネル「気付いてなかったのかよΣ」

朔「そういえば、明日（二十三日）誕生日だよな。おめでとう」

テレーゼ「また一つ老人に近づくのね、スピネル」

スピネル「素直におめでとうって言ってくれないかな、テレーゼ……」

終章『聖なる日に』



聖なる日の朝は霧はあるが穏やかな日だった。朔は布団から出て外を眺める。まだあの戦闘で負った傷は治らない。医者には『紫月』の後遺症もあるから動くな、と言われていたが、じっとしているのは嫌だった。溜息を漏らす。

「寝とらんと治るもんも治らへんで、朔」

「『根』……！」

驚いて声ができる方を見ると、大きな鞆とターコイズブルーの薔薇の花束を持った『根』が立っていた。花なんて、似合わないことを。朔は苦笑を浮かべた。

「花はアメリカからやからな。俺が選んだわけやない」

『根』は乱暴に花束をサイドテーブルの上に置いた。朔は戸棚から花瓶を出しながら『根』に言う。

「普通朝の六時から見舞いに来るか？」

「だって家の整理終わっとらんし」

「どうせテレーゼみたいにな、整理する途中で懐かしくなって本読んだりしてたんだろう？」

「そうやな。朔の六年前の写真データとかあったで。嬢ちゃんの枕元に置いて来たけどな」

おそらく恥ずかしい写真だろう。後で回収しなければ。朔は薔薇を花瓶に挿してから、再び外に眼をやった。

「……外、出ないか？」

「寒いで？ 大丈夫なん？」

「こんなところで話をするのもあれだろ」

朔はすばやくジャケットを着て病室を出る。『根』はその隣をゆっくりと歩いた。

外に出ると、深い霧がしつとりと肌に纏わりついた。朔はそれをどこか快く感じながら病院の周りの庭に足を踏み入れる。『根』の顔を見ることは出来なかった。

——これで最後だと、思いたくはない。

『根』はもう受け入れているのだろう。だが、朔は受け入れられそうもなかった。風が染みて涙が出そうになる。

「——そうそう。ちゃんと誕生日プレゼントとクリスマスプレゼント持ってきたで」

『根』は歩きながら鞆の中をまさぐる。その中からは、白いベルベットの箱が出てきた。『根』は朔の手にそれを握らせる。

「それは誕生日プレゼントやな。開けてみ？」

見なくても、中身は何となくわかる。朔は呼吸を整えてから箱を開けた。中にあったのは内側に赤い石が嵌められた女物の指輪と、同じデザインで青い石が嵌められた男物の指輪だった。朔は言葉を詰まらせる。

「必要になるのはまだ先やと思うけどな。そんなときまでちゃんと隠しとき」

「『根』……」

『根』は笑いながらベンチに座った。そして手を伸ばして雪を捕らえるが、雪はすぐに溶けて水に変わる。朔も同じように手を伸ばした。

「——あ、そーいやアメリカが城の防衛と『紫月』の件の報酬を振り込んどくって言ってたで」

「ちょっとしか働いてない気もするけど……それに、そんな大金はもう必要ないし」

「つーことは、あれか。嬢ちゃんあのままチェスタートン通うんやな？」

「メレディスも卒業まで居座るつもりらしいし……何よりテレエゼがやめたくないとか言いやがって……」

信じられない。ひどいいじめを受けていたというのに。彼女は自

分が思うよりもずっと強いのかもしれなかった。

「嬢ちゃん相手だとホンマに甘いな、朔」

「テレゼは気が強いのを乗り越して頑固なんだよ……いや、ただの駄々っ子か」

「他の奴はどうなんや？」

「メレデイスとメリッサは昨日退院したし、スピネルとテレゼもそろそろ退院だな」

でも、と朔は眼を伏せた。

「……翠は、まだ意識が戻らない」

精神攻撃の魔術は破る術がない。それを見つける前に柏木が死んでしまったからだ。翠は、皮肉なことに自分で自分の首を絞めていることになる。

自分の爪先を見つめて溜息をつく朔の手に、『根』は小さなチップを握らせた。朔は訝しげな視線を『根』に向ける。

「メレデイスと手を組むフリをして、柏木の研究データを盗んだんや。魔術には明るくないから、俺はさっぱりわからなかったけど……もしかしたら、この中にヒントがあるかもしれへん」

「『根』……」

『根』の痛みを堪えるような表情が引っ掛かる。だが、それにについて聞くことは出来なかった。

「これが欲しくて粘ってたんや。……まさか、メレデイスがあんなに早く計画を実行するとは予想出来なかった」

「……自分を責めることはない。お前は今までよくやってくれたよ」「これが最後みたいに言うなよ。明日も明後日も変わらない日が来るみたいにしてくれ。……最後の頼みや」

朔は静かに頷いた。最後の頼みくらいは聞いてやらないと、祟られそうだと。

「——そういや、朔って何歳やったっけ？」

『根』がいきなり声のトーンを変えた。無理をしているのがわかる。だからわざと素っ気なく朔は答えた。

「十九歳だよ」

「意外に歳離れてるやん。俺、二十三やで？」

「知ってるよ、そのくらい」

初めて出会ったときは兄のように思っていた。それが友人に対するそれに変わったのはいつなのか、もう思い出せはしない。だけど出会えてよかったと、それだけ思う。

「なあ朔、あの世ってどんなところと思う？」

まるで、旅行にでも行くような口調で『根』は聞く。朔はしばらく考えてから、短く答えた。

「肉眼で新月が見られるところかな」

「それは面白そうなところやな」

『根』は笑う。多分、『根』はこれからあの白の世界にも行くことになるだろう。だからあの月を見て自分を思い出してほしいと、少し感傷的なことを思った。

「――それと、今は珍しい真っ白な鳴砂があるな」

「鳴砂？」

「踏むと音がするんだよ。本当に綺麗じゃないと鳴らないから、珍しいんだよ」

そういえば自分は、この数ヶ月で二度も死後の世界に行ったのだ。一度目は『紅の世界』、二度目は『白の世界』――多分そこに花雪がいたから、自分は戻って来られたのだと思う。朔は空を仰いで眼を細めた。『根』も同じように空を見る。倫敦の朝の霧が晴れようとしていた。

「聖なる朝って感じやな。まあ、無神論者のお前には関係あらへんかもしれないけどな」

「クリスマスも祭の一つだと思えば問題ない。日本なんてクリスマスも正月も盆も祝うからな。もはや慣例になってるし」

「国民性の違いやな」

『根』は苦笑しながら立ち上がる。朔はそれをぼんやりと見つめた。

「そろそろ帰るかな。家、すごいことになったり……パソコン全部壊さなアカんし」

『根』のパソコンには機密が詰まっている。万が一にでも中身を見られるわけにはいかないのだろう。朔は溜息をつく。

「そのくらい、昨日のうちにやっとけよ……」

もう少し、一緒にいたいのに。

「じゃあないやん。俺は昨日サンタクロース並に忙しかったんやで？」

「何がそんなに忙しいんだ？ 依頼があつたわけでもないのに……」

「それはだな……」

『根』は再び鞆の中を探り始めた。しばらく攪拌し、ようやく小さな銀色のイヤークフを取り出した。

「これを朔にクリスマスプレゼントとしてあげようと思ったまではよかったんやけどな、しまった金庫の暗号がなかなか解けへんかったんや。俺でも一日かかる暗号作るなんて、さすが俺やな！」

「……大事な物なんじゃないのか？」

「大事っつーか……親から貰った最後のプレゼントやからな。でももう必要あらへんし」

最後のプレゼント——それは施設に売られ、脳を弄られる前という意味だ。朔は手渡されたイヤークフを、ゆっくり手に取った。内側に文字が刻まれている。どうやらフランス語のようだ。さすがに読めない。

「——じゃあ、俺はそろそろ行くで」

「うん……」

笑って送らなければならないと思った。まるで、明日も明後日も会えることを確信しているかのように。いつものように、手を振って。

「じゃあな、朔」

「——ああ」

それだけ言うのが、やっとだった。後は霞んで小さくなっていく

『根』の背中をただ見ていることしか、朔には出来なかった。

「……フェイも、『根』も……何で俺を置いていくんだろうな……」
ついて来い、と言われても困るけれど、どうして生きていてくれないのだろう。朔は膝を抱えた。

「――本当にじっとしてるのが苦手なのね、朔は」

肩にシヨールがかけられる。顔を上げるとそこには、金の髪をポニーテールにしたテレーゼが立っていた。朔は静かに笑う。

「……珍しいな」

「ああ、髪型？　ちょっと邪魔になってきたから――そろそろ切り時かしらね」

「俺は長い方が好きだ」

「毛先を揃えるくらいよ。それより、誕生日だっていうのに暗い顔してるけど……どうしたの？」

テレーゼは『根』のことについて、何も知らないのだ。いずれは話すつもりだが、今日はまだ話したくない。朔はごまかすように笑った。

「十九歳になってしまったなあと思って」

「三十路過ぎたおばさんじゃないんだから。はい、誕生日おめでとう」

テレーゼは小さな白い箱を手渡す。ゆっくり中を開けると、そこにはシルバーのピンキーリングが入っていた。

「い、一応私とペアっていうか何て言うか……だからねっ！」

テレーゼは左手の小指を朔に見せた。朔は苦笑しながら指輪を嵌める。そしてそのままテレーゼと指を絡ませた。

「ありがとう、テレーゼ」

「……ね、朔。気になっていたんだけど……その箱は？」

テレーゼは先程、『根』から貰った白い箱を指差した。朔は慌ててそれを隠す。

「何で隠すのよ」

「こ、これは『根』が勝手に……！」

「あ、そういや部屋に来たわね。朔の秘蔵写真と共に」

「今すぐその写真を破棄しろ！ 絶対ロクな写真じゃないっ！」

「破棄したら、それが何か教えてくれる？」

「どっちも嫌だ！」

朔は箱を掴むと、素早くテレーゼから逃げた。テレーゼはそれを夢中で追い掛ける。

「待ちなさい、朔！」



「――あの二人は何をやっているんだ？」

翠の病室から庭を眺め、スピネルは深い溜息をついた。テレーゼは朔に多大な影響を及ぼす。ふさぎ込んでいても、テレーゼさえいれば朔はすぐに回復するのだ。テレーゼもまたしかりだ。それが羨ましいと同時に、少し嫉妬もしてしまう。

「まあ、誕生日忘れられなかっただけよしとするか……」

プレゼントは病院の近くのパン屋で買ったラスクだったけれど。

あれは絶対自分で食べるためにも買っているに違いない。

「今日はクリスマスか……」

スピネルは視線をベッドに横たわる翠に移した。目を醒ます気配はなく、その翡翠色の瞳は今は見えない。しかし、苦しんでいる心はしっかりと見えた。

「翠……」

その苦しみを見ることが出来るのに、何も出来ない。スピネルは息を吐いた。

悪夢に囚われた翠に、外から出来ることなど何もない。そもそもその悪夢の正体を掴むことが出来ないのだ。それさえわかれば、介入することは出来るかもしれないのに。

「早く、出て来いよ……仕事が滞るじゃないか」

普通の人の三人分の仕事量をこなす翠がいなければ、困ることは

沢山ある。だが、それ以上に――

「――お前は本当に、嘘ばかりつく」

『第二の脳となり、最終決戦^{ラagnaログ}を生き抜く』という翠の言葉を信じている。あれは確かに嘘偽りのない言葉だったのだ。それなのに、何故翠は目を醒ましてくれないのだろう。

「お前以外に、あんなこと頼めない。だから早く、目を開けてくれ――」



『根』は片付けの途中で、乱雑に物が散らばっている家に足を踏み入れた。人の気配がするが、警報は鳴っていない。それに、この気配はよく知っている人間のものだ。

「城を抜け出すのはやめといった方がええんとちゃう？」

「だって、暇なんだから」

「アメリカもじっとしてられへん質だよなあ……」

まるで朔のようだ。朔は怪我をしても動き回るから、アメリカよりなお、質が悪いのだが。

『根』は違和感を覚え家を見回し、アメリカに驚きの目を向けた。かなりの部分の片付けが終わっている。キッチンに至っては、新築の家のものと大差がないほどに磨かれていた。女王のくせに、家庭的過ぎる。今まで知らない一面を見せられた気がした。

「Merci, Amelia」

思わず口をついて出た母国語の響きに、『根』は苦笑した。アメリカが片付けてくれたおかげで、あとはパソコンを破壊すればいいだけだ。『根』は奥の部屋の扉を開ける。アメリカもその後ろをゆっくりついてくる。ドレスの裾は長く、コードに引っ掛かりはしないかと『根』は思った。というか、掃除もドレスのままですんだのだろうか。

「相変わらずすごい数ね。今はシェイクスピアよね」

「せやな」

『根』はコードを手に取り、レーザーカッターでコンピュータを切り刻んだ。一台ずつ、慎重に。決して誰も復元できないように。切り刻みながら、視界が歪んでいくのをぼんやりと感じていた。愛着がないわけではない。むしろ、相棒のように大切に思っていた。それを壊すという行為は、自分の死を改めて実感させてしまう。

だけど死後の世界に新月が輝くことを思えば、少しは心も軽くなる。『根』はすべてのコンピュータを壊し終わると、中央にある椅子に腰掛けた。アメリカが後ろから『根』を抱きしめる。

「……貴方のこと、愛していたかもしれないわ」

「『誰も愛さない』がモットーやったんやないの？」

「そう。全てを愛したかったから。……だけど、朔を見て少しだけ羨ましくなったのよ」

『根』は静かに目を閉じる。徐々に鼓動が遅くなり、ゆっくりと死に引きずられていく。しかしそれは想像したよりずっと穏やかで、まるでまどろみのようだった。

「アメリカ……」

「何？」

「……朔を、よろしく頼むで。アイツには嬢ちゃんがおるけど、それでも足りひんときが来るかもしれんし。それに、嬢ちゃんは自分で生きる道を選んだわけやし」

苦しい共依存関係よりはいいのかもしれない。しかし、朔は間違はなくテレーゼに依存している。だからこそ二人が離れるのは不安だった。それに、厄介なものはまだ残っている。

「私の出来る限りのことをするわ。貴方の代わりにはなれないだろうけど」

アメリカの答えに、安心する。彼女は自分の限界を知っているから、無理矢理穴を埋めることはしない。だからこそ任せられるのだ。「……アナトール」

不意にアメリカが、『根』の本名を口にした。『根』は苦笑を浮

かべる。

「……本名は嫌いやったけど……最期に惚れた女に呼ばれるんは、悪い気はせえへんな……」

『根』の体から力が抜け、椅子が重みを受け止めて軋んだ音を立てる。

慟哭も何もなく、ただその軋んだ音だけが、一人の男の死を奏でた。

終章『聖なる日に』（後書き）

テレーゼ「第二部『幻の月』が完結しました……けど」

朔「すっきりしないな……」

テレーゼ「まあ、初めから選択肢は『一部で終わらせるか、三部まで書くか』だったからね。でも三部はプロット再考中らしいわ」

朔「何か俺もう疲れた……こんな人生送ってみろよ？ 九月末から十二月末の間に二回死後の世界に行ったんだぜ？」

テレーゼ「気になるんだけど、朔が白の世界で見た月って本当に新月なの？」

朔「根拠はないけどそんな気がする」

テレーゼ「科学者が聞いたら怒りそうなセリフね。ていうか父親が科学者とは思えないわ」

朔「そういやそうだよなあ……でも、花雪も一応科学者だけど文系っぽいじゃん」

テレーゼ「……確かに。ていうか呪文を数式にすれば科学っぽくなつたのに、何でそうしなかったんだらうね？」

朔「作者は数式を見ると眠くなるらしいから……」

テレーゼ「大人の事情ね」

朔「そうそう。今回は第三部まで間が開くのを埋めるために、実際にくだらないことをするので期待しないように」

テレーゼ「何するの？」

朔「さあ？」

テレーゼ「知らないんかい！」

2008年12月23日 スピネル誕生日おめでとう！……な日に、
第二部『幻の月』 完結。
ついでにあさって策の誕生日おめでとう！

番外編『黒薔薇』（前書き）

くだらない企画第一弾！

かわい洋へいさんのジェイド……もとい翠のイラストへのオマージュ&ただ単にサービスシーンが書きたかっただけという、内容のない話です。

番外編『黒薔薇』

「体に刻み込んであげますよ。私がどれだけ朔を愛しているかをね」

何でこんなことになったのだろう。朔は身動きが取れない体を懸命によじった。



そもそもの発端は、「チェスタートン寄宿学校の近くにある謎の家が気になる」というテレーゼの言葉だった。しかしその洋館の周辺は何故か立入禁止区画になっていて、行くことが出来ないというそれに翠が興味を持ってしまう、「それなら調べて来て」と言われてしまったのだ。要するに朔は巻き込まれただけなのだ。

「この辺りから立入禁止区画ですね。でも、何故でしょうね？」

「近くに熊でもいるんじゃないのか？」

「……何だかつまらなそうですね、朔」

「俺は怪しい洋館に興味なんかないから」

洋館、という言葉に翠は反応を示した。考えてみれば不自然な言葉だ。ここはイギリスで、ほとんどの家は洋館なのだから。日本の記憶が戻ってからというものの、感覚は完全に日本人のものになってしまったらしい。

視界が徐々に悪くなる。霧というより、もはや煙だ。灰色で、血を内包するような倫敦の霧——翠は小さく笑った。

「雰囲気が出てきましたね」

「……そうか？」

「ミステリーといえば霧でしょう。これで快晴だったら、色々どぶち壊しですよ」

小説じゃないのだから、雰囲気がぶち壊されるのなんてしょっち

ゆうだろう。あまりに状況に合いすぎているのは、逆に不気味だ。仕組まれているのではないかとさえ考えてしまう。

「……あれですね」

「何だ、この見るからに怪しいというかテレゼが好きそうな屋敷は」

確かに立派な屋敷なのだ。おそらくかつては男爵レベルの金持ちが住んでいたのだろう。だがしばらくは誰も住んでいないことがよくわかる。白い壁には蔦が這い、窓ガラスは一部抜けたところがある。

しかし何故か黒薔薇だけは、誰かが未だに手入れしているかのよう
うに美しく咲き誇っていた。

「――妙だな」

「そうですね」

相槌をうちながらも、翠は鉄の柵を越えて敷地中に入っていく。言っていることとやっていることが噛み合っていない、と言いかけてやめた。女的好奇心は止められない。テレゼでそれは何度も味わっている。

むせ返るような薔薇の香りは、雰囲気もあるだろうが、テレゼがいつも身につけている香りと違って、どこか禍々しささえ感じさせる。朔は顔を僅かにしかめた。残念なことに、こういう勘だけは殺し屋時代に鍛えられたせいでよく当たる。しかし翠はといえば、引き返そうとする気配は全くない。

「――朔？　どうかしましたか？」

「……いや、ちょっと考え事」

翠はそうですか、と呟いて、まるで自分の家に入るときのように無造作に扉を開けた。瞬間、埃が舞う。二人は盛大に咳込んだ。

それが落ち着いたところで、屋敷の内部を見る。特に変わったところはない、一般的な貴族の屋敷だった。しかしやはり異様なほどに薔薇の香りが満ちている。

「まず、どの部屋から見ましょうか？」

「……翠の好きなどころでいいよ」

翠もテレーゼも、何故こんな普通の廃墟に興味を示すのだろう。さっぱり理解できない。朔にとっては、廃墟は殺し屋時代の隠れ家でしかないのだ。

翠は何故か律義にノックをしてからドアを開ける。そこはリビングのようで、埃を被っているが豪華な家具が置かれていた。まるで人だけがそこからいなくなってしまったようだ。こんなに高価な家具が残るのは珍しい。ほとんどの場合、たとえ家具を置きっぱなしで引越しても、スラムの子供たちが家具を盗んで売りさばく。それは意外に稼げる商売なのだ。

「何かいわくでもあるんですかね」

その点は、翠も奇妙に感じたらしい。しかしだからといって探索はやめない。朔は逆に、スラム時代の癖で思わず家具をいくらで売れるか計算してしまっている。いわくつきのものを集めるおかしい人間に売りさばけば、一体何ユーロ――

「これは……」

翠が何かを見つけたらしい。その顔には笑みが浮かんでいる。しかしその笑みは、まるで蟻を踏み潰す子供のように残酷だった。

「――ここは、ウォリック伯の別荘のようですね」

「ウォリック伯？ あの子童連続誘拐監禁殺人事件の？」

それは五年くらい前の事件だったはずだ。子供を誘拐し、一ヶ月ほど監禁し暴行を加えた後に惨殺する――サリユー＝アンダーソンの『吸血鬼事件』と同じくらい、オカルトマニアの間では有名な事件だ。それなら、不自然に放置された家具の説明もつく。そしてこの区域が立入禁止の理由もだ。

「――ウォリック伯は最近脱獄したと聞く。ここに潜んでいる可能性もないわけではない」

「そうですね」

帰ろう、と言外に言うものの、翠は動こうとしない。まるで魅入られてしまっているようだ。それとも屋敷の中に満ちる薔薇の香り

が頭を麻痺させているのか。ふと考え、朔は驚きに目を見開いた。

「――可能性がある、というレベルじゃない。ここにいるんだ、翠」
「でしようね。薔薇の手入れはきちんとされていましたし」

「なら――」

「……こういうところは親子だな、と思うんですよ」

翠は微かに笑った。そのまま埃を被ったカーペットを剥がす。そこには小さな扉があつて、翠は唇を舐めた。その仕種は妖艶で、寒気さえ覚える。

「――陰惨なものを感じると、興奮するんですよ」

誰にもそういう部分はある。特に女は、好奇心が強い故に陰惨な非日常を味わいたがる。それは翠だけでなく、テレゼにも言えることだ。翠はおそらく地下室に続いているのであろう、小さな扉を開けた。

「犯人がいたらどうするんだ？」

「倒せば済む話でしょう」

階段を下りていくと、よりいっそう強い薔薇の香りがした。朔は夜目がきくが翠はそうでないらしく、歩くスピードは下に行くほど遅くなっていく。朔は翠の手を引いた。

とうとう階段を降りきった朔は、目の前にある扉の前に立った。扉には何か文字が刻まれている。朔は指先に火を点し、その文字を照らした。

「これはドイツ語ですね」

『体に刻み込みましょう。君の全てが僕のものである印を』――
――そう書いてあるらしい。朔はそのドアをそっと開けて、思わず息を飲んだ。石の牢獄のような部屋は、黒薔薇で満たされていたのだ。薔薇の香りでもせ返りそうだ。部屋の中央まで足を踏み入れたとき――――

「――朔」

不意に、翠が笑った。

「黒薔薇の花言葉を、ご存知ですか？」

「……いや、知らないな」

「――貴方の全ては私のもの」

その綺麗な声には、紛れも無く狂気の響きがあった。後ろから抱きしめられ、身動きが取れなくなる。

「み、どり……」

「ここに監禁していたんでしょね。そして拷問を加えていた――」
翠の視線を追いかけ、朔は目を見開いた。そこには古今東西の様々な拷問器具が置かれた棚があった。

「『苦悩の梨』もありますね。これは主に女性用ですが」

拷問については殺し屋時代に学んだし、自分でも仕事で何度かやったことがある。しかしここにある拷問器具は本当に陰惨だった。ロープで両手両足を縛り付け、そのロープを巻き上げることで関節をゆっくり外していくような装置すらある。これが実際に使われたと考えるだけでぞっとする。

翠は朔を抱きしめたまま、棚にある赤い紐を手にとった。それがただの紐であるはずはない。朔は体を震わせた。

「……何、するつもりだ……っ」

「そんなに怖がらなくても、拷問なんてしませんよ。私は朔を愛してるんですから」

耳元で囁かれ、耳に舌を這わされた。翠は耳の軟骨をなぞり、穴に舌を差し込み、耳たぶを甘噛みする。朔は思わず官能的な声を漏らしてしまう。

「あ……や、だ……みどり……っ！」

「愛していますよ、朔。――君の全てを」

紐が緩く首に巻き付けられる。翠はそれに優しく唇を寄せた。その瞬間、首に針で刺されたような痛みが走る。

「……っ、なに……?」

「体に刻み込んであげますよ。私がどれだけ朔を愛しているかをね」

こんな行為をしている時点で、その愛を疑いたくなる。間違いないそこには憎悪も存在していて、それが翠の想いを歪ませているのだ。しかし愛情と比例して憎らしくなることもある。朔の頭はいよいよ混乱してきた。

さっきの紐で傷をつけられた首筋に、翠は妖艶に舌を這わせる。猫が水を飲むときのように無邪気に、豹が獲物に牙を立てるときのように残虐に、見せつけるように赤い舌が蠢く。体に鈍く鋭い電流が走る。

「……っ……あっ……！」

「その声も、体も、心さえも——全て私のものにしたい」
体が熱い。甘い熱に支配されてしまう。翠はそれを感じたのか、小さく笑った。

「可愛いですよ、朔」

「……かわいい、とか言われても……嬉しくない……っ」

仮にも自分は男なのだ。たとえ翠が酸いも甘いも知り抜いている大人の女とはいえ、ここまで翻弄されてしまう男はいかなものか。そう思っても、熱は止まらない。

不意に唇が重なる。生理的なものなのか、何故か涙が零れた。

「朔……」

「……な、に」

「……貴方の心に、私が入り込む余地はありませんか？」

ひどく哀しそうな翡翠色の目。朔は思わず首を振った。翠も大切な存在だ。傷つけたくはない。

「俺も、翠のことは好きだ……だけど、ごめん。それは……恋愛感情ではない」

「——認めたくはないですよ、本当は。だけど貴方の隣にいるべきなのはテレーゼであって私ではない。……それはもう、認めざるを得ません」

「翠……」

「でも私は朔に触れたいし、朔の全てを手に入れたい。――たとえばそれが一瞬で終わってしまったも」

首を押さえられ、黒薔薇の上に押し倒される。黒い花びらが舞うのが見えた。強い力で体を押さえ込まれ、身動きが取れなくなる。

「み、どり……っん」

唇が重なり、舌を捕らえられる。朔は抵抗を強めた。何かが違うと思った。確かに翠は強引だが、本気で抵抗すればすぐにやめていた。しかし今はそれが無い。何かが理性を壊してしまったのだろうか。だとしたらその何かは何だろうか。素早く思考が廻り始める。しかし翠の行為に熱が高まり、思考はすぐに中断されてしまう。

「――私のことしか考えられなくなればいい」

赤い紐が再び巻き付けられる。今度はそれがきつく喉に食い込み、氣道が圧迫された。

「……く、あ……みど、り……」

「苦痛に歪んだ顔も綺麗だな」

顔に熱が集まり、何も考えられなくなっていく。翠は呼吸困難の朔に迫いうちをかけるように、唇を重ねた。

「――ずいぶんと、猟奇的な女性だね」

不意に、低い声が地下室に響いた。翠の手が止まり、呼吸が楽になる。

「――ウォリック伯」

翠は小さく笑って、朔の体を解放した。朔は素早く起き上がって、翠とウォリック伯を交互に見る。ウォリック伯は、褐色の髪と緑色の瞳を持つ、ごく普通の紳士といった風貌をしていた。しかし彼こそが子供を誘拐したあげくに惨殺した、凶悪な殺人鬼なのである。

「……今すぐここを出て行って、このことを忘れてくれるのなら殺しはしない」

「子供にしか興味がありませんか？　それとも、美学に反するから？」

あくまで紳士的なウォリック伯に対し、翠は独特の不敵な笑みを浮かべている。これではどちらが犯人かわかったものではない。

「後者の方だね。無意味な殺しは私の美学に反する」

「――貴方は美学のためにこんな部屋を？」

「ふふ……君は聡明な女性だね。いつから気付いていた？」

何が起こっているのかわからない。翠は優しく笑いながら、銃口をウォリック伯に向けた。

「試したんですよ。――朔でね。やはり私の予想通り、この部屋では血液は凝固しないようだ」

思わず首の傷に触れる。確かに普段なら既に塞がっているはずの傷から、細く血が流れているのがわかった。しかし問題にはならない程度だ。さつき首を絞められたせいで、僅かに止血されているようだ。

「その通りだよ。この部屋は血液が凝固しないように、特別なガスを部屋じゅうに満たしている。薔薇の香りでごまかしてはいるがね」

「……貴方にとってそれは美学ですが、私にとっては迷惑な話です」

翠は微笑しながら、何の宣言もなしに引き金を引いた。しかしあえて急所は外したらしく、ウォリック伯は腹部から血を流しながらも意識は保っている。しかし放っておけば死ぬだろう。血液が凝固しないということは、流れ続けるということだ。

「翠……」

呼び掛けると、翠は指を鳴らした。声が封じられてしまう。

「……最後に忠告しておきますよ、ジェームズⅡウォリック。――次のターゲットの写真をリビングに置いておくのはやめたほうがいい」

黒薔薇の上に倒れているウォリック伯に向かって、翠は容赦なく引き金を引いた。今度は眉間――確実に即死だろう。

翠はウォリック伯の脈を素早く確認すると、静かに拳銃をしまい、

朔にかけた術を解いた。



「どういふことか説明しろ」

何があつたかさっぱり理解できないのだ。屋敷を出てから朔は翠に詰め寄つた。翠はしかし、静かに笑うばかりである。

「……翠」

「朔の手を汚させたくなかつただけですよ」

翠は溜息をつきながら、ポケットから一枚の写真を取り出した。それは明らかに物陰から盗撮したとわかる、テレーゼの姿――リビングにあつた写真だ。

「ウォリックがターゲットにする人間は必ず金髪碧眼なんですよ」

「何で……気付いたときに言わなかつた？」

「言つたでしょう？ 『朔の手は汚させたくなかつた』と。朔が殺しても私が殺しても同じことなら、私が殺そうと思つたんです」

翠は笑つて、朔の髪を撫でた。朔はその手を掴んで言う。

「……聞きたいことはまだある」

「朔で試した理由ですか？ 私の血は元々血友病患者並みに凝固しないので試せないんですよ」

「え……」

翠は笑つて、右手の甲を朔に向けた。魔術を発動させると、そこにいきなり傷が出来て紅い珠が浮かび上がる。

「この力の代償ですよ。もちろん血友病患者と同じで、薬を飲めば普通の人間と変わりませんが……残念ながら今朝は飲み忘れてしまつて。それ以外の行為は役得というやつです」

「役得かよ……」

「テレーゼを助けてあげたんだから、まあ……少しくらい、いいかなと」

翠が笑いながら言うと、朔は深い溜息をついた。

「少しくらい、じゃないだろ……」

「あれくらいで音をあげるんですか？ 思春期の男とは思えませんね」

「俺は淡泊なんだよ」

「……千怜さんの息子とは思えませんね。あの人は遊び人だったのに」

父親が遊び人という話は初耳らしい。朔は驚きの目を向けた。

「昔は研究所の女性は例外なく食事に誘ってましたね。花雪に相当お灸を据えられてからは鳴りを潜めていましたが。後にも先にも花雪がキレたのはあの時だけです」

あの温和な花雪が、怒髪天を突くといった勢いでキレたのだ。子供がいるのに女を口説くなど。朔の母親は朔を産んですぐに死んでしまったらしいから、実際女を口説いても問題はなかったのだが。

「俺がそんなことをしたら、間違いなくキレられるだけじゃ済まない気がする……したくもないけど」

「テレーゼにメールチェックとかされないように気をつけた方がいいですよ」

「差出人が男とテレーゼだけでもか？」

「……朔って本当に女の気配がないんですね。女性としては嬉しいですが、男としてどうかと思いますよ。……独占欲の強いテレーゼにはうってつけかもしれません」

言ってから、いや、と翠は心の中で否定した。朔はおそらくテレーゼが成長しても、彼女を大切に思うあまり禁欲的になるだろう。しかし女には求めてほしいと思うときもある。愛しているから全てが欲しいと。

どれだけ体を重ねても、心を通わせても、人の全てなど結局手に入りはしない。だからこそ人はそれを願う。自分を求めてほしいと、愛すれば愛するほどに狂おしく。

翠は手を伸ばして、朔の頭を撫でる。あの屋敷の黒薔薇の匂いが、鼻腔をくすぐった。

「愛してますよ、朔」

たとえその全てを手に入れることが出来なくても。自分を見てく
れなくても。それでも気持ちは、止められなくて。

番外編『この世にはバレない嘘も存在する』（前書き）

くだらない企画第二弾！ 朔とフェイと『根』の話。（当時朔は十二歳）※BLのようなシーンが多々あります。だってフェイですから。

番外編『この世にはバレない嘘も存在する』



「――朔に会いたいってちゅう奴がおるんや」

ある日、『根』が経営するバーに行くと、そう言われた。朔は肘をついてアイスコ―ヒーを飲みながら、『根』に答える。

「依頼か？」

「依頼やない。取材や。最近話題の若手ジャーナリストのフェイトて奴なんやけど……朔が知っとるはずはあらへんな」

「取材って……」

「裏稼業……つーか殺し屋についてやな。まあ、上手くいくとは思えへんけど」

だろうな、と朔は呟いた。いくら顔も名前も出さないからといっても、本来殺し屋は見えない存在でなければならぬ。朔は日本刀を扱う珍しい殺し屋だから、噂になっているだけだ。

「……何で俺がそんな奴に会わなきゃならないんだ？」

「そう言うと思ってな、断つたろうと思ったんや。せやけど、厄介なことに下調べはバッチリらしくてな……そーとー突っ込んだところまで調べられてんで。あれはジャーナリストやなくて情報屋の域やな」

「放っておけば厄介だな。……まあ、バレて困ることなんてあまりないけど」

見ず知らずの他人に詮索されるのは好きではない。朔は眉をひそめながら、アイスコ―ヒーを飲み干した。

「……で、そいつとはいつ――」

「そろそろ来ると思うで」

「はあ!？」

急過ぎる。朔は思わず立ち上がった。『根』は狸のような嫌な笑

みを浮かべている。

「……お前って……そういえばそういう奴だったな」

「悪人やないから、別に準備する必要はないと思うで？」

「そうだけどさ……」

朔が呆れながら反論しようとする、ドアに付けたカウベルが軽やかに鳴った。朔よりも先に、『根』が反応する。

「ちょうどええところに来たな、フェイ」

朔は『根』の言葉に、弾かれるように店に入って来た男に目をやった。鳶色の長い髪、透明な灰色の瞳——凄腕のジャーナリストというよりは、文学青年のようだ。しかし次の瞬間、そのイメージは崩れ去った。

フェイは突然、朔に勢いよく抱きついてきたのである。

「写真で見るよりかわいい！ 誘拐したい！」

「離れる、この変態っ！」

朔は咄嗟に、フェイの鳩尾に拳を叩き込んだ。フェイは床にうずくまり、殴られた部分を押さえながら言う。

「オレ、は……君みたいに猟奇的でかわいい男の子が……大す……」

朔は無言でフェイの体を踏みつける。『根』は笑いを堪えながら二人のやり取りを見ていた。

「ごめん……かわいい子見るとつい……」

「世の中のために一回捕まってこい」

「つれないなあ」

フェイがやって来てから約二十分後。二人はようやくカウンター席に座り、話し始めた。朔はフェイの予想外な性格に戸惑いながらも、葡萄のジュースで心を落ち着かせる。

「……で、結局お前は俺の何を知りたい？」

「一般的な人間との相違点だよ。勿論、一般的な人間——つまり表の人間にも違いはあるけどね」

「それを知って何になる？」

「知ることは手段じゃなくて目的だよ。まあ、もちろん表の人間に知らせたいときは知らせるよ。知らせる必要がなければ、知らせない。今回のことはまだ迷っていて……」

朔はストローでジュースを掻き混ぜた。赤紫色の液体が渦を巻く。それを見ながら、朔はフェイに返事をした。

「表の人間に話すことなんてない。……理解されるはずはない」

「それはどうかな。確かに表の人間は、裏の人間をまるで獣の^{けだもの}ように言う。でもそれは、実際には裏の世界なんてちっとも見ようとしていないから言えることなんだ。見ようとすれば、少しなりとも理解はでき……」

朔は素早くナイフを取り出し、フェイの左胸に突き付けた。しかしフェイは柔和な笑みを崩さない。朔は真紅の目を細めた。

「……お前、本当に表の人間か？」

「オレは表の人間のつもりだよ。でも、そうだな……グレーゾーンかも」

フェイが言うと、それまで黙って話を聞いていた『根』が、フェイのコップに新しいジュースを注ぎながら言った。

「コイツの親父は始末屋や」

「よく知ってるな。……ああ、君は情報屋だもんな」

始末屋——それは、死体を始末する仕事だ。殺し屋の中には始末屋と手を組んで、自分の痕跡を消し去る人もいる。勿論表の人間も、自分の犯行を隠蔽するために始末屋を呼び寄せることもある。

「母は完全に表の人間だったし、オレが生まれてからは、父も裏世界から足を洗ったよ。だからオレはほとんど白いけど……完全にホワイトってわけじゃない。実はこういうことには馴れてるんだ」

フェイはナイフの刃の部分を、少しも表情を変えずに握んだ。朔はその行為に、慌ててナイフを納める。

「これで少しは信用してくれた？」

「……余計信用出来なくなった」

「それでも誠心誠意、愛情を込めて接してるつもりなんだけどなあ」

「気持ち悪いから愛情はいらない」

傷つくなあ、と、あまり傷ついてなさそうにフェイは言う。朔は深く溜息をついた。フェイのことは掴めないのに、自分のことは掴まれている。しかもどこか人を安心させ、全てを話してもいいという気にさせる何かがある。フェイにはあった。気を張っていなければ、どこまでも侵入されてしまう――朔はそう思い、フェイを拒絶することを決めた。



フェイと出会った次の日――朔は、自宅である狭いアパートで仕事の準備を整えていた。今日の標的は上院議員のバーリー男爵だ。報酬もかなり高い。朔のように、質素な生活をすれば一ヶ月はそれで暮らせる。しかしその作戦には、一つ大きな問題があった。

「女装か……」

娼館で遊び呆けている男爵だから、確かに『根』が言うように、そこで殺すのが最も効率的だ。さすがにそこには守護者も入れないだろうし、無防備にもなる。しかし妙に似合う自分を見ていると、男としてどうなのかと迷ってしまう。

「まあ、これが終われば楽できるし……」

無理矢理自分を納得させて、身嗜みを整えていると、インターホンが鳴った。外に誰がいるのかを確認しようとする前に、何故かドアが開く。いくら安いとはいえ、子のアパートもある程度は防犯対策もしている。それなのに……朔が身構えるのをよそに、脳天気な声が聞こえて来た。

「おはよう、朔」

「……待て、どうやって鍵を開けた」

「カードキーの開け方を買ったんだよ。あと、朔の居住地。千ユーロもしたんだよ」

「ちくしょう、『根』の奴……」

しかも千ユーロは安すぎるだろう。おそらく朔の居住地の情報は十ユーロもないはずだ。だが、フェイならば悪用はしないだろう。朔にとっては悪用なのかもしれないが。

「ていうかかわいいなあ、女装。本当に女の子みたい。まあ、オレは女の子より男の子の方が……っ」

「倫敦塔で処刑されてこい、この変態が！」

朔がフェイの鼻を殴ると、フェイは鼻血を出しながら倒れた。朔はヒールを履いた足で、わざとフェイを踏みつけながら玄関に向かった。

「待ってよ、朔」

「……俺は今から仕事なんだ。話なら後に……っ！」

急に、フェイに抱きしめられた。朔は目を^{みは}瞠る。起き上がった気配など、ほとんど感じなかった。フェイはやはりグレーゾーンの人間なのだと、強く意識する。

「かわいいなあ、朔は」

腰に手を回される。朔は思わず叫び出したくなった。仕事以外で男に触られたくなかない。

「——ふざけるな、この変態！」

朔は無理矢理フェイの拘束から逃れ、素早く引き金を引いた。銃弾はフェイの顔の横を擦り抜ける。フェイは目を見開いた。しかしすぐに表情を引き締めて、朔の手首を一つに纏めあげ、壁に押しつけた。

「ふざけてないよ。……証明してあげようか」

「なに、を……」

フェイは黒いワンピースと見事なコントラストをなす、白い首筋に唇を寄せた。その熱に体が震える。

「オレは朔が好き……君が纏う雰囲気がとても好きだよ。全てを拒絶しながら、全てを受け入れる優しさがね」

「や、だ……やめろ……っ！」

「朔が言ったんだよ。『ふざけるな』って。だからふざけるのはや

めたんだ」

首筋を強く吸われ、じんとした鈍い痛みとともに赤い花が咲く。フェイはそれに慈しむように舌を這わせた。

「っ……や、今から……仕事だから……っ！」

「必要ないよ。それは、嘘の依頼だから」

「う、そ……？」

フェイは朔から少しだけ離れ、口角を吊り上げた。その貼り付けたような笑みに背筋が凍る。

「依頼人はオレだよ、朔……」

そういえば、今回は依頼人と会わなかった。『根』が仲介人になっていたのだ。それに気付いた瞬間、『根』とフェイの間に密約があったことを朔は悟った。

「『根』のやろ……後で、シメてやる……っ」

「他の男のことなんて考えるな。今、朔の前にいるのは……このオレだよ」

唇を塞がれる。舌を搦め捕られ、朔は酸欠に喘いだ。

「……ん……や、だ……っ！」

朔は右足を振り上げ、フェイを蹴飛ばした。肩で息をしながら、朔はフェイを睨みつける。そして墨染桜の鯉口を切った。

「——これ以上ふざけたことをするなら、斬る」

「出来ないよ。朔は、本当は人を殺せない人間だ。だから依頼がなければ、人など殺せない」

確信を持って言っているだろうフェイに、朔は小さく首を振る。

しかし刀にかけた手からは、力が抜けていた。

「それは誤解だ。俺は自分の意志で殺したよ。——沢山の、人を」

「——二年前の事件なら、知ってるよ。ちゃんと調べたから」

「だったら……」

「でも理由がないわけじゃない。……そうだろ？」

「……っ」

おそらくフェイは何もかもを知っているのだ。朔は唇を血が出る

ほど強く噛んだ。

「朔がただの殺人狂なら、こんなことはしないよ」

フェイは朔の左腕を掴み、醜い傷の上に唇を落とした。

「……はな、せ……っ！」

「こんな綺麗な肌に、傷なんかつけないで」

傷をひとつひとつ音を立てながら舌でなぞられ、体が熱くなる。
まだ新しい傷口に、唾液が染みた。

抵抗が、出来なくなっていく。

「……ふざ、けんな……っ」

掠れた甘い声。それが堪らなく朔の羞恥心を誘った。

「——好きだよ、朔」

フェイは微笑しながら、ようやく傷口から唇を離した。そして髪を結んでいた白いリボンを解き、傷口を隠すように巻き付ける。

「なに、を……」

「包帯の代わり。包帯っていうのはさ、傷口を隠すためじゃなくて、
包み込んで癒すためにあるんだよ」

リボンに血が滲んでいく。それはまるで唐草紋様アラベスクのようで、醜い
自分の中でそれが唯一綺麗だと——朔は、一瞬だけ思った。



次の日——

『根』が経営するバーで、フェイは葡萄ジュースを飲んでいた。

『根』はそんなフェイを見ながら、深い溜息をつく。

「……何しとんねん、変態」

「『根』が言ったんだろ？ 『さりげなく傷を確かめろ』って」

「全然さりげなくないやん……朔は十二歳やし、下手すりゃ犯罪や
で？」

「まあ、その辺は役得……かわいい女装姿も見れたし。でもオレは
やっぱり露出が少ない服を着てほしいなあ。どう脱がせようか、

想像すると楽しいじゃないか」

「変態やな、お前……先が心配や」

頭を押さえながらも、『根』はほっと息を吐いた。朔をフェイを会わせるのは賭けだった。仮に自分が無理に朔の傷を確かめようとすれば、朔との関係は崩れるだろう。相手の心に無理矢理入り込んでいくような間柄ではないのだ。

朔は誰かが入って来てくれることを望みながら、それを強く拒絶している。しかしフェイという男には、どこか人を安心させ、心への侵入を許させるところがある。だからこそ二人を会わせ、フェイが朔の心の障壁を壊せるかどうかを試したのだ。結果は悪くなかった。だが、時間はかかるだろう。

「『根』は朔のこと、どう思ってる？」

「何やいきなり。まあ……大切な友人やな」

「オレは愛してるよ。今すぐ結婚したいね」

フェイがここまで朔に惚れてしまうとは。想定外だ。『根』はこの先の朔の受難を憂えて、溜息をついた。同時に決意する。

（フェイと俺が元々知り合いやったことは黙っとこ……言ったら冥土行きや）

フェイにも口止め料を払わなければならない。だが、金より命が大事だ。

興奮したフェイの惚気のろけを聞き流しながら、『根』は時計を見た。そろそろ朔が来る頃だろうか。『根』はフェイのおしゃべりを遮って、手を合わせた。

「……あ、フェイ。悪いんやけど店番頼む。ちょっと買わなあかんもんがあつてな」

「わかった。まあ、こんな昼間じゃあんまり客も来ないだろうしね」

『根』は何も知らないフェイを一人残し、早々に退散した。フェイが大変なことになるか、それとも朔か——十字を切りながら、数分後の二人を憂えた。

「……ご愁傷様、やな」



『根』が逃げ出した数分後——

店に入って来た朔は、『根』がいないと見て取ると、舌打ちをして踵を返した。フェイは慌ててそれを追う。

「オレとめくるめく官能の世界へ行かないか？ 邪魔者もないことだし」

「一人で行ってろ！ そして捕まってしまえ！」

「つれないなあ……そこもかわいいけど」

フェイは朔に後ろから抱きつき、うなじにキスをした。体から力が抜け、自然とフェイに寄り掛かってしまう。

「大胆だね」

「誤解するな、このへんた……っ！」

黒いワイシャツのボタンを外しながら、フェイは笑った。

「——好きだよ、朔」

昨日巻かれたリボンはまだ、朔の左腕にあった。だからなのか、フェイの言葉に抵抗することが出来なくなる。

「……て、めえ……取材はどうした、取材は……」

だから言葉で、フェイの本来やるべきことを思い出させようとする。しかし、フェイは朔よりも一枚上手だった。

「今まさに、朔の体を取材してるんじゃないか。……ていうか、取材受けてくれるんだ？」

言葉尻を取られる。朔は舌打ちをした。

————本当はその取材すら嘘だったということを朔が知ることはなかった。

その嘘は『根』とフェイだけが分かち合い、永遠に葬られたのである。

番外編『この世にはバレない嘘も存在する』（後書き）

朔「このあと、フェイに取材と称して仕事について来られたあげく、第二部第三話の翠みたいなことをやられて、左胸のホクロを見られたわけだ。だから俺とフェイが恋人だったことは一瞬もないからな！」

テレーゼ「本当にい？」

朔「本当だってば！」

テレーゼ「でもなあ……朔って女の気配、翠以外ないから……もしかしたらそっちの気が……」

朔「ない！」

第一部第五話から、実はずっとテレーゼの誤解を解くことが出来ていない朔なのであった。

番外編『年末アンケート』（前書き）

くだらない企画第三弾です！

書くキャラにアンケート……本当にくだらないですが、詠んでみて
ください。

番外編『年末アンケート』

テレーゼ「予告通りの『くだらない』企画を始めるわよ」

朔「……嫌だ」

テレーゼ「嫌だ、とか言わない！ 第三部出さないわよ！」

朔「主人公俺だろ！？ 俺出ない話って何ソレ！」

テレーゼ「私がチェスタートン寄宿学校で大活躍する話とかなら……」

朔「……翠は無視か？」

スピネル「早く企画を進めてくれないかな、そこのバカップル」

朔「く、黒いオーラが……」

テレーゼ「情趣を解さないスピネルがうるさいので、企画に突入するわよ！」

朔「さっきの会話に情趣はないだろ……」

テレーゼ「煩い！」

スピネル「今回は第二部主要キャラにアンケートを取った結果を公開するらしい。……くだらないな」

テレーゼ「まあまあ。じゃあ第一問目ね。『あなたが今見たいもの』よ」

朔「テレーゼが三十路になったところ

テレーゼ「朔の和ゴス

スピネル「テレーゼの風呂場バトル

『根』「翠がロリータな服を着ているところ

アメリカ「平和な世の中

翠「六年前の朔の秘蔵写真

メレデイス…成長した自分
メリッサ…クレア達が自分の前に跪く瞬間

朔「俺とアメリカとメレデイス以外答えおかしいだろ！ ていうか
メリッサの解答に日頃の恨みつらみが見える……」

スピネル「でも『根』の気持ちはわからないでもないな。だいたい
スカートを履いたところすら見たことはない」

テレーゼ「今寝てるし……着せとく？」

朔「第二問。『あなたはSかMか？』……どう考えてもおかしいだ
ろ、これ」
テレーゼ「文句言わない！」

朔「Mではないと思うが、Sというわけでもない。出生前診断では
S。」

テレーゼ「誰が何と言おうとSよ。」

スピネル「S……だけどMになれと言われたら……やっぱり嫌だ。」

『根』…Sやな、多分。

アメリカ…私は女王よ？ Sに決まってるじゃない。

翠…もちろんSですよ。

メレデイス…Sだね。苦痛に歪んだ表情とか、好きだよ。

メリッサ…メルの前ではM……かな。

朔「何この偏り！」

テレーゼ「そう言うなら、朔がMになればいいじゃない。だって作
者も『朔はうk（自主規制』って……」

朔「まあ、翠には相当翻弄されてるしな……」

スピネル「続いて第三問。『コイツは変態だと思う人は?』」

朔…俺以外全員。

テレーゼ…メレデイス。

スピネル……翠、かな。

『根』…鬼畜で変態でサドなんはメレデイスやな
アメリカ……ノーコメントで。

翠…メレデイス。

メレデイス…翠だね。一応お色気担当だし。

メリッサ…メルは変態だと思う。

テレーゼ「私も変態なの!？」

朔「……二話を読め」

スピネル「アメリカのアンケート用紙には、『根』と書いてから慌
てて消した形跡があったらしい」

テレーゼ「一番変態なのはメレデイスということは明らかね」

朔「真の変態は作者だと思うね、俺は」

テレーゼ「じゃあ、続いて第四問。『一日体を交換できるとしたら、
誰と交換したい?』」

朔…メレデイスか『根』。背が高くなりたい。

テレーゼ…朔になって刀を振り回してみたい。

スピネル…朔かな。

『根』…アメリカになって女王業してみたい。

アメリカ…テレーゼ。かわいいから。

翠……朔ですね。

メレデイス…成長する体なら誰のでも。

メリッサ…アメリカ。陛下って呼ばれてみたい。

テレーゼ「人気ね、朔」

朔「翠の解答に含みを感じるんだけど……」

スピネル「含みどころか欄外に『大丈夫。痛いことはしませんから』
って書いてあるけど」

朔「……っ、次行こうか」

テレーゼ「第五問目ね。『自分のチャームポイントだと思っている
ところは？』」

朔「実は睫毛が一センチ以上ある。」

テレーゼ「髪の毛。」

スピネル「髪の毛、かな。」

『根』「髪の毛やん。」

アメリカ「目かしら。」

翠「思いつきませんね。」

メレデイス「目かな。」

メリッサ「赤毛。」

テレーゼ「朔のはただの自慢ね」

スピネル「第六問。『あなたのくだらない特技は？』」

朔「自分で関節を外したり嵌めたりできる。」

テレーゼ「なろうの小説を読了時間の半分で読める。」

スピネル「プレゼントを開けなくても中身がわかる。」

『根』「骨がよく鳴る。」

アメリカ「寝癖を一瞬で直せる。」

翠「シャーペンをアクロバティックに回しつつ決して落とさない。」

メレデイス…親指を曲げただけで骨が鳴る。
メリッサ…型紙がなくても服が作れる。

朔「スピネル……そりゃあお前、見えるもんな」

テレーゼ「ちなみに作者は読了時間の半分プラス10分で読めるらしいわ」

朔「第七問。『コイツだけには死んでもなりたくない人は?』」

朔…翠。実は俺より不幸じゃないか?

テレーゼ…『根』かな。私は長生きしてギネスに載りたいのよ。
スピネル…翠だな。いやちよっとなつてみたい気もするけど。

『根』…朔やな。あんな人生やつたらもつと性格ねじ曲がるで、普通。

アメリア…テレーゼとスピネルね。武器商人の子供には生まれたくないわ。

翠…スピネルですね。人の心は見たくありません。

メレデイス……翠、だな。何て言うか……過酷だよな。
メリッサ…『根』かしら。私は普通に長生きしたいわ。

テレーゼ「鬼畜作者は好きなキャラほど不幸にしたくなるらしいわよ」

朔「つーことは何だ? ヒロイン交代の危機?」

テレーゼ「え、何ソレ!？」

スピネル「これは作者への質問だな。『各キャラのイメージカラーは?』」

朔…黒

テレーゼ…鮮やかな紅
スピネル…蒼

『根』…チョコレート色

アメリカ…鮮やかな青

翠…翡翠色

メレデイス…黒っぽい赤。もしくは濃い紫
メリッサ…明るい赤

朔「翠なんかイメージカラーから名前つけられてるからな」

テレーゼ「続いての第八問も作者に質問。『名前の由来は?』」

朔…新月のイメージ。好きな漢字の一つ。

テレーゼ…『テレーゼのために』と書いたのに、悪筆故に『エリーゼのために』になったというベートーベンの逸話から。

スピネル…ルビーの紛い物とも言われるレッドスピネル（でもこれも立派な宝石）

『根』…情報屋のイメージから。本名はフランスの作家の名前の組み合わせ。

アメリカ…アで始まってアで終わる名前にしたかったから。

翠…翡翠色のイメージから。「柏木」は源氏物語から。

メレデイス…「メル」という愛称で花雪に呼ばせたかったから。

メリッサ…ポルノグラフィティのベストを聞きながら考えたから。

花雪…桜のような雪、雪のような桜のイメージ。

テレーゼ「『ピアノを三日でやめた』というエピソードは名前から連想したらしいわ」

朔「実はやめた理由がくだらないんだよな」

スピネル「『先生がベートーベンそっくりで怖かったから』だよな、確か」

朔「えーと、第九問は……『最近殺意を覚えたことは？』」

朔…入院食の焼き魚が焼きすぎて固かった。

テレーゼ…看護師が朔にデレデレしていた。

スピネル…医者がテレーゼにデレデレしていた。

『根』…金庫の暗号が難しかった。

アメリカ…『根』の家が全然片付いていなかった。

翠…まあそれはおいおい明らかになるでしょう。

メレデイス…エピソードに出られなかった。

メリッサ…特には……

朔「翠以外はくだらないな、おい」

テレーゼ「ていうか、『根』の回答……自分じゃない」

朔「第十問。『何ヶ国語話せる？』」

朔…日本語、英語の二ヶ国語。実は日本語より英語のほうが話せる。
テレーゼ…英語、ドイツ語。一応フランス語も日常会話なら話せるわ。だから三ヶ国語ね。

スピネル…英語、フランス語の二ヶ国語。

『根』…英語、フランス語の二ヶ国語。あ、でも英語はフランス訛りがあるんや。

アメリカ…英語、フランス語、ドイツ語の三ヶ国語。

翠…日本語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、アラビア語の六ヶ国語。

メレデイス…英語とドイツ語の二ヶ国語。
メリッサ…英語のみ。

朔「凄すぎるだろ、翠……」

テレーゼ「『根』のエセ関西弁ってフランス訛りを表現しようとして挫折した結果らしいわ。最初は津軽弁にしようとしたけど、多分わけわからなくなるからってやめたみたい」

朔「『今日わや寒くねー？』とかなら今の青森の子も言うからわかるかもしれないけどな」

スピネル「それじゃあ第十一問。これが最後だな。『今後の抱負は？』」

朔「平和な日々のために頑張ります。

テレーゼ「早く大人になります。

スピネル「打倒朔！」

『根』「死後を謳歌するで。

アメリカ「世界が平和になるために尽力します。

翠「とりあえず目を醒まさなくてははいけませんね。

メレデイス「成長する術を探します。

メリッサ「目指せ女王様！」

テレーゼ「バラバラなんだけど……三部大丈夫？」

朔「しかも『根』の抱負が『青春を謳歌します！』みたいになってるな」

Prelude..第一話『Red Iris』



父は私が生まれたとき、恐らく不完全な力を持って生まれた証である、翡翠色の左目を見て落胆したに違いない。だから翠なんていう、皮肉な名前を付けたのだ。

それは生まれながらに捺された『出来損ない』の烙印。愛の証であるはずの名前にそんな意味を込められたことは、皮肉でしかない。父に名を呼ばれるたびに胸が痛むのを感じていた。でも何も言えなくて、結局静かに笑うことしか出来ない。そうしているうちに、意識せずに笑うことが出来るようになってしまった。心は引き裂かれて血を流しているのに、それを誰にも悟られないように笑う――それは滑稽で、空虚で。

でもそうするしかなかったのだ。口では「父とは思っていない」と言いながら、実際はただ一人の肉親だと認めていて。だからこそ愛してほしかった。優しい声音で名前を呼んでほしかった。たとえばそれが一瞬でも。

しかしそんな淡い願いは叶わないまま月日が流れ、ちょうど十一歳の誕生日に私は父から『力』をもらった。己の血を操作し、他者から魔力を奪う力――『紅珠』を。それが私の運命を振曲げたのだ。

まだ試作の段階だったのだが、それでも『紅珠』の力は絶大だった。花雪特有の、戦意を失わせる力の研究の最中に生まれたものだと聞かされたが、彼女の暖かい力と違い、『紅珠』は――とてつもない破壊的だった。

――でも、それだけならまだ問題はなかった。

問題は、その力があまりに強すぎたことだ。放っておけば、対象の魔力を全て吸いつくすまで止まらない。それは周りの人間にとっては恐怖の対象だった。誰もが力を失いたくなかったのだ。

そして研究所の人間は、陰で私を『怪物』と呼び始めた。でも、気にはならなかった。

私は『紅珠』を得ることで、初めて父に笑いかけてもらえたのだ。それ以外の人間など、どうでもよかった。たとえそれが忌まわしい力に対する歪んだ笑みであっても、それは願いつけても手に入らなかったもので――だから私は、嬉しかったのだ。

しかし人は欲深いもので、私はそれ以上を望むようになっていたのだ。



――わからない。

私は参考書を見ながら、溜息をついた。理解は出来るが問題は解けない、そんな状況に陥っていた。さすがにこれ以上の飛び級は難しいかもしれない。

だが止めたくはない。父を越えることはなくても、並ぶことはしたい。天才と言われた父は、十一歳の時には既に高校の卒業資格を手に使っていたのだ。千怜も十三歳には大学に入学している。今自分は、高校二年生のレベルだ。天才ではない自分が父に追い付くのはもはや不可能なのだろうか。私はノートの上に突っ伏した。

不意にドアがノックされた。慌てて体を起こして返事をする、控え目にドアが開いた。私は少し驚いてその小さな影に眼をやる。

「――勉強してた？」

「……ん、一応ね。どうしたの？」

朔はビーズクッションを抱きながら眼を擦る。紅い眼が輝いたように見えた。

「――怖い夢、見た」

「そっか……花雪は？」

こういふときは大体花雪のところに行くのだが。私は朔の顔を覗き込みながら聞いた。

「お仕事、しに行った」

仕事とは研究のことだろう。花雪も私たちの世話を一任されているとはいえ、科学者であり研究対象なのだ。私は納得して、朔の頭を撫でた。

「じゃあ、一緒に寝ようか？」

「でも……勉強してるなら、いい」

「もう寝ようと思ってたところだから、いいよ」

そう言うのと、朔は顔を綻ばせた。何も知らないその無垢な笑顔が愛おしく、羨ましく、憎らしい。だけど、それを気取られないように、私はまた笑う。

私は机の上を片付けてから、ベッドに横になった。朔もそれに続く。私は朔を抱きしめながら、その子供特有の高い体温を感じていた。

「――おやすみ、朔」

「おやすみ……」

舌足らずな言葉が堪らなく愛おしい。だけどその真紅の瞳は羨望を通り越して憎悪の対象だ。自分がもし、朔のように完全な力を持って生まれて来たなら――と考えるしまうのだ。

だから朔を見ていると気が狂いそうになる。心が張り裂けそうに痛い。笑顔を忘れてしまう。

「ねえ、朔……」

「なに？」

まだ幼い存在に縋るなんて、情けない。そう思いながらも止めら

れない。朔の前では全ての嘘が剥がれてしまうのだ。

「朔は、私のことが好き？」

「うん、大好きだよ」

「どんな私でも……？ 例えば、私が何も出来ない駄目な人間でも？」

「みどり……？」

戸惑いの響きが、朔の声に混じる。困らせてしまったとようやく気付いて、私は取り繕うように言う。

「——ごめん、今は忘れて」

「みどり……」

「ほら、もう遅いから……おやすみ」

頭を撫でると、朔は洪々といった様子で眼を閉じた。しばらくすると小さな寝息が聞こえてくる。私は小さく、自嘲的に笑った。

どうして朔の前ではこうも無力になるのだろうか。嘘をつけなくなるのだろうか。それは朔が自分の中にある全ての感情を引き出せる存在だからなのかもしれない。花雪は千怜には憧れや友情を感じても、憎しみは感じない。だが朔に対しては————

壊したいとさえ、思ってしまう。

実際にそれを実行することはないだろうが、時折壊したいという欲望に支配される。だけど自分がそれを成したその時は、私が壊れる瞬間でもあるだろう。

朔がいなければ自分を保つことは出来ないだろう。そんな確信があった。



次の日、サテネットの授業を四時間受けた後で、昼食を食べようと研究所の中の居住スペースに戻ると、朔に袖を引かれた。

「どうしたの？」

「今からお昼ごはん？」

「うん、そうだけど」

「じゃあ、いっしょに外で食べていい？」

朔はおにぎりとサンドイッチが入ったバスケットを見せた。確かに一人分の量ではない。

「いいけど……花雪は？」

「お父さんに呼ばれて、お仕事に行っちゃった」

おそらく私が戻って来ると想定していたのだろう。私は少ししゃがんで朔と眼を合わせた。

「じゃあ、一緒に食べようか」

「うん！」

朔に手を引かれるまま、研究所の裏にある森まで来てしまった。

森といってもきちんと人工的な森林で道は整備されているから、危険なことはないだろう。

「どこに行くの、朔？」

「花雪におしえてもらったところ」

答えになっていないが、花雪が教えたところなら止める必要はないだろう。私は黙って朔についていくことにした。

しばらく歩くと急に視界が開けた。そこには清冽な泉があった。

泉の回りには、珍しい紅い菖蒲が咲いている。朔の瞳の色と同じだと思った。

「こんなところ、あったんだ……」

こんな近くにあったのに全く知らなかった。そもそもこの森にはあまり足を踏み入れたことがない。朔は泉の傍の草の上に、敷物も敷かず座った。私もその隣に腰掛ける。朔はおにぎりとサンドイッチが入ったバスケットを開け、中からウェットティッシュを取り出した。おそらく花雪が準備したものなのだろう。朔と私はそれで手を拭いてから、昼ご飯を静かに食べ始めた。

昼ご飯を食べ終わると、朔は急に無言になり、泉を見つめた。私も黙って同じように泉を見つめる。

沈黙が苦になるような関係ではなかった。ただ隣にいてくれるだけでいい。

———だけど、もし隣にいてくれなかったら？

依存しているのだ。朔という存在に。

自分は欲張りだと思う。まやかしであるとはいえ、小さな頃から切望し続けた父からの愛をもらった途端に、違う愛が欲しくなってしまうっている。

それも、永遠に変わらない———存在するかもわからないものだ。こんな幼い子供に求めているものではない。

「——みどり」

そんなことを考えていると、不意に朔に名前を呼ばれた。私は一瞬驚き、朔の顔を見つめる。

「おれは、みどりが好きだよ」

「朔……？」

拙い、舌足らずな、それでも一番うれしい言葉だった。

「どんなみどりでも……何もできなくても、好きだよ」

朔は昨日の私の言葉を気にしていたのだ。目頭が熱くなる。朔の優しさが、柔らかく胸を突き刺したのだ。流れる血は涙より熱い。

「朔……っ！」

思わず朔を抱きしめると、唇に柔らかな感触を感じた。何をされたのかわからず、一瞬戸惑う。それから冷静に戻り、自分の唇を指でなぞった。

「朔……」

「みどりは、おれのこと……好き？」

「当たり前でしょ……誰よりも愛してる」

守りたくて、
傍にいたくて、
抱きしめたくて、
壊したくて。

——それをまとめて『愛』と呼んでもいいだろうか。
それ以外の言葉は見つからないから。

私が言うと、朔は笑った。まるで夜空を照らす月光のような優しい笑顔だ。そのまま左手を掴まれる。

「朔……？」

静かに、薬指に指輪が嵌められた。翡翠色のプラスチックが輝く銀色の指輪だ。おそらく百円くらいのものだろう。だけどその輝きは全てのものに優っていた。朔がくれたという——それだけでいいのだ。

「大きくなるまで、これでがまんして？ 大人になったらちゃんと……」

——私はこれが欲しかったのだ。

明日も、明後日も、大人になるまで好きでいてくれるという約束が。それも、目に見える形でだ。

こんなに幼いのに、私の一番欲しいものをくれた朔が——堪らなく愛おしい。何の混じり気もない感情で、柔らかくそう思った。

「ありがとう。——永遠に愛してるよ、朔」

同時に自分を縛り付けた。

——決して朔以外の人間を愛さないように。

朔が私を必要としなくなるその時まで。

誓いを胸に刻みながら朔を抱きしめると、紅い菖蒲が風にゆらゆ

らと——穏やかに、揺れた。

それから暫くは、穏やかな時が過ぎた。私はすでに十二歳になっていた。父にはやはり追いつけはしなかったが、もうそこまで必死になる必要はないと思っていた。

既に満たされていたのだ。朔さえいれば——薬指の約束さえあれば、自分は進んでいける。そう思っていたのだ。

——しかしそれは突然、破綻した。



西暦二九二九年十月二十四日、水曜日——それは、起こった。

私はその時たまたま外に出ていて、戻って来たら研究所は大変なことになっていたのだ。

——『狗』の大量発生。

一頭一頭の戦闘力はさほど高くない。簡単に滅することができる。だが数が尋常ではなかった。それに唯一対抗できる完全浄化の魔術は、自分のような半端者が使えるものではない。私は魔力が弱いものを優先的に逃がしながら、なるべく使わないようにしていた忌まわしい力——『紅珠』を発動させた。『狗』からも魔力は回収できる。これだけの数がいれば、完全浄化を使えるくらいの魔力は得られるだろう。

魔力の回収は五秒ほどで終わる。すぐに完全浄化の術を発動させようとして、私は体を硬直させた。

「嘘、だ……」

そんなはずはない。

信じたくはない。

だが今、回収した魔力は紛れも無く――
私は首を振った。動揺して隙が出来た私に、『狗』が一斉に襲い掛かる。しかし動くことは出来ない。

「翠！」

不意に、視界が白く染まった。それが白衣であると気付く前に、千怜は『狗』の攻撃をその全身で受けていた。

嫌な臭いがする。肉が腐っていく臭いだ。

早く『狗』を消滅させなければ――そう思っても、体が動かない。

「千怜、さん……」

「逃げるんだ、翠。向こうに朔と花雪がいるから、一緒に……っ！」

『狗』の攻撃を受け、千怜の右腕が腐り落ちる。私は拳を握りしめた。

――逃げることは出来ない、そう思った。

「【全てを焼き尽くす煉獄の炎よ、根の国から来たりし邪なるものを灼き、聖母のごとき光明で世界を照らし給え】！」

一瞬『狗』が消えて静寂に戻るが、再びどこから沸いてくる。

こんな芸当が出来るのは一人しかない。呪術を最も得意とする自分の父親――柏木匠、しか。唇を、血が出るまで強く噛んだ。

「……駄目だ、翠……お前の手にはおえない……」

「――なら、私は元を断ちます」

「翠……！」

「身内の不始末は身内で処理します。……だから、ごめんなさい」

父と戦って、勝てる可能性はゼロに近かった。しかし戦わなければいけないと思った。

怒りと憎しみが体を灼く。

平穩を崩されたことで、私の心もまた崩れていた。

朔のことが気にならないわけではなかったし、朔と一瞬に逃げたという気持ちもあった。しかしそれ以上に、父を憎んだ。

千怜と同様に、憧れていたのだ。だからこそ愛されたかったのだ。しかし父は偽物しかくれなかったばかりか、せっかく手に入れた穏やかな日々を壊した。

指輪を外し、ポケットに入れる。そして風の刃で『狗』を切り裂きながら、私は進んだ。風の魔術を利用して、柏木の場所を探る。どこか、研究所の外にいるのは確実だ。大量の『狗』を出すには集中力がいるからだ。

「あそこか……」

研究所の西側にある崖の近く。そこは危険だからと誰も近寄らない場所だ。私は走った。

殺さなければ。

殺さなければ。

たとえ相打ちになっても構わない。

むしろそうならいいとさえ思っていた。

研究所を出た私は、黒づくめの格好をしたその男を睨みつけた。

その瞳は、禍々しいほどの真紅だ。

「――来ると思っていたよ、翠」

柏木は微笑しながら、薔薇の香りがする煙草に火を点けた。余裕のある態度が癪に障り、私は風でその火を消した。

「何で……何で、こんなことをしたんだ！」

「何で？　――愚問だな」

くつくつと嗤う。私は柏木の目を睨みつけた。そうしなければ、自分が壊れてしまいそうだったのだ。

「主君を変えた……それだけだ。千怜は優秀だが、自分の力を使おうとはしない」

「力を使って……破壊して……それでどうなるんだ！」

「『怪物』であるお前には言われたくないな。お前だって思ったことはあるだろう？ 例えば、月峰朔を壊したいとか」

「……っ！」

朔にあの指輪をもらうまでは、確かにそう思っていた。だがそれを見破られたことが悔しかった。だから力任せに術を繰り返す。柏木は風に圧倒され、僅かにバランスを崩したが、即座に私の背後に回ってそれを回避した。

「——俺と来い、翠。お前は破壊の化身だ。俺のたった一人の、娘だ」

「思ってもないことを言うな！」

そんな言葉でごまかされはしない。愛されていないのは知っているのだ。柏木はまた嗤った。

「じゃあどうするんだ？ お前に罪はないとはいえ、俺の娘であり、他者の魔力を奪う力をもつお前はもうここでは生きていけない。それくらい、聡いお前ならわかるだろう？」

「その元凶である貴方を殺して私も死ぬ。未来など考える必要はない」

「俺と心中するってことか？ ——十二歳の子供が考えることじゃねえな」

「黙れ！」

感情に呼応するように、強い風が吹く。しかし柏木は表情を少しも変えなかった。完全な力を持つ柏木にとって、私など本来敵ではないのだ。『紅珠』を使っても勝てるかどうかはわからない。だが使わなければ確実に勝てはしないだろう。

右手の甲に力を込めて、術を発動させる。紅い珠を背後にいる柏木に向かって飛ばした。しかしこれはただのハッタリだ。柏木がそれを避けたところで、風で周囲の土を巻き上げる。同時に柏木の背後に向かって跳躍した。

土埃で柏木の視界を奪いながら、再び『紅珠』を放つ。それが柏

木に到達するのと、『蜘蛛』が放つ糸で体を拘束されるのはほぼ同時だった。

基本的に呪術は最も簡単な魔術であり、それより高位の魔術をぶつければ簡単に打ち破れる。しかし柏木の放つそれは特別だった。特に一体だけ出すときは、高位の魔術でも打ち破れないことがある。それは柏木の魔力が強過ぎるのが原因だ。しかしそれも不利な状況というわけではない。

「どうやら本気のような」

柏木の力を奪いとり続けていると、『蜘蛛』の力が弱まった。好機だと思い、風の刃で糸を切る。自由になると同時に左手に竜巻を作り出した。柏木の魔力を使っているから、威力は抗えないほどに強い。この崖から落ちたら誰だって死ぬだろう。空中では『転送』も使えない。

竜巻で柏木のバランスを崩しにかかる。研究所に籠っている生活で、足腰がこの竜巻に堪えられるほど強いとは思えない。崖の淵まで追い詰める――

そして、一気に間合いを詰めた。

―――確実に殺すために、自分も一緒に落ちるつもりだった。

「――お前は本当に……」

ほとんど手が触れそうな位置で、柏木に竜巻をたたきつける。その瞬間に、柏木がそう呟いて笑った。同時に、同じように竜巻を向けられて、私は成す術もなく飛ばされる。

「……っ！」

地面に叩きつけられる。受け身を取れなかったせいで、体のあちこちが痛む。しかし痛みを堪えながら辺りを見回す。

憎む相手の影は、どこにもなかった。代わりに一輪の紅の菖蒲が揺れていた。先程までの戦闘の巻き添えを食ったらしく、その立ち

姿に力はない。

「……なん、で……」

紅い菖蒲を見ながら呟く。

どうして助けた？

どうして——

情けをかけられたのが悔しくて、私は自分の肩を抱きながら唇を噛んだ。

最後に見た顔が、とても優しい父親のような表情だったことが私を動揺させた。自分の所有物くらいにしか思っていないのなら、あんな顔は見せないで欲しかった。あんな、優しい真紅の瞳は。

「ふざけるな……！」

私がせっかく手に入れた平穏を踏みにじっておいて、あんな顔をするな——そう、叫び出したかった。

しかし叫び出す前に、強い揺れが起こった。

「地震……？」

いや、違う。そんなものではない。何か魔術的なものが関わっている、そう思った。ここにいては危ない——

そう思った瞬間、体が紅の光に包まれ、私は意識を失った。

Prelude.: 第一話『Red Iris』（後書き）

◆後書き◆

『Red Iris』には「紅い菖蒲」と「紅い虹彩」という二重の意味がかけられています。

今回のPrelude編は第三部の序章であり、第一部より前の過去を描いていきます。なので次回は翠がジェイドとして出て来るのでご注意ください。（第二部で一切ジェイドって呼ばなかったから、忘れられてたりして……）

◆キャラ解説◆

カシワギタクミ
□ 柏木匠

翠の父親であり、研究所で一番優秀だった男で研究所の副所長。

（人望は千怜の方がするため、所長にはなれなかった）ちなみに知能指数は230と非常に高い。（翠は169で、こちらもわりと高い）

翠は風、朔は炎の魔術を得意とするが、匠は呪術を得意とする。たいていの場合は『狗』を使い数で勝負する。

不完全な存在である翠には冷たく当たっていた。このころから既に破壊的な力を求める傾向があったと見える。後にフリードリヒに従い、研究所を襲撃する。この時に翠と戦い崖から転落するが、実は生存していて、第一部第七話で朔を襲い、八話で翠に殺される。何故か朔に執着し、第二部のメレディスやオリヴァの背後にも彼がいた。

千怜とは大学時代からの友人。しかし平和主義者で力を使わない千怜を「臆病」だと蔑むようになっていた。

苗字は源氏物語の登場人物から、名前は優秀そうなイメージで。
(そういえば初めて名前が出て来たかも)

えー……次回『Black Rain』の更新は、2月13日(金)
を予定しています。

第二話『Black Rain』



雨が降っていた。

まるで僕の代わりに空が泣いてくれているようだ、と感傷的なことを思う。でもそんなことはないと思っていた。雨はただ降っているだけだ。空の涙などではない。

それでもそう思ってしまうのは、やはり両親が死んで少なからずショックを受けているからなのか。僕はこっそり教会を抜け出して裏手にある丘に向かった。おそらく僕などいなくてもクール社の研究員でも一番優秀な人物で、僕の家庭教師でもあるジェイドチユーターが何とかしてくれるだろう。

もう耐えられなかった。囁かれる言葉が。向けられる視線が。

「ガス爆発っていうけど謎ばかりなんでしょう？」

「そうさ。警察も首を捻っていたよ」

「やっぱり悪魔が憑いているのよ、この家は。やだわ、恐ろしい」

「本家に生まれなくてよかったって感じね」

それはクール家が『氷の一族』と言われている本当の理由だった。クール家には悪魔が憑いている。まるで井戸端会議のような会話は、葬儀の席だというのに声をひそめられずに続く。

「それより会社も財産も全部あの子が継ぐんだろ」

「爵位もよ。全く……何であんな出来損ないの子なんかに」

「ウィリアムだったらクール社も安泰だと思ったけど、あんな子供じゃあ……」

「じゃあお前さん、やってみればいいじゃないか。お飾りのお坊ちゃんなんて簡単に操作出来るだろう？」

「嫌よ。誰があんな呪われた……」

クール社に関わった一族の人間は傍系の者でも短命に終わってし

まう。その本当の理由を知る僕にとって、無責任な親族の噂は苦痛だった。父を称賛し、何をやっても父に届かない僕を蔑む声が自分を蝕んでいく気がしていた。

丘の上に立って雨を浴びる。喪服が水を吸って重くなっていく。それでも泣くことは出来なかった。こんな僕を親族たちはまた「親不孝だ」と蔑むのだろう。

——いくらでも蔑めばいい。

何も知らない人間には、僕が冷たい人間に映るのは当然なのだ。そして真実は僕とジェイドだけが知っていればいい。彼等に真実を教えたからと言って、この身に刻まれた悪しき宿命は消えないし、第一信じてなどくれないだろう。

雨雲に覆われた、濃い灰色の空を仰ぐ。雨が体を打って、まるで自分を浸し侵していくようだった。それならそれでいいのかもしれない。もう、どうすればいいかわからなかった。

——最後まで父には認めてもらえなくて、それが苦しみの理由だとは気付いていた。

「……父上……っ！」

地面に膝をつく。雨はそんな僕を冷たく貫いた。

「……何してるのよ、傘もささずに」

不意に聞こえるはずのない声と共に、雨が遮られた。背後に立って、傘をさしてくれているらしい。僕は答えなかった。ここに彼女が——商売敵であるテレーゼがいるはずがないと思っていたからだ。しかし僕の背後に立った女は痺れを切らしたのか、僕の背中をブーッで蹴った。

僕にこんなことをする女はテレーゼしかない。何故ここにいるかはわからないが、とりあえずテレーゼには間違いない。そう思いながら僕は振り返った。

「声が聞こえたら返事くらいしなさいよ。その口は飾りなの？　それとも耳の方がイカレてるわけ？」

「何で、ここに……」

喪服を着ているはずなのに、テレゼはやはり華やかだった。光を集めたような金髪が辺りを明るくしているのだ。自分の闇色の髪とは対照的だ。

「私のお父様と貴方のお父様は大学時代の友人だったらしいわ。その時は次男であるお父様が家を継ぐとは思っていなかったからでしょうけど」

だったらちゃんと式が行われている間に来ればいいと思ったが、敵同士だからそれはまずいのだろうと思い直し、口をつぐむ。テレゼは黒い傘をくるくると回しながら言った。

「それで、貴方は……両親の葬式だっていうのに、こんなところで何をしているの？」

「……お前には関係ないだろ」

「そうね、関係ないわ。でも今の答えは、私の質問の答えにはなっていないわ。ちゃんと答えなさいよ。それとも、頭がイカレちゃって思考停止状態なの？」

口の減らない奴———そう思ったが、平素の自分の方がもっと酷いと思い直し、溜息をついた。

「……別に何かをしていたわけじゃない。ただ、教会にいたくなかっただけだ」

「だったら傘くらい持って出なさいよ。風邪ひくわよ。まあ、スピネルが風邪ひいてこじらせて肺炎になっても、私には関係ないけどね」

そう言いながら、テレゼは教会にあったのだろう黒い傘を僕に差し出した。僕はそれを受け取りながらも、傘をさす気にはならなかった。

「雨に濡れる奇天烈な趣味があるなら別だけど……しっかりしないと、死んだ両親が悲しむんじゃないの？」

「――悲しまないよ。僕は『出来損ない』だ」

「そういえば、教会にいたケバいおばさんがそんなことを言っていたわね。でも、貴方が出来損ないなら、私も出来損ないよ」

テレーゼは優秀な娘だという噂を聞いていたのだが。僕はテレーゼに疑問の目を向けた。

「私は人形なのよ。人の心を虜にする美しい人形――私は確かにお父様の役には立っているわ。だけどそれは私自身の力ではなくて、ただ見た目が綺麗だからなのよ」

「……でも役には立ってるじゃないか。僕は……むしろ足手まといだったかもしれない」

「だから何よ？ 貴方が足を引っ張って来た貴方のお父様はもういない。貴方の前には誰もいない。貴方は誰がなんと言おうとクール家の当主で、いずれ私の敵になる人間なのよ。しっかりしなさいよ」
テレーゼに励まされるとは思っていなかった。それは嬉しいことだったけれど――素直には笑えなかった。

「僕には、重過ぎる……」

「別に最初から全部背負う必要はないわよ。どうせ貴方は、一生かかってもお父様には勝てないんだし。お父様はメイプルウッド始まって以来の天才的な武器商人だもの」

重過ぎるのは当主の責任ではなく、宿命だ。それはどこか呪詛にも似ている。しかしテレーゼはそれを知らない。無責任なのは他の親族と変わりはない。しかし彼女の場合は、僕を蔑もうとはしていない。だからそれほど不快にはならなかった。

「テレーゼ……」

とりあえず礼だけ言おうと口を開いた瞬間、背中に刺すような痛みが走った。思わず体を抱いたまま、地面に倒れる。

「スピネル！」

テレーゼが心配そうに僕に駆け寄るが、それに笑いかける余裕は既に消え去っていた。

「……っ！」

まるで背中に焼き炙^こを当てられているような熱がある。降りしきる雨はその熱を冷ますどころか、傷口に侵入して悪化させているような気さえした。

「スピネル！——とりあえず、屋根があるところに……」

テレーゼは辺りを見回して、少し歩いたところにある温室を見つけた。とりあえずそこに行こうと思ったのか、僕を支えながら歩き出す。それを断る余裕すら、今の僕にはなかった。

青い薔薇が咲き誇る温室に入ったと同時に、僕は崩れ落ちた。テレーゼの力では支えきれずに、青い花びらを押し潰す。

「スピネル！」

熱を持つ背中にテレーゼが触れ、驚きに大きな目をさらに見開いた。続いて額に触れる。熱がないかどうかを確認したようだ。熱などあるはずはない。痛みの原因はわかっているのだ。

唐突に、テレーゼは僕の服を脱がせ始めた。元々今日の服は後ろにボタンがアルタイプだったから、背中を見ようとしているのだ。それだけはいけない、と思い、僕は抵抗した。しかし腕力に関しては貴族で温室育ちの僕より、同じお嬢様でもお転婆なテレーゼの方が当然強い。抵抗は簡単に封じられた。

「……見、るな……っ！」

僕の言うことなど、テレーゼは聞きやしないとわかっている。でもテレーゼには見られなくなかった。僕に刻まれた、忌まわしい宿命の証を。しかしテレーゼは僕の願いを無視して、背中を晒す。

「この痣……」

「触る、な……っ」

そこにはテレーゼの拳と同じくらいの痣が浮かび上がっている。しかしそれは痣にしては複雑な形をしていて、すぐに人為的につけられたものだとわかるほどだった。

「誰につけられたの？」

「……お前には、関係ない」

痛みは少し和らいでいた。テレーゼがそこに手を当てているから

なのかはわからない。

「——そうね、関係ないわ。私達はいずれ敵になるんだもの。でも——ここで貴方を放っておくわけにはいかないわ」

「放っておいてくれ！　僕がどうなろうとお前には関係ないだろ……っ！」

「でも目覚めが悪いわ」

テレーゼの言っていることはわかる。彼女はここで僕を無視していく人間ではない。でも、この痣のことは彼女に言うことは出来なかった。言っても何も変わらない。全てはもう過ぎ去ったことなのだから。

「テレーゼ……っ……もう、放っておいてくれ……」

「でも……」

「放っておいてくれて言ってるだろ！」

叫ぶと、テレーゼの手が一瞬強張ったのがわかった。その隙に服を直す。

「スピネル……」

「この痣のことは、誰にも言うな。いいな？」

テレーゼは不用意にこのことを人に言ったりはしない。だからその点では安心だ。僕はゆっくりと、痛む背中を気にしながら立ち上がった。温室を出ようとすると、テレーゼが追いかけてくる。

「まさか、その痣……貴方の、お父様が……？」

「——お前には関係ない」

吐き捨てて温室を出ようとすると、向こうから歩いてくる人影が見えた。琥珀色の髪を一つに結った、今の僕の全てを知る人間——ジェイドだ。

温室の扉が開けられ、いつもと変わらない柔和な笑顔が視界を満たした。

「——ここにいたんですね。探しましたよ」

「終わったのか？」

「ええ。皆さん帰途についていますよ。……貴女も、お帰りになっ

た方がいい」

テレーゼに向かってジェイドは言う。その声は冷たくて、寒気が走った。テレーゼは諦めたように笑って温室を出ていく。後はジェイドに任せるといことなのだろう。僕は息を吐き出した。ジェイドが僕の体を支える。

「……痣を、見られた」

「そうですか。――それで？」

「……どうということはない。口止めはした」

だけど、それだけだ。全てを知る人間を増やすつもりはない。ジェイドと僕が全てを知っていれば問題はないのだ。

僕は自分の力で立ち、温室のドアを開けた。

「行くぞ、ジェイド」

「はい」

外にはまだ雨が降っていて、まだ昼間だというのに空は黒かった。それはさながら僕の未来のようにも見えた。

第二話『Black Rain』（後書き）

◆後書き◆

『黒い雨』と言っても、井伏鱒二は関係ありません。

この頃、テレーゼもスピネルも七歳ですね（十一月なんで）。会話が七歳児じゃないですけど（へーへ；

今回はスピネルが弱っているので、皮肉はテレーゼの方が言っていますね。ただ彼女は挑発に乗りやすいので、いつもはスピネルに負けていますが……。

ちなみにジェイド（翠）はPrelude編の全四話のうち、三話に登場します。なのに朔は一話で終わり……あれ、主人公なのに（笑）

そういえば、ジェイドのクール社での正確な立場がようやく出てきましたね。一研究員なのに、次期当主の家庭教師（しかも当時十九歳）……すごいな、オイ（へーへ；

次回『Red Spinel』は2月27日公開予定です！

第三話『Red Spinel』



家庭教師^{チューター}なんていらなと思っていた。ほとんどのことはサテネットの授業で知ることが出来るし、クール社には優秀な人間が沢山いる。家庭教師など煩わしいだけだ。しかし僕の母のアンジェラは僕に家庭教師をつけたがった。

そして十人目の家庭教師として、僕が六歳の時につけられたのがジェイド・オークスだった。

似ていると思った——憧れであった父に。

クール社の魔術研究員の中でも一番若く、一番優秀だというその男は、本当に何でも出来た。勉強だけではなく、テーブルマナーや社交ダンス、家事全般も完璧だった。クール家始まって以来の天才と言われた父よりもあるいは優秀だったかもしれない。今まで九人の家庭教師にいちいち難癖をクビにしていた僕は困った。非の打ち所がなかったのだ。

だから仕方なくジェイドを雇い続けた。母はそれを喜んでいたが、何故彼女が家庭教師にこだわったのかはわからない。

——ただのビジネスライク。その関係が変化したのはその一年後だった。

両親が死んだ事故を唯一目の当たりし、クール家の真実を知ってしまったジェイドは、僕の唯一信頼できる人間になっていた。だからその後のクール社の運営にも携わらせた。本当は秘書にしようとしたが、ジェイドは「自分は研究員でありたい」とそれを断り続け

た。

そのうちに、他の研究員——日本で、ジェイドと一緒にいたメンバーから彼の父親の話聞き、ジェイドは自分に似ていると思った。優秀な父親の息子であり、決して父を越えられはしなかった——その痛みは、僕の痛みと似ていた。だから僕はジェイドに好感を抱き、彼のような優れた人間になりたいと思ったのだ。



少し気難しい子なのよ——社長の妻であるアンジェラに頼み込まれ、私はそれを快諾した。いずれ利用できると思ったのだ。ウイリアムのように完成された人間は操りづらい。しかしまだ六歳ならば、自分の思うように形を変えられる。そしてクールはメイプルウッドの敵——フリードリヒやテレーゼに復讐するための手駒として、これ以上の存在はないだろう。

しかしその計画は、スピネルを初めて見た瞬間に揺らいでしまった。彼は恐ろしいまでに朔に似ていたのだ。違うのは眼の色——そしてスピネルの方が彫りが深い、西洋人らしい顔をしていたということだけだった。

だから私は朔を作ろうとしたのだ。いつも周囲からの期待に押し潰されているスピネルを救い出し、純粹で無垢で優しい朔のような存在にしようと思ったのだ。青血隊には「利用する」と言ったが、そんな気は本当はなかった。

——朔を復讐の手駒には出来ない。
そう思っていたからだ。

そして私は朔にしていたように、スピネルを愛した。勿論アンジェラに頼まれていた、スピネルの躰もちゃんとした。スピネルは元々聡い子供で、何でもある程度の努力をすればこなせたから、苦労はしなかった。

私は満たされて、一時復讐を忘れていた。このままスピネルの――朔の似姿の成長を見るのも悪くないと思っていたのだ。

つまるところ、彼は代替物でしかなかったが、彼がそれに気付くことはないと思っていた。今や完全に朔とスピネルは重なり合っている。だから――

――しかし一年後、その関係は僅かに変化した。

スピネルの両親が死んだ事件により、スピネル自体が変わってしまったのだ。今までより少し冷たい目を周囲に向けるようになった。そこには暗い絶望が横たわっていて――まるで自分のようだと思った。

それでも自分に向ける目は変わらずに、優しい眼差しは朔のそれとよく似ていた。だからこの変化もたいしたことではなかった。しかしクール家の当主として世界を知る度に、瞳を陰らす絶望の影は濃くなる一方で、それが私は悲しかった。

朔と重ね、自分と重ね――代替物ではあるが、その幸せを私は願っていたのだ。

――しかし、その関係も二年後には完全に破綻した。



力が欲しいと思ったのだ。何かを――例えばこの忌まわしい宿命を壊す力が。

ジェイドは魔力を、その才のないものにも与える研究をしていた。僕はそれが欲しいと少しだけ思っていたのだ。

それがあったとしたら、父にも抵抗できたかもしれないし、母を守ることも出来たかもしれない。僕はもう何も失いたくなくて、だから強さが欲しかった。

大切なものがあつたのだ。自分の一番の理解者であるジェイドと、自分の心に咲いた真紅の薔薇であるテレゼと。だが今の自分に、二人を守る力はない。

もし僕に魔力があれば、どうだろう。

魔術は解明されていない部分も多いが、武器としてはかなり有用だ。僕のように身体能力が高くない人間でも、ある程度は戦えるようになるはずだ。せめて自分と、もう一人を守るくらいには。

だから僕はジェイドに言った。「力が欲しい」と。それが何を意味するかわからない奴ではない。だから一瞬、迷った。

しかしすぐに彼は頷いた。そこにある思惑を、その時の僕は知らなかったのだ。



「力が欲しい」——彼の言う力が、魔力であることはすぐにわかった。だから迷った。今の術式はまだ未完成で、どんな副作用があるかわからない。そして完全な力が得られない可能性もあつた。つまり自分のような半端な——『出来損ない』を作ってしまった可能性すらあつたのだ。だから思い止まらせようと考えた私の脳裏に、抗いがたい欲求が浮かび上がった。

——もし、成功すれば？

シュミレーションでは、魔術発動時以外は元々の瞳の色であるとなっている。しかし最終形態であるルベドに移行すれば——瞳は朔と同じ真紅に染まる。それはとても魅力的なことに思えた。ここに朔が完成するのだと、そう思った。

その瞬間、私の頭からは失敗の可能性は消え去り、頷いてしまっていたのだ。その先に破綻が待つとは知らずに。

結論から言うと、私は失敗したのだ。
確かに魔力の付与は成功した。しかし私は彼に力を与えすぎたのだ。

「……小面様」

「ここではその名前で呼ぶなど言っただろう。どうした？」

廊下で私を呼び止めたのは、紅い眼の女だった。私の一番の理解者であり、右腕の女――青血隊での呼び名は、般若。彼女はどこか悲しげな眼を私に向けた。

「もう、隠す必要は無いでしょう？」

「……千里眼とは、本来千里先のもの……未来、心情、出来事を見通す力だ。だがスピネルのあれは、何故か人の心を見透かす方向に特化している。研究対象としては……青血隊としては格好のサンプルだ」

そういうことではないとわかっている。だけどそういう客観的事実を口にすることで心の平静を保とうとしていた。

「そんなことは、思っていないでしょう？ 貴女は本当は、あの子を……」

「何だ、お前まで千里眼のマネごとか？」

「小面様……」

「私の心は誰にもわからない。だから……わかったようなことを言うな」

本当は知っている。彼女は私の心をかなり正確に把握しているのだ。私が何故スピネルに力を与えたのか。そしてその力を与えるまで私が復讐のことなど忘れ去っていたことも。

総て知られていても、私はもう動きを止めることは出来ない。私は壊れるまで動き続ける、からくり仕掛けのオートマタ。

だけど私の心には、まだ迷いがあった。

本当は少しだけ期待していた。
スピネルが私を選ぶことを。
都合のいい願いだと、わかってはいたけれど。



魔力を得るための手術が終わった後、僕の目に映る景色は変わっていた。何もかもが見通せる目を、僕は手に入れてしまったのだ。そう——人の心さえも。

そして僕は、一番信頼していた人間が実は僕のことなど見ていなかったことを知った。自分は代替物でしかなかったことを知ってしまったのだ。

「手術……成功したようですね」

「ああ。いいオペションもついてきたようだしな。青血隊としてはいいサンプルじゃないのか？」

「……自分の命がサンプルですか？」

もっと見なければいけないと思った。布越しでは力が制限されるけれど。

見たかったのは、彼女が自分を見ていたという事実。僕は否定しなかったのだ。僕によく似た、だけど僕とは明らかに違う、澄んだ真紅の瞳を持つ男のことを。

だけど否定は出来なかった。だから僕は剥ぎ取るように巻かれた布を外した。

「お前に、わかるか？ 大切なものを護れなかった悔しさが。わかるだろう？ お前は護れなかったからな」

「……っ」

揺れる心。まだ力に慣れていない僕には、処理しきれない感情の濁流。だから僕は気づけなかった。気づけないままに、叫んだ。

「僕は、護る。テレーゼを、この手で……この力で」

「敵に与えられた力で戦うんですか？ 実に貴方らしいですね。――」

——あきれるほどに、幼い」

言葉ににじむのは、侮蔑。僕は拳を握り締めて、きつく唇を噛んだ。

「お前に僕の気持ちなんかわからないだろう？　もう青臭いままじやいられないんだ！　僕はテレーゼを護ると決めたんだ！」

その瞬間、翠の思考が一瞬乱れる。しかし僕がそれを意識して見たときには、誰の思考にも見たことがないくらいに凪いでいた。

だからわからなかった。

そのとき、彼女が何を考えていたのか。

「——余計な力を与えてしまったようですね」

静かな微笑は、偽りにまみれていて。だけど偽りの下の真実を見ることはまだ出来ない。

だけど、決めなければならぬ。僕にはもう翠と一緒にいるのは耐えられなかった。

それ以上に、僕は僕の心とは裏腹に動く口を制御することが出来なかった。

「……帰れ。そして二度と……戻って来るな！」

翠は小さく笑う。それはいつもの笑顔より少し闇を含んでいる。同時に見える。真実しか映さないこの忌まわしい眼に。

——僕が望んだ真実が。

「みど、り……」

「貴方は本当に似ていますね……そういう、真っ直ぐなところが」

静かに閉まる病室のドア。その瞬間に、歯車は動き始める。ただ、望んだはずのその事実と真実は僕を戸惑わせた。

「……お前は、本当は……僕自身を見ていたのか……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3366f/>

紅眼の守護者(ガーディアン)

2010年10月9日02時54分発行